

### 写真図版目次（下谷地B）

トレンチと遺物出土状況……………	図版 1	トレンチ外出土遺物(24)……………	図版31
トレンチ出土遺物(1)～(4)……………	図版 2	陶磁器	
トレンチ外出土遺物(5)……………	図版 6	同(25)～(27)……………	図版32
トレンチ出土遺物(1)		木製品(1)～(3)	
縄文土器・石器		トレンチ外出土遺物(28)……………	図版35
同(2)～(9)……………	図版 7	トレンチ出土遺物(5)	
黒色処理の土器(1)～(8)		木製品(4)	
同(10)～(18)……………	図版15	トレンチ外出土遺物(29)……………	図版36
非黒色処理の土器(1)～(9)		木製品(5) 植物遺体・鉄製品	
同(19)～(23)……………	図版24	胎土分析資料……………	図版37
須恵器(1)～(5)		遺物の縮少率は実測図に準じる。( )は実測図	
墨書文字(1)～(2)……………	図版29	No.である。	

1. Bi6トレンチ



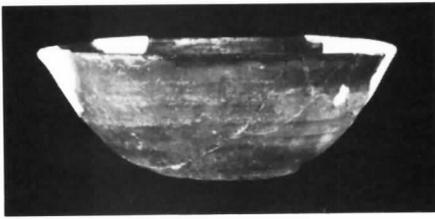
2. 同トレンチ  
遺物出土状況



3. 同トレンチ  
遺物出土状況



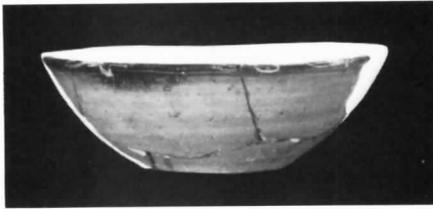
図版1 トレンチと遺物出土状況



1  
(4-1)



8  
(4-13)



2  
(4-2)



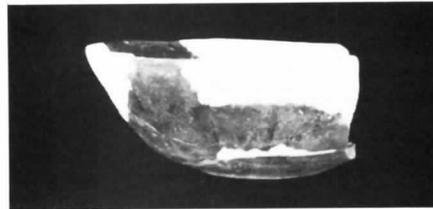
9  
(4-14)



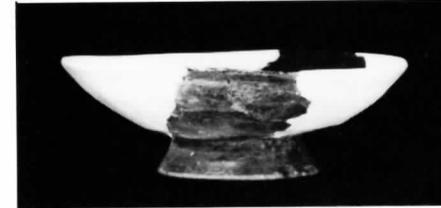
3  
(4-3)



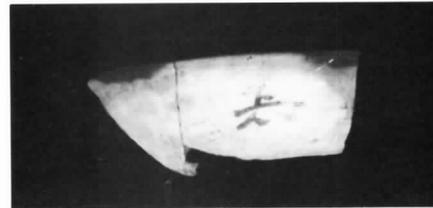
10  
(4-16)



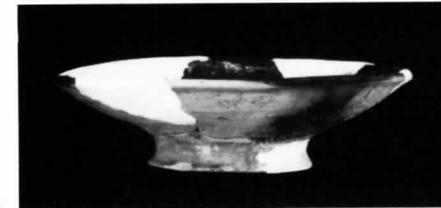
4  
(4-4)



11  
(4-17)



5  
(4-5)



12  
(4-18)



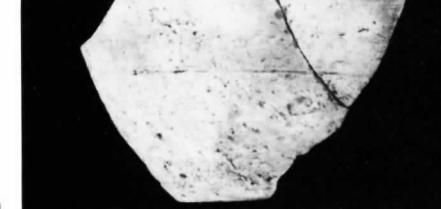
6  
(4-10)



13  
(4-19)

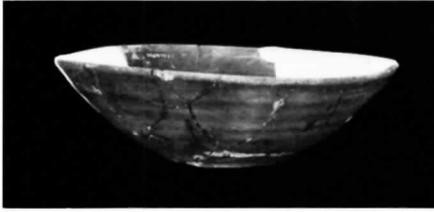


7  
(4-11)

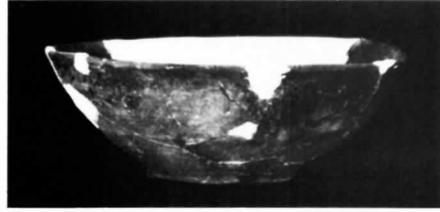


14  
(5-21)

図版2 トレンチ出土遺物(1)



1  
(6-1)



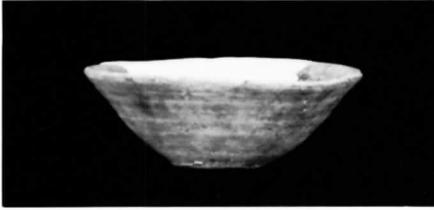
8  
(6-9)



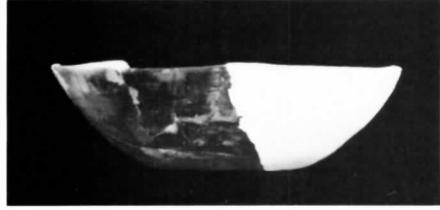
2  
(6-2)



9  
(6-13)



3  
(6-3)



10  
(6-14)



4  
(6-4)



11  
(6-15)



5  
(6-5)



12  
(6-16)



6  
(6-7)



13  
(6-17)



7  
(6-8)



14 (6-10)

図版3 トレンチ出土遺物(2)



1  
(7-20)



8  
(7-27)



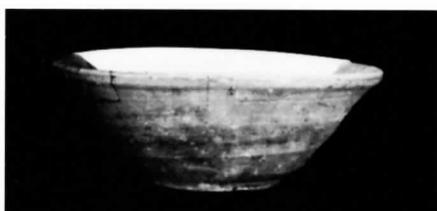
2  
(7-21)



9  
(7-28)



3  
(7-22)



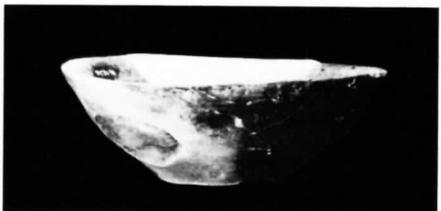
10  
(7-29)



4  
(7-23)



11  
(7-30)



5  
(7-24)



12  
(7-31)



6  
(7-25)



13  
(7-32)



7  
(7-26)

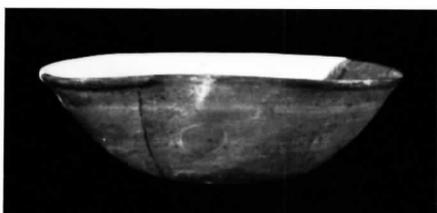


14  
(7-33)

図版4 トレンチ出土遺物(3)



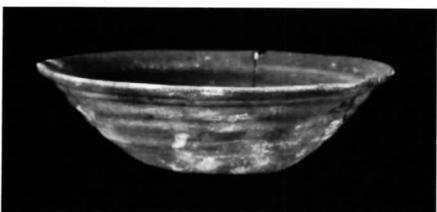
1  
(8-35)



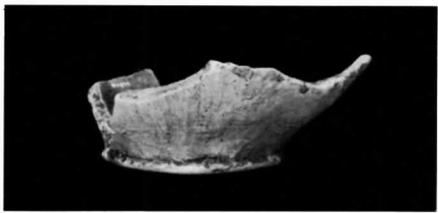
8  
(9-8)



2  
(8-36)



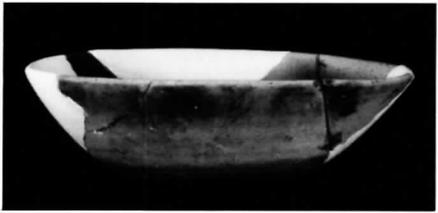
9  
(9-9)



3  
(8-37)



10  
(9-10)



4  
(9-1)



11  
(9-11)



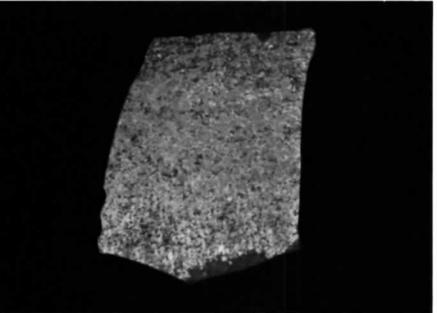
5  
(9-2)



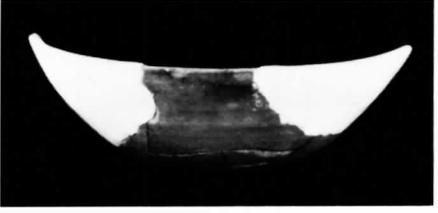
12  
(9-12)



6  
(9-4)

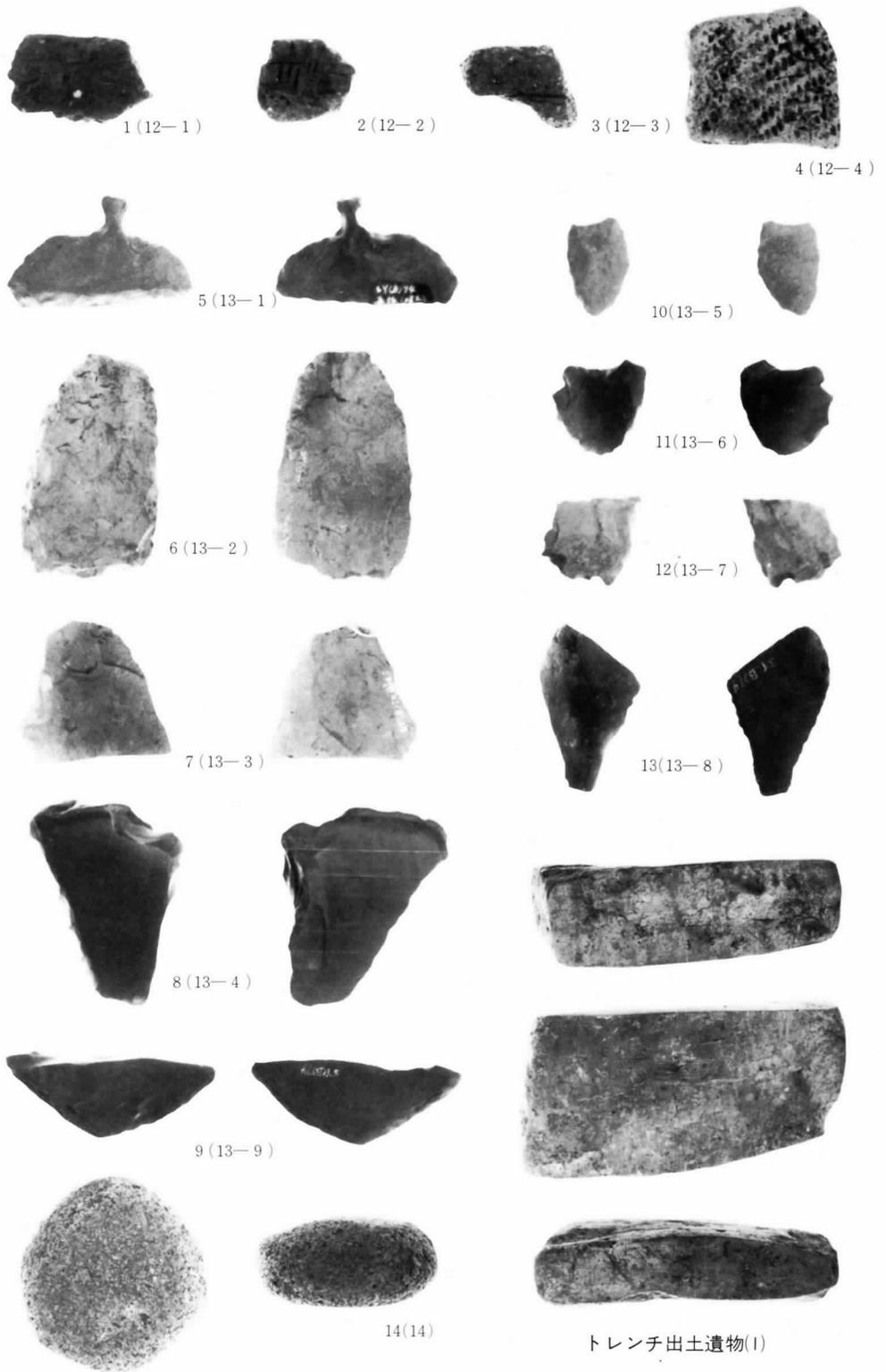


13  
(9-13)

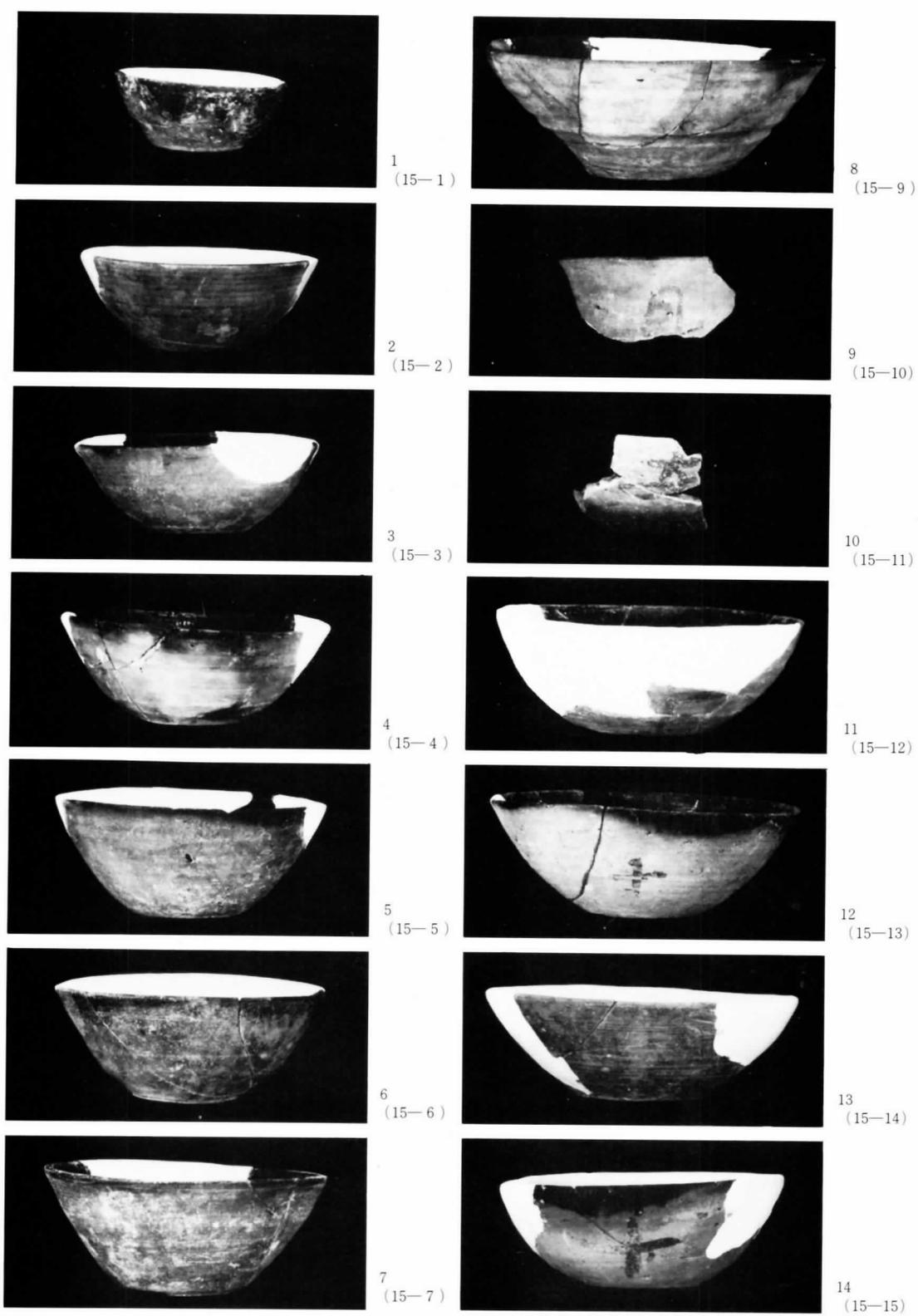


7  
(9-7)

図版5 トレンチ出土遺物(4)



図版 6 トレンチ出土遺物(5) 石製品  
トレンチ外出土遺物(1) 縄文土器・石器



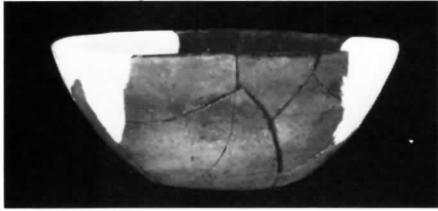
図版7 トレンチ外出土遺物(2) 黒色処理の土器(1)



1  
(15-16)



8  
(16-23)



2  
(15-17)



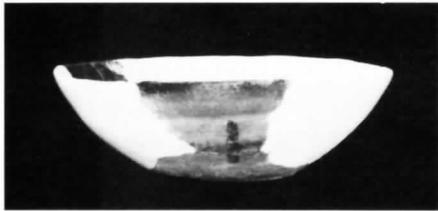
9  
(16-24)



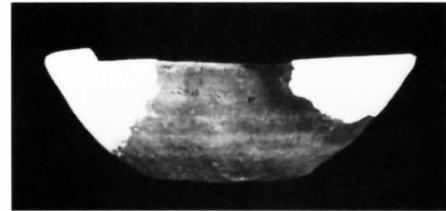
3  
(15-18)



10  
(16-25)



4  
(16-19)



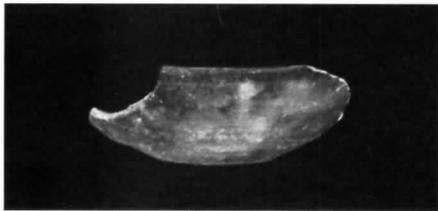
11  
(16-26)



5  
(16-20)



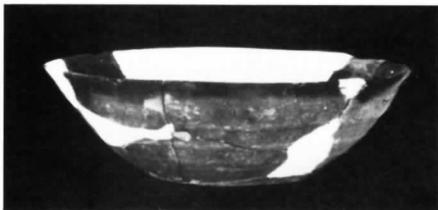
12  
(16-27)



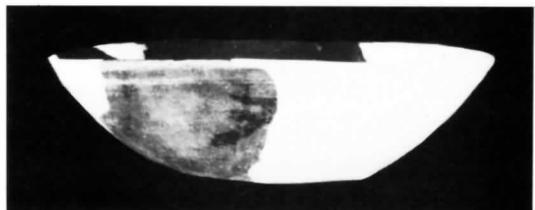
6  
(16-21)



13  
(16-29)

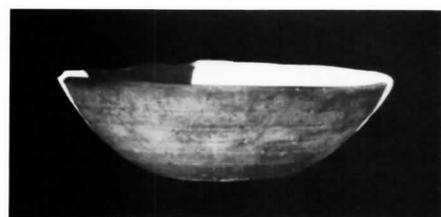


7  
(16-22)



14  
(16-28)

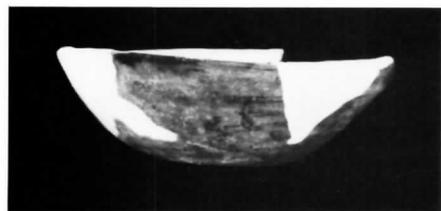
図版 8 トレンチ外出土遺物(3) 黒色処理の土器(2)



1  
(16-30)



8  
(16-37)



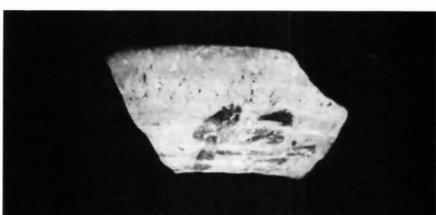
2  
(16-31)



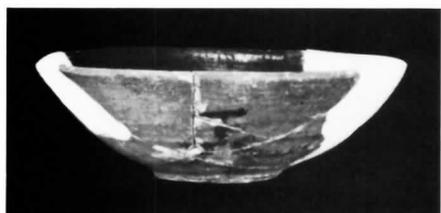
9  
(16-38)



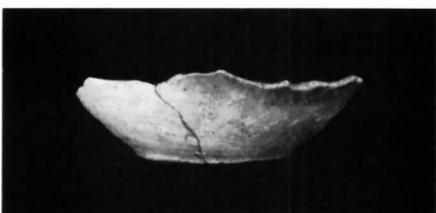
3  
(16-32)



10  
(17-39)



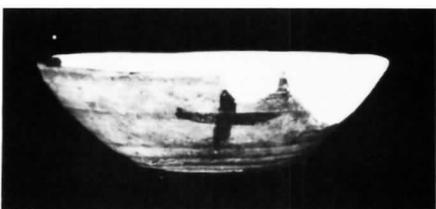
4  
(16-33)



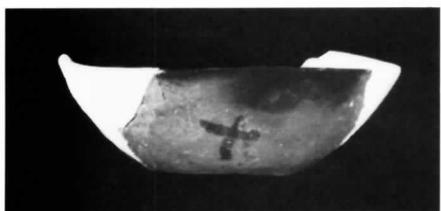
11  
(17-40)



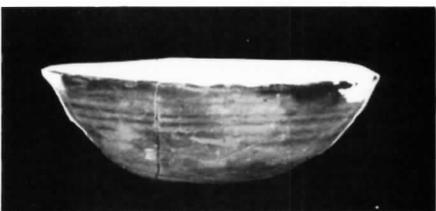
5  
(16-34)



12  
(17-41)



6  
(16-35)



13  
(17-42)

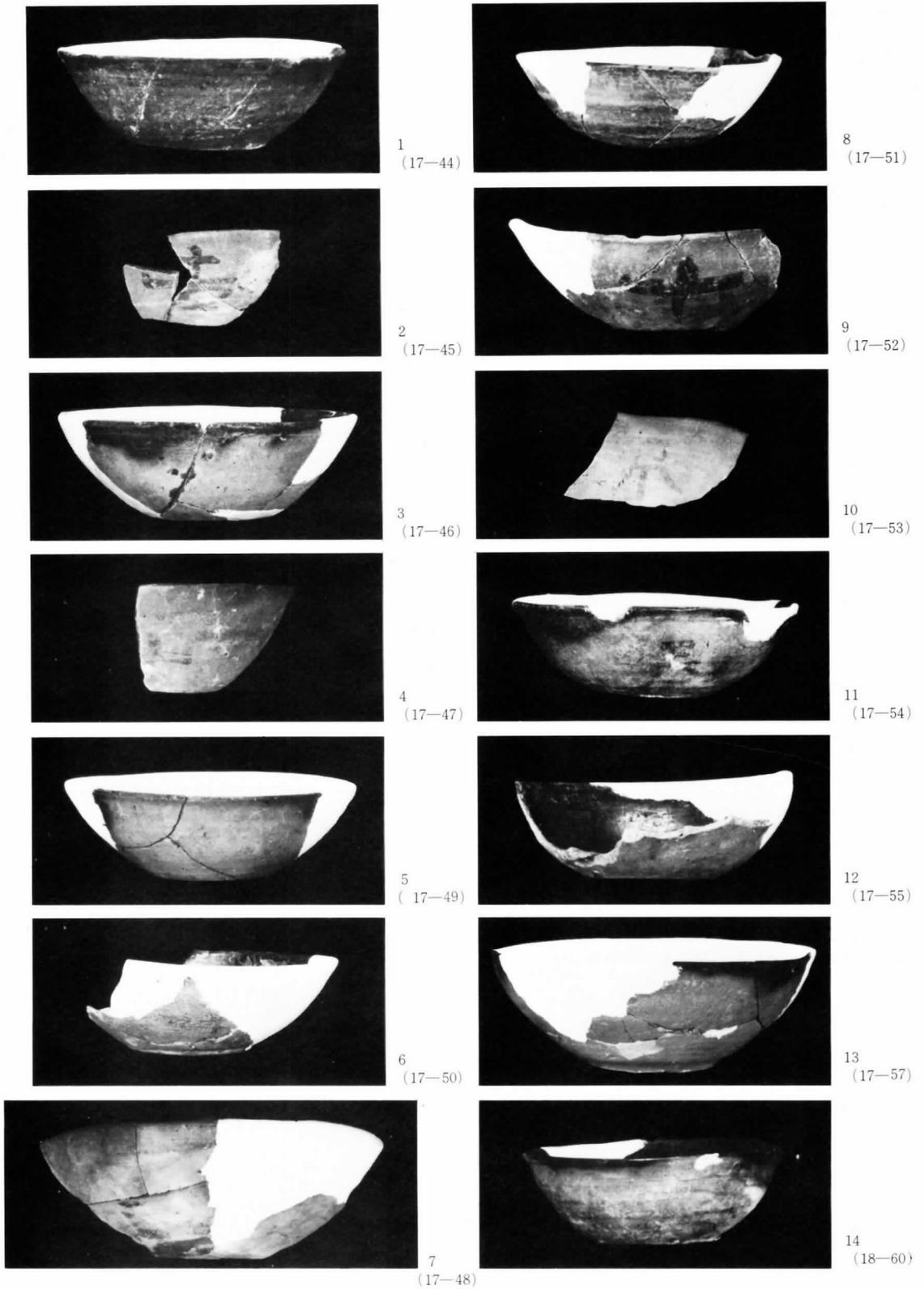


7  
(16-36)

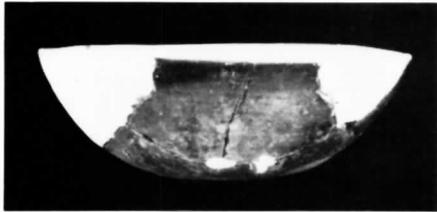


14  
(17-43)

図版9 トレンチ外出土遺物(4) 黒色処理の土器(3)



図版10 トレンチ外出土遺物(5) 黒色処理の土器(4)



1  
(18-61)



8  
(18-72)



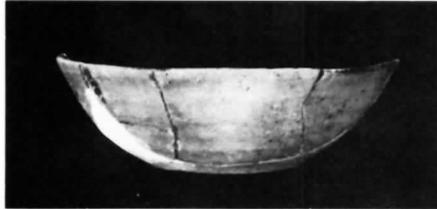
2  
(18-62)



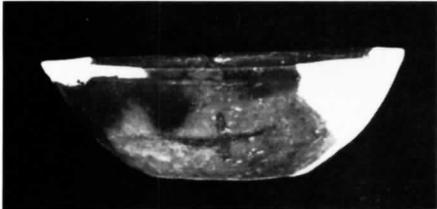
9  
(18-73)



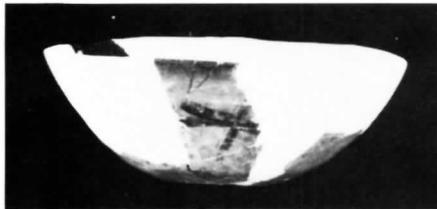
3  
(18-64)



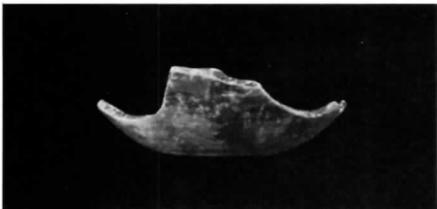
10  
(18-74)



4  
(18-65)



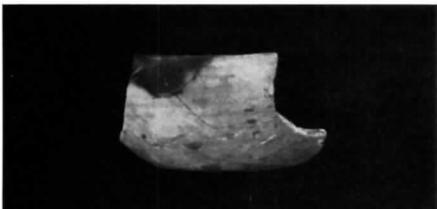
11  
(18-75)



5  
(18-66)



12  
(19-77)



6  
(18-70)



13  
(19-78)



7  
(18-71)



14  
(19-79)

図版II トレンチ外出土遺物(6) 黒色処理の土器(5)



1  
(19-80)



8  
(19-88)



2  
(19-81)



9  
(19-89)



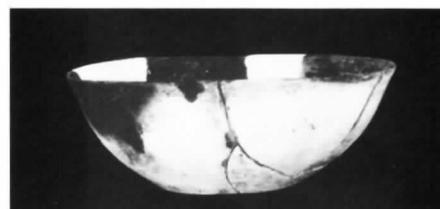
3  
(19-82)



10  
(19-90)



4  
(19-83)



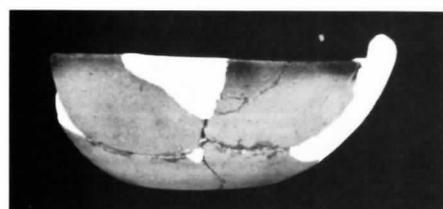
11  
(19-91)



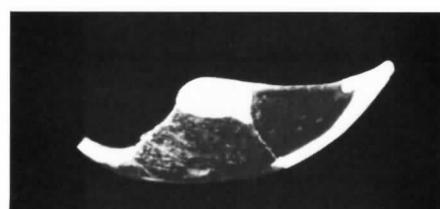
5  
(19-84)



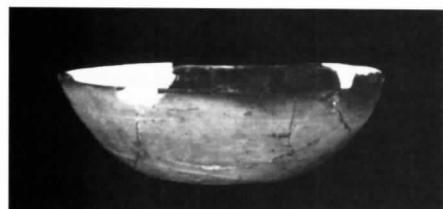
12  
(19-92)



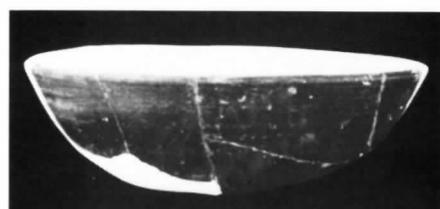
6  
(19-85)



13  
(19-93)



7  
(19-87)

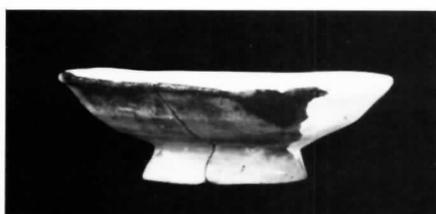


14  
(19-95)

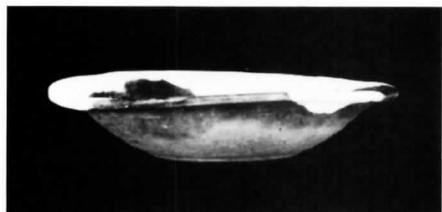
図版12 トレンチ外出土遺物(7) 黑色処理の土器(6)



1  
(21-1)



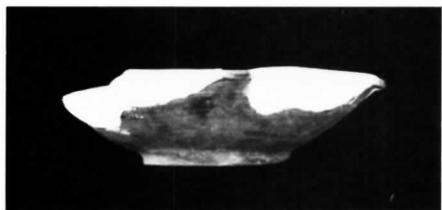
7  
(21-7)



2  
(21-2)



8  
(21-8)



3  
(21-3)



9  
(21-9)



4  
(21-4)



10  
(21-11)



5  
(21-5)



11  
(21-13)



6  
(21-6)



12  
(21-14)



13  
(21-15)

図版13 トレンチ外出土遺物(8) 黒色処理の土器(7)



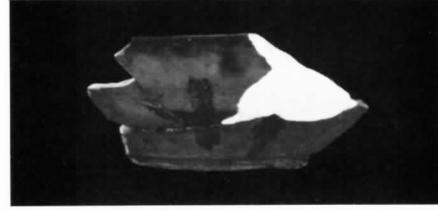
1  
(21-16)



8  
(22-23)



2  
(21-17)



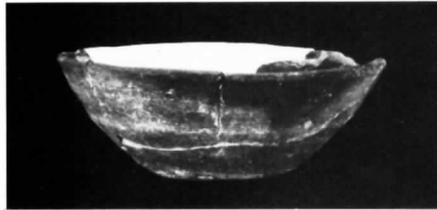
9  
(22-25)



3  
(21-18)



10  
(22-26)



4  
(21-19)



11  
(22-27)



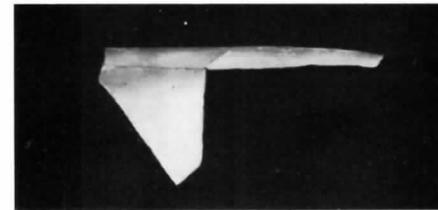
5  
(21-20)



12  
(22-28)



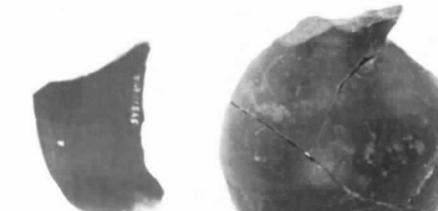
6  
(22-21)



13  
(23-29)



7  
(22-22)



14(24-32)

15  
(24-31)

図版14 トレンチ外出土遺物(9) 黒色処理の土器(8)



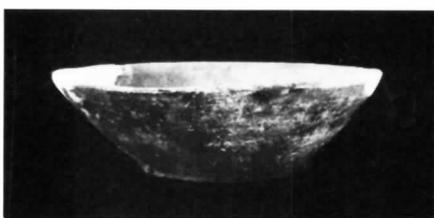
1  
(25-1)



8  
(25-8)



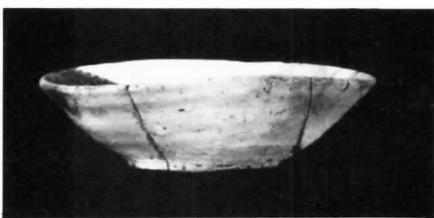
2  
(25-2)



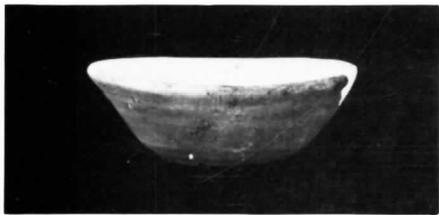
9  
(25-9)



3  
(25-3)



10  
(25-11)



4  
(25-4)



11  
(25-12)



5  
(25-5)



12  
(25-13)



6  
(25-6)



13  
(25-14)



7  
(25-7)



14  
(25-15)

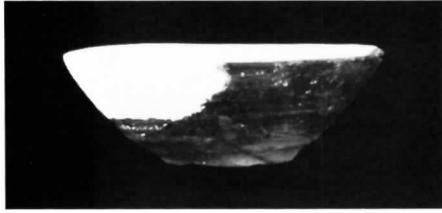
図版15 トレンチ外出土遺物(10) 非黒色処理の土器(1)



1  
(25-16)



8  
(26-23)



2  
(25-17)



9  
(26-24)



3  
(25-18)



10  
(26-25)



4  
(25-19)



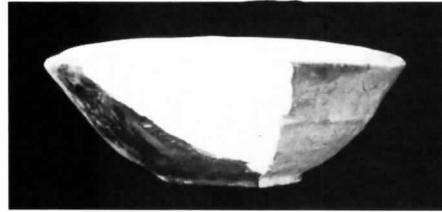
11  
(26-26)



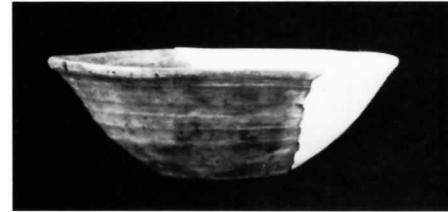
5  
(25-20)



12  
(26-27)



6  
(25-21)



13  
(26-28)

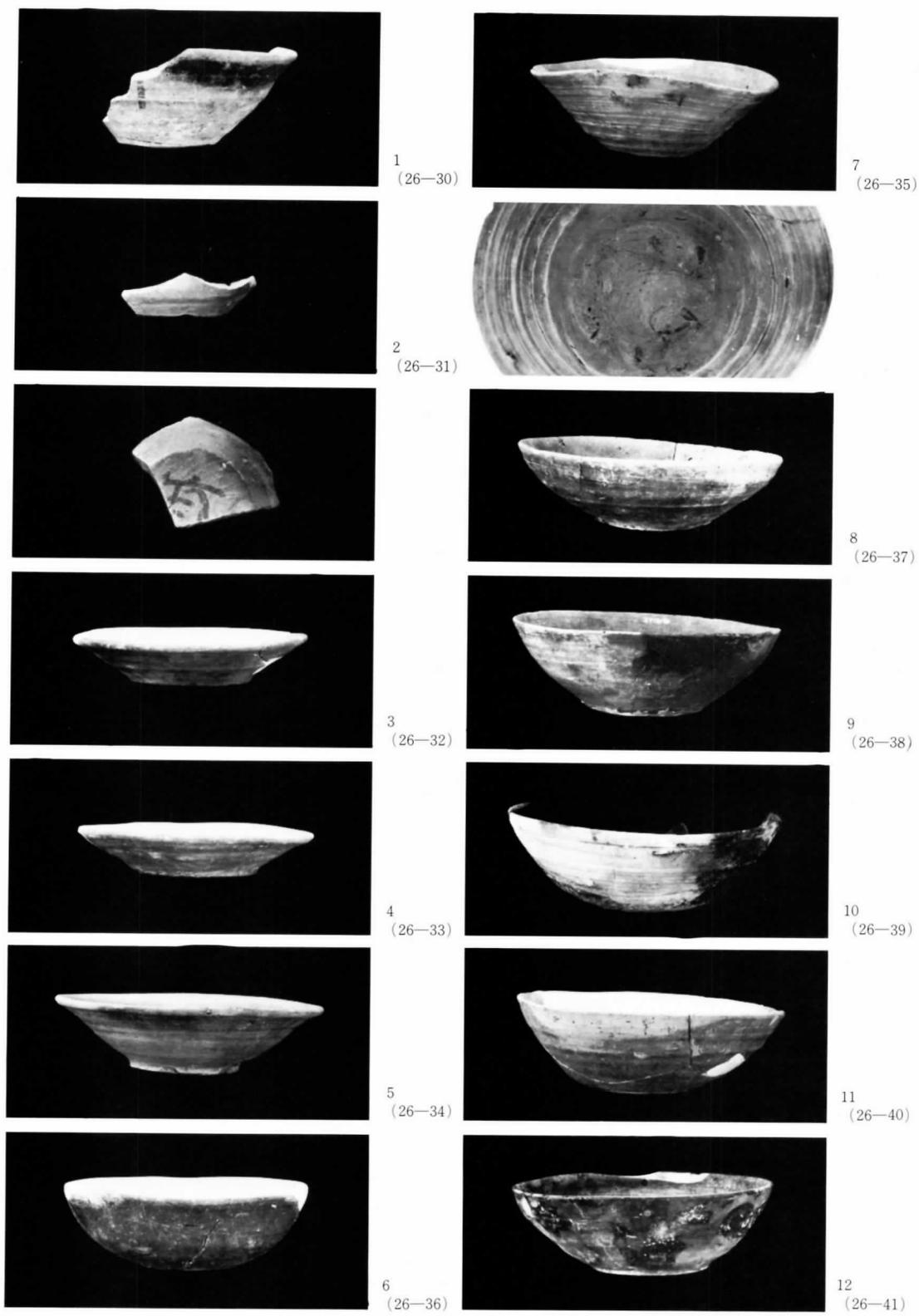


7  
(26-22)

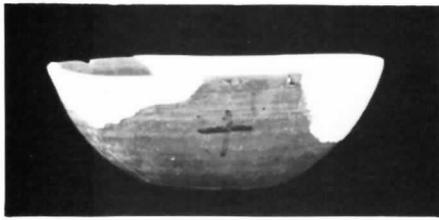


14  
(26-29)

図版16 トレンチ外出土遺物(II) 非黒色処理の土器(2)



図版17 トレンチ外出土遺物(12) 非黒色処理の土器(3)



1  
(26-42)



8  
(27-49)



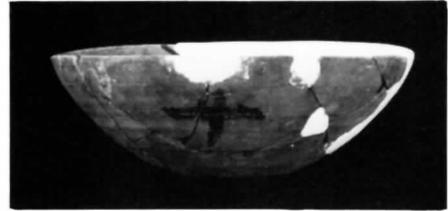
2  
(27-43)



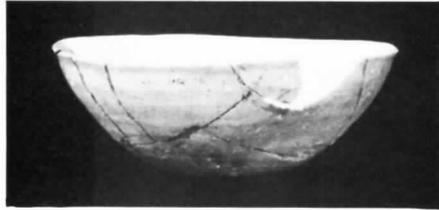
9  
(27-50)



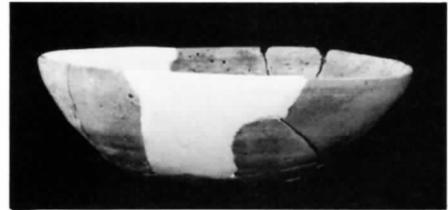
3  
(27-44)



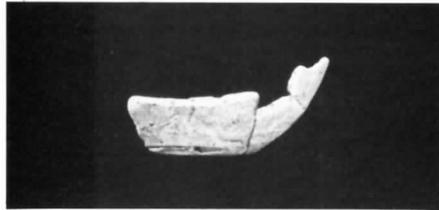
10  
(27-51)



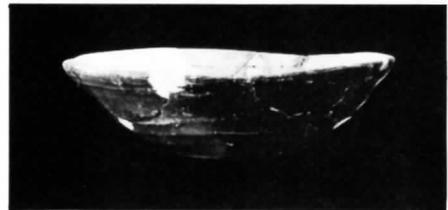
4  
(27-45)



11  
(27-52)



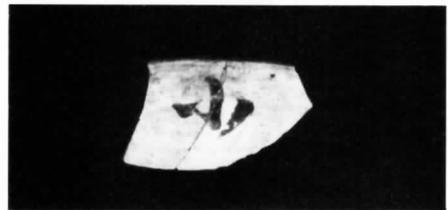
5  
(27-46)



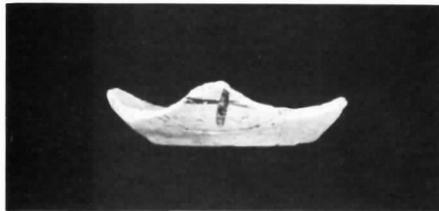
12  
(27-53)



6  
(27-47)



13  
(27-54)



7  
(27-48)



14  
(27-55)

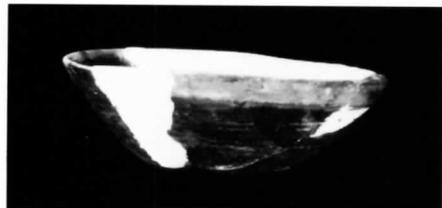
図版18 トレンチ外出土遺物(13) 非黒色処理の土器(4)



1  
(27-56)



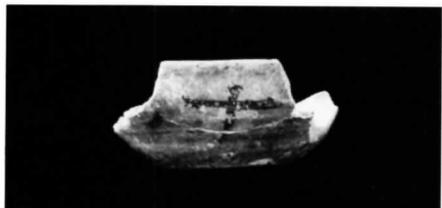
8  
(27-63)



2  
(27-57)



9  
(28-64)



3  
(27-58)



10  
(28-65)



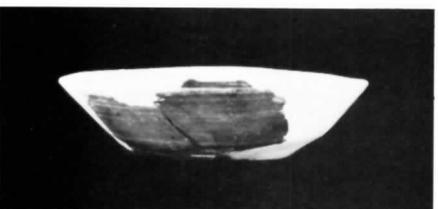
4  
(27-59)



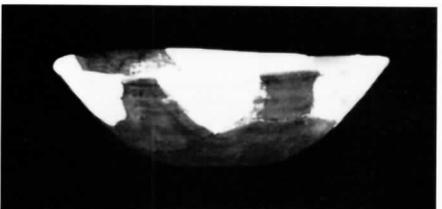
11  
(28-66)



5  
(27-60)



12  
(28-67)



6  
(27-61)



13  
(28-68)



7  
(27-62)



14  
(28-69)

図版19 トレンチ外出土遺物(14) 非黒色処理の土器(5)



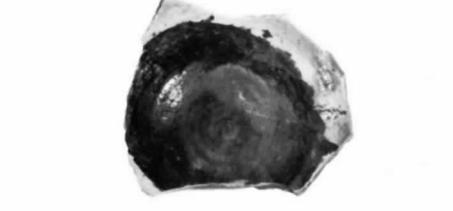
1  
(28-70)



8  
(28-77)



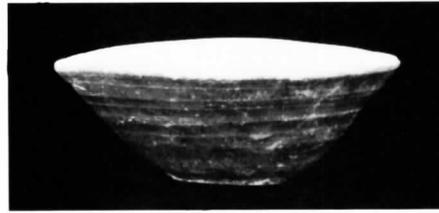
2  
(28-71)



3  
(28-72)



9  
(28-78)



4  
(28-73)



10  
(28-79)



5  
(28-74)



11  
(28-80)



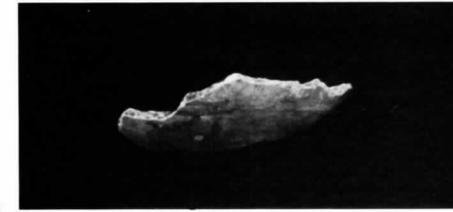
6  
(28-75)



12  
(28-81)

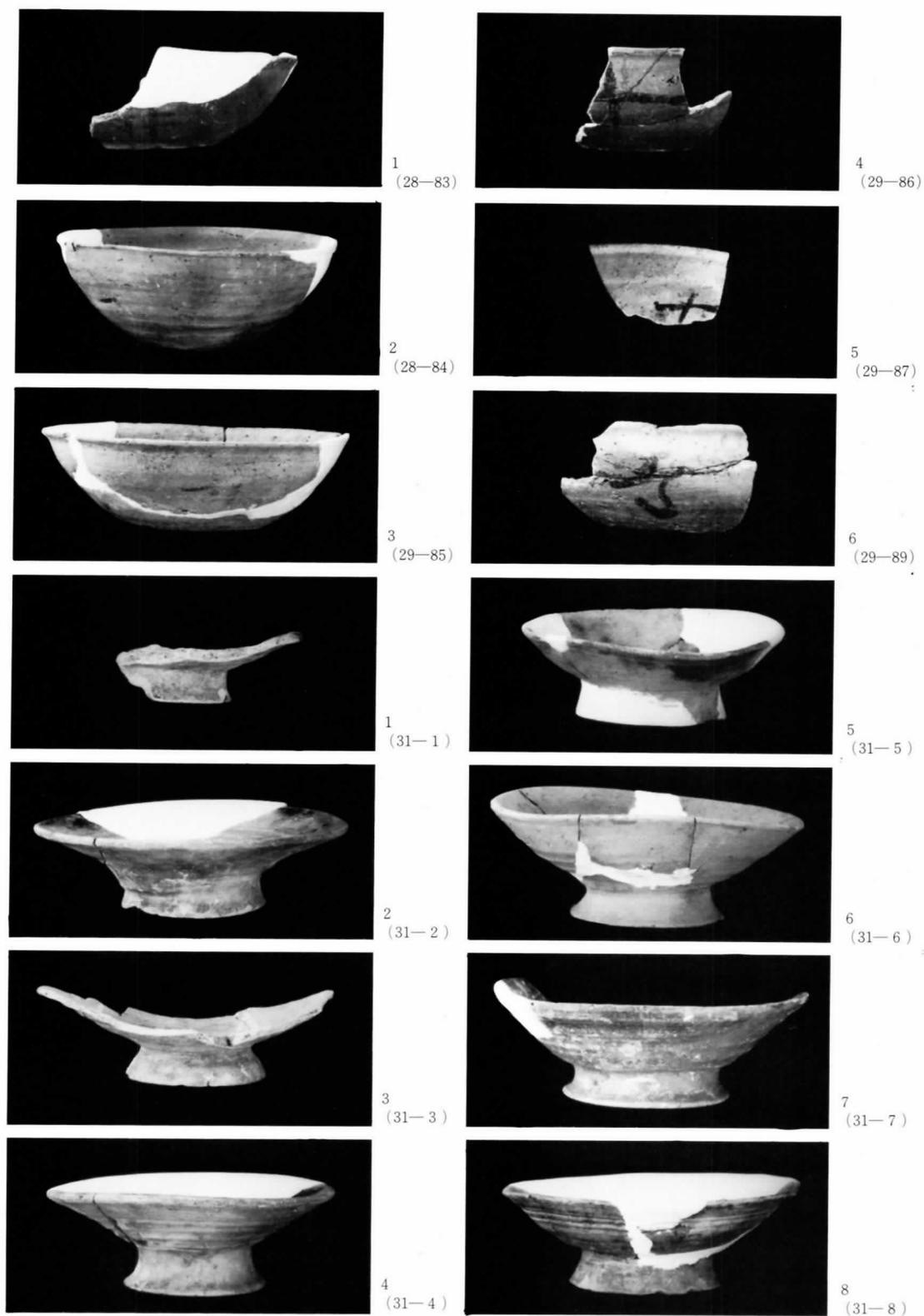


7  
(28-76)



13  
(28-82)

図版20 トレンチ外出土遺物(15) 非黒色処理の土器(6)



図版21 トレンチ外出土遺物(16) 非黒色処理の土器(7)



1  
(31-9)



5  
(31-14)



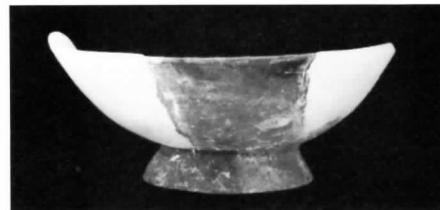
2  
(31-10)



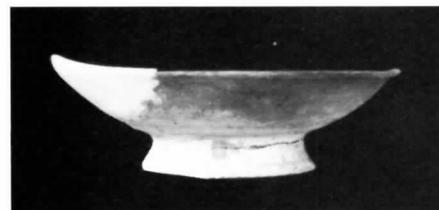
6  
(31-15)



3  
(31-12)



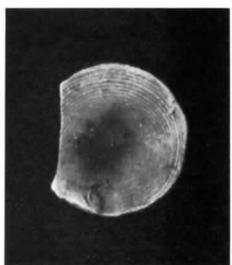
7  
(31-16)



4  
(31-13)



8  
(31-17)



9  
(33-5)



10  
(33-4)



11(33-1)

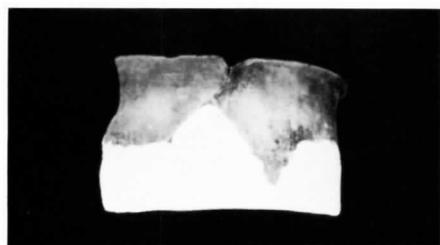


12(33-2)



13  
(33-3)

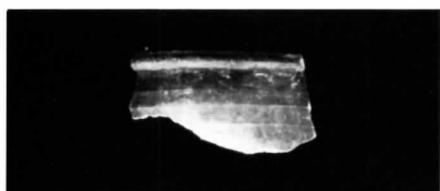
図版22 トレンチ外出土遺物(17) 非黒色処理の土器(8)



1  
(32-1)



2  
(32-2)



3  
(32-3)



4  
(32-4)



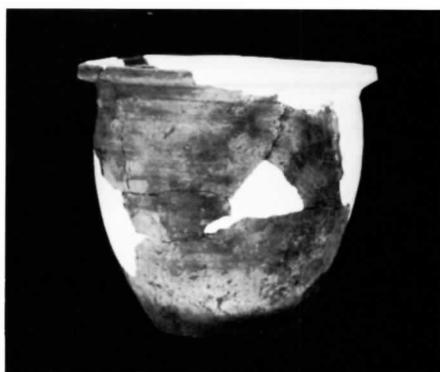
5  
(32-5)



6  
(32-6)



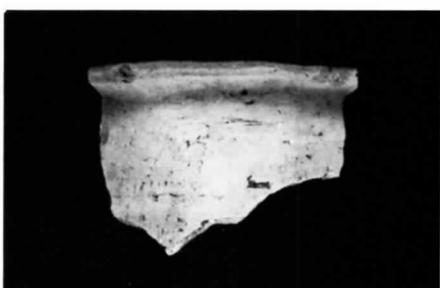
7  
(32-12)



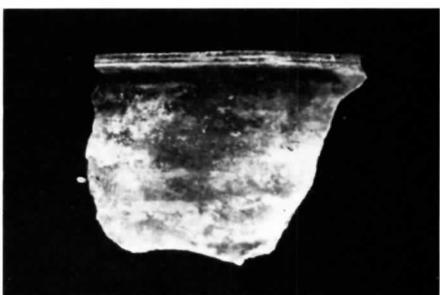
8  
(32-7)



9  
(32-8)



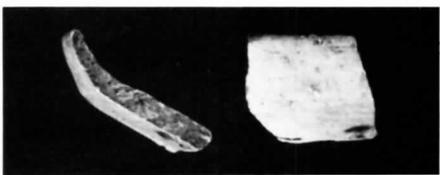
10  
(32-9)



11  
(32-10)



12  
(32-11)



13  
(32-13)

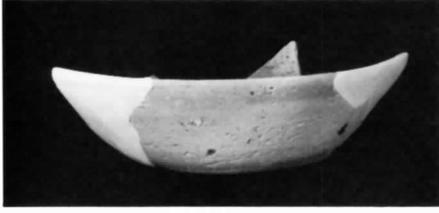
図版23 トレンチ外出土遺物(18) 非黒色処理の土器(9)



1  
(34-1)



8  
(34-11)



2  
(34-2)



9  
(34-12)



3  
(34-3)



10  
(34-13)



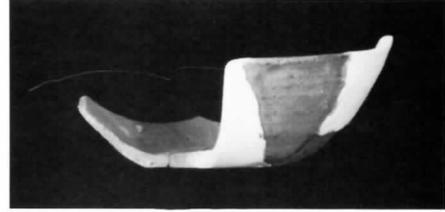
4  
(34-5)



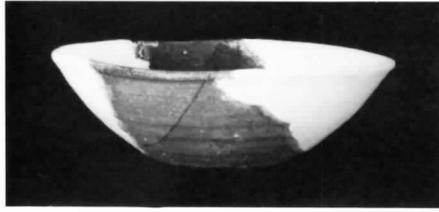
11  
(34-14)



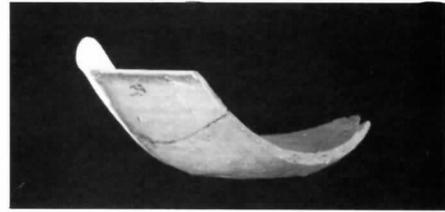
5  
(34-6)



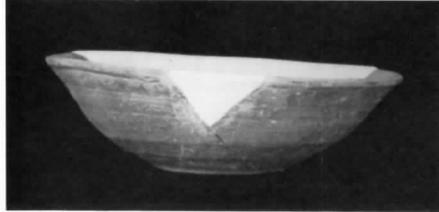
12  
(34-15)



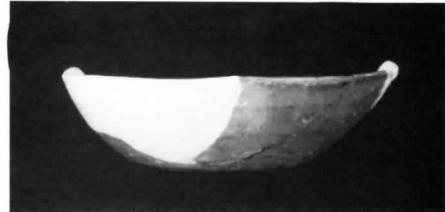
6  
(34-8)



13  
(34-16)

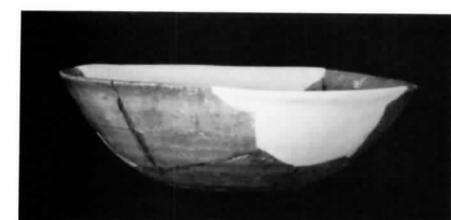


7  
(34-9)



14  
(34-17)

図版24 トレンチ外出土遺物(19) 須 恵 器(1)



1  
(34-18)



8  
(35-26)



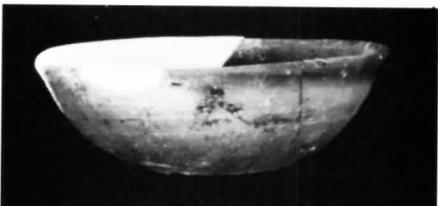
2  
(34-19)



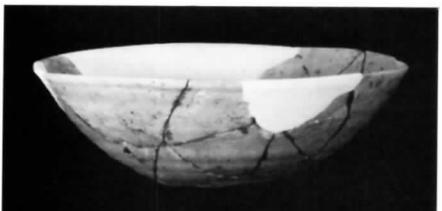
9  
(35-27)



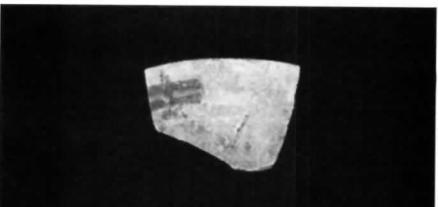
3  
(35-21)



10  
(35-28)



4  
(35-22)



11  
(35-29)



5  
(35-23)



12  
(35-30)



6  
(35-24)



13  
(35-31)

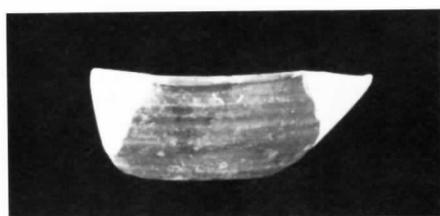


7  
(35-25)



14  
(35-32)

図版25 トレンチ外出土遺物(20) 須恵器(2)



1  
(35-33)



8  
(36-42)



2  
(35-34)



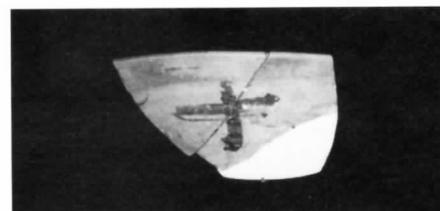
9  
(36-43)



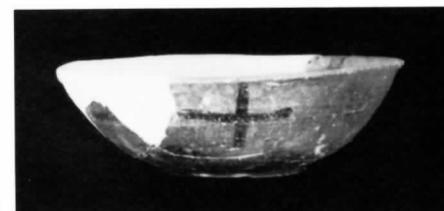
3  
(35-35)



10  
(36-44)



4  
(35-36)



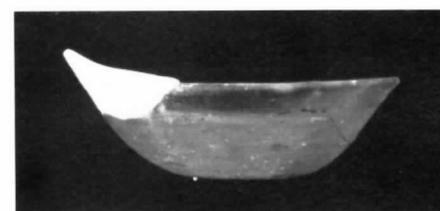
11  
(36-45)



5  
(35-37)



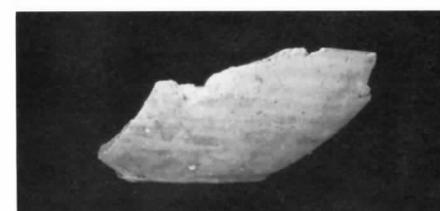
12  
(36-46)



6  
(35-38)



13  
(36-47)



7  
(35-40)

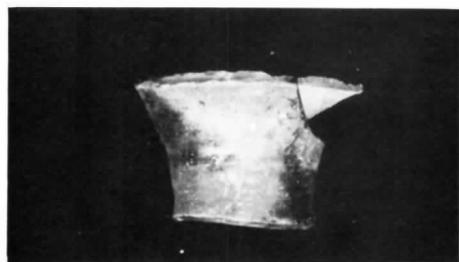


14  
(36-48)

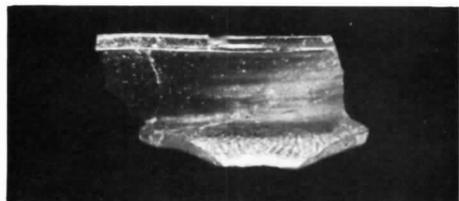
図版26 トレンチ外出土遺物(21) 須 恵 器(3)



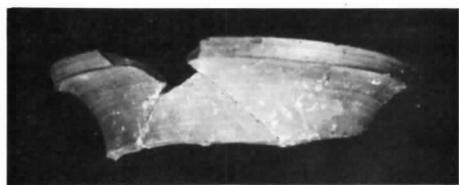
1  
(38-1)



3  
(38-5)



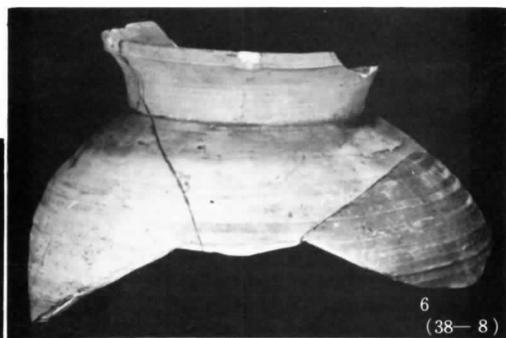
4  
(38-6)



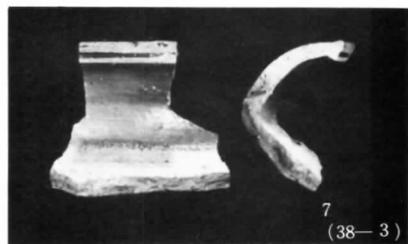
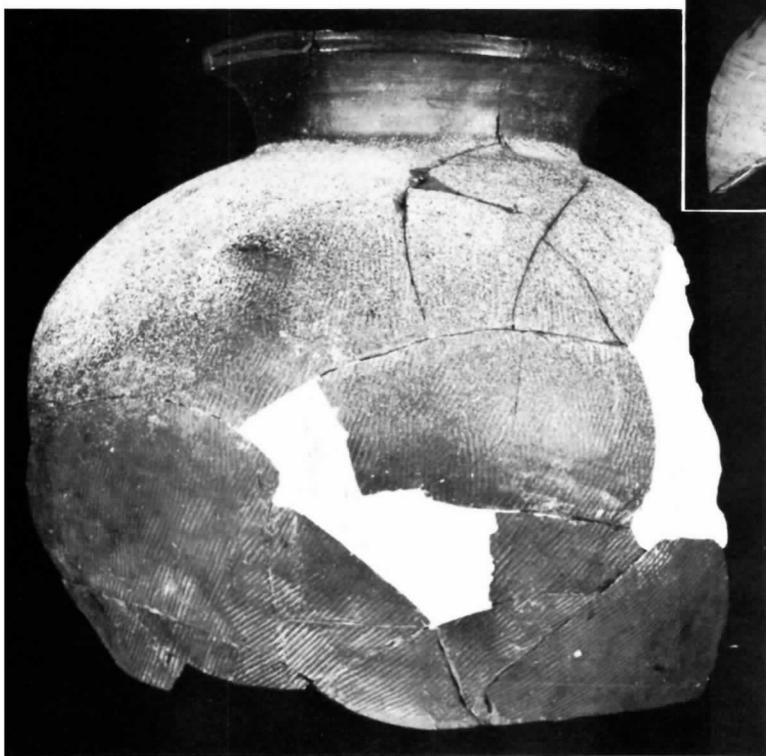
5  
(38-7)



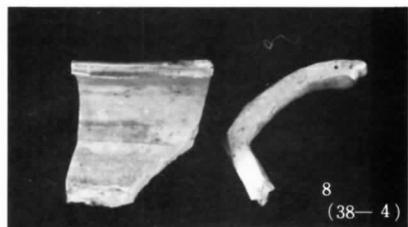
2  
(38-2)



6  
(38-8)



7  
(38-3)



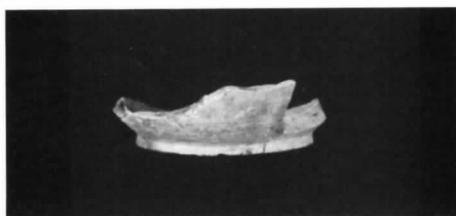
8  
(38-4)

9  
(38-9)

図版27 トレンチ外出土遺物(22) 須恵器(4)



1  
(39-10)



5  
(39-12)



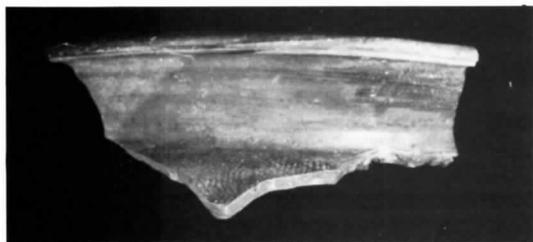
6  
(39-13)



2  
(39-11)



7  
(39-14)



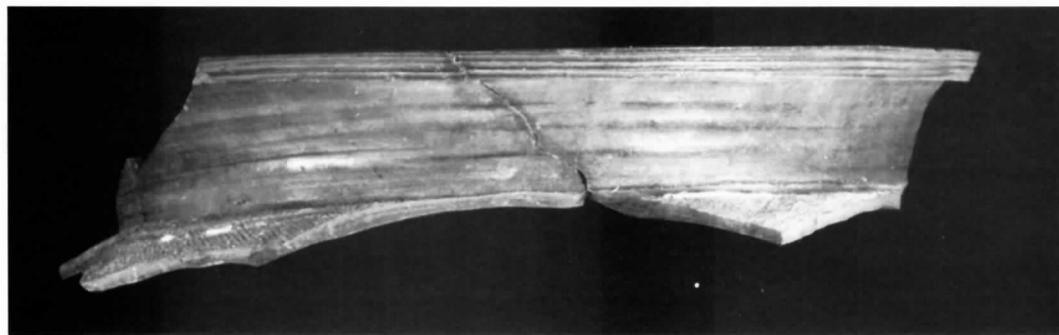
3  
(39-16)



8  
(39-15)

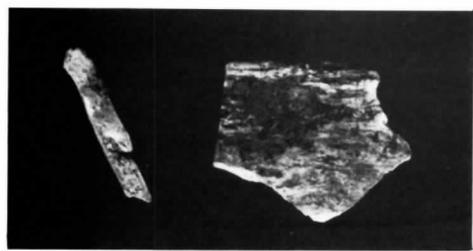


4  
(39-17)



9  
(39-18)

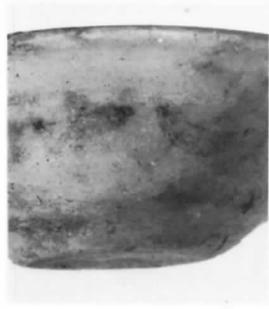
図版28 トレンチ外出土遺物(23) 須恵器(5)



1  
(39—11)



2  
(39—10)



B 169



B 192



B 25



B 75



B 24



B 86



B 95



B 94



B 184



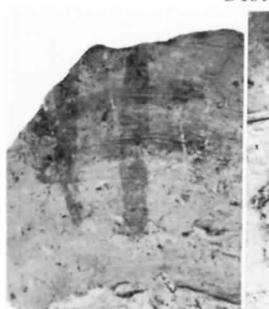
B 192



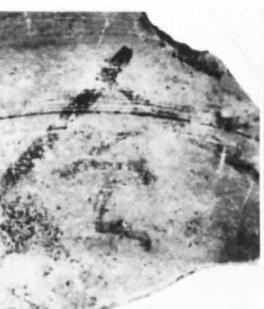
B 183



B 167



B 176



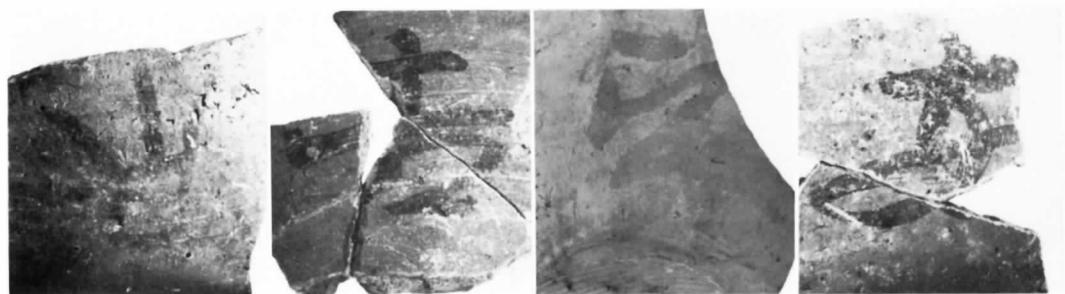
B 144



B 145



B 173

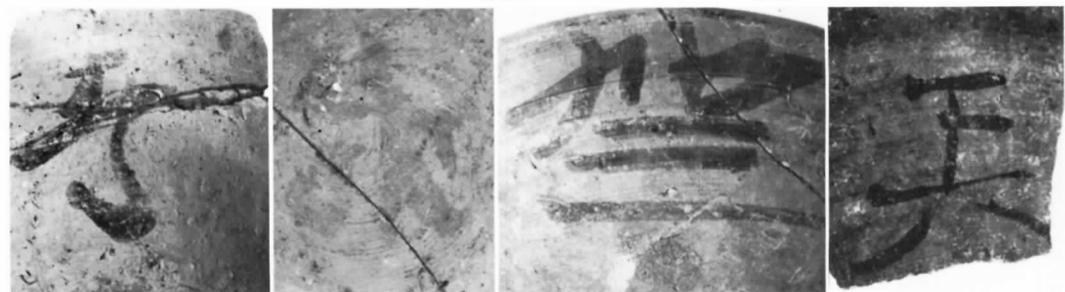


B 173

B 171

B 178

B 156

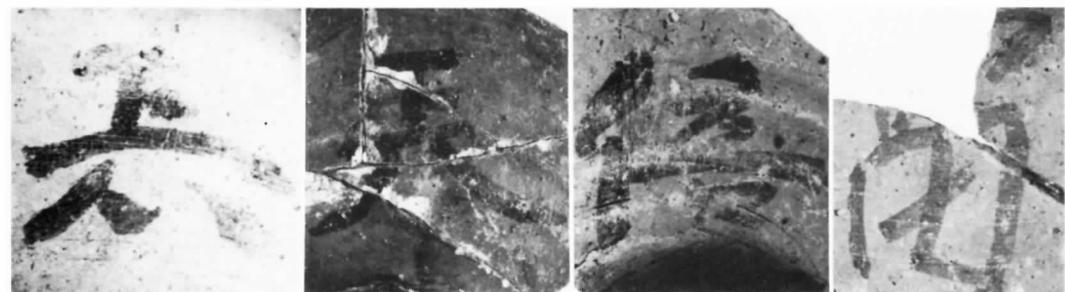


B 186

B 179

B 187

B 123



B 135

B 119

B 170

B 191

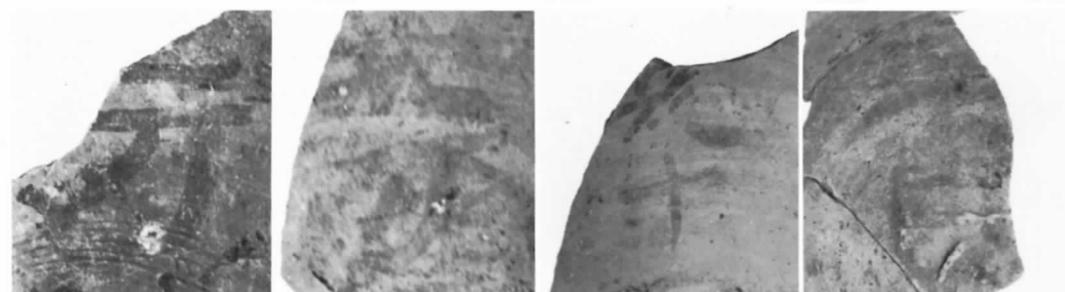


B 163

B 165

B 162

B 260

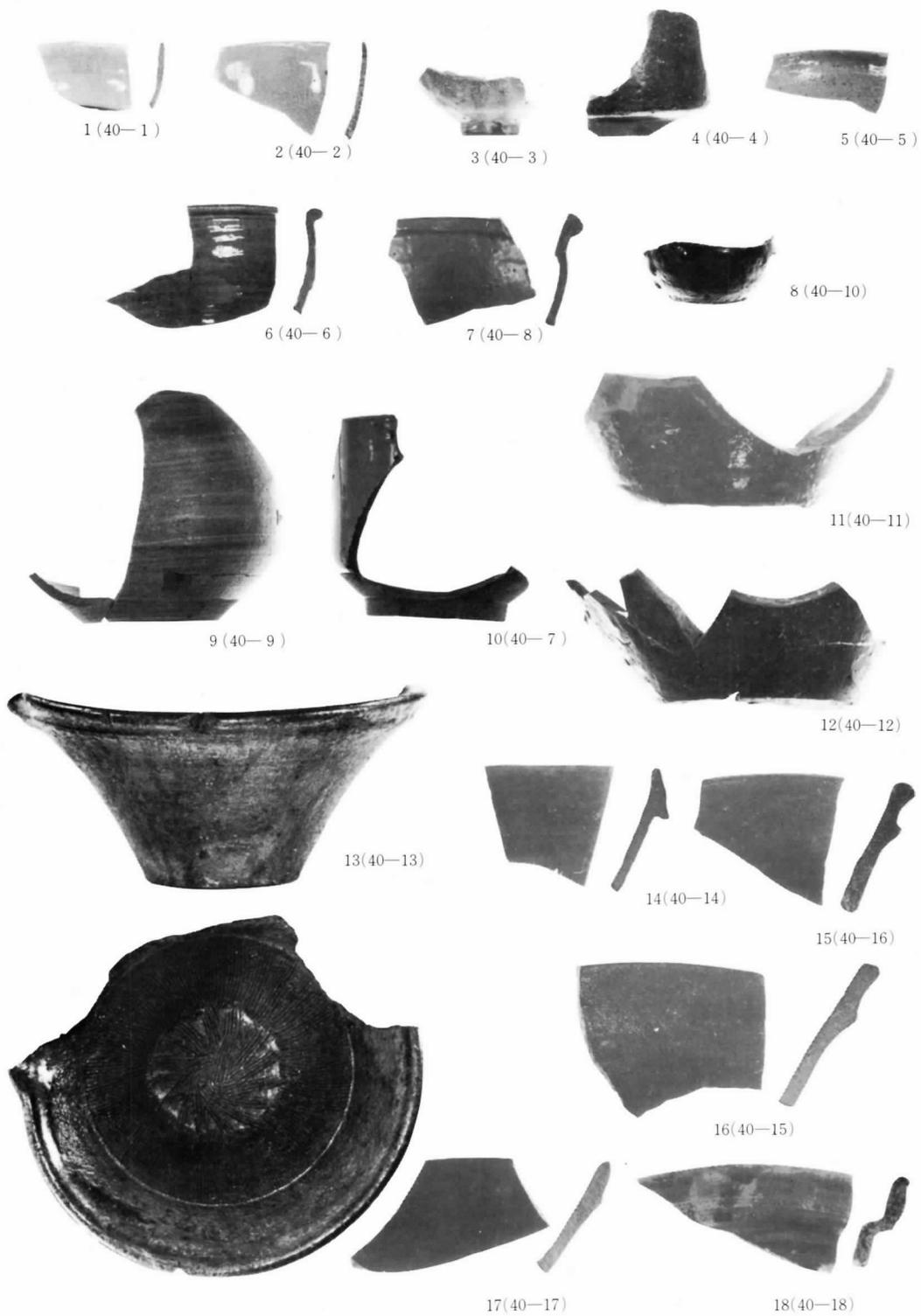


B 189

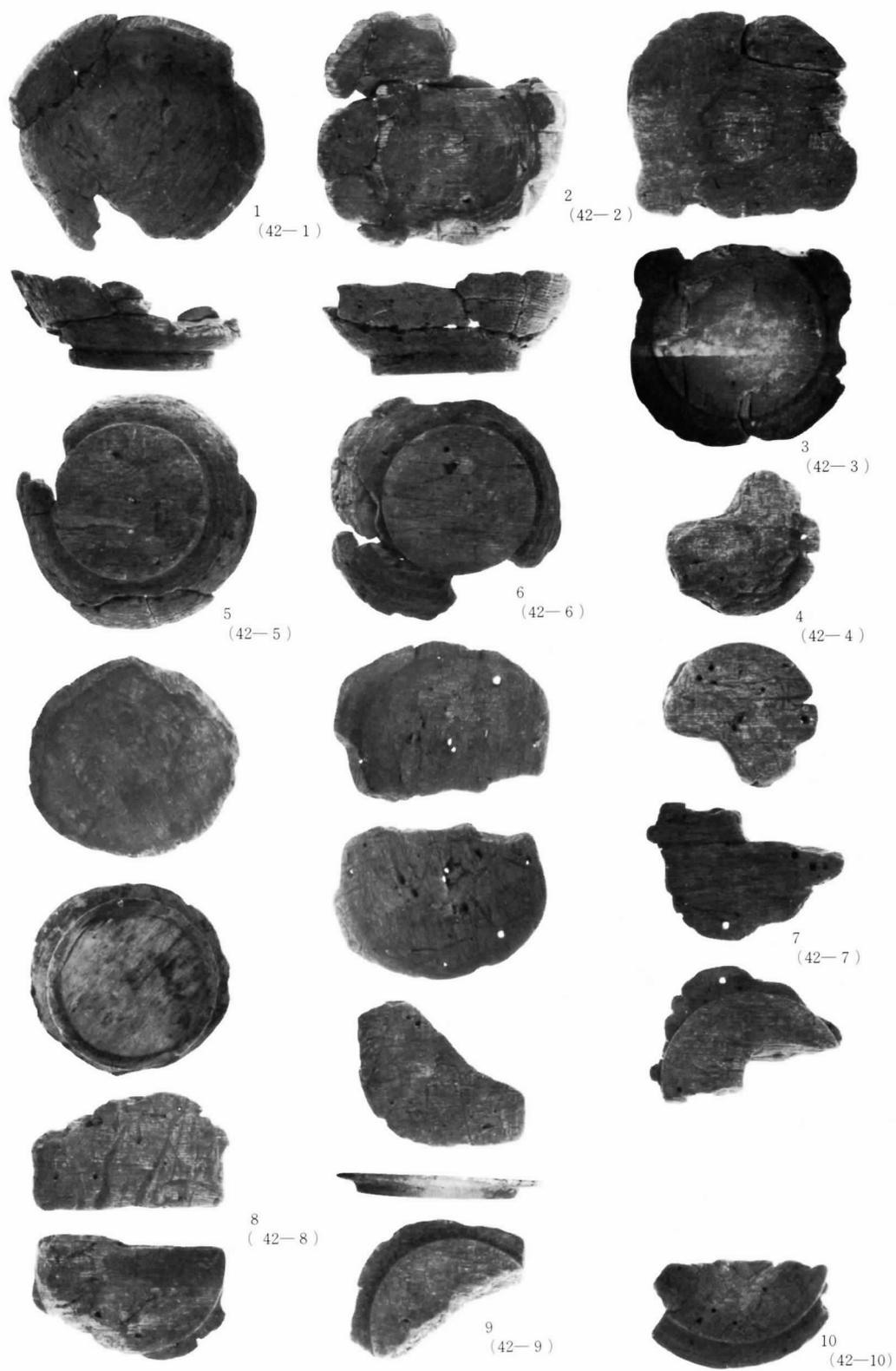
B 177

B 181

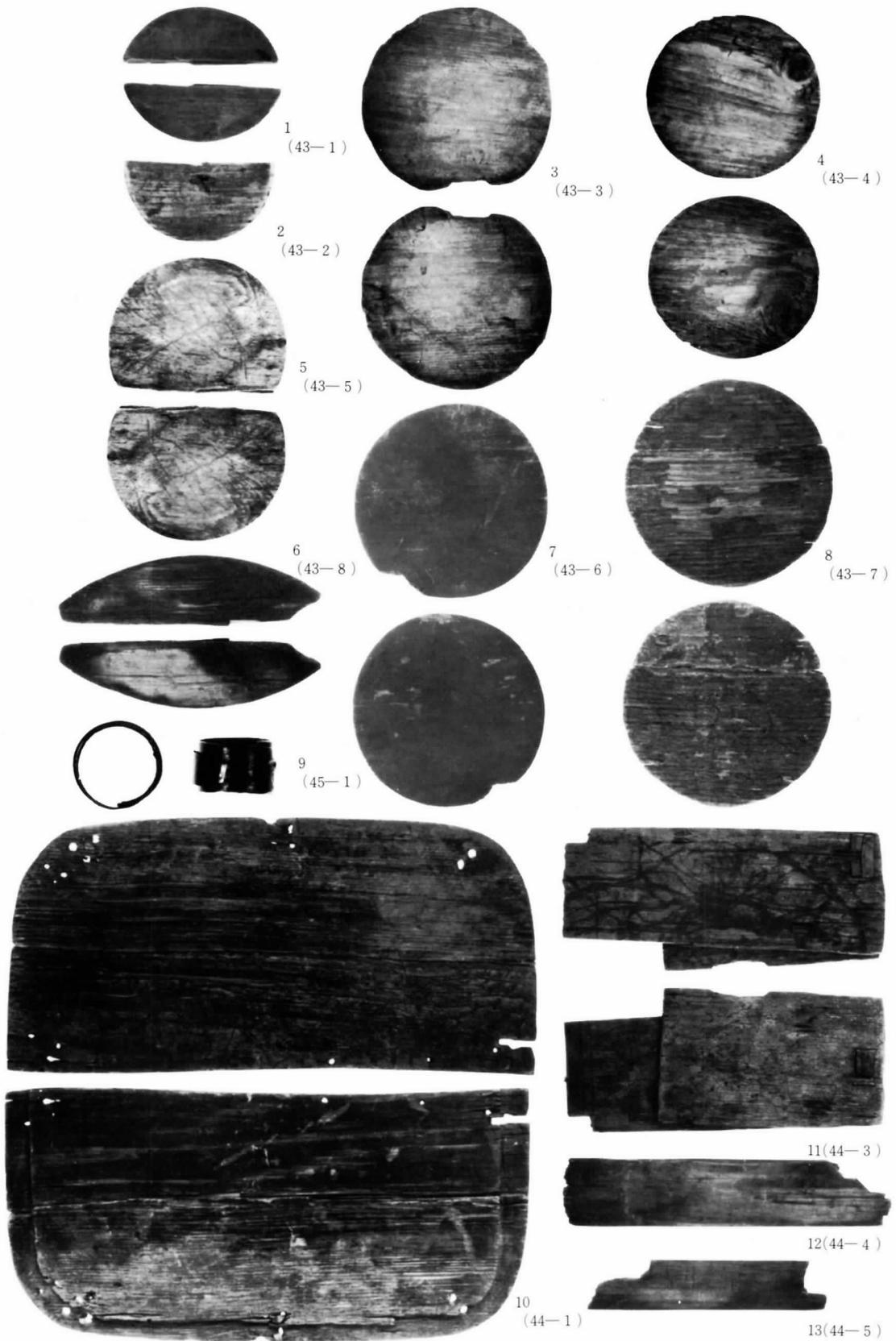
B 233



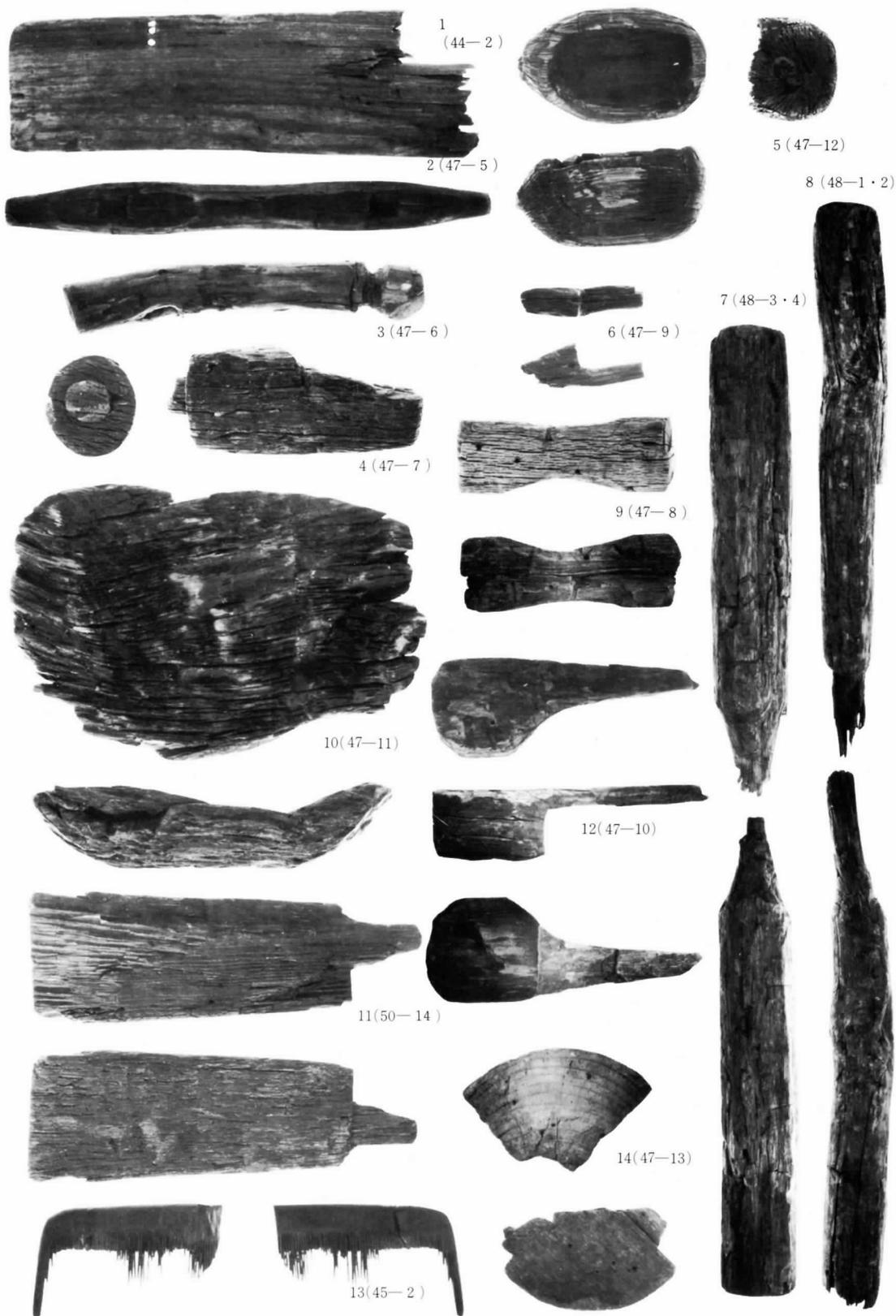
図版31 トレンチ外出土遺物(24) 陶磁器



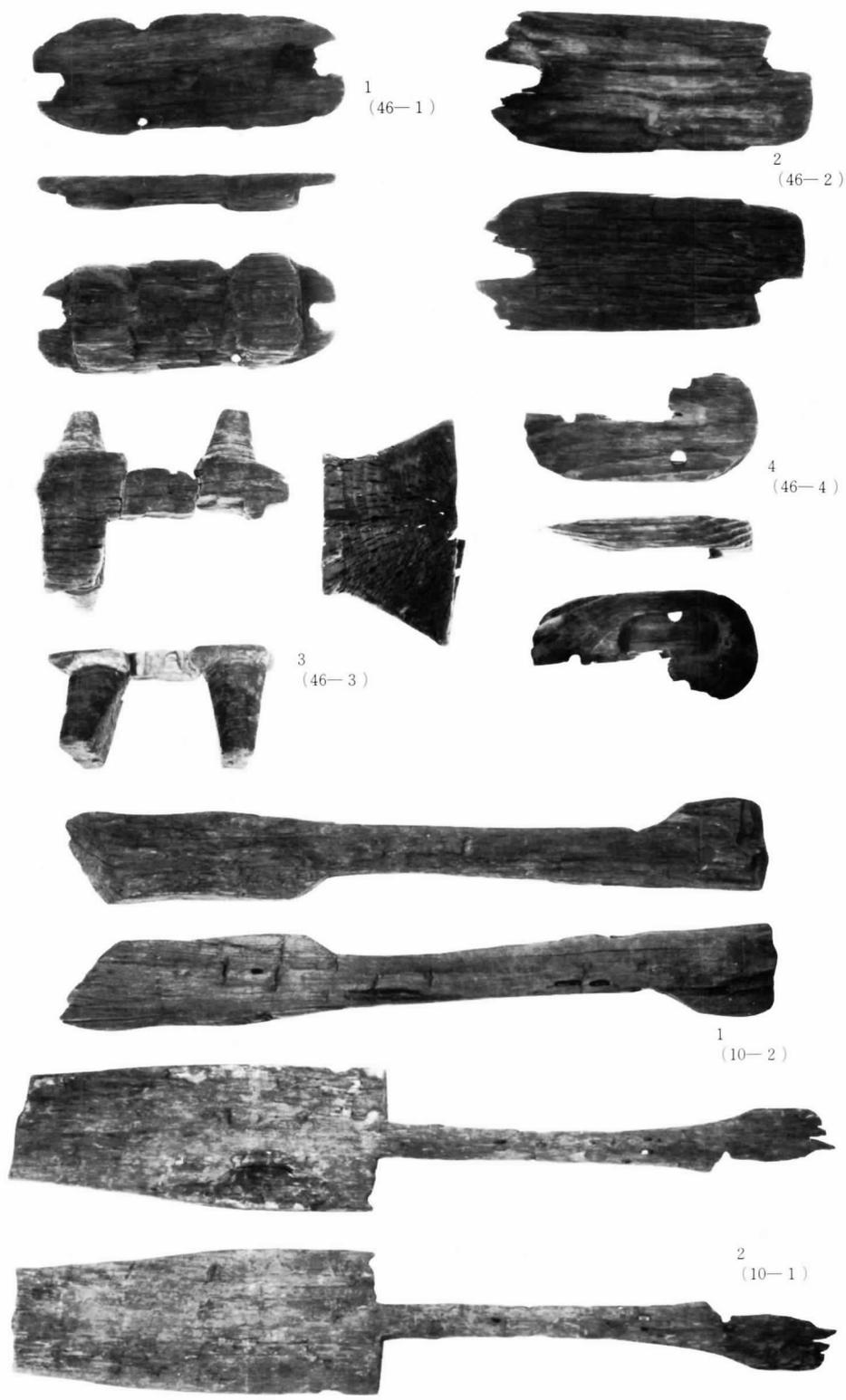
図版32 トレンチ外出土遺物(25) 木製品(1)



図版33 トレンチ外出土遺物(26) 木製品(2)



図版34 トレンチ外出土遺物(27) 木製品(3)



図版35 トレンチ外出土遺物(28) トレンチ出土遺物(5) 木製品(4)



1(49)



ヒョウタン (1/3)



トチ (1/3)



オニグルミ (1/3)

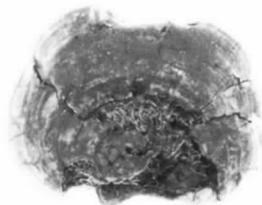


マンサク (1/3)

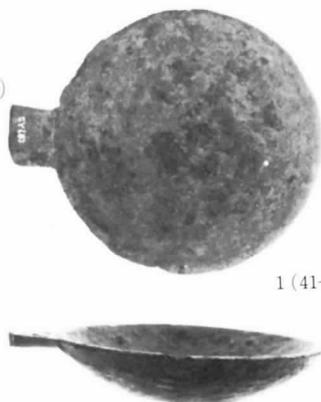
クリ (1/2)



イネ(1/1) ヒエ(1/1) 不明(1/1)



キノコ (1/3)



1(41-1)



2(41-3)

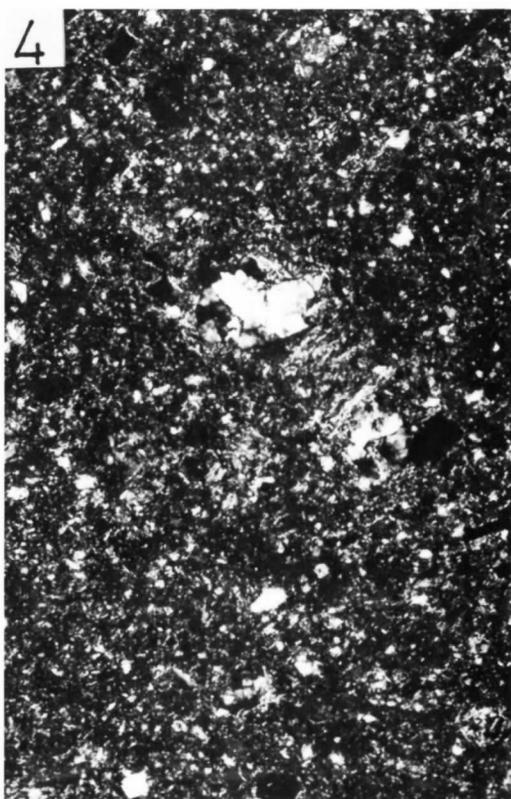
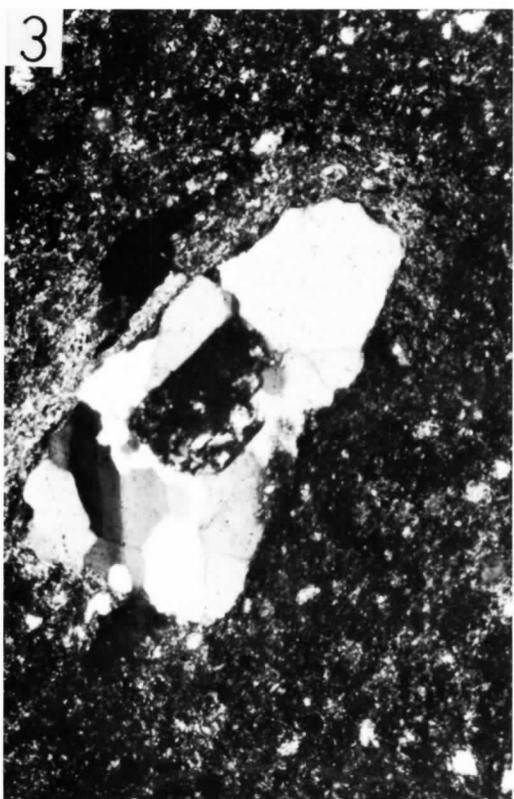
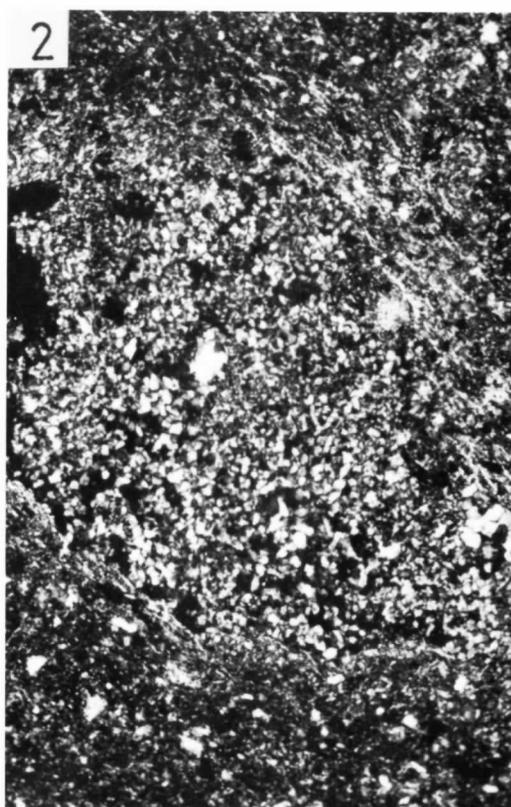


3(41-2)



1(49)

赤外線テレビより撮影  
(東北歴史資料館による)

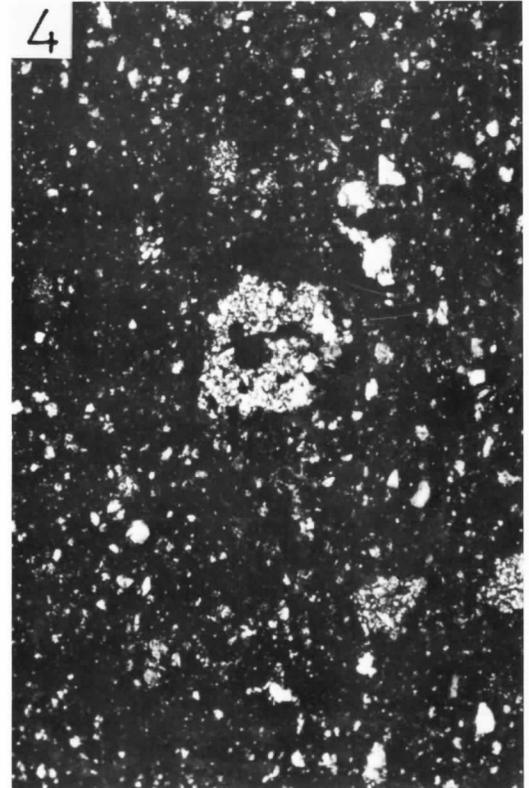
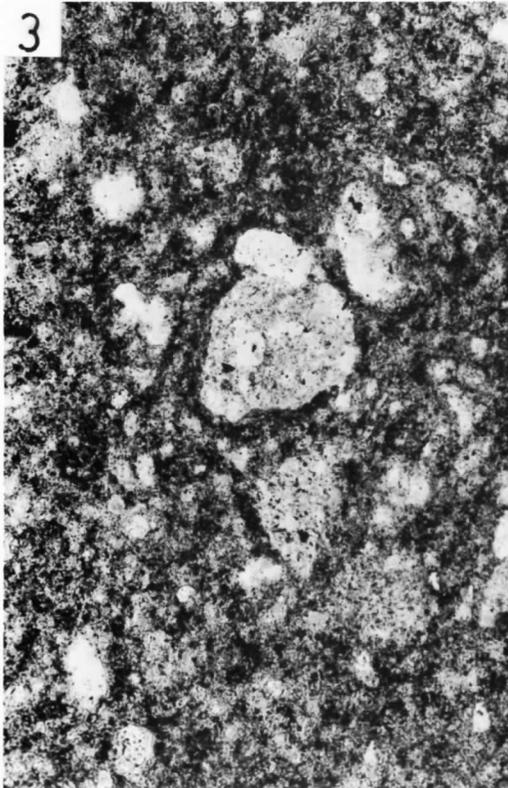
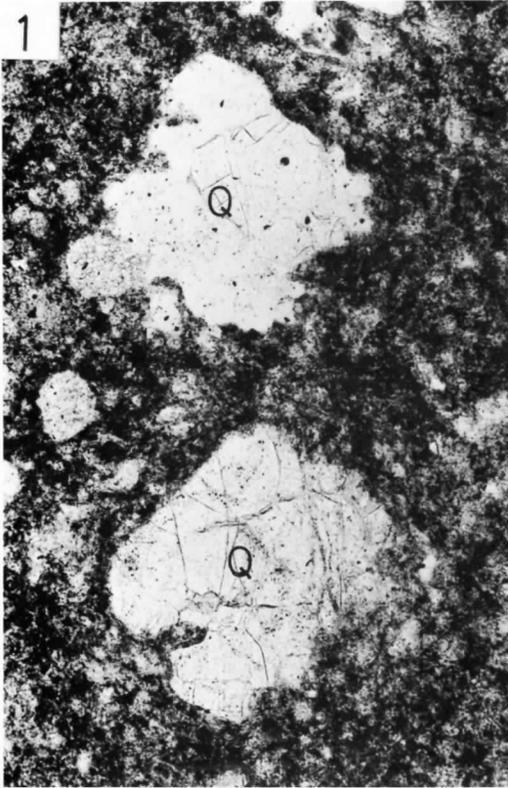


図版37 S-1. 赤焼土器?(坏)、江釣子村下谷地B遺跡出土

1: 石英・斜長石・輝石・火山ガラス・鉄鉱・緑レン石などの鉱物がみられる。

岩片はプロピライト。(平行ニコル)

2: チャート。(直交ニコル) 3: 花崗岩。(直交ニコル) 4: 珪岩。(直交ニコル)



図版38

S-2. 須恵器(坏)、江釣子村下谷地B遺跡出土

1: 石英・長石・鉄鉱および少量の火山ガラスを含む。(平行ニコル)

2: 同上。(直交ニコル)

3: チャートの岩片。(平行ニコル)

4: 3に同じ。(直交ニコル)

かみ ふじ き  
上 藤 木 遺 跡

遺 跡 名：上藤木(略号KF73)

遺 跡 所 在 地：和賀郡江釣子村北鬼柳14-20-1

調 査 期 間：昭和48年8月27日～9月17日

調 査 対 象 面 積：3,530 m<sup>2</sup>

発 掘 調 査 面 積：972 m<sup>2</sup>



## I 位置と立地

本調査地は、国鉄東北本線北上駅の北西約3.4kmの所にある。

和賀川の北岸、猫谷地遺跡の北側に位置し、金ヶ崎段丘相当面に立地する。当調査地は周囲より幾分の高まりが見られる。最高標高は72.70m内外である。

周辺の遺跡としては、前述の猫谷地遺跡（縄文時代・古代）「本調査関連遺跡」、西方に本宿遺跡（縄文時代前・中期）、北方に下谷地遺跡（古代）「本調査関連遺跡」等がある。

## II 調査の概要及び結果

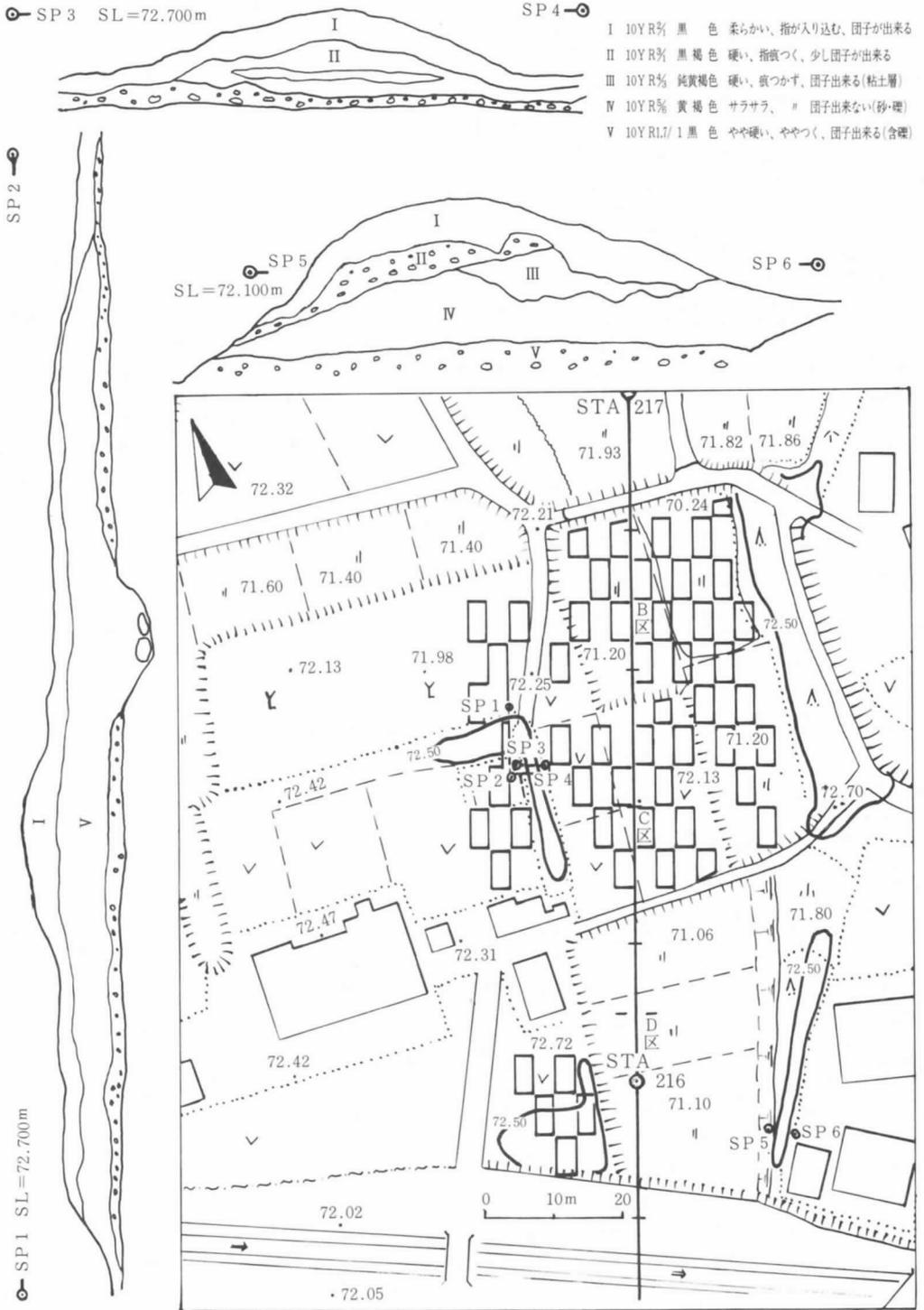
本調査に先立つ分布調査に於いて、土塁状の地形が確認され館跡等の可能性も考えられた。

結果として、土塁状の地形の高まりは図示のごとく版築等の特殊な工法でなく乱積されたものである事が判明した。調査地域にはその他関連遺構は検出されなかった。土塁状の高まりは民家の敷地境界であったとの話もあるが、いつの時代からのものかは不明である。この構造物はC区とD区の間にて、東方向への通路状低地でもって途切れている。調査地区東側の同構造物は北側にも連なっており、そのすぐ内側は周囲より一段低くなっている。調査地区南側はすでに水路により開削され、旧状を把握できない。この事は調査区外西方も同様で、把握できない。

## III 今後に残された問題

IIでも述べた様に民家の敷地境界としての使用の事実関係についても明確に出来なかった訳であるが、類例の把握が必要である。又、Iでも述べた通り当地方は縄文時代より、特にも古代における生活の場として重要な位置付けがなされなければならない。調査地周囲には他にも種々の遺跡が存在する事であろう。本調査の原因となった大規模開発が行なわれた地域だけに今後更に開発が進む事であろう。その現状変更の際には細心の注意を払い遺跡の破壊が行なわれる事を防がなければならない。十分な調査を行い、今回明確に出来なかった点について解決の糸口が明らかになるような成果が得られる事を期待したい。

— 上藤木遺跡 —



第1図 上藤木

なり さわ  
成 沢 遺 跡

遺 跡 名：成沢(略号NS72)

遺 跡 所 在 地：北上市相去町字下成沢54-1ほか

調 査 期 間：昭和47年6月～昭和47年7月9日

調 査 対 象 面 積：2,500 m<sup>2</sup>

発 掘 調 査 面 積：1,250 m<sup>2</sup>

## 図 版 目 次

第1図 成沢遺跡全体図 ……………264	第15図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(3) ……………282
第2図 藩境塚 ……………265	第16図 Db 6 竪穴住居跡埋土遺物 ……………282
第3図 Ba 6 竪穴住居跡 ……………266	第17図 Df18竪穴住居跡 ……………284
第4図 Bi65竪穴住居跡 ……………268	第18図 Df18竪穴住居跡出土遺物(1) ……………286
第5図 Bi65竪穴住居跡炉跡断面図 ……………269	第19図 Df18竪穴住居跡出土遺物(2) ……………287
第6図 Bi65竪穴住居跡出土遺物(1) ……………271	第20図 Df18竪穴住居跡出土遺物(3) ……………288
第7図 Bi65竪穴住居跡出土遺物(2) ……………272	第21図 遺構以外の出土遺物(1) ……………290
第8図 Bi65竪穴住居跡埋土遺物 ……………273	第22図 遺構以外の出土遺物(2) ……………291
第9図 Ch59竪穴住居跡 ……………274	第23図 遺構以外の出土遺物(3) ……………292
第10図 Ch59竪穴住居跡出土遺物 ……………275	第24図 遺構以外の出土遺物(4) ……………293
第11図 Cg65竪穴住居跡 ……………277	第25図 遺構以外の出土遺物(砥石) ……………293
第12図 Db 6 竪穴住居跡 ……………278	第26図 遺構以外の出土遺物(縄文土器) ……………294
第13図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(1) ……………280	第27図 遺構以外の出土遺物(石器) ……………296
第14図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(2) ……………281	

## I 位置と立地

成沢遺跡は岩手県北上市相去町字下成沢54の1他にあり、東北本線北上駅の南西約5kmに所在する。西方約10kmには、奥羽脊梁山脈に続く第三紀安山岩類からなる山地が連なり、その東麗には夏油川等によって形成された扇状地性台地が広がっている。一方、台地の北及び東には和賀川、北上川があり、東流あるいは南流している。扇状地性台地の大部分は金ヶ崎段丘面に覆われているが、一部村崎野段丘面、西根段丘面が残丘状に取り残され、その末端には成沢川等の小河川が入って、東西に連なる低台地に分断している。当遺跡ののる北部台地は「六原台<sup>注(1)</sup>地」あるいは「相去台地<sup>注(2)</sup>」と呼ばれ、沖積平野とは15mほどの急崖をなして接している。

調査地は、この取り残された村崎野段丘の最北端中ごろに位置し、成沢川に面した南斜面に立地している。現状は宅地、山林及び畑地で、調査地点の標高は87~94.5mである。

注(1)『土地分類基本調査 北上山系開発地域・北上』岩手県企画開発室(北上山系開発) 1976

(2)『相去遺跡現地説明会資料』岩手県教育委員会 北上市教育委員会 1973

## II 調査経過及び方法

調査範囲は当初東北縦貫自動車道が南北に通るため、東西約45m、南北約50mの約2500㎡であったが、その後南北120mに拡張している。地区割は道路中心杭STA183+00を基点として、北9mをCa50とした。調査は3mを単位とするグリット方式を採用し、昭和47年6月から7月9日にかけて実施した。

調査地内の基本層序は次のとおりである。

I層 表土(耕作土) 火山灰のブロックを含む。

II層 暗褐色火山灰層 腐植と火山灰の入り混った層であり少量のパミスを含む。

III層 淡黄褐色火山灰層 安山岩の小礫(亜角礫)とパミスを多量に含む。

IV層 パミス パミスと火山灰とがほぼ均等に混り合っている。安山岩の小礫を含む。

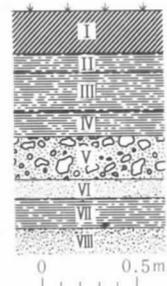
V層 砂礫層 組成として腐ったパミスから成った層である。しかし崩壊していないパミスも多量に混じっている。

VI層 白色粘土層 微量ながら植生痕と褐鉄鉱とパミスを含む。

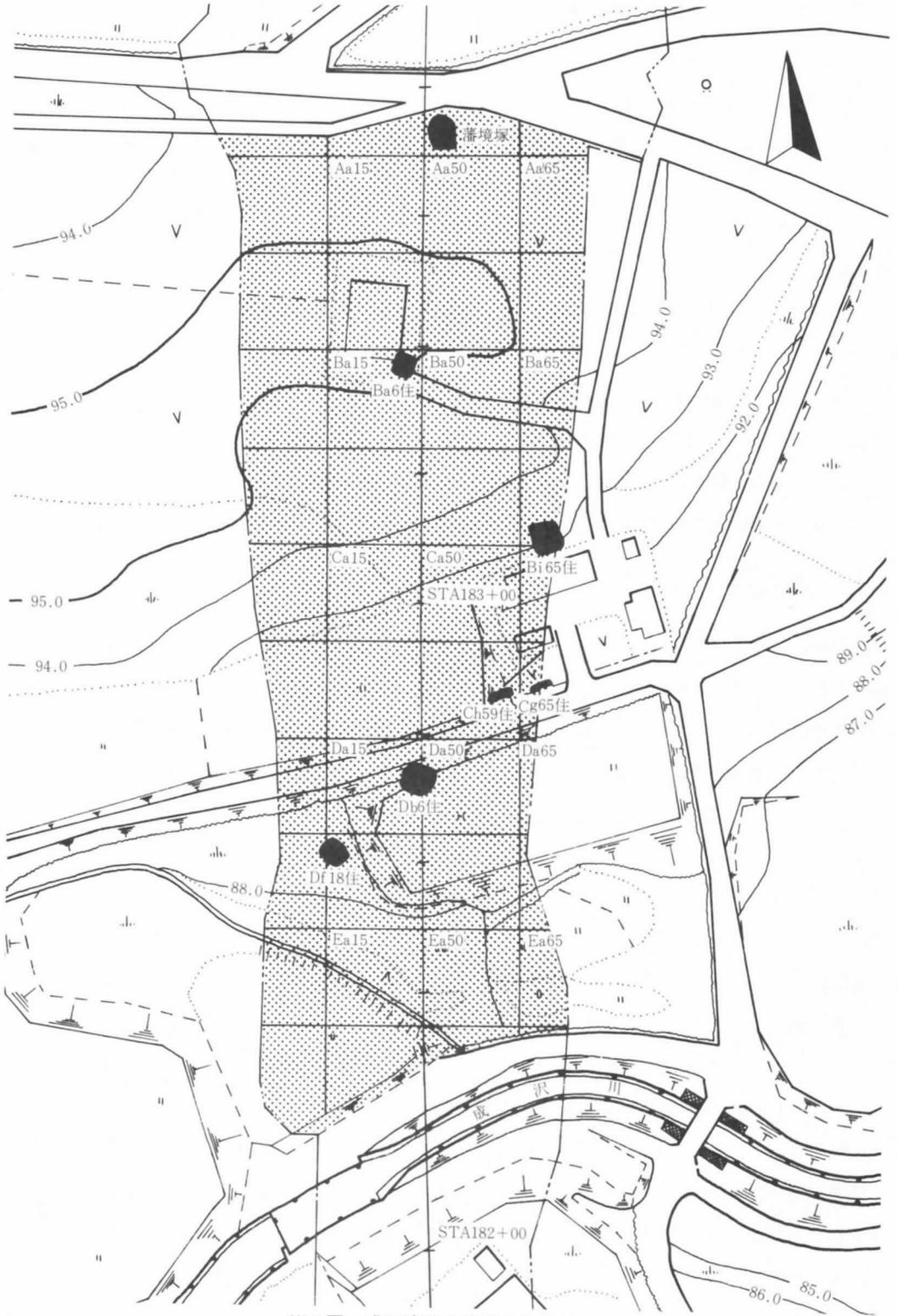
VII層 組成として殆んど腐ったパミスから成った層である。

VIII層 青灰色粘土層 上部に植生痕を多量に含む黒色を呈する。

なお、本調査に先だって隣接する地域(西側)を北上市教育委員会が主体となって発掘調査を行っている。



基本層序  
(Dd21グリット西壁)



第1図 成沢遺跡全体図 | / 1,000

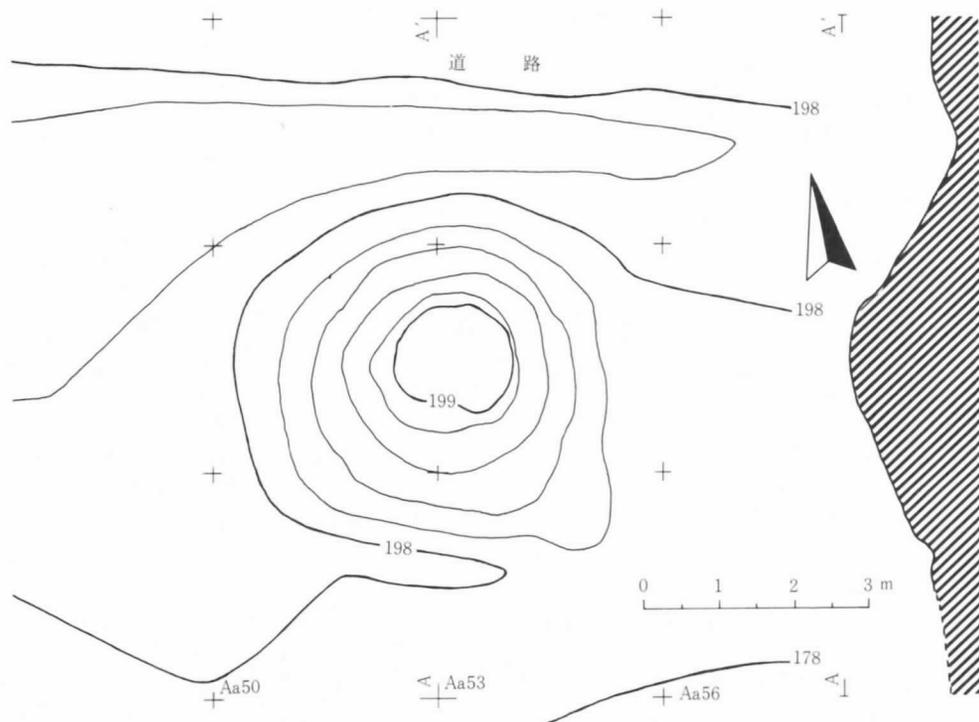
### III 調査結果

今回の調査で検出された遺構は近世の藩境塚1、古代（平安時代）の竪穴住居跡6棟、時期不明の溝2、縄文時代の土坑1である。発見された遺物は土師器、須恵器を中心に砥石等の石製品、鉄製品である。それに若干の縄文土器、石器等である。

#### 1 藩境塚（第2図 図版1）

藩境塚は調査地北端にあり、市道のすぐ南に位置している。市道は昭和48年の圃場整備の際に若干移動されているが、当地域においてはほとんど以前のものをそのまま踏襲している。旧道は旧町村界となっており、北が上鬼柳村、南が相去村である。また、和賀郡、胆沢郡の郡界にもなっており、藩政時代には南部、伊達両藩の藩境でもあったものである。

検出された遺構は現状でも土盛り状の高まりとして遺存しているもので、保存状態は比較的良好である。平面形は第2図の如く直径4.0～5.0mほどの円形に近いもので、東辺と南辺が直線的であった。それぞれ4.0mを計測する。残存部の高さは約1.2mである。旧表土の有無、修復の痕跡については確認されなかったが、現地説明会資料によると築成の順序を示すものは認められず、周辺の土を盛って叩いた程度のものであったという。また、下底部には藩境塚の標式とみなされる「約0.5m四方の木炭敷が認められた。」という。



第2図 藩 境 塚

## 2 竪穴住居跡

### 1 Ba 6竪穴住居跡 (第3図 図版1)

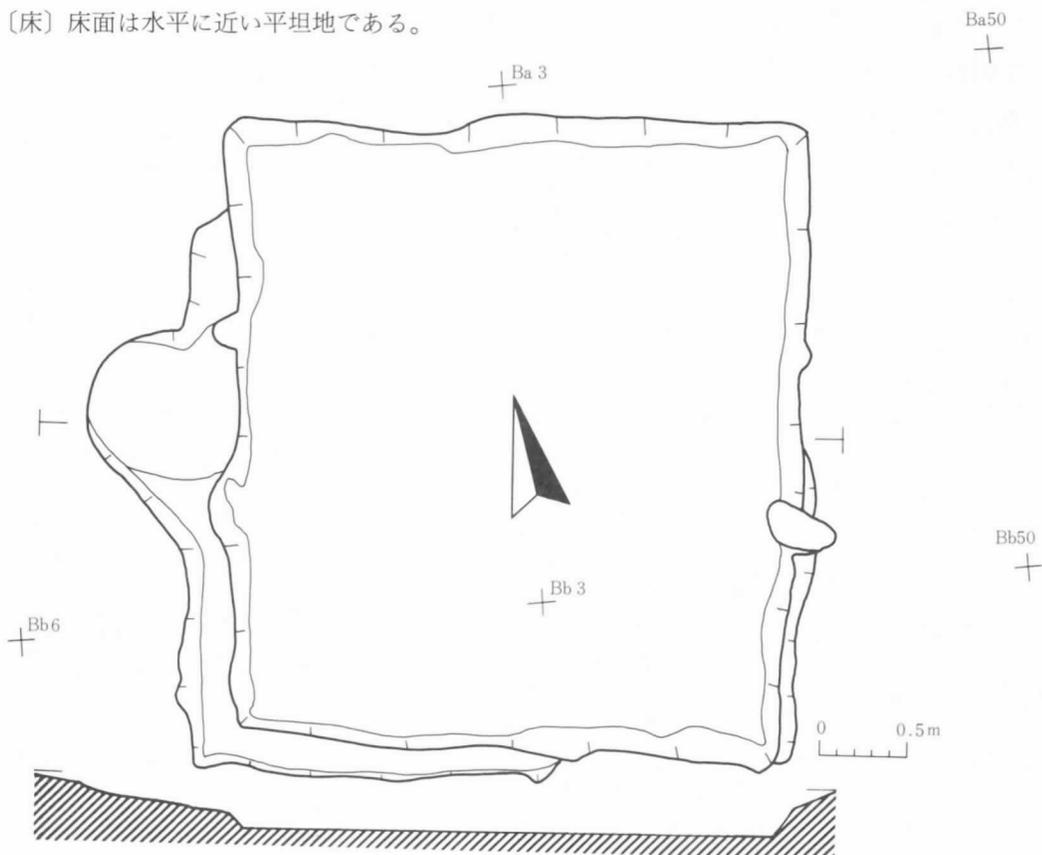
Ba 6竪穴住居跡は藩境塚の南約35mで、成沢川の北約120mに位置し、台地中央部にあたる。柱穴、竈が検証されなく住居跡であるかどうか疑問の残るものであるが、一応、住居跡として取り扱っておく。上半が削平されており、保存状態はあまり良好ではない。遺物は埋土を含めて発見されていない。

〔平面形、規模〕平面形は南北約3.6m、東西約3.2mの正方形に近い方形である。隅が角ばっている。長軸方向はN14°Eである。

〔堆積土〕記録されていない。

〔壁〕地山を壁とし、直線的である。壁高は0.1~0.2mで、東壁中央部が僅かに低くなっている。西壁及び南壁西半には幅0.1~0.15mほどの小さな段をもつ。それは住居跡床面から0.1mの高さにあり、長さは西壁で3.2mを計測する。

〔床〕床面は水平に近い平坦地である。



第3図 Ba 6 竪穴住居跡

〔その他の施設〕柱穴、竈、貯蔵穴は前述の如く検出されていない。ただ、西壁中央部に東西0.9m、南北0.8mの円形の突出部をもつ。登り勾配で住居跡外に続いており、入口ではないかと考えられる。また、東壁中央やや南寄りに0.5×0.3のpit様の遺構が検出されている。

〔遺物〕遺物は床面及び堆積土とともに全く発見されていない。周辺の表土層から土師器甕の体部小破片と羽口口縁部小破片が認められたのみである。

## 2 Bi 65竪穴住居跡（第4図 図版2）

Bi 65竪穴住居跡は調査地の東端にあり、成沢川の北約85mに位置する。南斜面の上端部である。当遺構は検出面が非常に浅く、表土層除去後ただちに発見されたものである。竈の両側壁が残存していたもので、保存状態は比較的良好である。遺物は表土あるいは堆積層に多く認められ、床面及び貯蔵穴、煙道等から実測可能なものが20点余り発見されている。なお、煙道、煙出しはCa 68土壌と重複しており、おそらくは土壌によって破壊されたものと推測される。

〔平面形、規模〕平面形は南北4.8m、東西4.5mの正方形に近い方形で、幾分歪んでいる。隅はやや角ばっており、長軸方向がN 3°Eである。

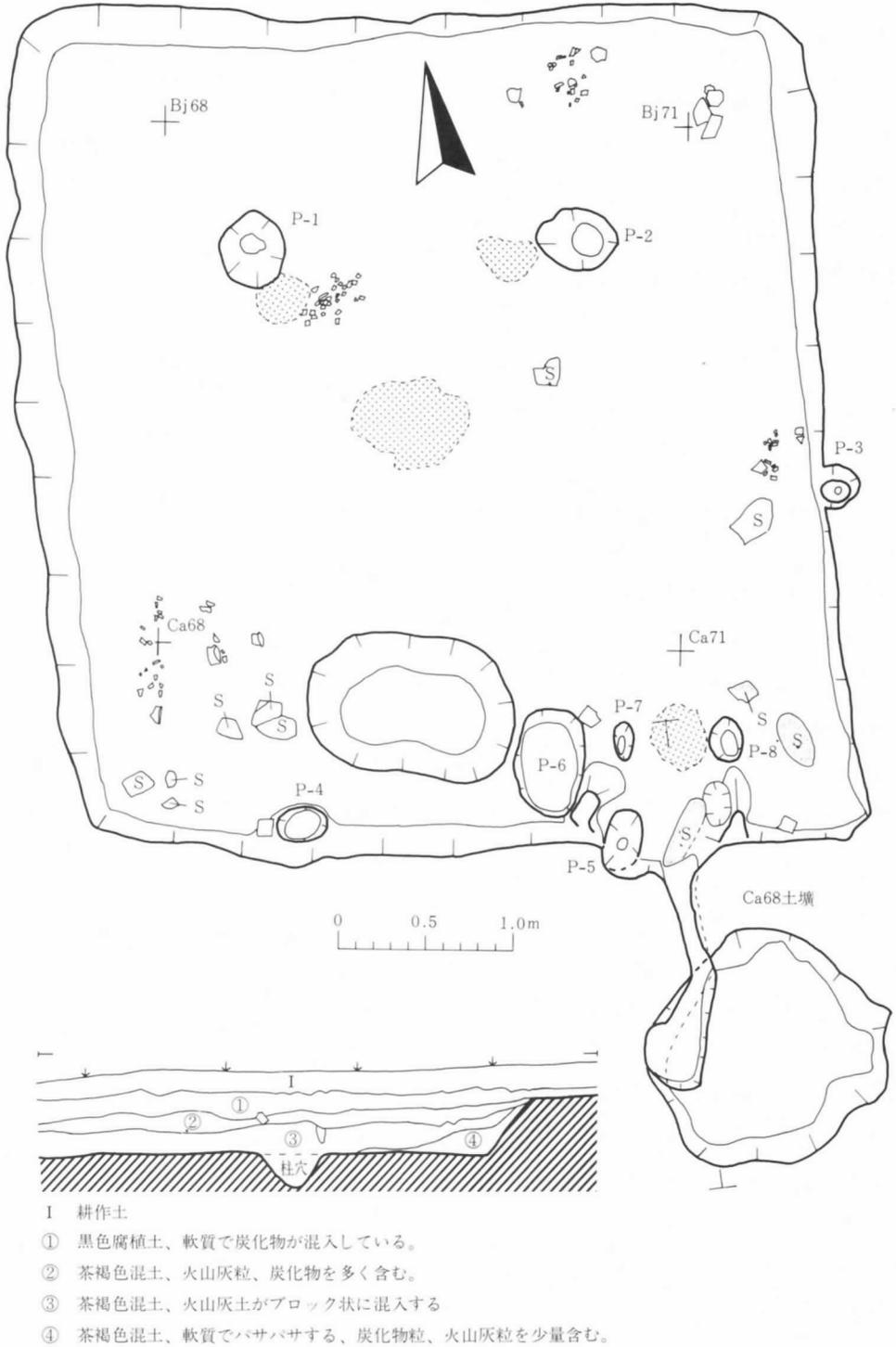
〔堆積土〕堆積土は表土を除き4層に細分される。①層は黒色腐植土で、上層を全体的に占める。草木根が多く認められ、炭化物が混入している。遺物は鉄滓、羽口、炉壁を中心に土師器の坏、甕の小破片と縄文土器、石器が混在する。②層は茶褐色混土（腐植土と火山灰の混土）で、炭化物、焼土粒を含んでいる。壁際では薄く、中央部に厚く堆積し、住居跡埋土の大部分を占める。遺物は土師器の坏、甕が多く、鉄滓、縄文土器が混入する。③層は壁際にやや厚く堆積しているものでブロック状の火山灰土が主体をなす褐色混土で、炭化物粒、焼土粒が混入している。遺物は土師器の坏、甕で復原可能なものを含む。④層は黒褐色混土で、壁際に厚く、中央部ではほとんど痕跡程度である。遺物は土師器の坏、甕で実測可能なものが散在する。

堆積土をまとめると、①層が凹地に堆積した腐植土で、②層が流入堆積した埋土と考えられる。③、④層は壁の崩壊等に起因すると見られ、前者が地山壁の崩落で、後者が旧表土などの先行崩壊土と推測される。いずれも自然堆積と見られ、遺物では①、②層出土遺物が流入堆積したもので、③、④層出土遺物が当住居跡に伴うものと推測される。

〔壁〕地山を壁とし、直線的である。壁高は0.15～0.35mで南側が低くなっている。なお、東壁のほぼ中央の外側と南壁内側に、壁に喰い込んだ形の pit がある。

〔床〕地山を床面とし、平坦である。住居跡中央部とP 1の南、P 2の西の3箇所焼土が散在している。また、南部中央には、1.2×0.8mの長方形の落ち込みが存在している。深さは0.1mほどである。

〔柱穴〕住居跡内から検出されたpitは8個である。P 1、P 2は北壁に平行し、東壁、北壁、西壁からおよそ1.2m内側に位置している。P 3は東壁中央にあつて外側に接し、P 4、P 5は

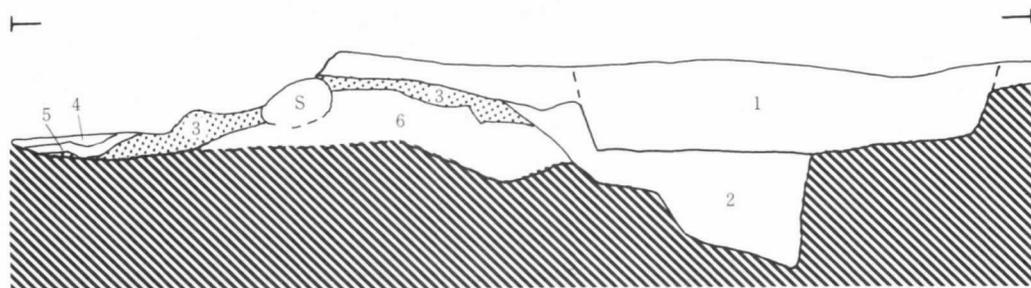


第4図 Bi65竪穴住居跡

南壁内側に接し、P 1、P 2 に対応する位置にあたる。P 6 は竈右側壁の西にあたり、P 7、P 8 は燃焼部側壁の先端部に位置している。規模は0.2~0.5mほどで、特に P 6 は0.6×0.4と大きく、P 7、P 8 は0.22×0.11m、0.25×0.19mと小さい。深さは11~32cmで、P 5 は65cmと異常に深い。埋土はP 1、P 2 によると黒色混土である。

主柱穴は柱配置からP 1、P 2、P 4、P 5 が推定されるが、P 5 は竈内に位置しており、P 6 かもしれない。同 pit は遺物、焼土粒、灰等を含んでいて、貯蔵穴が予想され、主柱穴と貯蔵穴が重複あるいは隣接していた可能性がある。P 7、P 8 は規模が小さく燃焼部側壁先端に位置しており、芯石を設置した跡と考えられる。

〔竈〕南壁東寄りにあり、側壁、煙道、煙出しが確認されているが、上半は削平されている。燃焼部は住居跡内にあるが、一部壁外に出ている。規模は0.5×0.5mと推定され、内部には崩落したと見られる天井石が、周辺には芯石に使用したと思われる川石が散在している。側壁はシルトで構築され、左側が直線的、右側が燃焼部を広く折れ曲っている。先端には小さなpitがあり、芯石を設置した穴と思われる。煙道は約1.3mで、先端が若干西に折れている。幅、高さとも15cmで、くり抜きと考えられる。底面は壁付近で一段上がり、その後下り勾配で煙出しに続く。煙出しはCa 68土壌と重複していて詳細は不明であるが、直径30cm程度の円形をなすと推測され、その深さは検出面からおよそ50cmである。焼土は燃焼部床面と煙道周壁に認められ、その厚さは約5cmである。なお、煙道から土師器環(10)が出土している。



- |                   |               |
|-------------------|---------------|
| 1 黒色土 パサパサして粘性がない | 4 黒褐色土 灰を混入する |
| 2 褐色混土            | 5 青灰色粘土       |
| 3 焼土              | 6 黒褐色土 焼土粒を含む |

第5図 Bi65竪穴住居跡炉跡断面図

〔貯蔵穴〕竈右側壁西のP 6 が0.6×0.4mと大きく、埋土に焼土粒、灰を含んでおり、環(16)及び高台付環(19)を有しており、貯蔵穴が想定される。同pitは主柱穴とも考えられるものであり、前述の如く柱穴と貯蔵穴の重複あるいは隣接する可能性がある。出土遺物は竈周辺遺物と接合しており、廃棄直前まで空洞となっていたと推測される。

〔伴出遺物〕埋土③、④層及び床面、貯蔵穴から発見された遺物は環、高台付環、甕、それに砥石、羽口、炉壁である。いずれも破損していたもので竈周辺に集中していた。なお羽口、炉

壁については埋土遺物で取り扱っている。

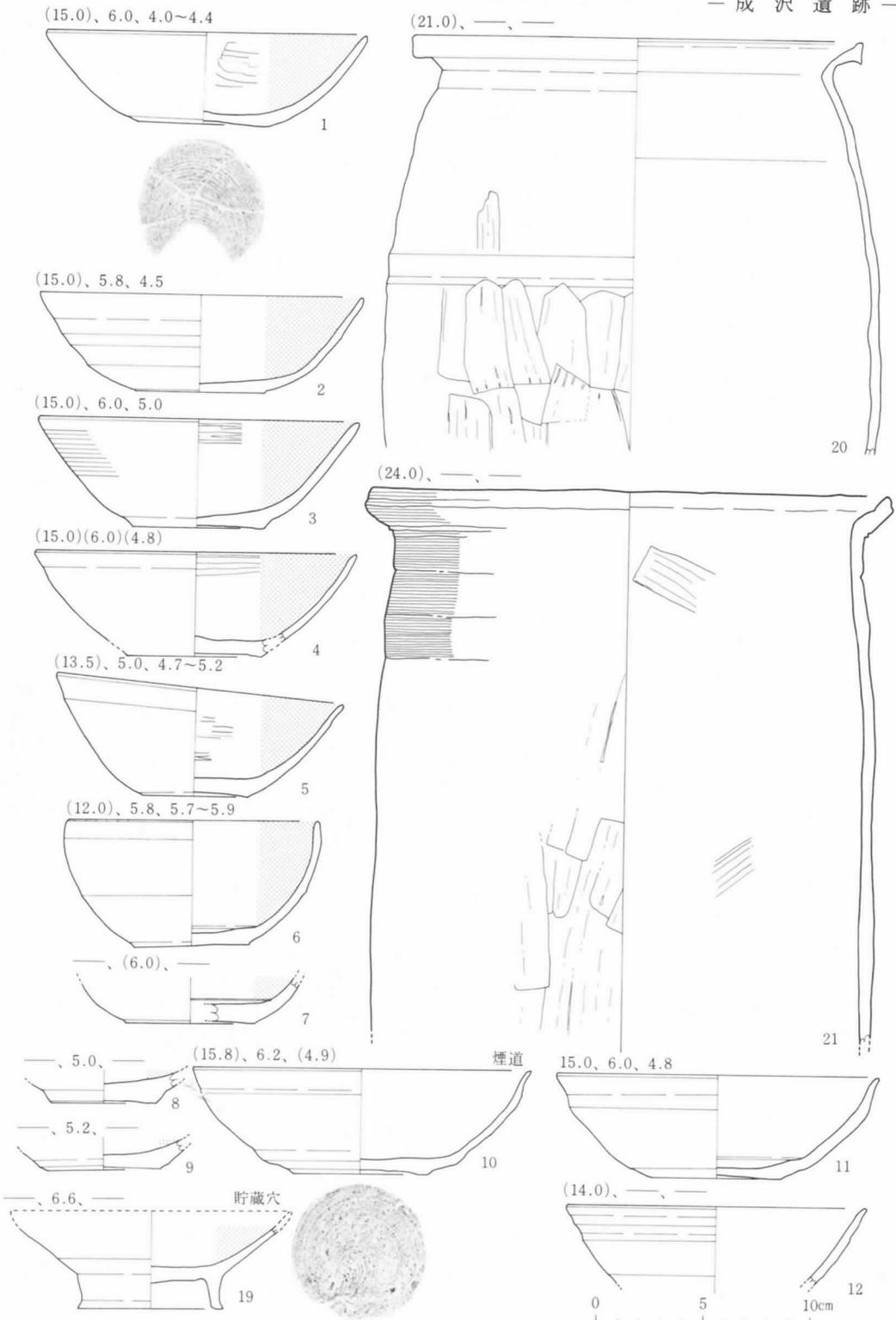
坏：復原可能なもの、図化できるものを含めて18点である。1～9の9点が内面黒色処理を行っているもの、10～18の9点が行われていないものである。これらのうち10、16は煙道、貯蔵穴から発見されたものである。

前者はすべてロクロ成形されたもので、回転糸切底である。なお8は一部ヘラケズリされている。体部はゆるやかに内彎しながら立ち上がるものと、比較的直線的に立ち上がるものがある。口縁部はそのままおさまるものと外反ぎみのものがある(5)。なお、6は底部から強く内彎するもので、口縁部は直口ぎみに立ち上がり碗に近い器形をなす。中にはロクロ成形痕の顕著なものがあり(2)、内面はヘラミガキされているようである。色調は内面黒色、外面灰白色、青灰白色をなす。ただし、7の内面は赤褐色を呈し、6の外表面は赤褐色をなす。

後者もロクロ成形されたもので、比較的成形痕の顕著なものが多く見られる。底部は回転糸切によるもので、内底には厚薄が認められる。体部は比較的直線的に立ち上がり、12、13はそのまま口端に続く。口唇部はいずれも外方に挽き出され、10、11が若干外反している。器肉は薄いものが多く、焼成は良好で黄褐色、褐色を呈す。胎土は15が精製されたものを用いているが、他は粗砂を含んでいる。17は胎土、焼成、成形とも粗雑な作りである。なお、14の内面には黒色付着物がついている。

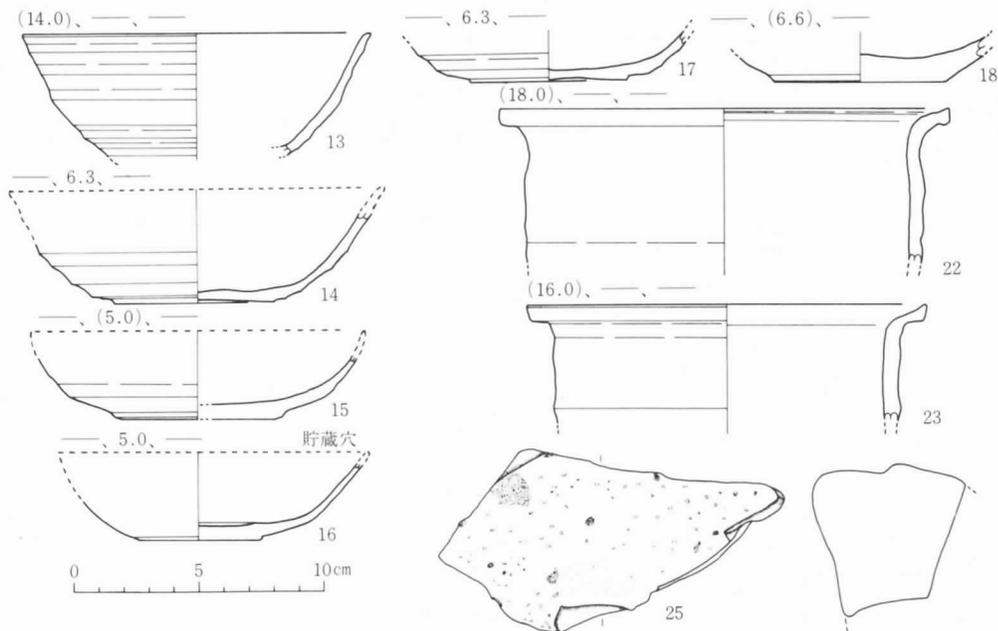
高台付坏：貯蔵穴から発見された1点で、口縁部を欠損している。ロクロ成形されたもので、内面黒色処理されているが、灰青色を呈す。下端を外方に挽き出した高目の高台をもつもので、回転糸切された底部に貼付されている。器壁は比較的薄く、体部がゆるやかに立ち上がるようである。内底には放射状のヘラミガキが観察される。

甕：図示可能なものは大型2点、小型2点の4点である。20は口縁部が大きく外反するもので、上下両端に挽き出されている。体部はゆるやかに彎曲し、中央部付近に最大径をもつ。口縁部から体部上半がロクロ成形され、下半が縦方向、下端が横方向にヘラケズリされている。内面は下半にハケメが認められ、上半はロクロ成形痕をもつ。底部はヘラケズリされているようである。全体的に器肉が薄く、凹凸が目だつが硬質に焼き上がっている。口縁部内側から外面に煤状の付着が見られる。21はロクロを用いない大型甕である。器肉が厚くどっしりした感をもつ。口縁部が大きく外反し、さらに上方に挽き出され、受口状を呈す。頸部には工具によると見られる明瞭な段が見られ、その下が横ナデされ、下半が縦方向にヘラケズリされている。内面は横ナデされているようであるが、はっきりしない。胎土には小石等を含み、非常に脆い。外面には大量の黒色付着物が付いている。22、23はロクロ成形されたやや小型の甕である。両者とも口縁部が強く外反し、口縁端が僅かに挽き出されている。器肉は比較的厚く脆弱である。なお、23の外表面には炭化物が付着している。



注、遺物の左上の数字は口径、底径、器高を示し、( )は推定値で  
— は計測不能なものである。右上は出土地点等を示す。

第 6 図 Bi65 竖穴住居跡出土遺物(1)



第 7 図 Bi65 竪穴住居跡出土遺物(2)

以上の他には須恵器の破片がある。24は器肉が厚い大甕の破片である。叩き目痕は外面が格子状で、内面は菊花状をなす。

砥石：自然石をそのまま使用したもので砥石と考えられる。破損しているが2面に使用痕をもつ。

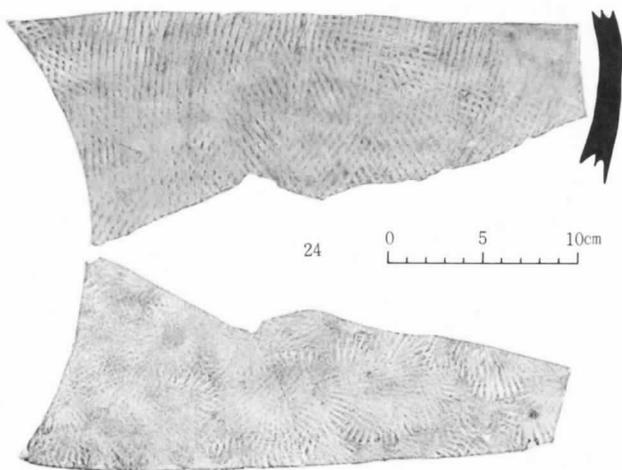
〔埋土遺物〕表土層及び埋土①、②層から出土した遺物は下表の通りである。

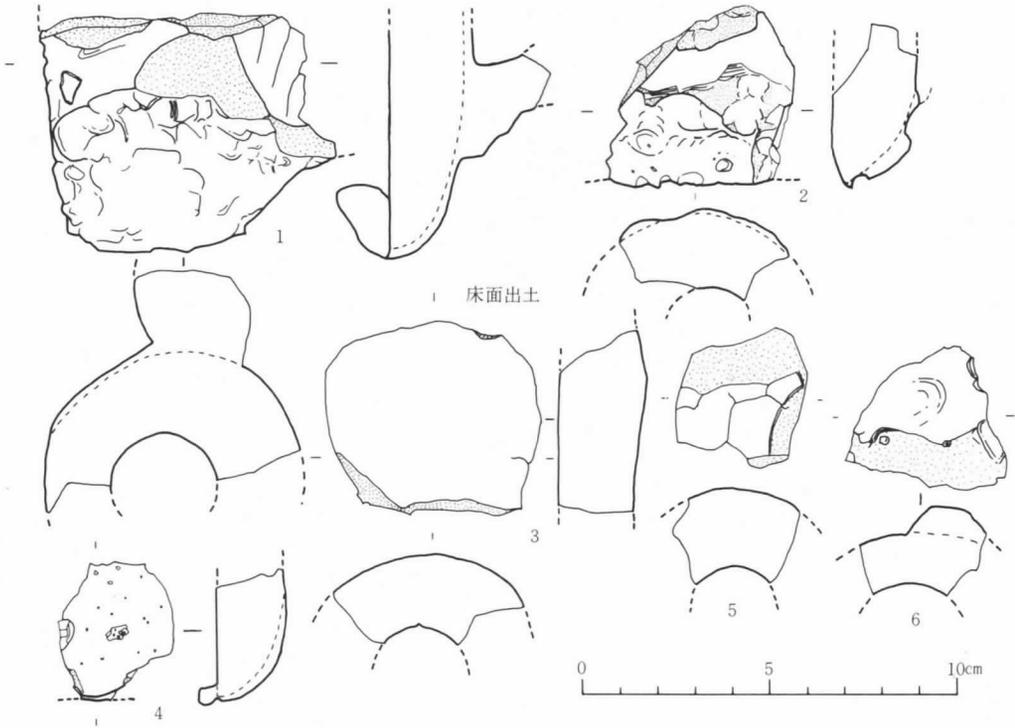
第 1 表 埋土遺物

土師器坏	土師器甕	須恵器甕	羽 口	炉 壁	鉄 滓	鉄	縄文土器	石 器
42	13	2	5	30	37	11	3	3

坏片42点、甕片15点で、圧倒的に坏片が多い。このうち須恵器は甕2点のみである。いずれも細破片で器形の捉えられるものはない。坏では内面黒色処理したものと、そうでないものがあり、両者ともロクロ成形されているようである。

特にここでは羽口5、炉壁30、鉄滓37、鉄11と製鉄あるいは鍛冶遺構に関連ある遺物の多い





第 8 図 Bi 65 竪穴住居跡埋土遺物 (但し 3 は床面出土)

のが特徴である。なお、住居跡埋土下層出土の羽口 1 点、炉壁 3 点についても一括している。

羽口はすべて破片で、全体の形状を捉えることはできない。先端部は 3 点で、いずれも内側に向って尖っている。外径が 6~7cm で、内径がおおよそ 2.0~2.8cm である。胎土には精製されたものを用い、ほとんど不純物を含んでいない。ただし、床面出土の 3 はガラス質の鈹滓を含んでおり、現地で製作されたことを思わせる。なお、1 は半裁状に割れているが、その割れ口に熔融物が付着している。

炉壁は細片で 14×9cm を最大破片とする。内面は黒色あるいは茶褐色を呈し、鉄滓が付着している。裏面は赤褐色あるいは青灰色をなす。胎土には大量のスサが混入されており、表面に近い部分が焼き爛れてガラス質のコークス状を呈している。残存部の厚さは 2.4~4.5cm である。写真図版 12 の炉壁によるとかなり大きなものであったと推測される。

鉄滓は金属光沢をなすものと、酸化して茶褐色を呈するものがある。いずれも鍛冶滓に見られる層 (ひとよ) が認められないので、おそらくは精錬滓と考えられる。同資料の分析結果は付章の別表のとおりであり、Ni が非常に少なく精錬滓であることを示している。鉄製品はいずれも細片で詳細は不明である。

以上の他には縄文土器 3 点、石器 3 点がある。遺構以外の出土遺物で一括している。

### 3 Ch59 竪穴住居跡 (第9図)

Ch59 竪穴住居跡は調査地の南東部にあり、成沢川の北約60mに位置する。南斜面の上端部である。ほとんど農道によって破壊されており、北辺の一部を残すのみである。北西部が Ch62 溝と重複するようであるが、前後関係は確認されていない。

〔平面形・規模〕北辺は3.0mを計測し、残存部から方形をなすと考えられる。

〔堆積土〕記録されていない。

〔壁〕地山を壁とし、直線的である。壁高は0.15~0.37mで、西方が幾分浅くなっている。なお、中央外側には、だるま状の pit が接している。深さが21cm、27cmである。

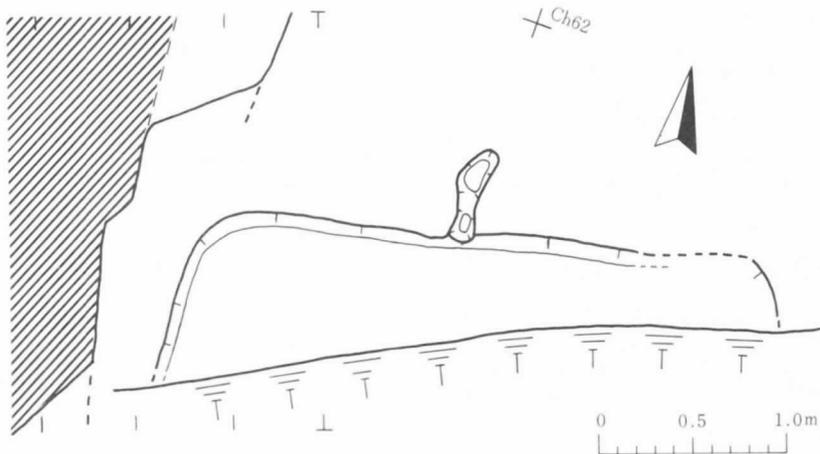
〔床〕地山を床とし、ほぼ平坦である。

〔その他の施設〕柱穴、竈、貯蔵穴はいずれも検出されていない。

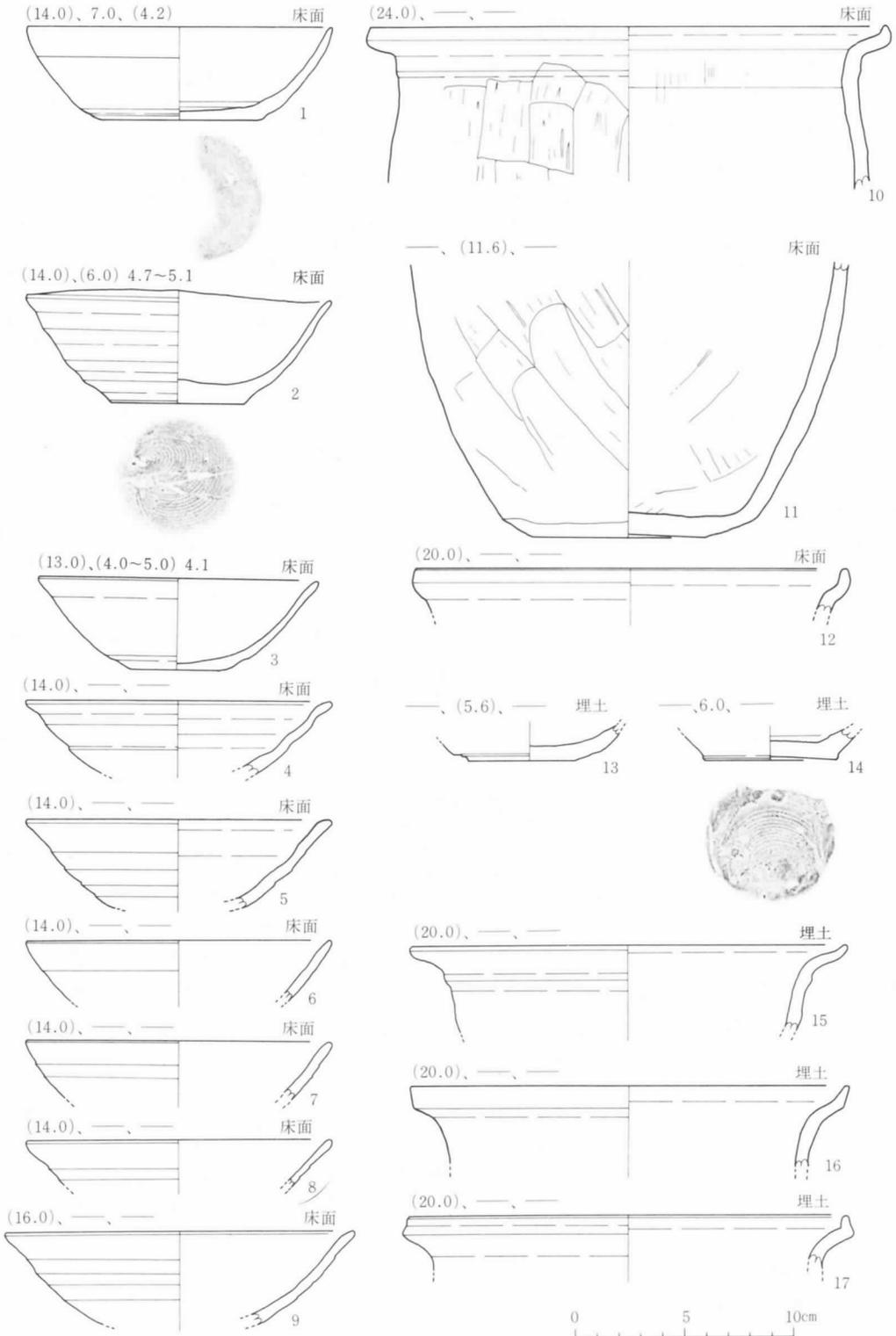
〔伴出遺物〕住居跡床面から坏と甕が発見されている。主に北東部から発見されているが、甕(11)は北西部からの発見である。遺物はすべて破損しているもので、完全な形で発見されたものはない。

坏：発見された坏は破片を含めて9個体である。いずれもロクロ成形によるもので、内面黒色処理されたものは含まれていない。色調は赤味がかかった黄灰色で、焼成は比較的良好である。中には軟質なものが含まれている(1、3)。全体的形状は1を除いて、口縁部が大きく開くもので、口径に対して底径が小さい。体部はふくらみをもって立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものがあり、口縁部が外反している。器表面の凹凸は顕著なものが多いが、3、6は比較的少ないものである。底部の切離しは回転糸切技法で、2には一部再調整の痕跡が見られる。器肉は厚手のものと薄いものがあり、8は特に薄く成形されている。

1は口径に対する底径が大きいもので安定感のある器形をなす。体部の立ち上がりが前者に比較して強いもので内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁部に続いている。器表面の凹凸は



第9図 Ch59竪穴住居跡



第10図 Ch59竪穴住居跡出土遺物

ほとんど認められなく、底部は手持ちヘラケズリされている。

甕：図示できるものは口縁部2、底部1の3点である。いずれも大型の土師器甕である。10は口縁部が強く外反するもので、端部が上方に挽き出され、受口状に段を形成している。口縁部はロクロ成形され、その後頸部から下半がヘラケズリされている。内面には僅かにハケメが認められる。11は体部下半が斜め方向にヘラケズリされ、底部及び底部近くは摩滅してはつきりしないが横方向にヘラケズリされたようである。内面ではかすかにハケメ痕を残している。なお、11の外面には煤状の黒色物が付着している。

以上の他には小型甕と思われる体部破片がある。ロクロ成形されたもので、体部の凹凸が顕著である。

〔埋土遺物〕この住居跡では埋土遺物として取りあげられたものはなく、全て表土層から採集されたものである。これらの中には周辺のものをも一括している。発見された遺物は坏9点、甕34点、それに縄文土器、石器10点である。いずれも小破片で全体形状の判明するものはない。

坏は薄い青灰色を呈する還元焰焼成された焼成不良の底部破片（回転糸切）が1点で、他は酸化焰焼成されたものである。このうち内面に黒色処理を施したものは底部破片（切離しは不明）を含む2点である。他はロクロ成形による赤味を有する灰白色のもので、赤焼土器あるいはB類、土師質土器等と総称されるものに属するものである。体部の凹凸が顕著である。底部切離しは回転糸切技法で、胎土には精粗があり、焼成は普通であるが、中には堅緻なものも認められる（13）。

甕は薄い青白色あるいは灰白色を呈した平行線状の叩き目を有する須恵器が3点で、内面の凹凸が著しい。また、青灰色を呈した外面ケズリを施した肉薄の細片がある。他は土師器である。それらは部分破片を総合すると口縁部が強く外反するもので、口端部が上方に挽き出されて受口状を呈する。口端部の挽き出しに際しては外面に稜線を残すもの（16、17）と残さないもの（15）とがある。

調整技法は口縁部から体部上半がロクロ成形され、体部下半がヘラケズリされているようである。底部はいずれも回転糸切によるもので、摩耗しているもの以外、調整の認められるものはない。中には付高台を有していたと思われるものが含まれている。それも回転糸切痕を残している。

以上の他には盤を思わせる丸底風の大型の破片が存在する。成形、調整等は不明である。

なお、縄文土器、石器については遺構以外の出土遺物で一括している。

#### 4 Cg65 竪穴住居跡 (第11図)

Cg65 竪穴住居跡は Ch59 竪穴住居跡の東約3.0mにあり、成沢川の北約60mに位置する。南斜面の上端部であり、ほとんど農道によって破壊されており、北辺の一部(約0.5m)をかろうじて残すのみである。

〔平面形・規模〕北辺が約3.1mで、残存部から方形をなすと考えられる。

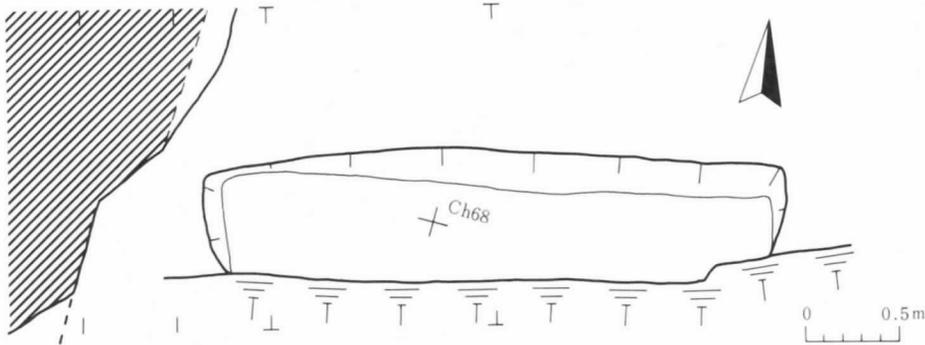
〔堆積土〕記録されていない。

〔壁〕地山を壁とし、直線的である。壁高は約35cmを計測する。

〔床〕地山を床とし、ほとんど水平である。東端部には焼土が散乱している。

〔その他の施設〕柱穴、竈、貯蔵穴はいずれも検出されていない。ただし、床面東端に焼土が散在しており、あるいはその近くに竈があったものかもしれない。

〔埋土遺物〕周辺の表土から土師器甕の破片が採集されている。



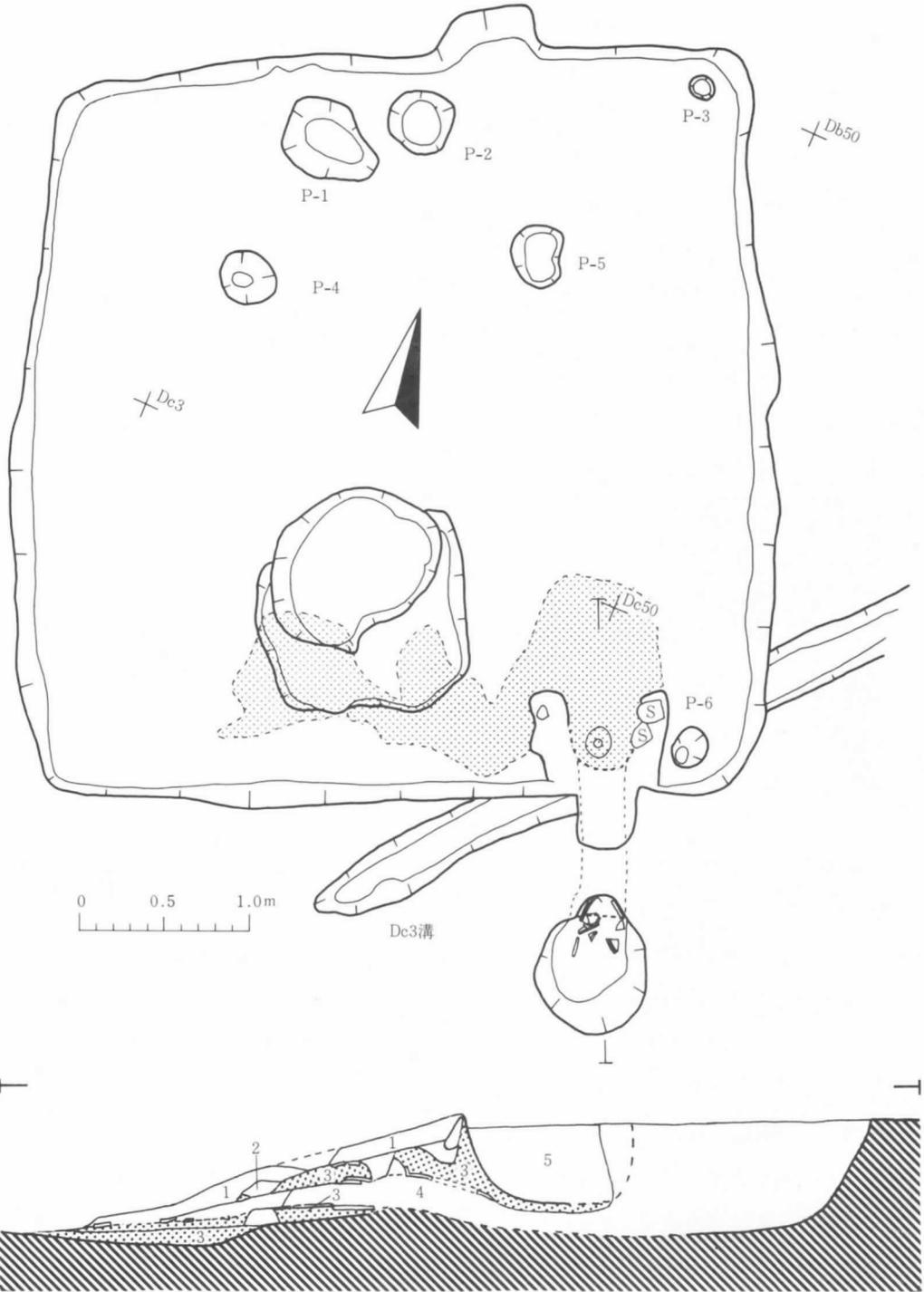
第11図 Cg65竪穴住居跡

#### 5 Db6 竪穴住居跡 (第12図 図版3)

Db6 竪穴住居跡は調査地の南部にあり、南斜面の中ほどに位置する。成沢川の北50mで農道の南にあたる。竈の両側壁が残存しているもので保存状態は比較的良好である。遺物は表土、あるいは堆積土に多く認められ、床面あるいは煙道・煙出し等から復原可能なものが11点発見されている。なお、竈は Dc3 溝と重複しており、溝によって破壊されたと見られる。

〔平面形・規模〕平面形は南北約4.3m、東西約4.4mの正方形に近いプランをなす。隅は角ばっており、西辺の方向はN14°Wを示す。

〔堆積土〕堆積土は表土を除き4層に細分される。いずれも注記されてなく色調・性状等は不明である。①層は壁際が薄く中央部が厚いもので埋土の大部分を占める。②層は灰白色粉状パミスで、厚さ2～3cmのレンズ状堆積をなす。検出面では環状に認められたものである。③層は壁際に厚く堆積しているものでロームブロックが混入している。④層は壁際にやや厚く中央部に薄く及ぶものである。まとめると①層は凹地に流入堆積したもので、②層が火山活動に起因するものである。③、④層は壁の崩壊等による先行する堆積土と考えられ、いずれも自



- 1 暗褐色土 焼土・炭化物、粘土混入 4 茶褐色土 焼土・炭化物混入  
 2 白黄色粘土 5 暗褐色土  
 3 焼土

第12図 Db 6 竪穴住居跡

然堆積と見られる。遺物では表土及び①層遺物が流入堆積したものと推測され、③④層及び床面出土遺物が住居跡に伴うものと推察される。

〔壁〕 地山を壁とし、直線的である。壁高は20～30cmで、南辺が幾分浅くなっている。なお北壁中央のやや東寄りに0.6×0.2mほどの小さな張り出しをもつ。

〔床〕 床面は南に向って若干傾いているが、ほぼ平坦である。南部中央付近に東西1.2m、南北1.15mの方形の落ち込みと、その北に重複する東西1.05m、南北0.8mの落ち込みが発見されている。前後関係は確認されていないが、深さは前者が0.1m、後者が0.13mで僅かに後者が深い。埋土からは甕破片が出土している。

〔柱穴〕 住居跡内から検出された pit は 6 個である。P 1、P 2 が北辺中央に近接しており、P 3、P 6 は北東隅・南東隅に位置している。P 4、P 5 は東壁、北壁、西壁の1.2m内側にあり、北壁に平行している。大きさには直径15～50cmとバラツキがあり、深さは4～13cmで極めて浅い。主柱穴はP 4、P 5 が想定されるが、南辺の対応するものが確認されてなく断定できない。P 3、P 6 は隅に位置して規模が小さく、補助的なものが予想されるが、これも他の隅では確認されてなく断言できない。

〔竈〕 南壁の東端近くにあり、側壁、煙道、煙出しが確認されている。上半は、Dc3 溝によって破壊されており天井石等は遺存していない。燃烧部は住居跡内にあり、規模が0.5×0.5mほどである。中央部には焼土に埋設した状態で支脚と考えられる須恵器坏が伏せられている。両側壁はシルトで構築され、中に川石を芯として用いている。煙道には底部を取り除いた甕形土器を埋設しており、その長さは約1.0mである。底面は壁付近から一段上がり、その後下り勾配で煙出しに続く。煙出しは0.8×0.65mの長円形をなし、その深さは検出面から0.3mほどである。焼土は焚口付近と竈西方に大きく広がっており、現地性焼土は燃烧部床面と煙道周壁に認められ、その厚さは5～10cmである。なお、煙出しから土師器坏2個体が発見され、上部付近一帯には須恵器大甕が散在している。

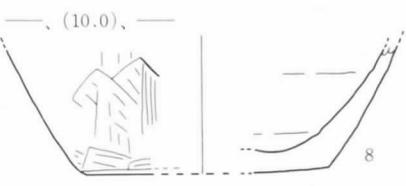
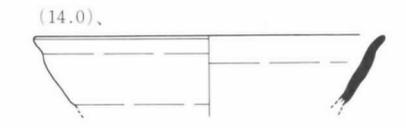
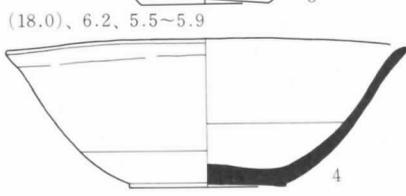
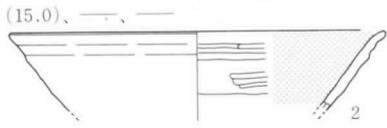
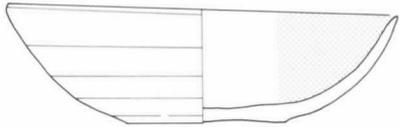
〔伴出遺物〕 住居跡床面と煙道、煙出しから坏、甕、大甕、それに石器、砥石が発見されている。床面遺物は主に竈周辺から出土したものである。完全な形で出土したものは砥石のみで、土器はすべて破損している。

坏：発見された坏は器形の復原できるもの2点、実測可能なもの3点である。このうち4は竈の支脚としていたと考えられるもので燃烧部の中央に伏せてあったものである。1～3は内面黒色処理を施したもので、4、5は薄い青灰色をなす軟質な須恵器である。前者はいずれもロクロ成形されたもので、底部は回転糸切技法による。1は体部がゆるやかに内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁端に続く。器肉が厚くなめらかで、安定感のある器形をなす。若干ゆがんでいる。2は器肉が薄く、凹凸が認められる。なお、1、3の内面は一部赤褐色を呈して

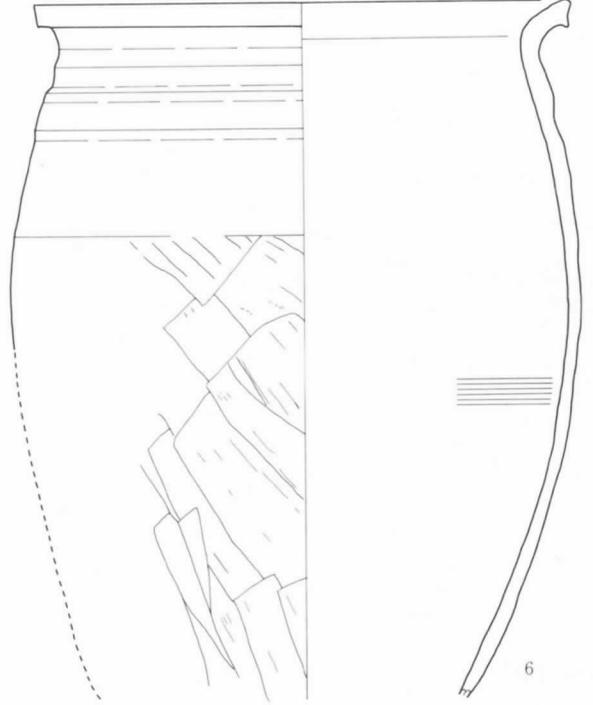
おり、ヘラミガキされているようであるがはっきりしない。後者もロクロ成形されたもので、底部が回転糸切技法で切離されている。4は腰のはった器形をなし、口縁部が外反している。器壁の凹凸は少ない。

甕：図示できるものは口縁部2点、底部1点である。いずれも大型の長胴の甕である。このうち6は底を抜いて煙道に使用されていたものである。口縁部は両者とも強く外反し、上下両端部に挽き出されている。体部はゆるやかに彎曲し、中央よりやや上位に最大径をもつと考えられる。体部上半から口縁部にかけてロクロ成形され、その後縦方向、斜方向、下端は横方向にヘラケズリされている。底部は8によるとヘラケズリされているようである。なお、7は器肉が薄く脆弱である。いずれも焼成は良好で、特に6は硬質に焼成され薄い青灰色、灰褐色を呈

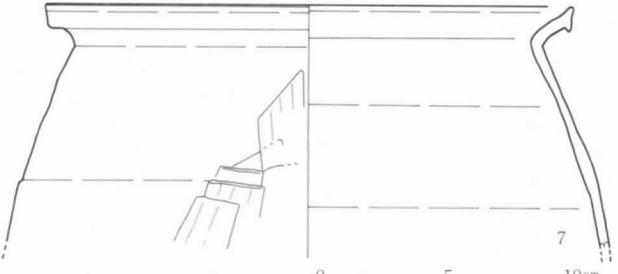
(15.6)、6.3、4.2~4.8



21.4、—、—



(21.0)、



0 5 10cm

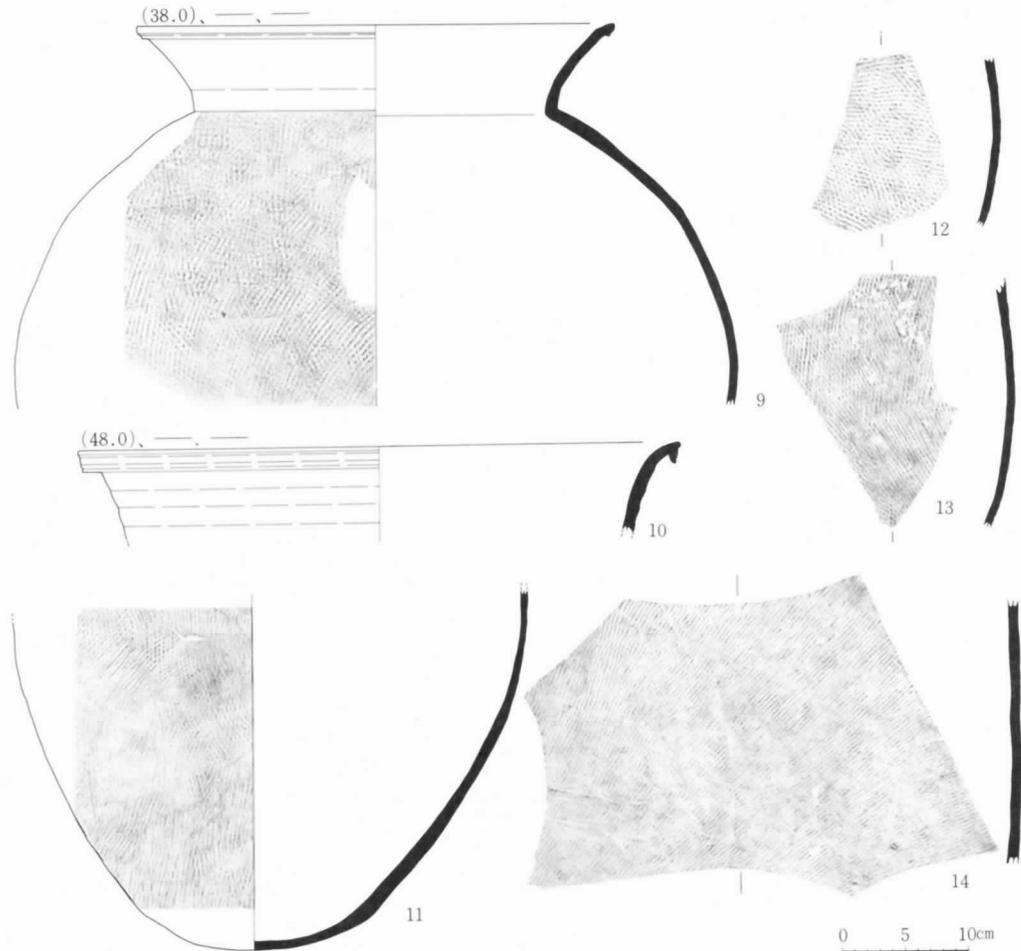
第13図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(1)

している。器表面に炭化物が付着している。

以上の他には小型甕の体部破片がある。ロクロ成形痕が顕著で凹凸が著しい。

大甕：破片を含めて5個体認められる。いずれも破片で、器形の捉えられるものは2点である。9は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口唇部下端に稜線をもち、1条の沈線がめぐる。体部は大きく脹らむもので、中ほどに最大径をもつと見られる。頸部から口縁部にかけてはロクロ成形され、下半は全面格子状叩き目文をもつ。内面は無文であるが、小さな凹凸が観察される。なお、体部中ほどには窯入れの際に生じたと思われる凹みが認められる。

10は口縁部が大きく外反し、口端部を折り返して下方に挽き出している。ロクロ成形されているが大きくゆがんでいる。11は丸底で、体部が緩やかに彎曲しながら立ち上がる。全体形状は底部が先細となり、肩部の張る形をなすと思われる。底部を含む全面に平行線状叩き目文が施され、一部格子状を呈す。内面は無文で滑らかである。なお、体部中ほどには窯壁の一部と



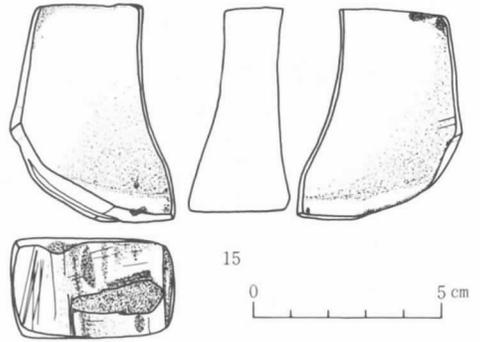
第14図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(2)

思われるものが付着している。両者とも器壁が薄く、前者は自然釉のためか全面ガラス光沢をなし、11は灰釉が体部中ほどまで流れている。焼成は良好で青灰色をなす。

12~15は体部破片である。前2者が斜格子状叩き目文をもち、後者が平行線状の叩き目文をもつ。内面はいずれも無文である。焼成は良好であるが、12、13はサンドイッチ状に色調が異なる。

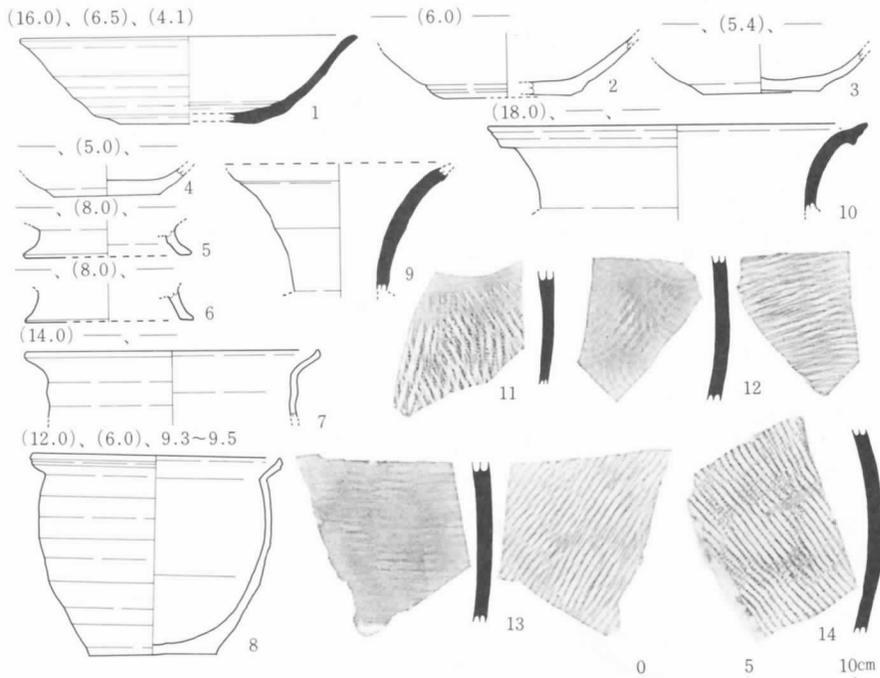
砥石：方形を基調とするが、成形痕をもつ一端が丸味をなす。主な使用面は表裏両面と右側面の3面で強度に擦り減っている。上面と右側面には横方向の鋭い条痕が見られ、下端は折損後に成形したものと思われる。

以上の他には石斧の基部と考えられるもの(17)と、搔器(5)が発見されている。混入であろうか。



第15図 Db 6 竪穴住居跡出土遺物(3)

〔埋土遺物〕 この住居跡では埋土として取り上げられたものは坏2点、甕1点のみで、他は表土層、第1層あるいは黒色土層から採集されたものである。これらの中には床面遺物と接合するものがあり(須恵器甕9、11、13、14)、住居跡に伴うものも含まれている可能性がある。発見された遺物は坏75点、甕81点、壺1点、それに縄文土器8点、石器6点である。ほとんど



第16図 Db 6 竪穴住居跡埋土遺物

のものは小破片で全体形状の判明するものは小型甕1点のみである。

坏・高台付坏：発見された坏は土師器73点、須恵器2点である。前者のうち内面黒色処理したものは8点、内外黒色処理したものが4点で、ほとんどのものが黒色処理を施していない。これらのうち実測可能なものは口縁部1点、底部3点、高台部2点である。

1が青灰色をなす須恵器で、2～4は黄橙色、灰白色の土師器である。前者はロクロ成形されたもので、底部は回転糸切技法によって切離され、体部下端がヘラケズリされているようである。器形はゆるやかに内彎しながら立ち上がり、口縁部が外反する。内外面のロクロ成形痕が顕著である。

後者もロクロ成形されたもので、底部は回転糸切技法による。体部はゆるやかに立ち上がるようである。胎土はいずれも精製されたものを用い、焼成が良好であるが、3は器肉が薄く軟質である。5、6は高台部のみの破片である。5は外方に大きく開くもので、6は直線的である。端部は両者とも外方に挽き出され、Bi65住のものに類似している。焼成は良好で硬質に焼き上がっている。色調は灰白色であるが、一部褐色を帯びる部分が見られる。内面黒色処理したものは器壁が比較的薄いものが多い。いずれもロクロ成形されたもののようで、口縁部の外反するものが目につく。内外両面黒色処理を施したものは比較的器壁が厚く、彎曲度が強いようである。内外面ともに丁寧にヘラミガキされている。

甕：図示できるものは2点である。7は口縁部が大きく外反するもので、端部が僅かに上方に挽き出されている。器壁が薄く、ロクロ成形痕をもつ。軟質で、中型甕と考えられる。8は全体形状の捉えられる小型甕で、幾分胴の張る器形をなす。ロクロ成形されたもので、底部は回転糸切底である。口縁部は強く外反し、若干上方に挽き出され、口唇部外面には1条の沈線がめぐっている。胎土には小石を含み、脆弱である。なお、口縁部内側には煤状の付着物が観察される。以上の他にはロクロ成形痕をもつもの、ケズリの施されたもの等の大型甕の破片がある。また、彎曲度の強い体部破片が見られる。器肉が厚く、ロクロ成形後に外面ヘラケズリされたものである。色調は黄橙色をなし、硬質に焼き上がっている。

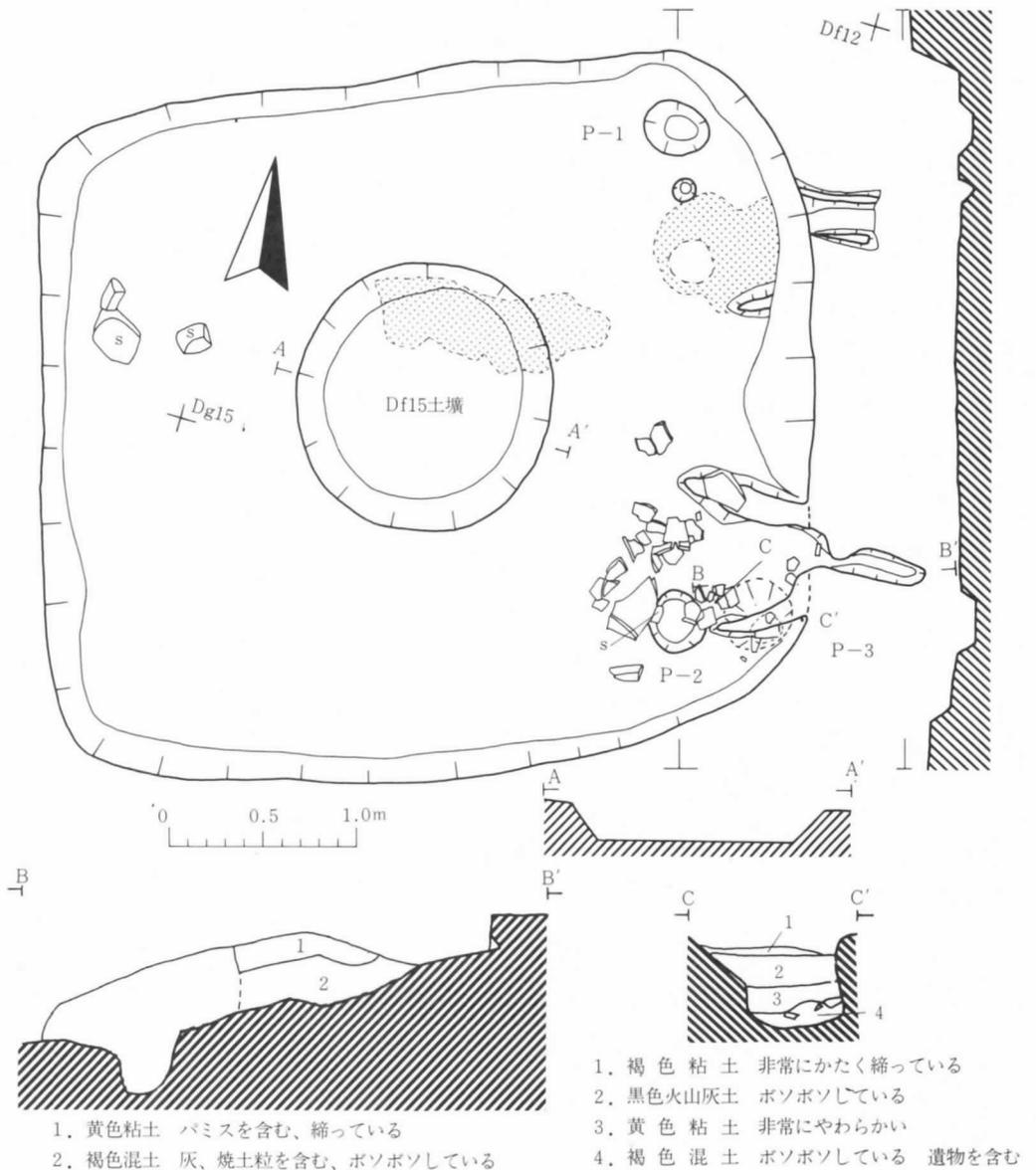
さらには須恵器甕の破片が23点見られる。いずれも破片で、数量的には14の叩き目文をもつものが多い。11は口縁部破片で、ゆるやかに外反する。端部は両端に挽き出され、幾分受口状をなす。口縁部は沈線状を呈している。頸部外面にはかすかに叩き目文を残している。色調は灰青色である。11、14は縄状叩き目文をもち、12、13は平行線状の叩き目文を有す。内面は前者がなめらかな無文で、後者は12が青海波文、13が平行線状の叩き目文をもつ。11～13は青灰色を呈し硬質であるが、14は灰白色を呈し軟質である。

壺：壺と考えられるものは長頸壺の頸部とみられる1点である。須恵器と考えられるが、色調は褐色を呈し、軟質である。なお、縄文土器、石器については4で一括している。

6 Df18竪穴住居跡 (第17図 図版2)

Df18竪穴住居跡は調査地の南部にあり、斜面上位に位置している。成沢川の北約45mで、農道の南約10mにあたる。竈の両側壁が残存しているもので、保存状態は比較的良好である。遺物は埋土に少量認められるほかは床面から復原可能なものが12点発見されている。なお、中央部には縄文時代のものと考えられる土壌が存在する。

〔平面形・規模〕 平面形は南北約3.6m、東西約4.1mの正方形に近い方形をなす。隅は幾分丸みを有している。長軸方向がN76°E（短軸方向N14°W）である。



第17図 Df18竪穴住居跡

〔壁〕 地山を壁とし直線的であるが、隅の部分が彎曲している。特に東辺の彎曲が著しい。壁高は10～25cmで南辺が低くなっている。

〔床〕 地山を床とし、水平に近い平坦をなす。中央に Df15 土壌がある。なお、推定北竈周辺及び中央（土壌北半）に焼土が散在している。

〔柱穴〕 pit は住居跡内 3 個、住居跡外 1 個の計 4 個が検出されている。P 1、P 3 は北東隅、南東隅にあり、支柱穴が想定される。ただし、P 3 は竈燃烧部右側壁下にあたっており、同時存在はあり得ず先行するものと考えられる。P 3 の埋土は 4 層に分けられ、①層は茶褐色粘土で貼床と考えられる。②層は黒色火山灰層で、③層が黄色粘土層である。④層は茶褐色混土で遺物が混入している。P 2 は燃烧部右側壁先端部にあり、これも支柱穴と見られる。P 3 が先行すると考えられ、造り替えされた可能性がある。P 4 は北東隅の外側 0.5m に位置している。いずれも大きさは直径 30cm 前後で、深さが 8～25cm である。

〔竈〕 東壁南端にあり、両側壁と短い煙道をもつ。燃烧部は住居跡内にあり、規模は 0.5×0.7m ほどである。左側壁は 0.75m で、右側壁が 0.5m ほどで短くなっている。後者の先端には P 2 があり、おそらくは支柱に接続していたものと推察される。両側壁ともシルトで構築されており、特に川石等を用いていない。煙道は崩壊しているが直径 20cm の円形で、約 0.6m を計測する。底面は登り勾配で煙道部に続くと思われるが、明確な煙出しは確認されていない。なお、焚口付近には須恵器片が散在していた。

また、東壁北寄りには壁外に煙道と見られるものが認められ、住居跡内では右側壁と思われる高まりが見られる。先行する竈の痕跡と推測される。南東隅の P 2 は P 3 の造り替えの可能性があり、P 3 が当竈に伴う柱穴と理解される。

〔伴出遺物〕 住居跡床面（特に竈焚口付近に集中）、貯蔵穴から坏と甕が発見されている。遺物はほぼ復原できるものが 1 点、図化可能なものが 11 点で、完全な形で遺存していたものはない。

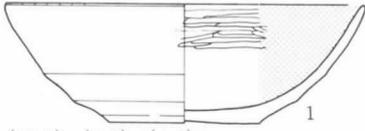
坏：発見された坏は図化可能なものを含めて 8 点である。1～4 の 4 点は内面黒色処理を行っているもので、5～8 は黒色処理されていない。これらのうち 4、7 は貯蔵穴から発見されたものである。前者はいずれもロクロ成形されたもので、回転糸切底である。体部は内彎しながら立ち上がり、そのまま口縁端に続くもの(1)と、外反するもの(2)とがある。内面はヘラミガキされているが、不明瞭なものも含まれている。色調は内面黒色をなすものは外面が灰白色を呈し、赤色変化した部分の認められる 2、3 は赤橙色をなす。

後者もロクロ成形されたもので、底部が回転糸切技法で切離されている。体部は内彎しながら立ち上がり、そのまま端部に続く。器壁はなめらかであるが、5 の外面は凹凸が著しい。色調は白色に近い青灰色である。胎土は精製されたものを用い、いずれも軟質である。

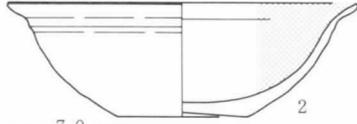
甕：甕は 4 個体が知られる。いずれも大型の甕である。このうち 10 は埋土遺物と接合するも

— 成 沢 遺 跡 —

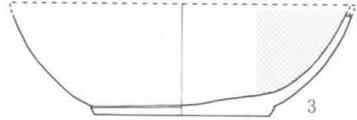
(14.4)、(6.0)、4.8



(14.0)、(5.0)、(4.6)



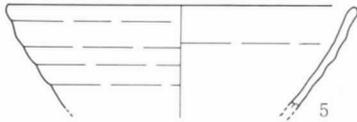
—、7.0、—



—、5.6、— 貯藏穴



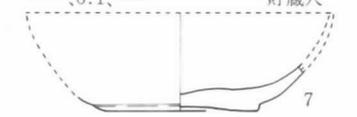
(14.0)、—、—



(15.0)、—、—



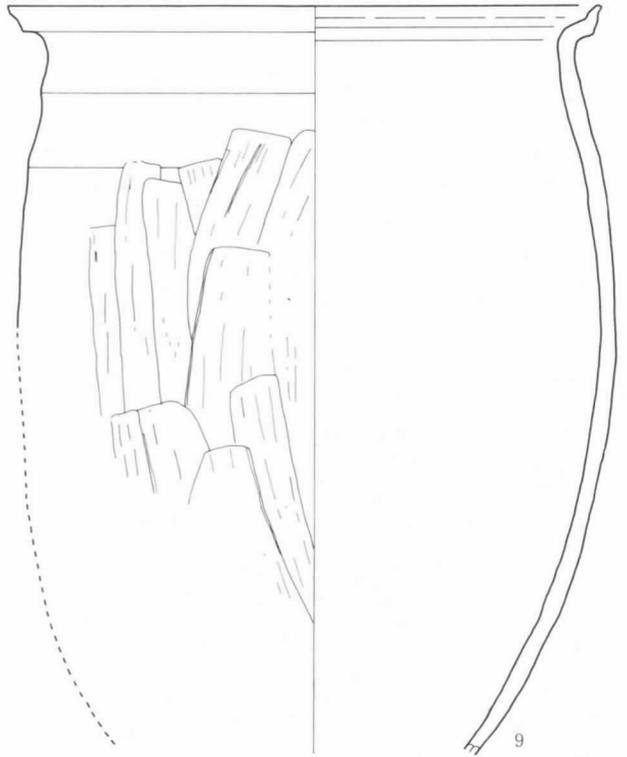
—、6.1、— 貯藏穴



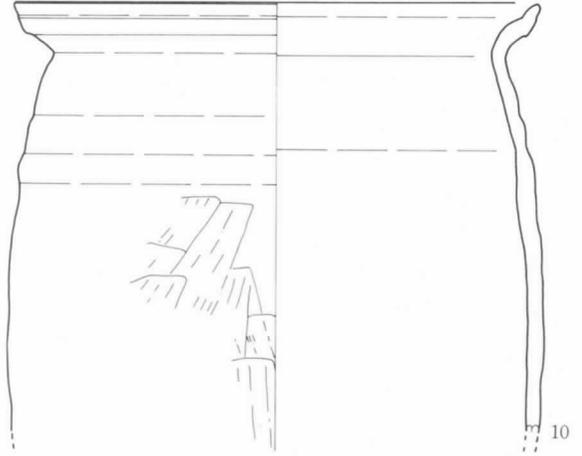
(14.0)、—、—



23.6、—、30.0以上



(21.0)、—、—



0 5 10cm

第18図 Df18竪穴住居跡出土遺物(1)

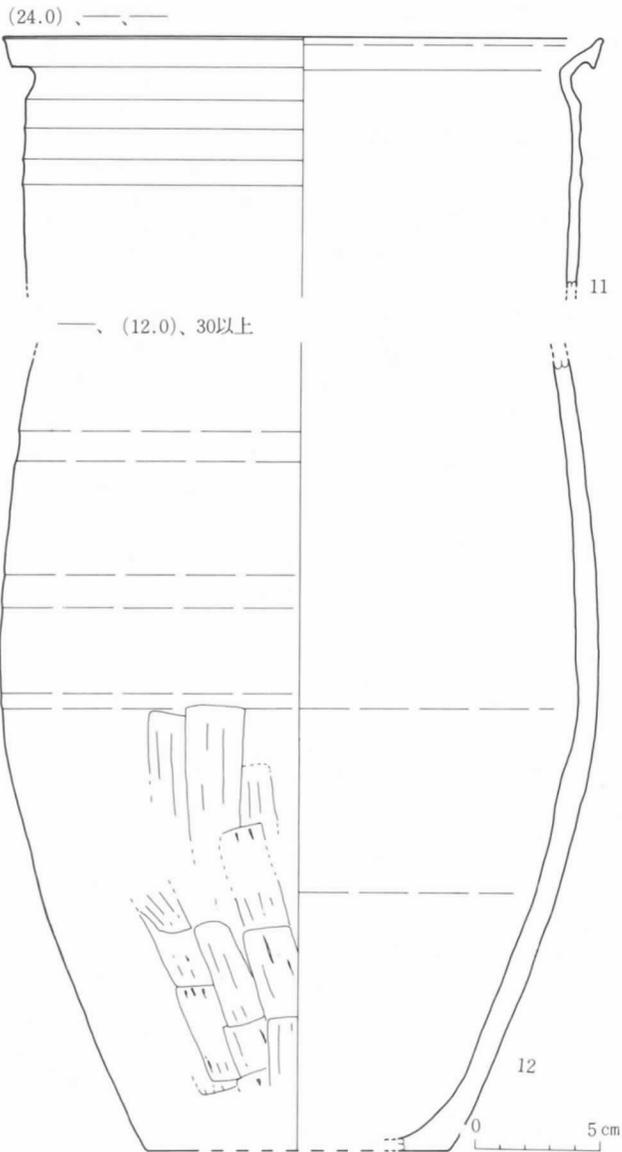
ので、当住居跡に伴うものかどうか疑問の残るものである。9は底部を欠き、10、11が口縁部破片で、12は口縁部を欠く破片である。口縁部はいずれも強く外反し、9、10の端部が上方に挽き出されて受口状をなし、11は上下両端に挽き出されている。体部は中央よりやや上部に最大径をもち、ゆるやかに彎曲する。体部上半から口縁部にかけてロクロ成形され、その後頸部下端からヘラケズリされている。ただし、12のケズリは中央部からである。底部は12によるとヘラケズリされているようである。なお、11は器肉が薄く軟質であるが、焼成はいずれも良好である。特に9は硬質に焼き上がっている。

以上の他には小型甕と思われる体部破片が2個体ある。いずれもロクロ成形痕を顕著に残すものである。

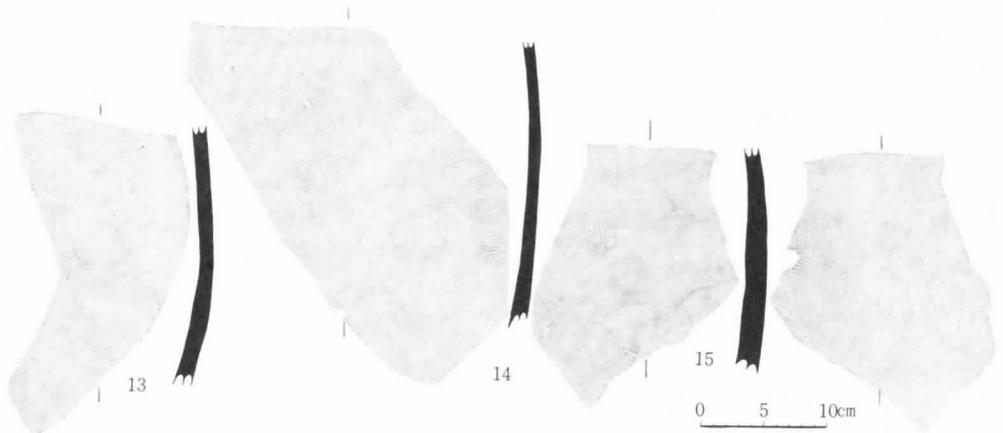
大甕：体部破片が3個体認められる。器厚が1.1~1.9cmで大甕と考えられる。外面には平行線状の叩き目文をもち、一部斜格子状を呈するものがある。内面は平滑に仕上げられ

ているが、部分的にかすかな当具痕が観察される。焼成は良好で青灰色をなし、器表面は若干ガラス光沢をなすものもある。中には砂粒の付着しているものが認められる。

〔埋土遺物〕この住居跡は表土層のほか埋土Cとして取り上げている。しかし、断面図は作成されてなく相対的な位置関係ははっきりしない。また、カマド埋土C、カマド上II層出土としたものがあって、接合するものがある(坏3)。さらには床面出土遺物と接合するものが含まれている(甕10の4点)。これらはいずれも竈周辺に位置しており、あるいは住居跡に伴うものかもしれない。ここでは一応、床面接合遺物を除いて埋土遺物として取り扱っておく。



第19図 Df18竪穴住居跡出土遺物(2)



第20図 Df18竪穴住居跡出土遺物(3)

発見された遺物は坏5点、甕17点、須恵器甕1点、それに縄文土器25点、使用痕を有する剥片1点(10)である。

坏はいずれも細片で形状の捉えられるものはない。内面黒色処理したものを2点含んでいる。甕はロクロ成形痕をもつもの、ヘラケズリ痕をもつもの等の体部破片で器肉の厚いもの、薄いものが見られる。胎土に石英等の砂粒を混入するものが多い。須恵器甕はDb 6住居跡の9と接合するものである。

なお、縄文土器、石器については遺構以外の出土遺物で一括している。

### 3 その他の遺構

1 Cg 62溝：Cg 62溝は調査地の南東部にあり、南端がCh 59住居跡と重複している。当遺構は耕作土（表土）除去後ただちに発見されたもので、竪穴住居跡より新しいと推測される。方向はN61°Eであり、約6度の勾配をもって南西に傾斜している。検出面の幅は約50cmで、深さが40cmほどである。断面形はU字状をなす。

2 Dc 3溝（第12図）：Dc 3溝は調査地の南部にあり、一部 Db 6住居跡を切っていると見られる。方向はN50°Eであり、南西に向って緩やかに傾斜している。検出面の幅は35cmで、深さが5cmと浅い。

3 Ca 68土壇（第4図）：Ca 68土壇はBi 65住居跡の煙出しと重複している。平面形は直径約1.2mの円形をなし、深さが20cmである。埋土は黒色土である。

4 Df 15土壇（第17図）：Df 15土壇はDf 18住居跡のちょうど中央にあり、上半が同住居跡によって削平されたと見られる。平面形は直径1.4mの正円をなし、深さが0.2mである。埋土は褐色土、黄色火山灰質粘土で焼土が混入している。中から縄文土器4点が発見されており、縄文時代のもつと推測される。なお土器は無文の胴部破片であり、時期は不明である。

#### 4 遺構以外の出土遺物

遺構以外の出土遺物は竪穴住居跡出土以外のものと、成沢川に面した南斜面から大量に採集されたものである。発見された遺物には土師器、須恵器、石製品、鉄製品のほか、縄文土器、石器等がある。このうち前者は主に南斜面から出土したものであり、後者は住居跡埋土を含める平坦地からの発見である。

なお、縄文土器、石器については数の少ないこともあって、竪穴住居跡出土遺物を合わせて記述している。

##### 1 土師器、須恵器（第21～25図 図版9、10）

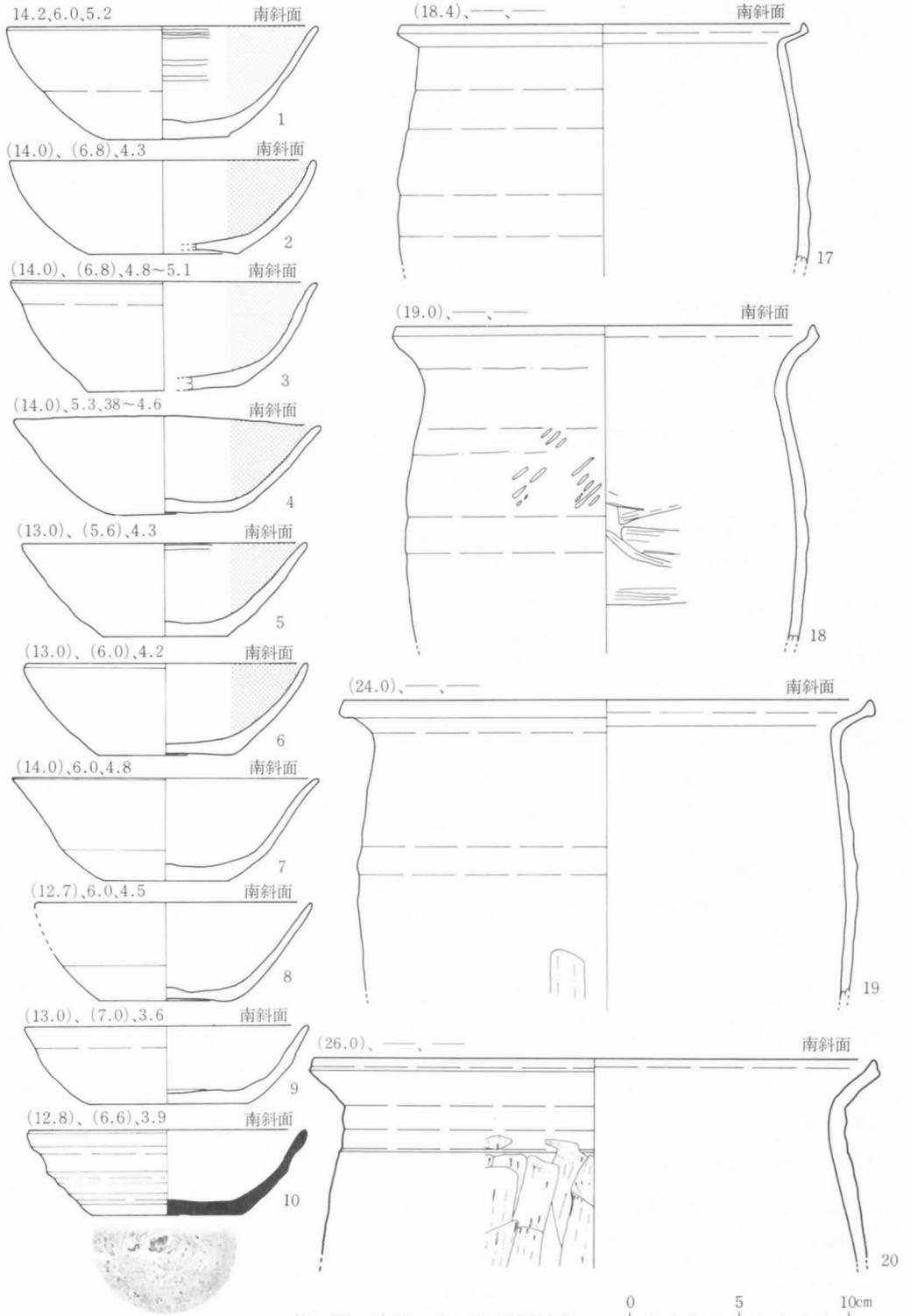
古代に属する遺物は土師器、須恵器、それに若干の鉄製品、石製品である。器種には坏、甕大甕、壺等がある。

坏：発見された坏のうちで図示可能なものは13点である。いずれもロクロ成形されたもので、酸化焰焼成されたもの9点、還元焰焼成されたものが4点である。前者には内面黒色処理されたものと、行われぬものがあり、3者の中では黒色処理を行ったものが圧倒的に多い。

1～6が内面黒色処理を行ったもので、体部が内彎しながら立ち上がる。口縁部が外反するものと、そのままおさまるものがある。器肉は比較的薄いものが多く、器面のロクロ成形痕はあまり目立たない。ゆがみも少ないようである。底部は2の中央部が極めて薄くなっており、1、4、5では逆に厚く盛り上がっている。切離し技法は4がヘラケズリ調整されていて不明であるが、他は回転糸切底のようである。内面の調整は不明瞭なものが多い。胎土は精製されたものを用いているもの(6)もあるが、砂粒を含んでいる。特に2、5では金雲母の混入が目につく。

7～9が黄橙色、褐色を呈するもので、前2者は体部が直線的に立ち上がるものである。7は腰部が張り、口縁部が外反している。器肉は比較的薄く、器面の凹凸が少ない。底部は両者とも中央部が盛り上がり、切離し技法は回転糸切によるものようである。胎土には細砂を含み、焼成は良好であるが脆弱である。後者は口径に対して底径が大きいもので、安定感のある器形をなす。体部の立ち上がりは前者に比較して強いもので、口縁部が僅かに外反する。精製された胎土を用いており緻密である。

10～16が還元焰焼成されたもので、体部は13が僅かに内彎し、11、12が直線的に立ち上がって、口端にそのまま続く。器肉は比較的厚手で、器表面の凹凸が少ない。底部は回転糸切底で、中央部が盛り上っている。10は9と同様に口径に対して底径が大きいもので、安定感のある器形をなす。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部近くで外反する。器面の凹凸は顕著で、口唇部に重ね焼痕を残す。底部はヘラ切技法による唯一のものである。なお、13は底部と体部の境界に明瞭な段をもち、11、12は体部下端が回転ヘラケズリ調整されている。焼成は良好で青灰色をなすが、13



第21図 遺構以外の出土遺物(1)

は薄い青灰色を呈し、軟質である。

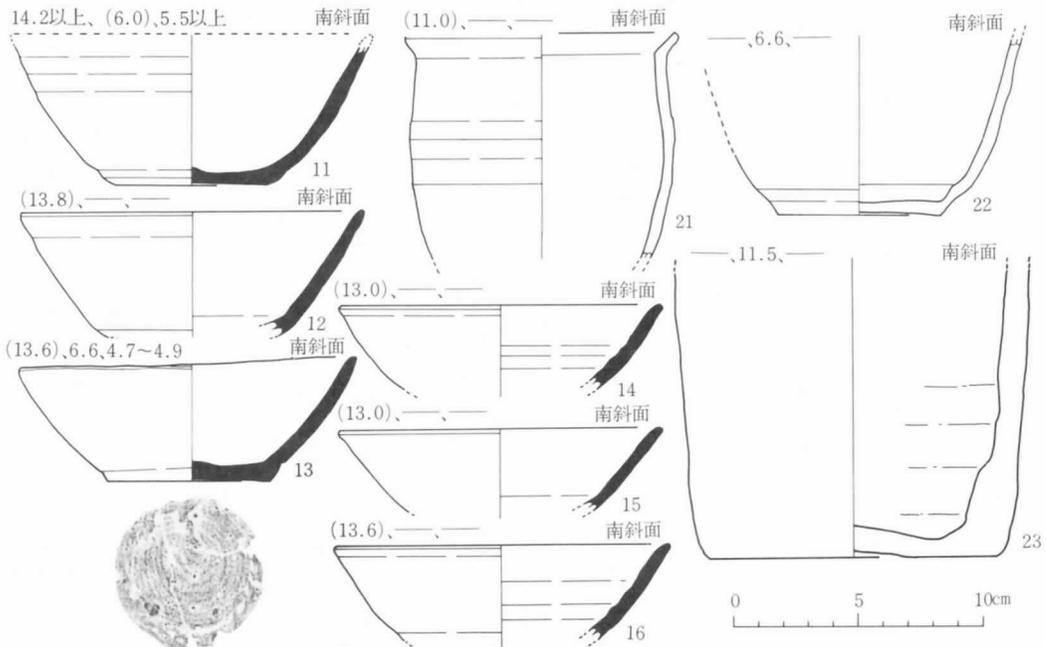
以上の他には図示できないが、酸化焰焼成された赤橙色の高台付坏がある。

甕：図示できるものは口縁部5、底部2の7点である。いずれも酸化焰焼成されたもので、23を除いてロクロ成形されている。

17～20は大型の長胴の甕である。口縁部は17が強く屈曲し、19、20が強く外反し、18が緩やかに外反する。口端部はいずれも上方に挽き出されている。体部は緩やかに彎曲し、中央部より若干上位に最大径をもつと見られる。体部上半から口縁部にかけてロクロ成形され、その後19、20は頸部下端から縦方向にヘラケズリされている。ただし、19のケズリは中央付近からである。なお、18の器面には部分的に平行線状の叩き目痕を残している。内面では18が不定方向のヘラナデ痕、20が刷毛目状の横ナデ痕が認められる。器肉は20を除いて薄く、比較的ロクロ成形痕が顕著である。特に20の頸部では3段の段状の成形痕をもつ。いずれも焼成は良好で、硬質に焼き上がっている。

23はロクロ不使用の甕の底部で、体部が直線的に立ち上がり円筒状を呈す。外面は器壁が荒れて詳細は不明であるが、縦方向にヘラケズリされているようである。内面は紐巻き上げ痕を残し凹凸が著しい。焼成は良好でやや硬質であるが、胎土に砂粒を含み非常に脆い。

21、22はロクロ成形された小型甕である。21は口縁部が強く外反するもので、端部に稜線をもつ。体部は緩やかに彎曲し、中央よりやや上位に最大部をもつと見られる。22は回転糸切底を有する底部で、体部は下端に段を有するが、ほぼ直線的に立ち上がる。両者とも器肉が薄く、

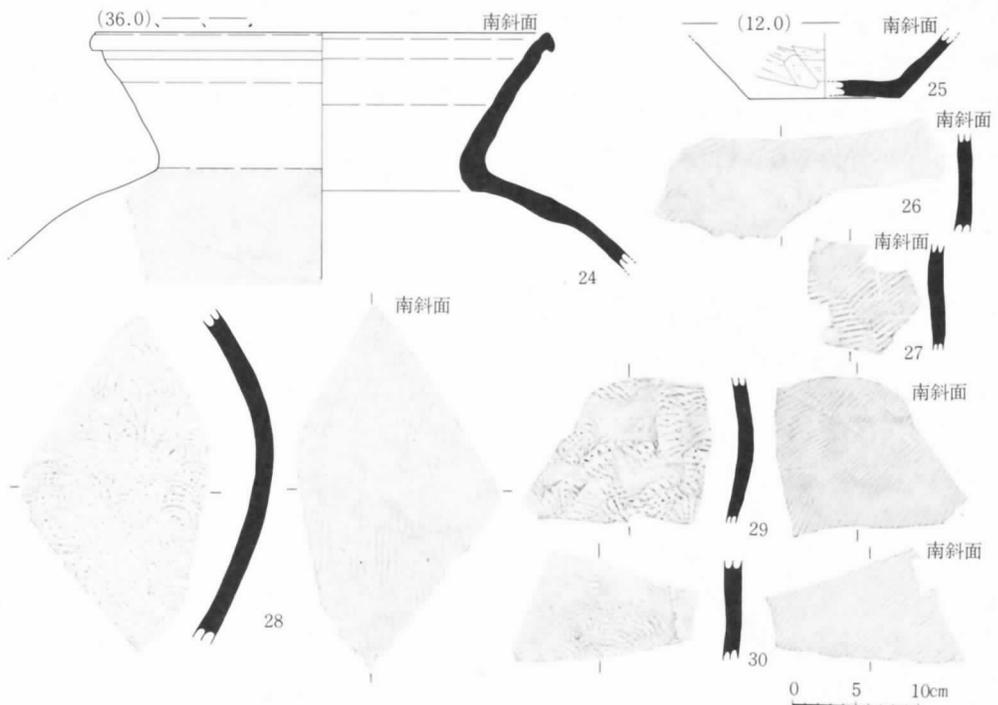


第22図 遺構以外の出土遺物(2)

ロクロ成形痕をもつ。以上の他には還元焰焼成された甕あるいは壺の破片がある。いずれも細片で図化できるものではない。体部上半から口縁部にかけてロクロ成形、下半がヘラケズリ調整されているものである。中には平行線状の叩き目痕を残すものもある。

大甕：図示可能なものは2点である。24は頸部が「く」の字状に屈曲するもので、口縁部が直線的に外傾している。口端部外面に1条の沈線がめぐり、下端が稜線をなす。体部はゆるやかに彎曲し、肩部の張る形をなすと思われる。頸部から口縁部にかけてロクロ成形され、下半は平行線状の叩き目文をもつ。肩部の自然釉が剥落してザラザラしている。内面は無文であるが小さな凹凸が観察される。口縁内側には沈線状の凹がめぐっている。器厚は1.1~1.8cmで比較的厚い。

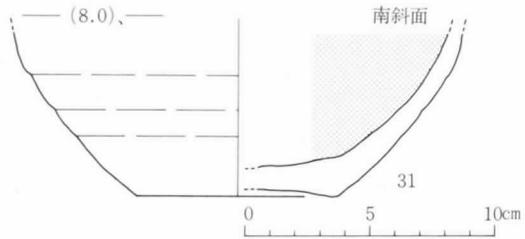
25は体部が開きながら立ち上がる底部破片である。外面が横あるいは斜方向にヘラケズリされ、下端部にかすかな平行線状の叩き目文を残す。内黒は無文で凹凸をもつ。底は不定方向にヘラケズリされている。両者とも焼成は良好で青灰色をなし、堅緻である。



第23図 遺構以外の出土遺物(3)

26～30は体部破片で、いずれも平行線状の叩き目文をもつ。内面は28、30が青海波文をもち、29が花文状の叩き目文をもっている。26、27は無文で、前者の凹凸がやや顕著である。焼成は27を除いて、青灰色をなし硬質である。特に26、30は器表面が濃厚なくすべ色をなす。26は薄い青灰色をなし軟質である。なお、28は灰釉のためガラス光沢を有す。

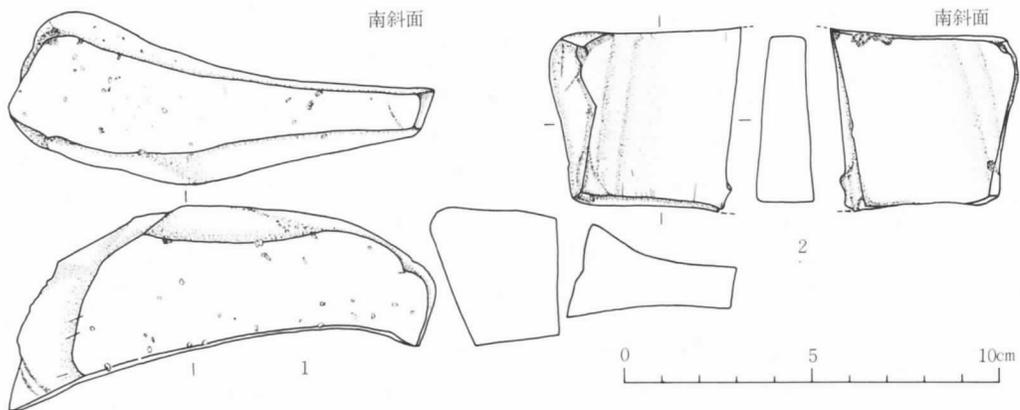
鉢：図示可能なもの1点である。31はロクロ成形されたもので、体部がゆるやかに立ちあがり大型の碗状をなす。底部は上げ底風で、回転糸切底である。器厚は坯よりやや厚く、外面にはロクロ成形痕が観察される。内面は黒色処理されているが、暗褐色あるいは赤橙色をなす。



第24図 遺構以外の出土遺物(4)

以上の他には口縁部が直口ぎみに立ち上がるもの、外反するもの、外反し端部が上方に挽き出されているものなどの口縁部破片がある。いずれも坯より大きくなるもので、この種の口縁部と考えられるが、口端部まで1～6と同様に黒色処理が施されている。

砥石：破損しているものを含めて2点である。1は流紋岩製で、自然石をそのまま利用したもので、2面の使用面をもつ。2は淡緑色細粒凝灰岩製で方形をなす。4面を使用面とし、主な使用面は2面で、他は先行する使用面と見られる。折損部と1面を残して全面黒色を呈す。両面とも著しく擦り減っている。



第25図 遺構以外の出土遺物(砥石)

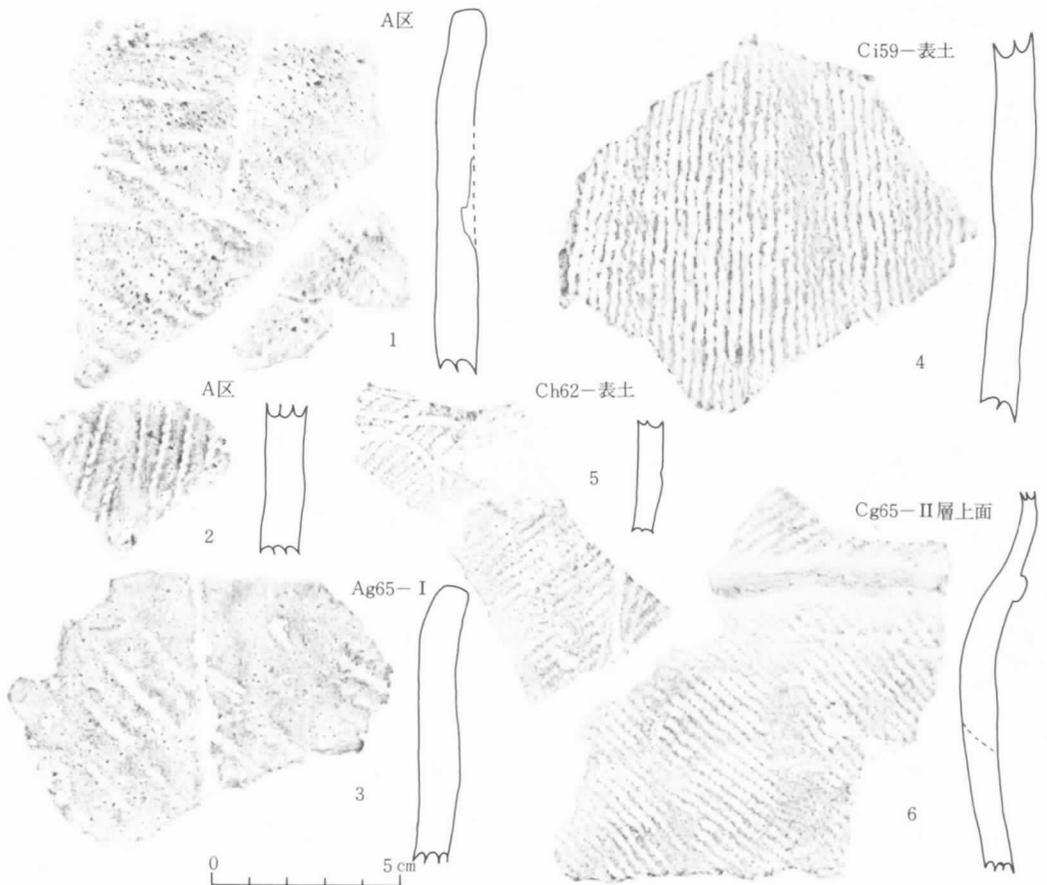
## 2 縄文土器 (第26図 図版11)

調査地全域から縄文土器、石器が採集されている。ほとんど第1層から発見されたものであるが、住居跡埋土あるいは床面出土遺物をも一括している。

縄文土器は細片を含めて86点である。すべて破片で器形の把握できるものではなく、時期は不明であるが、文様等から縄文時代前期初頭のもの、中期中葉のものが存在するようである。また、細片であるが、晩期と考えられるものが数点含まれている。

前者は主にA地区から発見されたもので、比較的大破片が多い。口縁部4点、胴部25点、底部3点で、大型深鉢形土器と見られる。底部は平底で直線的に立ち上がり、やや開きぎみの口縁部に続く。口縁部は平口縁で丸くおさまる。文様は太目の単節斜縄文(無節を含む)の地文のみ(1、3)で、撚糸文も認められる(2)。器壁は厚く、焼成は良好で赤橙色をなす。

後者は主にC、D地区の成沢川に面した斜面から発見されたものである。細片が多く器形の復原されるものはない。文様は縄文、撚糸文の地文のみのもの(4)と、沈線あるいは隆帯を貼付するもの(5、6)とがある。



第26図 遺構以外の出土遺物(縄文土器)

### 3 石器 (第27図 図版11)

発見された石器は石匙1、搔器6、石錐1、使用痕を有する剥片7、磨製石斧2、岩偶状石製品1で、他は屑片17である。

#### 石匙及び搔器

つまみを有するものを石匙とし、明らかに刃部加工されたものを搔器とした。1は小型の縦型石匙であるが、両面加工的な刃部が対辺に形成されている。片面に大きく自然面を残す。凝灰質硬質泥岩である。2～4は円形を基調とするもので、ラウンドスクレパーと見られる。刃部は周縁に形成されている。5はつまみが付くと横型石匙と見られるもので、方形をなす。6は三日月に近い形をなす不定形で、左右両側縁を刃部としている。このうち、右側縁の上半部は押圧剥離によるものであるが、下半部と裏面、それに左側縁は打撃剥離によるものである。刃部は6を除いて、主要剥離面からのみ剥離加工されている。使用痕はすべての刃部に細破砕痕が観察される。石材は凝灰質硬質泥岩2、硬質泥岩2、珪質泥岩1、黒曜石1である。なお、5、7は素材が薄く、刃部角が鋭角で削器的なものである。

#### 石錐

8は縦長剥片を横に使用したもので、1側縁に片面から加工された短い錐部をもつ。錐部は鋭く尖り、つまみが極端に大きい。硬質泥岩である。

#### 使用痕を有する剥片

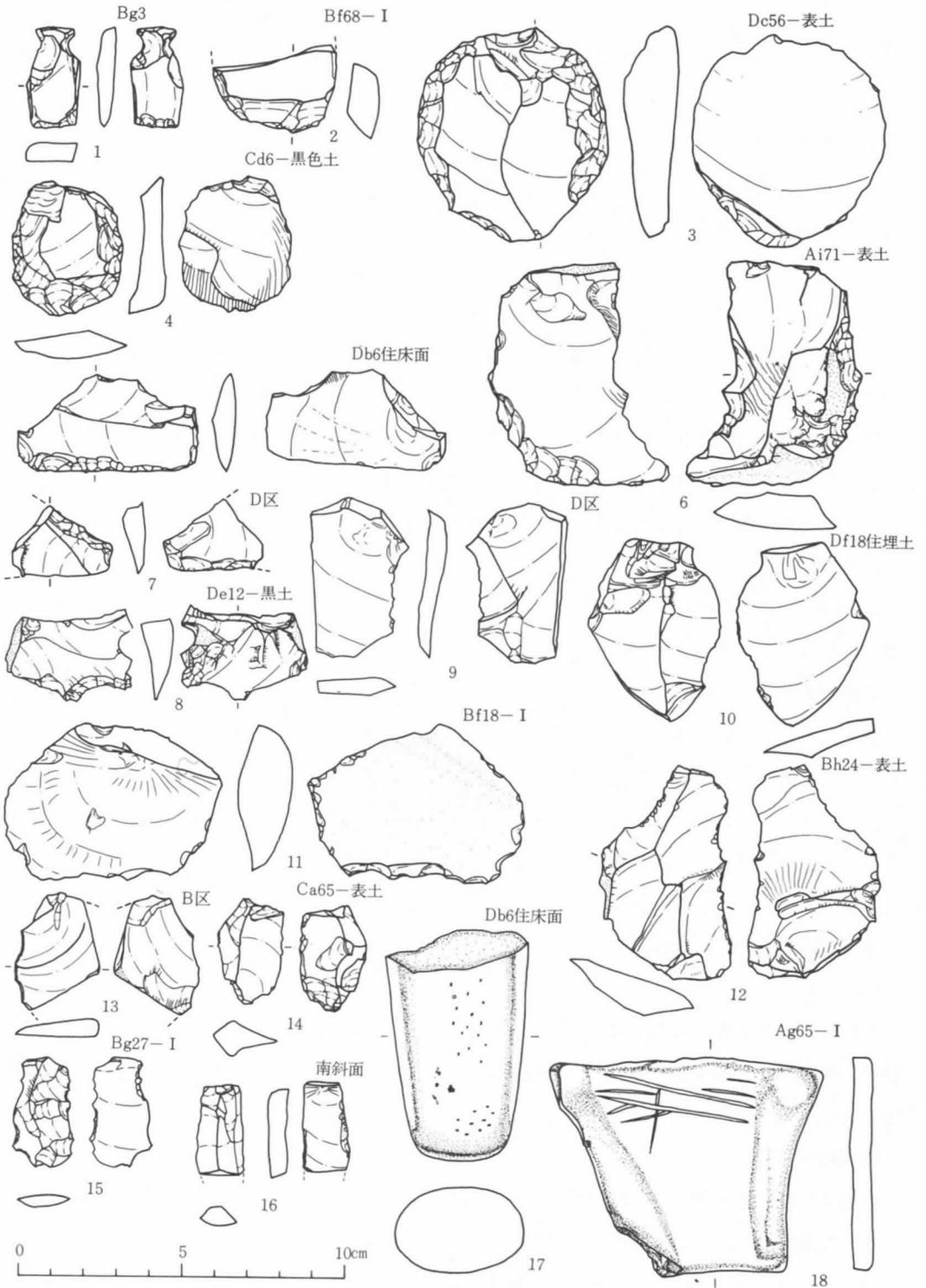
使用痕を有する剥片は、剥片の一端に小さな剥離痕をもつもので、搔器とは刃部加工（使用痕）の不規則性、縁辺の一部使用であることで区別される。全体的形状は素材に大きく左右され、定形化されていない。大きさも区々であるが小型のものが多いようである。使用痕は細破砕痕（9、13～16）と、剥落痕（10、11）で、13、15、16の3点は摩耗している。なお、16は石刃様の剥片、15は調整剥離面を有する剥片、11は自然面を有する剥片を利用している。石材は凝灰質硬質泥岩4、硬質泥岩1、珪質泥岩1、松樹岩1である。

#### 磨製石斧

破片を含めて2点である。17は基部のみの破片で、先端が平坦となっている。断面形は長円形で、側縁が丸く稜線をもたない。粘板岩製で全面研磨されている。上面からの加圧による折損である。他は硬質泥岩の細片である。

#### 岩偶状石製品

中期前葉の板状土偶の上半部に類似するもので、両手を左右に伸ばした形をなす。扁平な方形の石質凝灰岩を腕の部分を除いて研磨したもので、両腕が作出されている。背にあたる部分には沈線が認められ、裏面（おそらくは前面）が剥落している。頭部及び脚部については不明である。



第27図 遺構以外の出土遺物（石器）

但し 5、17はDb6竪穴住居跡、床面出土、  
10はDf18竪穴住居跡埋土出土である。

## IV まとめと考察

### 1 藩境塚について

藩境塚は南部藩と伊達藩の境界として寛永19年(1642)に築かれたものである。その後小塚が築かれ、度々「刈払い」「上置」など補修され、標式として機能したものである。しかし、廃藩置県以降は存在意義を失なって放置され、崩壊するにまかせている。中には開墾等によって破壊されたものも存する。そこで昭和38年から41年にかけて北上川以西の現況実態調査が行われ『南部伊達両藩藩境塚、一北上川以西の一部』として報告されている<sup>註(1)</sup>。

藩境塚には大塚と小塚があって、調査報告書によると北上川以西の大塚は40で、小塚は時代によって幾分変動しているようであるが315と捉えられている。このうち小塚は延享3年(1746)の「御境小塚繕築直シ並新規上置等、他領御当地古人出会相立申覚、外諸伝記」によると椏峠大塚と日影山大塚の間のもので「小塚敷屯間半四方、高サ四尺くらい」で、前欠大塚以東が「是より小塚敷屯間四方、高サ三尺五寸也」とあり、構築されたものは前者が約2.7m四方で高さが約1.2m、後者は約1.8m四方で約1mの高さであったことが知られる。ところが、昭和38年に調査された小塚No267(前欠大塚以東にあたる)は4.5尺(1.36m)四方で高さが僅か37.5cmであったという。かなり崩壊していたことが伺える。

大塚は実態調査報告書によると下表のとおりである。

大 塚	東	西	南	北	高さ	大 塚	東	西	南	北	高さ
二 番	22.3尺 (6.8m)		23.0尺 (7.0m)		1.5m	泉徳寺沖	16.0尺 (4.8m)		18.0尺 (5.5m)		0.9m
三 番	△21.3 (6.5)		27.6 (8.4)		2.3	五代坂沖	17.5 (5.3)		18.0 (5.5)		1.0
高 森	20.0 (6.1)		19.0 (5.8)		0.6	うとう坂沖	16.0 (4.8)		19.0 (5.8)		1.0
大 平	15.0 (4.5)		16.0 (4.8)		0.9	羽場沖	16.0 (4.8)		17.0 (5.2)		1.0
水 沢 森	10.0 (3.0)		10.0 (3.0)		0.6	柳上沖	18.0 (5.5)		18.0 (5.5)		1.0
椏 峠	記 載 な し					正覚寺沖	18.0 (5.5)		23.0 (7.0)		1.2
日 影 山	10.0 (3.0)		11.0 (3.3)		0.6	宿坂沖	17.0 (5.2)		15.0△ (4.5)		0.8
柳 瀬	9.5 (2.9)		10.0 (3.0)		1.1	小塚4	4.5 (1.4)		44.5 (1.4)		0.4
鍋 割	14.7 (4.5)		14.5 (4.4)		0.6	滝沢沖	記 載 な し				
前 掛 山	14.0 (4.2)		15.0 (4.5)		0.9	筑瀬館沖	消				
手 洗	16.0 (4.8)		15.0 (4.5)		0.9	川原沖	消				
上 平 袋	12.0 (3.6)		13.0 (3.9)		1.0	八幡堂沖	消				
下 平 袋	12.5 (3.8)		13.0 (3.9)		1.2	糖塚沖	消				
白 掛 沖	13.0 (3.9)		12.5 (3.8)		1.1	打越沖	消				
内 野 沖	15.0 (4.5)		14.0 (4.2)		1.5	金鳴沖	消				
横 打	18.0 (5.5)		15.0 (4.5)		0.9	堀切上	記 載 な し				
和 田 沖	14.0 (4.2)		12.0 (3.6)		1.0	堀切坂脇	52.0 (15.8)		15.0 (4.5)		7.6
石 名 坂 沖	14.5 (4.4)		15.5 (4.7)		0.7	赤石鼻	64.0 (19.4)		106.0 (32.1)		3.0△
八 天 坂	18.0 (5.5)		16.0 (4.8)		0.8						

△印は欠削されていることを示す。

これらはいずれも方形で、特に大型な堀切坂脇大塚と赤石鼻を除くと、22.3×23.0尺(6.69×6.9m、二番大塚)を最大とし、9.5×10.0尺(2.85×3.0m、柳瀬大塚)を最小とする。また高さでは2.34m(三番大塚)を最高とし、0.57m(水沢森大塚)を最低とする。大多数のものは14~20尺(4~6m)四方で、高さでは1m前後のものが多い。今回調査されたものは1辺4.0m以上で、高さが1.2mであり、大塚に相当すると考えられる。

それではどの大塚であろうか。柳上沖大塚は享保9年(1724)～元文2年(1737)の「御境小塚繕築直新規塚数改申覚帳」と延享3年(1746)文書(前掲)では「成沢東向柳上之沖」としており、成沢川の東にあたることが知られる。柳上沖大塚の西が羽場沖大塚である。同塚は実態調査報告書では東西16.0尺(4.85m)、南北17.0尺(5.15m)、高さ104.5cmとしており調査された藩境塚に極めて近い数値を示している。また、同報告書の大塚形状実測図の羽場沖大塚(236)は北に接して道路が図示されており、今回のものと一致する。

以上のことから今回調査されたものは羽場沖大塚と見られる。

注(1)『南部伊達両藩藩境塚—北上川以西の部—』岩手県教育委員会 (昭48)

(2) 前掲所収の付録南部伊達両藩藩境塚関係資料集録による。

## 2 竪穴住居跡について

今回の調査で発見された竪穴住居跡は6棟である。このうち2棟は大半が農道のため破壊されたもので、1棟は内部施設が認められず住居跡かどうか不明なものである。その分布は成沢川に面した斜面上部に比較的多く見られ、他は散在する程度である。

平面形は方形を基調とし、ほとんど正方形に近い。規模は1辺が3.5～4.5mで比較的小型である。堆積土は4層に細分され、上層は黒色腐植土、茶褐色混土で流入堆積と見られ、下層は褐色混土、黒褐色混土で、壁の崩壊等による先行する堆積土と考えられる。いずれも自然堆積とみられるものである。なお、Db6 竪穴住居跡の2層はいわゆる粉状パミス<sup>注(1)</sup>である。

壁は地山を壁とし、壁高が15～35cmで全体的に南壁が低くなっている。床面はほとんど水平で、貼土等は認められない。また、いずれにおいても周溝は確認されていない。柱穴はBi65住では4柱で南側列が壁に接している。Db6住は北側柱穴が各壁から1.2m内側にあり、同様の配置が想定される。なお、Df18住のP2は竈側壁先端部に位置し、特異な例である。

竈は2棟が南壁東寄り、1棟が東壁南寄りである。燃烧部はBi65住が若干壁外に出ているが他は壁内に納まる。側壁はシルトで構築されているが、中には小さな礫を芯としているものもある。Bi65住では側壁先端部に小さなpitが検出されており芯石を設置した穴と推測される。煙道は比較的長く、Bi65住では中ほどで屈曲している。Db6住は一部くり抜きで燃烧部近くでは底を抜いた甕型土器を利用している。このような例は相去遺跡<sup>注(2)</sup>において2例知られる。煙道底面は壁の部分で一段上がり、下り勾配で煙出しに続いている。煙出しは直径0.3～0.5mの円形で、深さが0.3～0.5mのpit状を呈す。なお、Db6住では支脚として坏を伏せて利用している。

貯蔵穴と考えられるものはBi65住の竈右側壁外側のP-6と、Df18住のP-3である。前者は坏及び高台付坏を出土するもので、焼土粒及び灰を含んでいる。遺物は竈周辺遺物と接合するもので、廃棄段階に混入したと考えられ、空洞になっていたと見られるものである。後者

は坏を出土するもので竈右側壁の下にあたり、先行する貯蔵穴と考えられる。

伴出遺物は床面、煙道、煙出し、貯蔵穴から発見されたもので、埋土下層のものを含む。床面では竈周辺に集中しており、Df18 住では特に焚口部に密集している。伴出遺物には土師器、須恵器、それに若干の砥石で、土師器には坏、高台付坏、甕等がある。

坏には内面黒色処理を施したものと無処理のものがある。両者ともロクロ成形されたもので、切離技法は回転糸切である。前者の器形は体部が内彎しながら立ち上がるもの(Bi65 住1、Db6 住1、Df18 住1、3)と、直線的に立ち上がるもの(Bi65 住2、3、4)とがあり、口縁部はそのままおさまるものと外反するもの(Bi65 住5)とがある。Bi65 住6は大きく内彎するもので口径が比較的小さく器高が高く碗形をなし、Df18 住2は口縁部が大きく外反している。器表面はロクロ成形痕を残すものと平滑なものがあり、器壁は比較的薄手のものが多い。底部は薄くなるものと厚くなるものがあり、若干上底ぎみのものが大勢を占める。内面はヘラミガキされていると思われるが不鮮明なものが少なくない。また黒色をなすが赤褐色を呈するものが含まれている。焼成は良好であるが軟質に焼き上がっている。

後者は前者同様体部が内彎しながら立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものがあり、比較的后者が多いようである。口縁部もそのままおさまるものと外反するもの(Bi65 住10、11、Ch59 住2、3)の両者が存する。ただし、Ch59 住1は底径が大きく器高が低く異質感がある。底部は一部ヘラケズリされている。器表面はロクロ成形痕の顕著なものが多く、器壁は厚薄両様がほぼ同数存在する。底部は厚くなるものと薄くなるものがあり凹凸の認められるものが目だつ。いずれも焼成は良好で硬質なものが多い。特に Ch59 住2は還元焰焼成されたものに近く灰白色を呈している。

高台付坏は Bi65 住の1点のみである。比較的高台の高いもので、下端が外方に挽き出されている。内面が黒色処理されている。

甕は Bi65 住の21を除きロクロ成形されたものである。大きさに大小があり、大型の長胴の甕は口縁部が外反するもので、口縁部は上下両方に挽き出すもの(Bi65 住20、Db6 住7、Df18 住11)と上方に挽き出すもの(Ch59 住10、12、Df18 住9、10)とがある。9、10は微かに受口状を呈している。体部はいずれもゆるやかに彎曲するもので、中ほどに最大径をもつ。調整は口縁部から体部上半がロクロ成形で、下半は縦あるいは斜方向のヘラケズリで下端は横方向のヘラケズリである。底部は摩滅してはつきりしないがヘラケズリされているようである。いずれも焼成は良好で硬質に焼き上がっている。特に Db6 住6、Df18 住9は一部還元化している。

Bi65 住の21はロクロを用いないもので、体部の脹らみが少なく円筒状を呈す。口縁部が外反するもので端部が微かに上方に挽き出されている。調整は口縁部から体部上半が横ナデされ、

下半は縦方向のヘラケズリである。内面は横ナデされているようであるがはっきりしない。胎土には小石を含み、脆い。

小型甕は Bi65 住の 2 点のみである。口縁部が外反するものでその造りは単純なものである。器表面にはロクロ成形痕を残している。

須恵器は坏と大甕がある。坏は Db6 住の 2 点のみで、器形は体部が内彎しながら立ち上がるもので、口縁部は僅かに外反している。器壁の凹凸が少ないが、内面黒色処理されない Ch59 住 2 の形に近い。底部は回転糸切底で、体部下端に小さな段を造り出している。軟質で二次焼成のためか薄い青灰色をなし、本来の須恵器の色調とは異なる。

大甕は頸部が「く」の字状に屈曲して、体部が大きく脹らむもので、中ほどに最大径をもつと見られる。口縁部は外反し、端部が下方に挽き出されている。底部は丸底でやや先細となる。口縁部から頸部にかけてロクロ成形され、下半は全面叩き目文をもつ。外面が平行線状（斜格子状となるものも含む）、格子状の叩き目文で、内面は無文のものも少なくないが斜格子状の当具痕をもつ。器壁は比較的薄く焼成は良好でくすべ色をなす。中には自然釉のためガラス光沢をなすものも認められる。

伴出遺物の組成は下表の如く住居跡によって若干異なるが、基本的にはロクロ成形された坏類と土師器甕、須恵器大甕からなる。

竪穴住居跡	内黒処理坏	内黒無処理坏	須恵器坏	土師器甕	須恵器甕	砥石
Bi 65 住	9	9		4	1	1
Ch 59 住		9		3		
Db 6 住	3		2	3	5	1
Df 18 住	4	4		4	3	

組成の違いは坏類にあって、①内面黒色処理を施したものと、施されないものからなるもの (Bi65 住、Df18 住)、②黒色処理を施したものと須恵器からなるもの (Db6 住)、③黒色処理の施されないものからなるもの (Ch59 住) の 3 様が見られる。

なお、Db6 住の須恵器は軟質なもので黒色処理されない土師器坏 (Ch59 住 2) に非常に類似しており、遺構でも竈位置、柱穴配列等が Bi65 住に酷似し、①の中に含まれるものかもしれない。Bi65 住はロクロを用いない長胴甕が伴っており、古い要素をもっているが、遺構では Db6 住と類似しており、出土遺物では Df18 住と近似していて、これら 3 棟はそれほど時間差のないものと考えられ、集落を形成していたものと推測される。これらの住居跡は主体となる遺物が<sup>注(3)</sup>ロクロ成形されたもので、ロクロ技術が定着した時期の竪穴住居跡と言え、宮地遺跡の「住居跡における土器のあり方」の「第Ⅲ群」にあたり、年代観は「9世紀後葉から10世紀中葉にかかる時期」と見られる。

③の Ch59 住は構造については農道のため破壊されて不明であるが、宮地遺跡の「第Ⅳ群」に比定され、「10世紀の後葉」の年代観が与えられ、後出する竪穴住居跡と言えよう

注(1) 井上克弘氏・山田一郎氏の「東北地方における奈良～平安時代遺跡埋土中の粉状パミスについて」では胆沢火山灰とし、供給源を栗駒山にもとめている。

(2) 相去遺跡現地説明会資料 第5地区第1号址、10地区2号址

(3) 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書IV』（宮地遺跡）岩手県教育委員会（昭55）

### 3 まとめ

当遺跡は村崎野段丘の最北端に位置し、成沢川に面した南斜面に立地している。検出された遺構は縄文時代の土塙1、平安時代の竪穴住居跡6棟、近世の藩境塚、時代不明の溝2である。発見された遺物は土師器、須恵器を中心に砥石等の石製品、鉄滓、鉄製品等である。それに若干の縄文土器、石器等である。

古いものから順に記すと、縄文時代の遺構としては竪穴住居跡に破壊された土塙が1基確認されたのみで、発見された遺物も土器が86片、石器が35点とそれほど多いものではない。辛うじて生活の痕跡をとどめているもので、性格は後世の破壊を含めて不明である。なお、土器は前期初頭、中期中葉のものと、数は非常に少ないが晩期と考えられるものが含まれている。

古代の遺構は破壊されたものを含めて竪穴住居跡6棟である。そのあり方は、成沢川に面した斜面上位に比較的多く見られ、台地中央部では少なくなる。おそらくは成沢川に添って東方あるいは西方に続いていると見られ、集落を形成していたと推測される。

平面形は比較的小型な方形を基調とし、中には堆積土に粉状パミスを伴うものがある。竈は南壁東寄りか、東壁南寄りで、煙道が比較的長く、甕型土器を用いているものが検出されている。柱穴は基本的には4個と見られ南壁に接するものようであり、貯蔵穴ははっきりしないものもあるが竈側壁近くに設けられている。

発見された遺物は土師器、須恵器等で、出土遺物の大多数を占める。土師器には坏、高台付坏、長胴甕、小型甕があり、坏はさらに、内面黒色処理を施したものと、施さないものがあり、ほとんどの場合後者の坏を伴っている。成形に際しては坏類はもちろん、甕類においても、Bi65住の長胴甕1点を除いてロクロ成形されており、ロクロ技術の定着した時期にあたる。

須恵器には坏と大甕がある。坏は軟質で薄い青灰色をなし、器形が内面黒色処理されない土師器坏に類似していて、元来いわれている須恵器坏とは趣を異にする。甕類については、破片であるが、各住居跡に見られ、基本的に伴うものと考えられるが、それ以外の器種は極めて少ない。須恵器生産の終焉にあたるものと考えられる。

当遺跡周辺には古代の遺跡が多数発見されており、一大遺跡群を構成している。この中で、発掘調査されたものには、三十人町遺跡、葛西壇遺跡、卯ノ木遺跡、相去遺跡、高前田遺跡、上大谷地遺跡等がある。<sup>注(2)</sup>前3者については部分調査で詳細は不明であるが、相去遺跡では5地区1棟、6地区3棟、7地区2棟、8地区6棟、10地区2棟で、高前田遺跡では8棟、上大

谷地遺跡では4棟と比較的規模が小さい。

当遺跡でも、東西に続くと見られるが、確認されたものは6棟でそれほど密集しているものではなく、規模及び分布において類似していると言えよう。構造においても柱穴が南壁に寄るとか、竈が東壁南寄り、あるいは南壁東寄りであるとか、煙道に甕を用いるなど類似するものがある。また、出土遺物においても①ほとんどロクロ成形されたもので構成され、②坏においては須恵器が極めて少なく、あっても赤焼き土器に近いもので、①いわゆる赤焼き土器を伴うなど、共通するものがある。さらに堆積土においては、埋土にいわゆる粉状パミス<sup>註(4)</sup>を伴うなど、非常に近接した時期の竪穴住居跡、集落と捉えられる。

以上見てきたように規模、住居跡構造、出土遺物等に類似点が見い出され、相去遺跡現説資料で指摘されている如く、当遺跡を含めて、各々の集落が有機的に関連していたものと推測される。すなわち成沢遺跡はこれら相去台地遺跡群の中の散在する1集落と捉えられる。

なお、住居跡の中には完全に埋没しきらないうちに鉄滓、炉壁等の入ったものがあり、遺構としては確認できなかったが、近くで鉄生産がなされたと考えられる。

近世には遺跡の北端が鬼柳村と相去村の村境となり、また、南部藩と伊達藩の藩境として塚が築かれ、現在に至っている。調査された塚は規模等から大塚と見られ、成沢川との位置関係から羽場沖大塚に相当すると思われる。構造は周辺の土を盛って叩いた程度のもので、下底部には藩境塚の標式の木炭敷が確認されている。

注(1) 『北上市史』(昭和43)所収 北上市遺跡分布地図

『相去遺跡現地説明会資料』(昭和48) 所収 「相去遺跡」及び周辺遺跡位置図

(2) 『北上市相去町三十人町遺跡調査報告』齊藤尚己『北上市史Ⅰ』所収

『北上市相去町葛西壇遺跡発掘調査報告』沼山源喜治『北上市史Ⅰ』所収

『卯ノ木遺跡発掘調査報告書』北上市教育委員会(昭和50)

『相去遺跡現地説明会資料』岩手県教育委員会 北上市教育委員会(昭和48)

『高前田遺跡現地説明会資料』岩手県教育委員会 北上市教育委員会(昭和49)

『上大谷地遺跡現地説明会資料』上大谷地遺跡調査団(1972)

(3) 坏にのみ限定されないものようであるが、ここでは内面黒色処理されない土師器坏をさす、須恵系土器、あるいは赤褐色、褐色を呈する須恵器を含む。

(4) 卯ノ木遺跡1号住居跡、相去遺跡第8地区4号址、同10地区1号址、上大谷地遺跡 BL18 住居跡等

## 付章 出土遺物の分析と年代測定

### 1 Bi65 竪穴住居跡埋土の鉄滓の分析

岩手県工業試験場

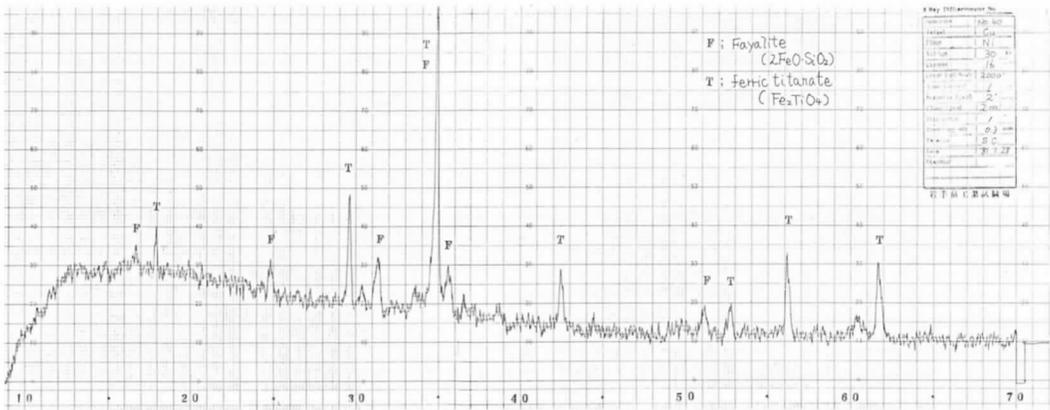
#### 1、定量分析結果

鉄滓の定量分析結果

化 学 組 成		(100%)		
total Fe	MnO	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	C
41.85	0.47	19.48	9.56	0.21

#### 2 X線回折法による定性分析結果

検出鉱物：Fayalite (2FeO・SiO<sub>2</sub>) +、ferric titanate (Fe<sub>2</sub>TiO<sub>4</sub>) ++



〔測定条件〕対陰極；Cu、フィルター；Ni、電圧；30kV、電流；16mA、時定数 1 sec、カウントフルスケール；2000cps、検出器；シンチレーション計数管

#### 3、蛍光X線法による定性分析結果

検出元素：Al、Si、K、Ca、Ti、Cr、Mn、Fe、Zr

〔測定条件〕対陰極；W、Cr、分光結晶；Lif、EDDT、電圧、電流；50kV、40mA、時定数；1 sec、カウントフルスケール；10<sup>4</sup>cps、検出器；シンチレーション計数管

〔備考〕化学分析ではシリカ分(SiO<sub>2</sub>)が多く、X線回折ではシリカ分を含むものとしてのフェアライトとオルトチタン酸第1鉄(Fe<sub>2</sub>TiO<sub>4</sub>)が検出された。さらに化学分析では砂鉄に由来すると思われるチタンがかなり多く含まれている。電子顕微鏡写真撮影(図版11の下)を行ったところ、八面体と思われる結晶があった。この結晶は等軸晶系、正立晶系、あるいは斜方晶系に属するもので、フェアライト、オルトチタン酸第1鉄(ともに斜方晶系)のいずれかと思われる。<sup>注(1)</sup>

2、Db6 竪穴住居跡埋土の粉状パミスの分析

岩手県工業試験場

1、定量分析結果

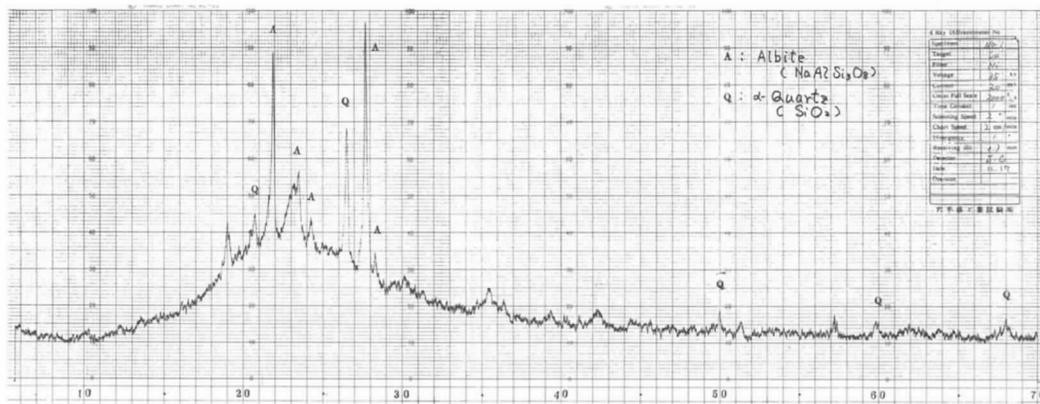
粉状パミスの定量分析結果

H <sub>2</sub> O <sup>-</sup>	H <sub>2</sub> O <sup>+</sup>	SiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	CaO	MgO	S	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O
5.15	12.56	57.52	3.24	0.374	0.045	14.14	0.096	2.08	0.768	0.055	2.97	0.915

2、粉末X線回折法による定性分析結果

検出鉱物：α-Quartz (SiO<sub>2</sub>) +、Albite (NaAlSi<sub>3</sub>O<sub>8</sub>) ++

注 検出鉱物については、最強線の強土の順位を++、+で表わし、おおよその目安とした。



〔測定条件〕 対陰極；Cu、フィルター；Ni、電圧；35kV、電流；20mA、時定数；1 sec、カウントフルスケール；2000cps、検出器；シンチレーションカウンター

3、Db6 竪穴住居跡出土の炭化材の年代測定

日本アイソトープ協会

年代測定結果 1240±75yB、P (1210±70yB、P)

年代は <sup>14</sup>C の半減期5730年 (カッコ内は Libby の値5568年) にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数 (yearsB.P.) として示されています。付記された年代誤差は、対射線計数の総計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に広げますと確率は約95%となります。なお <sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

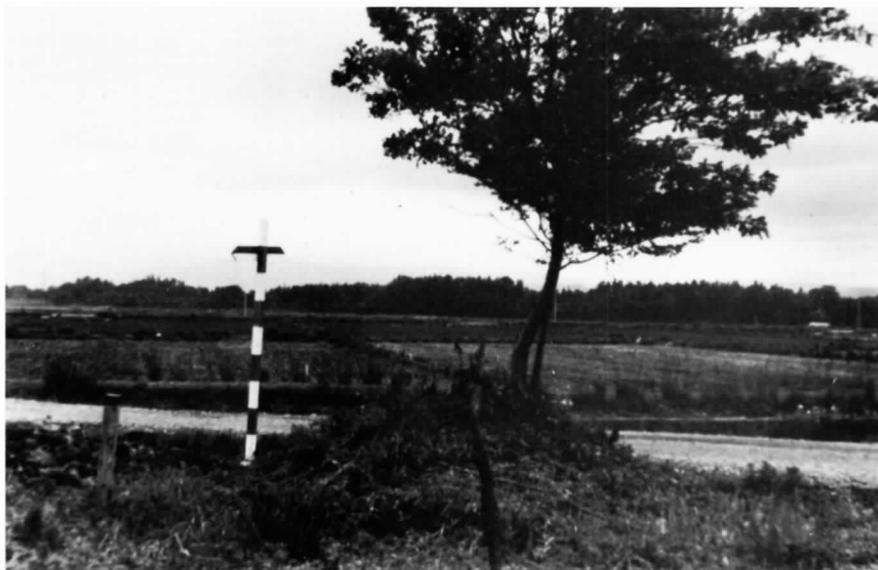
注(1) これは、他の資料4点と共に記述されていたものから当該資料分を抽出し、一部記述の順序を入れ替えたものである。

写 真 图 版

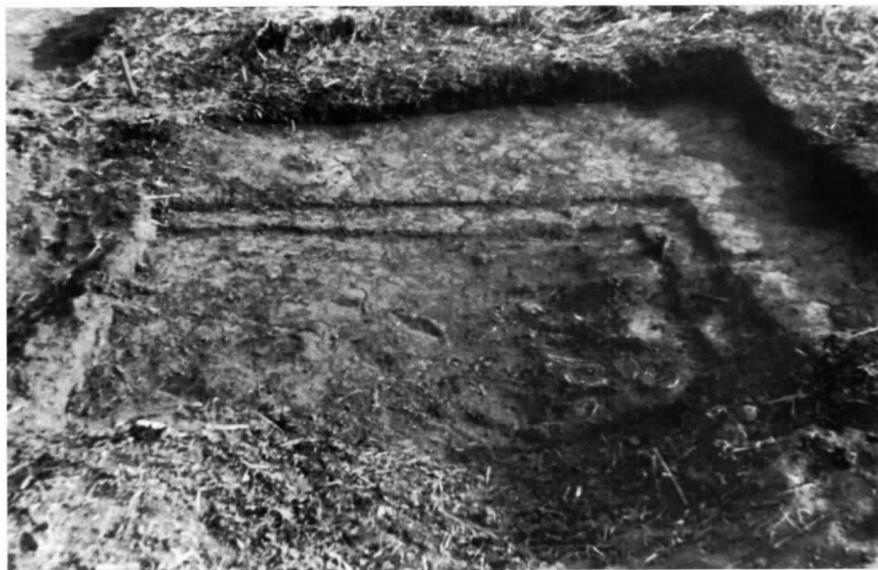
写真図版目次 (成沢)

藩境塚, Ba 6 竪穴住居跡 ……図版 1  
Bi 65 竪穴住居跡 Df 18 竪穴住居跡  
……………図版 2  
Db 6 竪穴住居跡竈 ……図版 3  
Bi 65 竪穴住居跡出土遺物 ……図版 4  
Bi 65, Ch 59, Db 6 竪穴住居跡  
出土遺物 ……図版 5  
Db 6 竪穴住居跡出土遺物 ……図版 6

Df 18 竪穴住居跡出土遺物 ……図版 7  
Df 18 竪穴住居跡出土遺物,  
遺構以外の出土遺物(1) ……図版 8  
遺構以外の出土遺物(2) ……図版 9  
遺構以外の出土遺物(3) ……図版 10  
縄文土器, 石器,  
鉄滓の電子顕微鏡写真 ……図版 11  
炉壁, 鉄滓, 鞆羽口 ……図版 12



藩境塚



Ba 6 竪穴住居跡



Ba 6 竪穴住居跡

図版 I

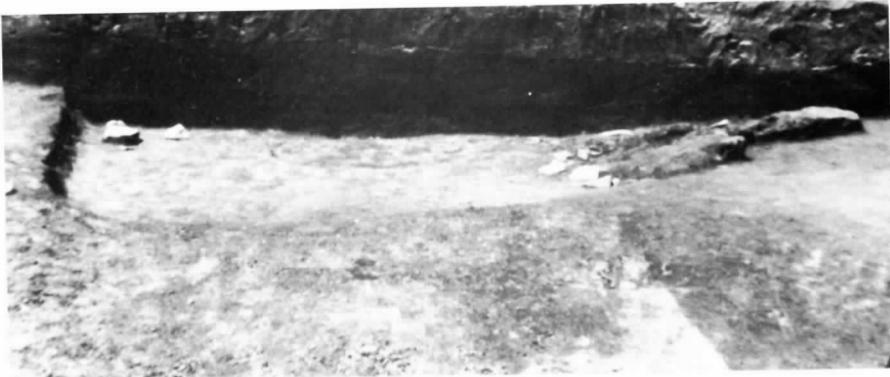
藩境塚、竪穴住居跡



Bi65豎穴住居跡



Bi65豎穴住居跡



Df18豎穴住居跡



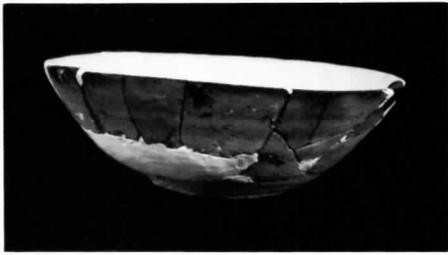
Df18豎穴住居跡竈

図版 2

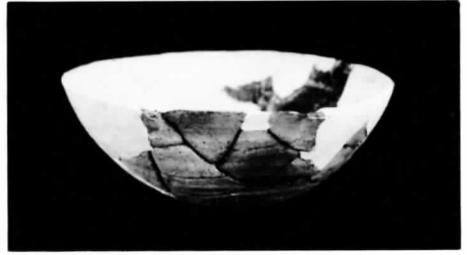
豎穴住居跡



图版 3 Db 6 竖穴住居跡竈



4



5



6



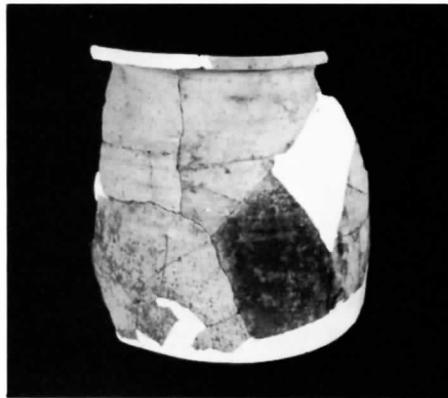
11



14



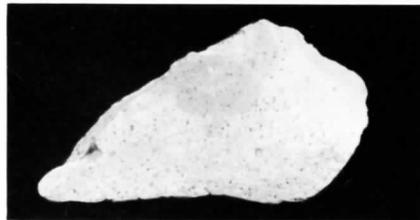
17



20



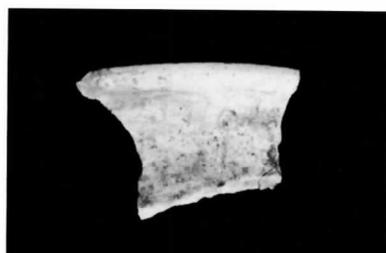
21



25

4. 5. 6. 11. 14. 17 坏、高台付坏 約 $\frac{1}{3}$   
 20. 21 甕 約 $\frac{1}{6}$   
 24. 大甕 約 $\frac{1}{4}$   
 25. 砥石 約 $\frac{1}{3}$

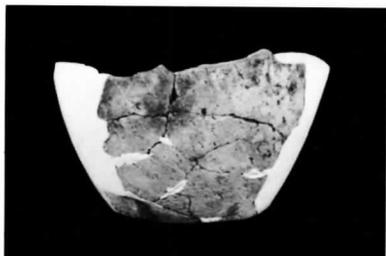
図版 4 Bi65 竖穴住居跡出土遺物



10



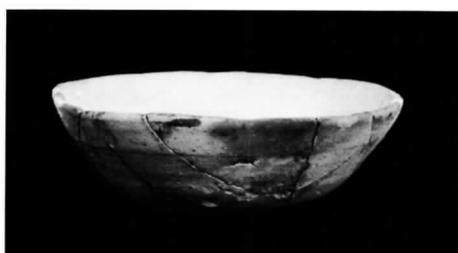
24



11



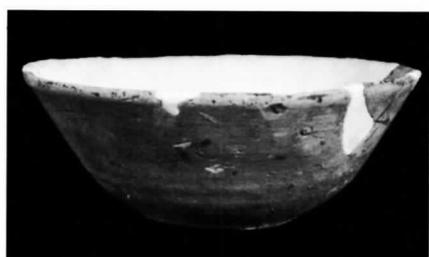
1



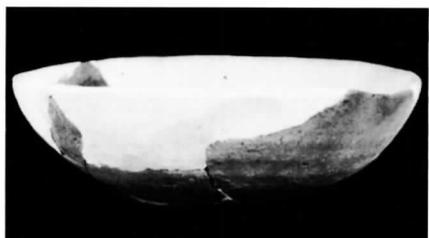
2



9



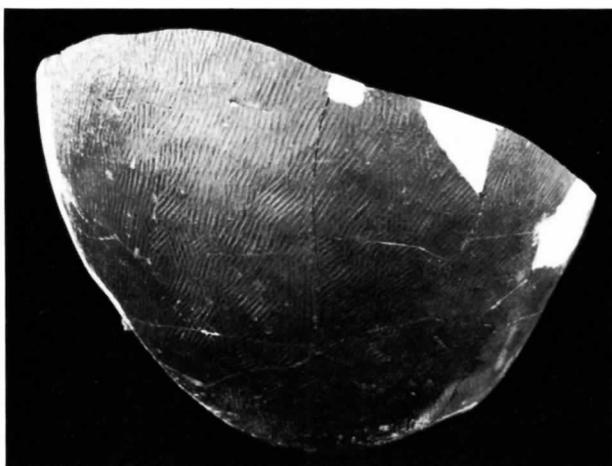
1



4

10, 11. Ch59住 甕 約 $\frac{1}{4}$ 、約 $\frac{1}{6}$  1, 2 Ch59住 坏 約 $\frac{1}{3}$

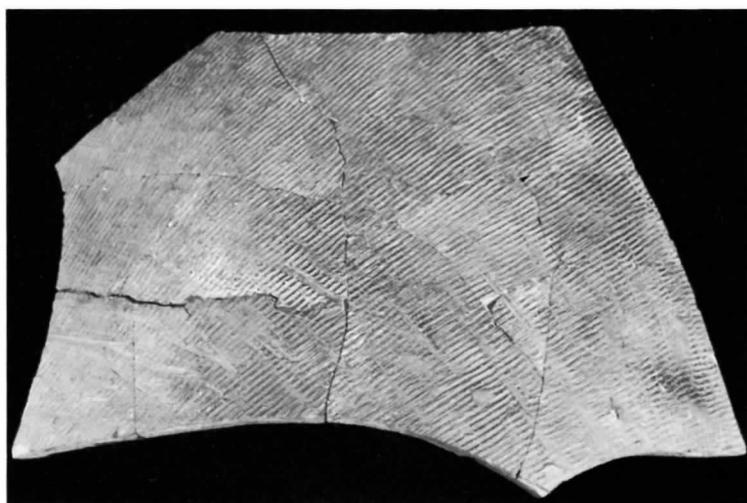
図版 5 Bi65, Ch59, Db 6 豎穴住居跡出土遺物



11



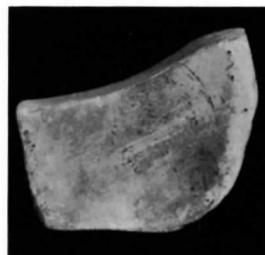
6



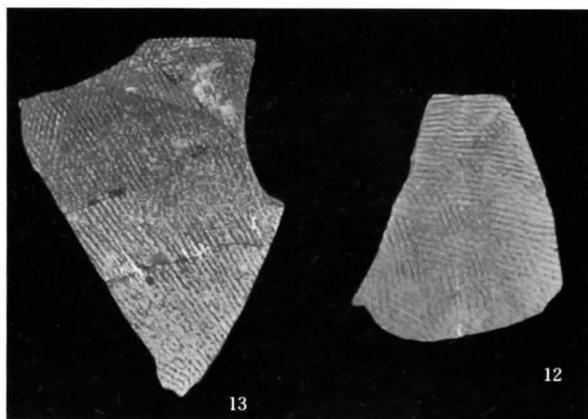
14



8

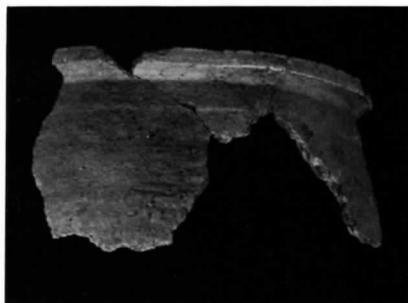


15



13

12



7

1. 4 坏 約 $\frac{1}{3}$       9. 11. 12. 13. 14 大甕 約 $\frac{1}{6}$ 、約 $\frac{1}{4}$   
 6. 7. 8 甕 約 $\frac{1}{6}$ 、約 $\frac{1}{4}$       15 砥石 約 $\frac{1}{2}$

図版 6 Db 6 竖穴住居跡出土遺物 (但し、8は埋土遺物)



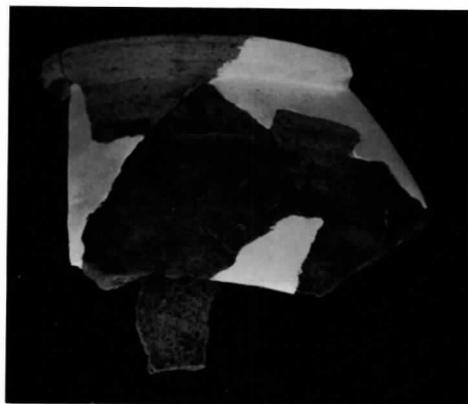
1



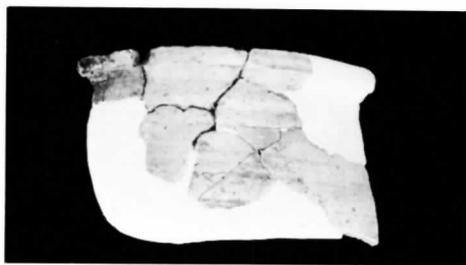
2



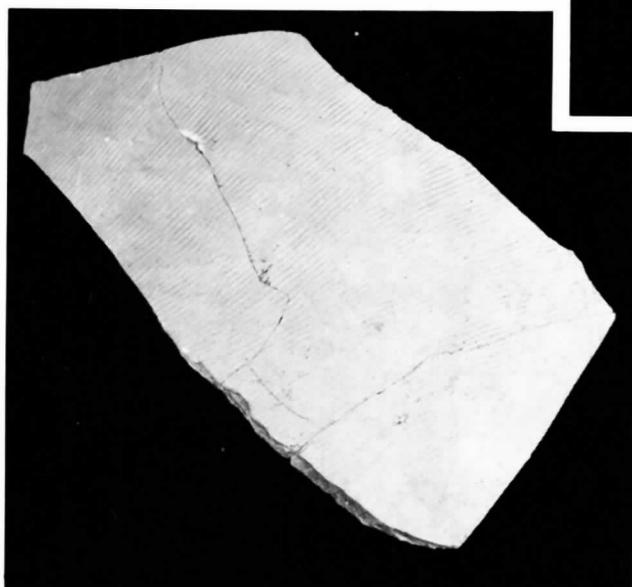
9



10



11



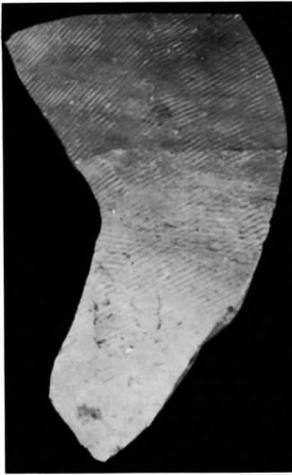
14



12

1. 2 坏 約 $\frac{1}{3}$   
9.10.11.12 甕 約 $\frac{1}{6}$

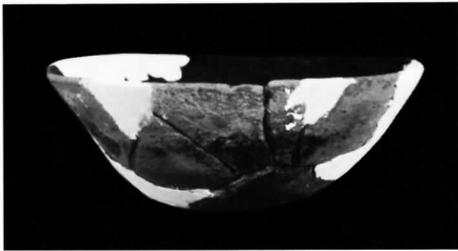
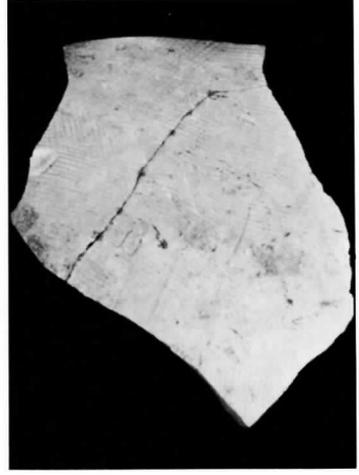
13.14.15 大甕 約 $\frac{1}{4}$



13



15



1



2



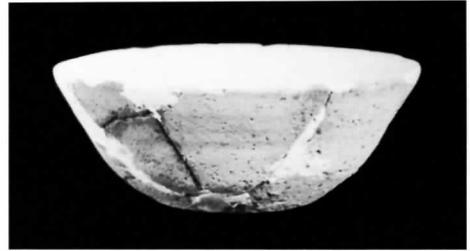
4



5



6



7

1. 2. 4. 5. 6. 7. 8. 10. 13 坏 約 $\frac{1}{3}$  31 鉢 約 $\frac{1}{3}$   
図版 8 Df18 竖穴住居跡出土遺物・遺構以外の出土遺物(1)



8



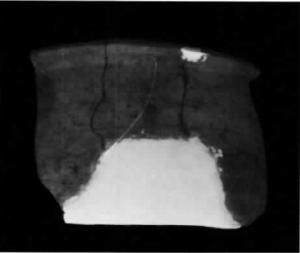
10



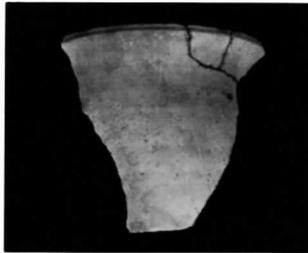
13



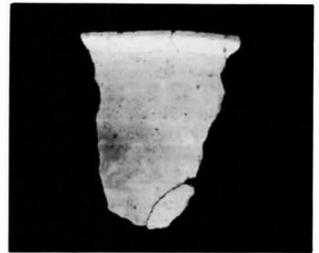
31



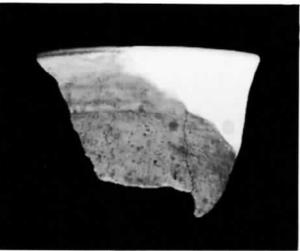
19



18



17



20



22



21



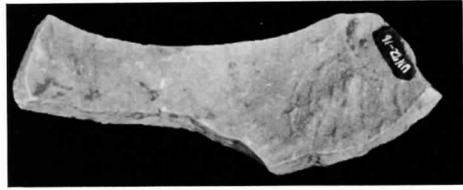
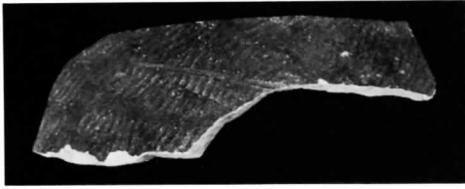
24



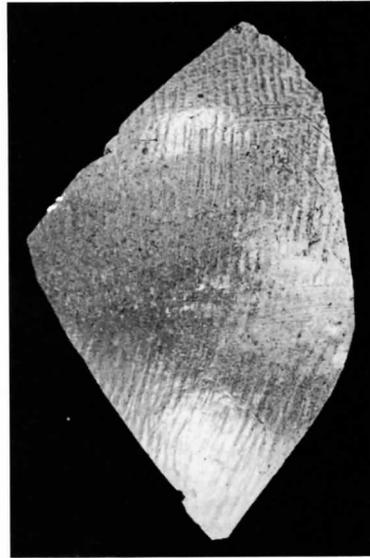
23

17. 18. 19. 20. 21. 22. 23  
壺 約 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{4}$

図版 9 遺構以外の出土遺物(2)



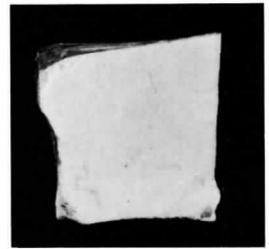
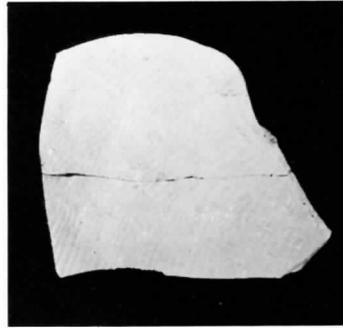
26



27

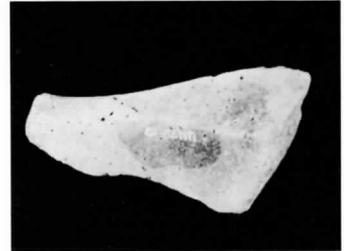
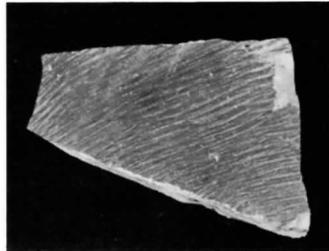


28



2

29

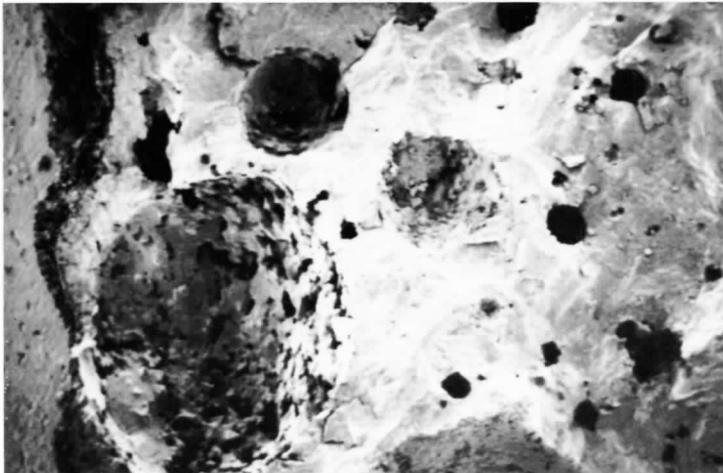
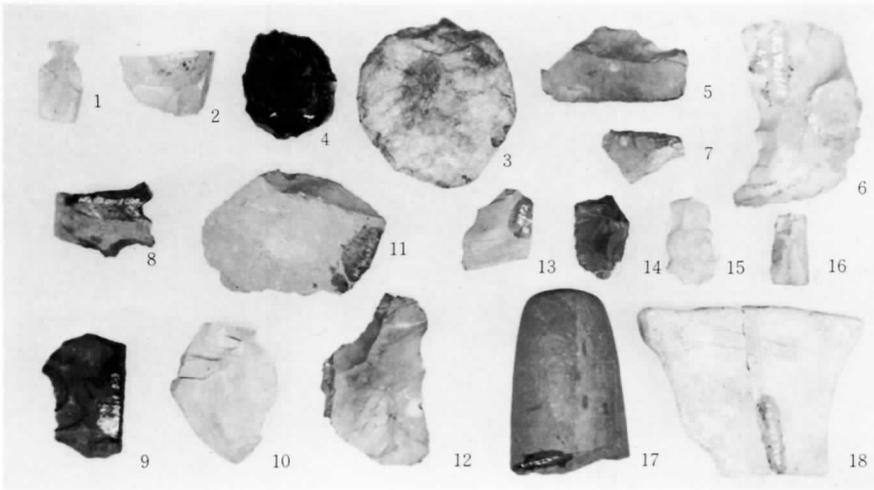
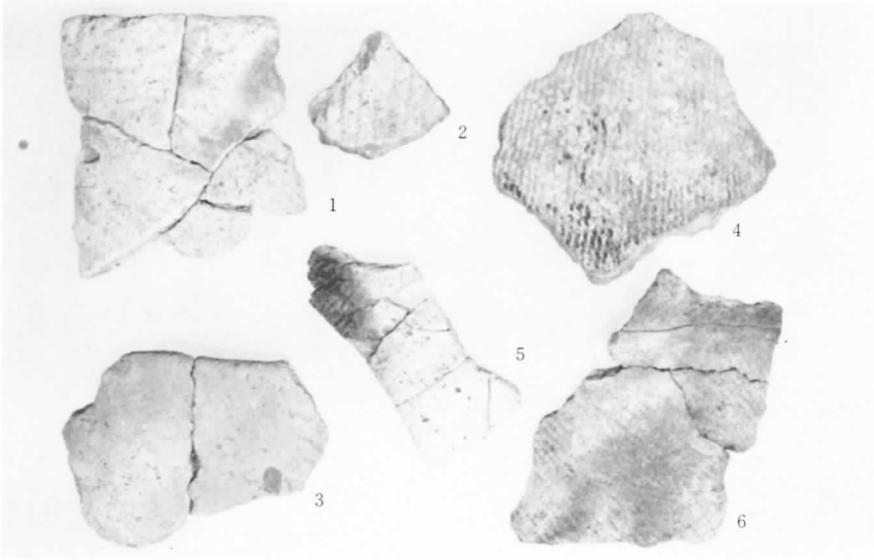


1

30

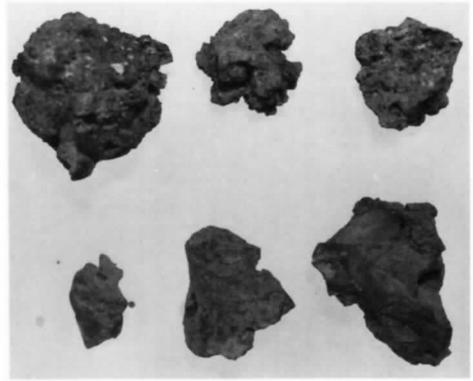
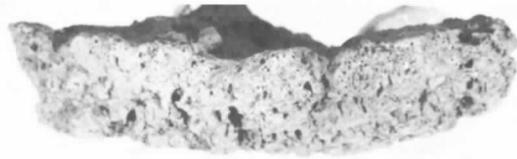
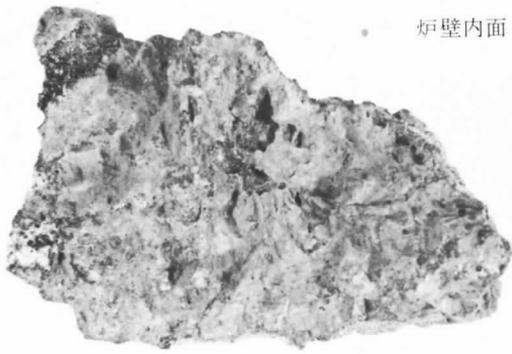
24.26.27.28.29.30 大甕 約 $\frac{1}{6}$ 、約 $\frac{1}{4}$  1. 2 砥石 約 $\frac{1}{2}$ 、約 $\frac{1}{3}$

図版10 遺構以外の出土遺物(3)

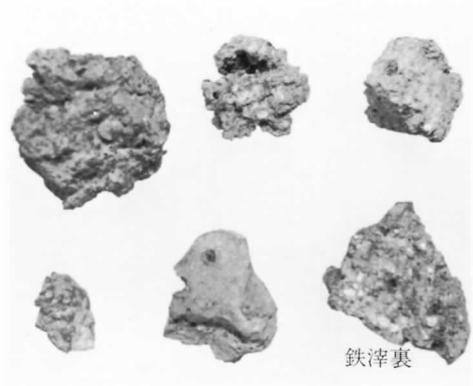


鉄滓の電子顕微鏡写真 (50倍)

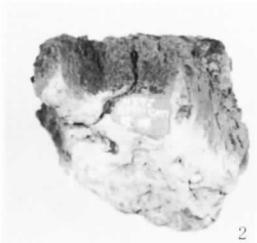
図版II 縄文土器、石器、鉄滓の電子顕微鏡写真



鉄滓表



鉄滓裏



図版12 炉壁・鉄滓・鞆羽口

しも なり さわ  
下 成 沢 遺 跡

遺 跡 名：下成沢(略号S N S 72)

遺跡所在地：北上市相去町字中成沢44ほか

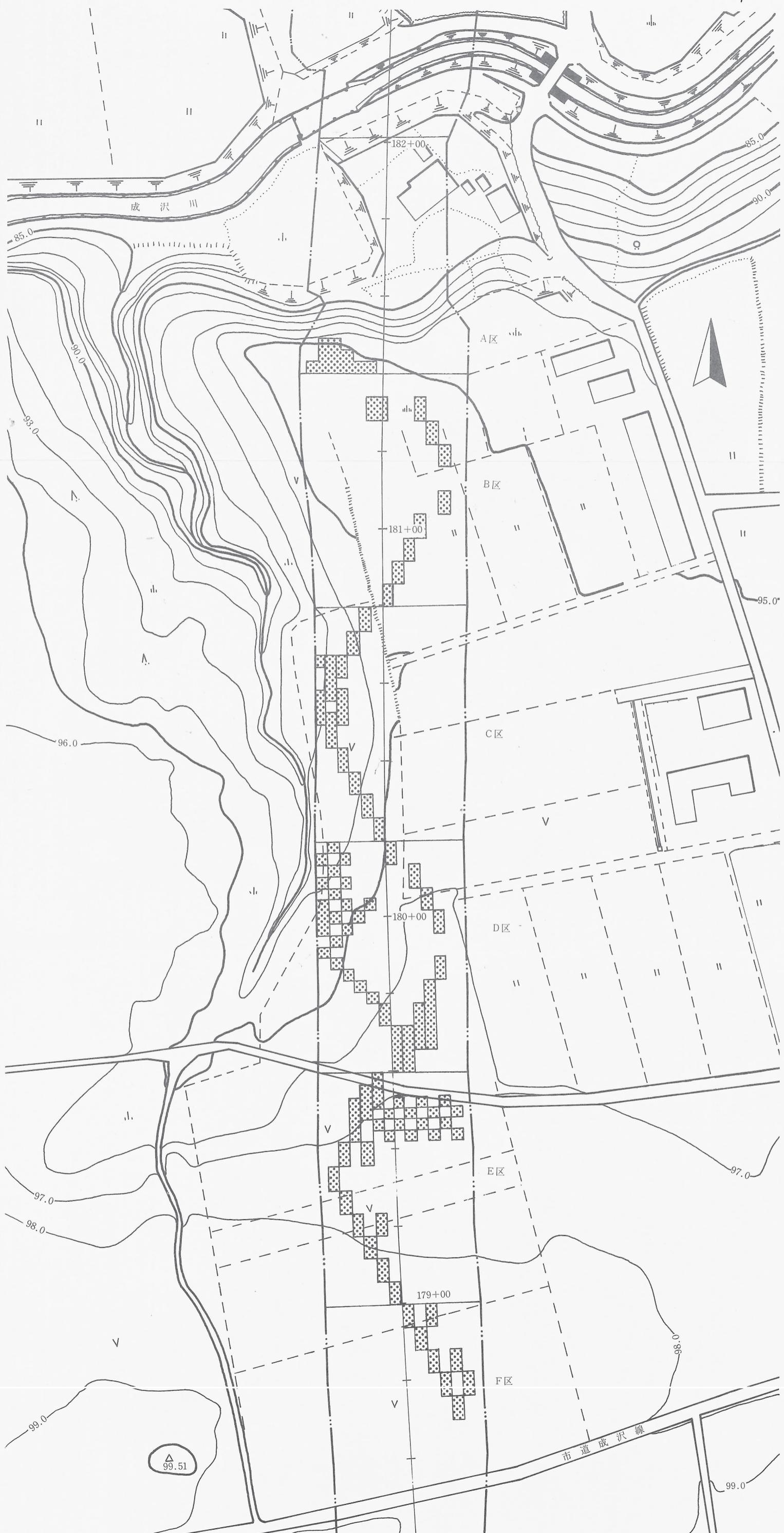
調査期間：昭和47年5月8日～昭和47年6月10日

調査対象面積：3,500㎡

発掘調査面積：1,200㎡

図 版 目 次

第1図	下成沢遺跡全体図	321	第17図	接合資料(3)	340
第2図	基本層序	324	第18図	接合資料(4)の分布図	341
第3図	As18 溝跡	326	第19図	接合資料(5)	342
第4図	As18 溝跡出土遺物	327	第20図	接合資料(4)	343
第5図	As15 焼石 pit	327	第21図	接合資料(5～8)の分布図	345
第6図	As15 焼石 pit 出土遺物	327	第22図	接合資料(6、7、8)	346
第7図	台石	328	第23図	接合資料(10、13、14、16)の分布図	347
第8図	旧石器遺物分布図	329	第24図	接合資料(9～11)	348
第9図	磨製石器、石核	331	第25図	接合資料(12～16)	349
第10図	石刃様剥片、細石刃様剥片	332	第26図	遺構以外の出土遺物(1)	351
第11図	剥片(1)	334	第27図	遺構以外の出土遺物(2)	352
第12図	剥片(2)	335	第28図	遺構以外の出土遺物(3)	353
第13図	接合資料(1)の分布図	336	第29図	遺構以外の出土遺物(4)	354
第14図	接合資料(1)	337	第30図	遺構以外の出土遺物(5)	355
第15図	接合資料(2)	339	第31図	遺構以外の出土遺物(6)	356
第16図	接合資料(2、3)の分布図	340	第32図	遺構以外の出土遺物(7)	357



第1図 下成沢遺跡全体図 1/1,000

## I 位置と立地

下成沢遺跡は岩手県北上市相去町字中成沢44、45—7他にあり、東北本線北上駅の南西約5.5kmに所在する。成沢遺跡とは成沢川をはさんだ南に位置する。調査地は北が成沢川、南が市道成沢線で区画された東西約40m、南北約400mである。内部はほぼ平坦であるが、南及び北東に緩やかに傾斜している。西（路線外）には成沢川の支谷が大きく入りこんでいる。現状は水田及び畑地で、調査地点の標高は95.6～98.5mである。成沢川との比高は約10mである。

当遺跡は成沢遺跡同様に村崎野段丘の北部中ごろにあたり、起伏の少ない台地上に立地している。周囲には成沢川の北側に成沢遺跡、その西方に三十人町遺跡があり、沢を隔てた南には大谷地、上大谷地遺跡、その西方には高前田遺跡、東方には相去遺跡、葛西壇遺跡等が存在し、古代の一大集落を構成していたものと見られる。<sup>注(1)</sup>

なお、本遺跡は

- 昭和42年12月17日 大谷地遺跡埋蔵文化財包蔵地調査カード 11番（北部）、13番（南部）
- 〃 43年3月 北上市史所収 北上市遺跡分布図 中成沢IV・V(137・138)遺跡
- 〃 49年3月 岩手県埋蔵文化財分布地図 下成沢遺跡（地点不明）
- 〃 56年 北上市改正分布地図（仮称） 成沢遺跡（107）
- 〃 56年3月 改正 岩手県遺跡基本図 下成沢II遺跡（75、0182）

に該当するものと見られ、統一された遺跡名とはなっていない。これは東北縦貫自動車道関連遺跡の調査の際に中成沢に所在する下成沢遺跡と命名したことに起因するものと推測される。本来は小字名をもって中成沢遺跡と呼ぶべきものと思われるが、ここでは東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書として報告するものであり、従来の呼称をそのまま踏襲し下成沢遺跡としておく。

注(1) 『北上市史I』（昭和43）所収 北上市遺跡分布地図

『相去遺跡現地説明会資料』（昭和48）所収 「相去遺跡」及び周辺遺跡位置図

## II 調査経過及び方法

調査範囲は当初東西約40m、南北100mの3500m<sup>2</sup>であったが、その後南北約400mに拡張している。地区割は道路中心杭 STA179+00、STA181+00を基点とし、STA182+00以南の60mをA区とし、順次南にB、C、D、E、F、G、H区とした。調査は3mごとのグリット方式を採用し、適宜2グリットを1単位とする粗掘りを行い、遺構検出をもって拡張することにした。昭和47年5月8日から6月10日にかけて実施し、都合189グリットを調査した。

なお、調査の一段落した7月8日には現地において説明会を開催している。

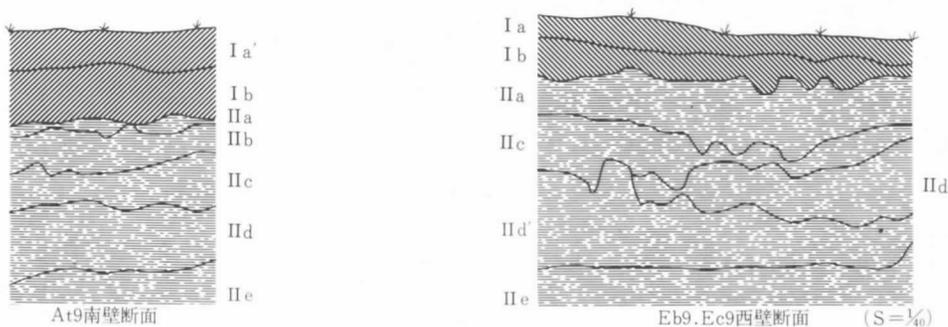
以上のようにして進めた結果、A区で時期不明の溝及び焼石 pit を検出し、E区において旧石器の工房跡を確認した。後者についてはII層以下の石核、剥片等をグリットごとに番号を付し、地点及び高さを調査日ごとに記録した。なお、チップ（碎片）については地点とレベルの記録にとどめ、取り上げは一括としている。

調査地内の基本層序は次のとおりである。<sup>(註(1))</sup>

**I a層**：黒褐色土。褐色腐植土。草根を多く含む腐植質土を主体とする表土及び耕作土である。但し、A区のI a'層は下層のI b層が他の2倍の層厚を有しており、盛土の可能性をもつ。なお、I a'層の下位には酸化土、グライ化土が存在し、水田であったことを示しており、あり得ないことではない。

**I b層**：褐色土。黒褐色土。草根を若干含む粘土質の層である。調査地全体を一様に覆っている。但し、前述の如くA区においてはやや厚くなる傾向があつて、当該層序に旧表土が加わっている可能性がある。

**II a層**：黄褐色火山灰土。いわゆる汚れ火山灰と称されるもので、現地説明会資料（以下解説資料）では「粘土化している部層」としている。層厚は地点によって若干異なりE区では20～30



- I a' 褐色腐植土 耕作土  
さらさらして粘性がない
- I b 黒褐色土 さらさらしている
- II a 汚れ黄褐色火山灰土 粘性あり
- II b 黄色火山灰土  
安山岩質の礫を少量含む
- II c 黄色の強い火山灰土  
安山岩質の礫を少量含む。粘性がある
- II d 赤味の強い火山灰土  
下部に少量のバミスを含む  
安山岩質の礫を混入する 粘性が少ない
- II e 村崎野バミス

- I a 黒褐色土 耕作土 草根を多く含む さらさらしている
- I b 褐色土 礫を微かに含む
- II a 汚れた黄色火山灰土 微量のバミス、礫を含む  
粘性はあまりなく、ボロボロ崩れやすい
- II c 白味の強い火山灰土 微量の木炭、浮き上がったバミスを含む  
粘り気がある
- II d 極めて赤味の強い火山灰土 浮き上がったと思われるバミスが見られる。安山岩質の礫を混入する。スコリアが多い、粘り気は強い
- II d' 白味の鮮やかな火山灰土 浮き上がったバミス少量 安山岩質の礫が普遍的に見られる スコリアが多い、粘り気は強い
- II e 村崎野バミス

第2図 基本層序

cmで、A区では10cm内と薄くなっている。斜面下位ほど薄くなっているもののようである。この層は腐植が浸透したものと見られ、漸移層とも考えられる。クラックが入っている。

II b層：黄色火山灰土。現説資料では「赤味のつよくやや粘土化した部層」と説明されているもので、安山岩質の礫を少量含んでいる。A及びD区で確認されているが、旧石器工房跡の発見されたE区では認められない<sup>注(2)</sup>。台地縁辺部にのみ見られるものの如くである。

II c層：灰白色火山灰土。黄色火山灰土。粘性をもつ火山灰土で遺跡全体を一様の厚さで覆っている。E区断面図では「黒いつぶ状の植生痕と思われるものが顕著である。」と注記され、現説資料の「植生痕にとみ、白褐色～灰褐色を呈する部層」としているものにあたる。また、同断面図では「旧石器はこの層位に多く、primaryな包含層は本層である<sup>注(3)</sup>」と付記している。なお、同資料ではこの層の存在から「火山灰の降下が小休止し、植生の回復した時期の存在した可能性」を指摘している。

II d層：赤味の強い火山灰土。E区では部分的に欠落しているもので、地点によって粘土化の度合いが異なる。A区では「粘性の少ない火山灰」、E区では「粘り気は強く」と説明され、現説資料では「粘土化の軽微な部層」としているものである。なおE区では「植生痕と思われるものは相変らず多い」としている。

II d'層：白味の鮮かな火山灰土。E区でのみ認められるもので、II d層とは上下関係あるいは平行関係にある。同一の層として捉えられるものかもしれない。「植生痕と思われるものも極めて多い。粘り気は強い」と注記されている。層厚にバラツキが見られる。

II e層：村崎野パミス、調査地全域で認められる。

注(1) 残された土層断面図はA区、D区、E区の15枚である。しかし注記されているものは各区ごとの3例である。それらの層序は必ずしも一致するものばかりではなく、確定できない部分も少なくなかった。そこで現説資料を参考としながら、合わない部分はつとめて注記のまま併記している。なお、現説資料に使用されているDT53グリット南壁断面図は遺存せず比較検討できなかったことを記しておく。

注(2) E c 12グリット南壁断面図ではIII b層 (II b層相当) が記されている。しかし、その延長にあたるE c 6、E c 9グリット南壁断面図及び隣接部のE b 9、E c 9グリット西壁断面図では、II b層が確認されていない。E c 9グリット西壁断面図ではII b層の下にII e層が確認されており、E c 12グリット南壁断面図のIII d層が注記等からそれに該当するものと考えられる。同様に両者を対比すると、III c層がII d層、III b層がII c層相当となり、II b層が欠落していることになる。但し、これはすべて注記されたものではなく、注意を要する(I、II、III d、III e層のみ注記)。こうなると今となっては確認すべくもないが、D区におけるII b層についても疑問が残る。混同していると考えられるが、これらの層序は

統一後の層序番号を用いており、理解に苦しむ。あるいはII a層の中に含まれているのであろうか。

注(3) 断面図注記では旧石器はこの層(II c層)から出土している如くに記されているが、断面図と遺物出土地点のレベルを検討してみると必ずしもII c層から発見されているものばかりではないようである。

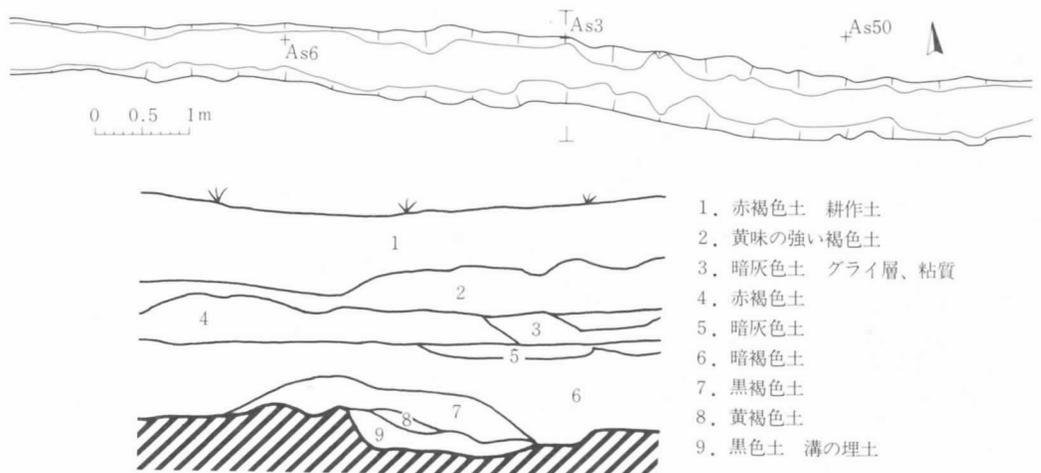
### III 調査結果

今回の調査で検出された遺構は時期不明の溝と縄文時代早期末～前期と考えられる焼石 Pit、それに旧石器時代の石器工房跡である。発見された遺物は旧石器時代の石核、剥片等を中心に縄文土器、石器と若干の土師器、須恵器である。

#### 1 As18 溝跡 (第3図 図版1)

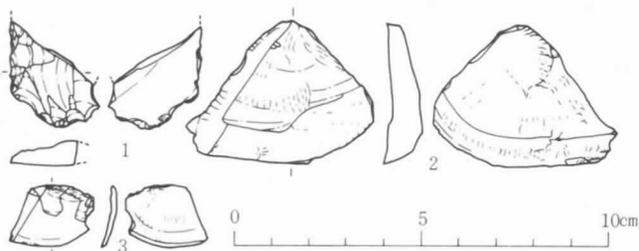
調査地の北端にあたる成沢川に面した斜面上部に位置する。西端は調査地外に続き、東端は豚舎建設のため破壊されていて確認できないが、おそらくは路線外に続くと思われる。溝は基本層序第III層上面において確認されたもので、幅50～80cm、深さが検出面から10～15cmである。埋土は黒色腐植土で縄文土器、石器等が採集されている。しかし、いずれも埋土から発見されたものであり年代決定資料とはならないであろう。調査地内ではほとんど水平に近いが僅か東方に傾斜している。方向はE10°Sでほぼ直線状をなし、調査前の水田方向E12°Nとは大きく隔っている。

縄文土器は現存していないので不明であるが、現説資料では「縄文文化中期初頭」としている。石器は搔器1、剥片2、碎片3である。1は左側縁から先端部にかけて刃部加工が観察され、基部を破損した搔器と見られる。2、3は二枚貝状を呈した剥片で、後者は極めて小さい



第3図 As18溝跡

ものである。他はいずれも石器製作に伴って産出した碎片である。なお、当溝周辺からは比較的多量に繊維を含む土器片、石核、剥片、碎片等が採集されている。

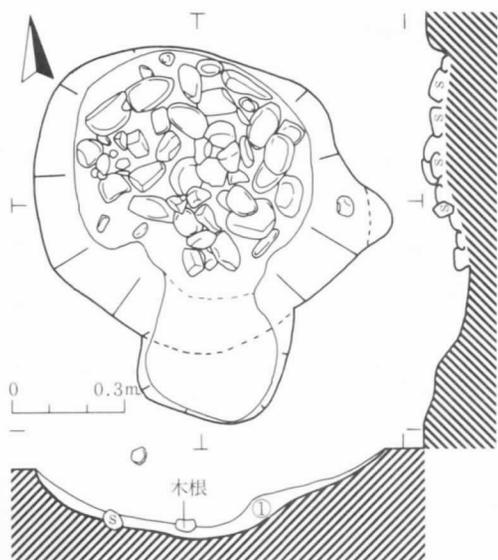


第4図 As18溝跡出土遺物

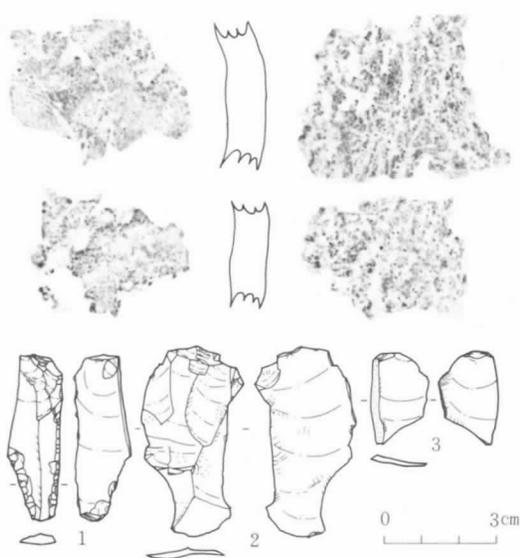
## 2 As15 焼石 pit (第5図 図版1)

調査地の最北端、成沢川に面した斜面上位に位置する。平面形は直径約1mの土壌の南に径0.4mの小土壌が接合しただるま形をなす。深さは35cmほどの皿状で北寄りに拳大～小児頭大の玉石が30個ほど入っていた。南の接合部の深さは5cmほどで極めて浅くなっている。玉石はすべて火熱を受けており中には亀裂の入っているものも認められた。中央部がやや高くなっており積み重ねた状況を示す。堆積土は黒褐色土で下位に木炭粒、焼土粒を含む。現説資料によると、土壌内外には焼土、灰等は認められなく焼石を利用した調理用施設ではないかと考えられている。

なお、玉石に混入して、土器片14点、石器、剥片等が10点発見されており、縄文時代に属するものと推測される。土器片はいずれも摩滅している細片である。中には繊維を含むものがあり、早期末～前期初頭に位置付けられると見られる。繊維土器は幾分肉厚で、色調は黄色～黄褐色を呈し、胎土及び内面が赤褐色～青褐色をなす。施文は斜縄文と考えられるがはっきりしない。他の土器片は赤褐色を呈する脆弱なものである。



① 黒褐色土 下部に木炭粒 焼土粒 ローム粒を含む  
第5図 As15焼石pit



第6図 As15焼石pit出土遺物

石器は搔器1、剥片1、碎片8である。1は縦長剥片の両側縁に調整剥離を施したもので搔器と考えられる。素材は中央部に稜線をもつ三角形をなし、左側縁は基部から中ごろにかけて折損している。先端部は欠損後背面から剥離加工されている。2は表面に調整面を多く残す極めて薄い剥片である。調整剥離剥片と考えられる。3は小型の縦長剥片で連続的に生産されたものと見られる。形状が米ヶ森型台形石器に類似している。他の7点はいずれも細片で調整の際に派生したものと考えられるものである。

### 3 旧石器工房跡 (第8図)

当遺構は調査地の中央のやや南にあり、Eb6、9、Ec6、9の4グリットに及んでいる。それはちょうど成沢川に注ぐ沢の谷頭の近くにあたる。遺構は東西約7.0m、南北約5.5mの円形に遺物が分布するもので、遺物のあり方は周辺部が粗で、その北東よりの直径約1.5mの範囲が密集地である。レベル的には碎片等によると第8図の如く密集地を中心とする播鉢状を呈し、その中心部が40cmと若干厚くなっている。あたかも凹地に集中した遺物の如くである。これらの遺物は現説資料によると、IIa~IIc層から発見されたとしており、その中でも70%が後者から発見されているという。但し接合資料等によると第8図の断面のように必ずしもIIc層とは限らないものようである。

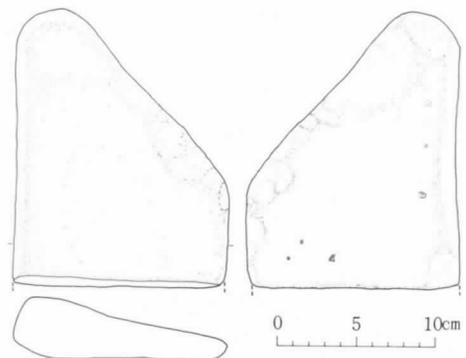
発見された遺物は台石、ハンマー・ストーン、磨製石器、石核、それに石刃様剥片、細石刃様剥片、表皮除去剥片、縦型剥片、横型剥片等の剥片等で、総数321点である。また数点の自然石が混入している。これらのうちほぼ半数の181点は碎片である。

#### 台石 (第7図 図版8)

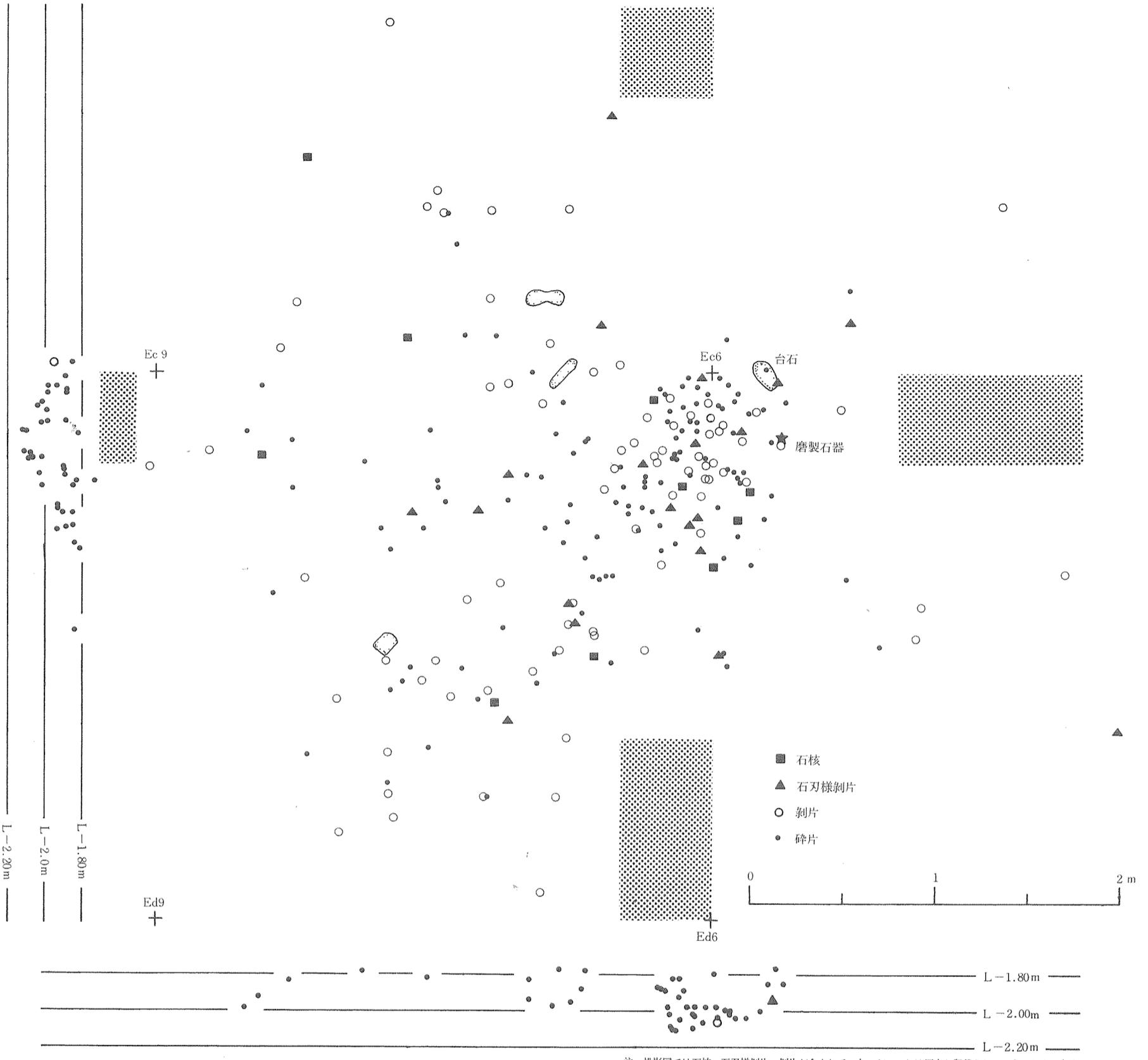
現存するものは1点であるが、「現説資料」「地団研見学旅行2」によると3点出土したことになる。第7図の台石は密集地の北東部にあり、レベル的にはほぼ中央部に位置している。扁平な緑色粗粒凝灰岩の川原石であるが、中ほどで2分している。中央部が幾分凹んでおり、滑らかになっている。台石あるいは石皿として使用されたものであろう。

#### ハンマー・ストーン

ハンマー・ストーンは1点も現存していないが、「北上市の原始、古代の遺跡」の写真によると2点遺存していたようである。詳細については不明であるが、棒状を呈するものの如くである。



第7図 台石

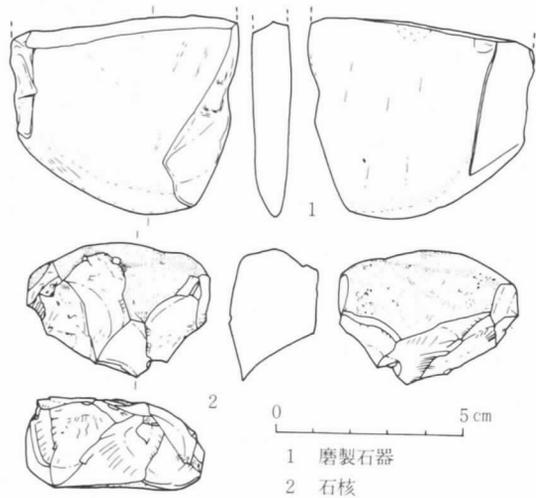


注 投影図では石核、石刃様剥片、剥片が含まれていないが、これは標高が記載されていないためである。  
Ec9グリットの1~17は平板測量のため地点不明で除外している。

第8図 旧石器遺物分布図

磨製石器 (第9図1 図版2)

これは「地団研見学旅行2」では局部磨製石器として説明されているものである。密集地の東端、レベル的には下位から発見されている。基部及び両側縁が折損しているが、先端部は両面から研磨され蛤刃状をなす。石材は淡緑色細粒凝灰岩で非常にやわらかく、刃部はそれほど鋭利なものではない。なお、同一母岩から剥離されたと見られる剥片、碎片は17点で最大2.3m離れている。しかしほとんどのものは密集部分に含まれている。



第9図 磨製石器・石核

石核 (第9図2 図版2)

石核は11点で、10点が接合資料である。このうち接合資料9-3、8-3、6の3点は小型でありあるいは剥片に含まれるものかもしれない。5点は密集地に位置するが、他は若干離れており散在している。これらはいずれも一端に大きな自然面を残すもので、ほとんどのものは上部に一端を除去したのみの平坦打面をもつ。但し、接合資料2-8、3-4、5の3点は節理面を打面とするものである。接合資料7-4は2面に分割面をもつもので、剥片剥離加工が行われていない。

打面はいずれも凹状をなすネガティブ面で、打面調整は認められない。また剥片剥離作業は一方向からのみ行われたもので転移しているものはない。得られた剥片の大多数のものは縦長剥片のようである。これらの石核は接合資料7-4を除いて打面が極端に狭くなっており残核と言えるものであろう。なお、接合資料1-18は階段状剥離となっており、石刃核と見られる。

以上のものに対し2は表裏両面から剥離されたもので、あたかも小さなチョッピング・ツール様を呈し、若干形態を異にする。打面が作業面を上下に転移するもので、得られた剥片は縦長剥片と見られるが、それほど長いものではなかったようである。この資料は素材の自然面を3.5cm残すのみであり、剥離加工がかなり進行したと見られ、やはり残核と見られる。

石材は硬質泥岩5、流紋岩質細粒凝灰岩(珪化している)5、緑色極細粒凝灰岩(珪化している)1である。

なお、「現説資料」によると「石核はプリズム様を呈するものが多い様である」と説明されていることを付記しておく。

石刃様剥片 (第10図1~5 図版3)

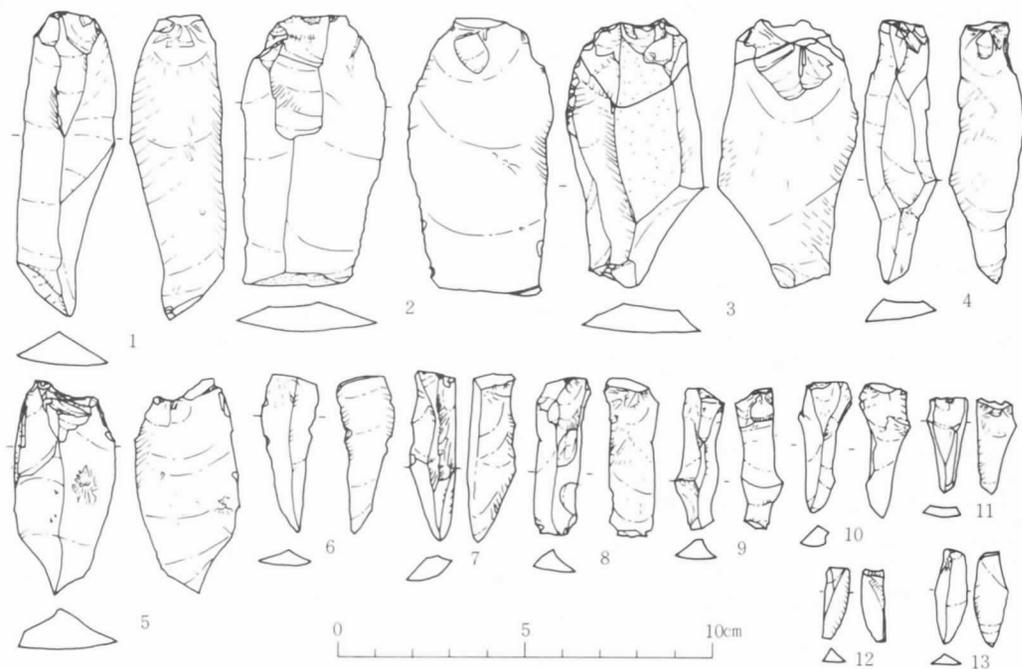
縦長で両側縁がほぼ平行するものを石刃様剥片とした。15点の出土で接合するものを除くと12点である。このうち接合資料は7点である。1～4の4点は長さが7.0～8.2cmで、1、4の2例がいかに細身で石刃らしい。他の2例は幾分幅広となっている。5、接合資料1-8、(9、10)(12、13)の4例は4.3～5.8cmで若干小さくなっている。幅は2.5cm前後でほぼ一定である。接合資料1-16、17、15-1、16-1の4例は2.8～3.7cmの小型である。しかし、幅は2.0cm前後でそれほど細くはなっていない。総じて形の整った典型的な石刃と言えるものは少ない。

断面形は三角形あるいは台形を基本とし、接合資料1-16、15-1、16-1の3例は極めて薄い台形をなす。剥離技法はすべて主要剥離面と同方向から剥離されている。打撃面は調整の施されない平坦打面でネガティブ面である。これらのうち2、接合資料1-8、(9、10)の3点が先端部、5の1点が側縁に表皮が認められる。なお、3の左側縁上部には小剥離痕が認められ、あるいはナイフ型石器に含まれるものかもしれない。石材は粘板岩1、硬質泥岩8、硬質凝灰岩3、泥質石質凝灰岩1、泥質細粒凝灰岩2である。

#### 細石刃様剥片 (第10図6～13 図版3)

縦長で両側縁が平行するもののうち長さが5cm以内のものを細石刃様剥片とした。しかし細石刃核と認められるものはなく断定できない。8点の出土で6、12が基部を欠き、8、9、12が先端部を欠失している。6は若干大きく石刃の先端部なのかもしれない。

打撃面は平坦打面で9、10、13が小さく、13は自然面となっている。断面形は三角形か台形



第10図 石刃様剥片、細石刃様剥片

で前者が多く、先端部が尖っている。剥離技法は90度転移した剥離痕をもつ9を除いて主要剥離面と同一方向から剥離されている。石材は粘板岩1、硬質泥岩4、琉紋岩質細粒凝灰岩1、泥質細粒凝灰岩2である。

#### 剥片 (第11、12図 図版4、5)

発見された剥片は104点で、44点が接合資料である。1～10、接合資料1-1、2、3、4、5、2-7、4-1、2、6-1、8-2、11-2の21点は1面に自然面を大きく残すもので、表皮除去剥片と見られる。自然面を打面とする4、接合資料1-1、2の3点以外は平坦打面を打撃面とし、3、8、10、接合資料4-1、2は打面を欠失している。このうち接合資料1-1、2、4-1、2は打面形成剥片であることが確認されている。これ以外にも打面形成剥片が含まれていると考えられるが特定できない。1、4、5、6、7、12は先行する剥離痕を残しており目的剥片とも考えられる。これらは表皮を多く残しており、接合資料1-5、6の如く目的剥片剥離でも比較的早い段階に剥離されたものと見られる。

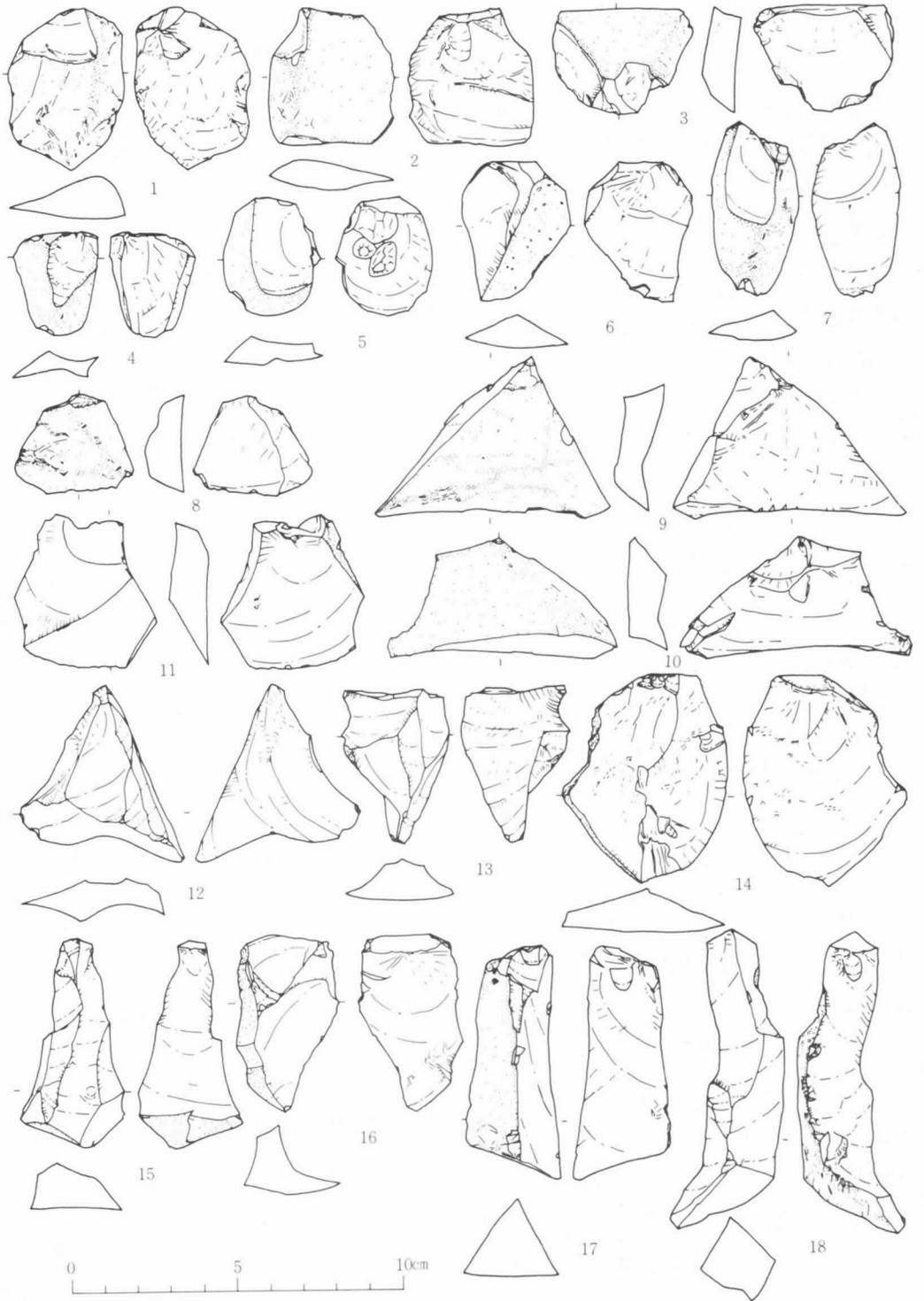
11～18、接合資料1-6、2-1、4-3、4、6、7、9、5-1、8-1、9-1、2、10-2、11-1の21点が比較的大型の剥片である。ほとんどのものが一部に自然面を残している(86.4%)。縦長剥片が多いが、接合資料8-1、9-1、10-2は横長剥片である。15～18、接合資料2-1、4-3、11-1は比較的厚手の縦長剥片で、11、14が幾分幅広の縦長剥片である。11、14、接合資料1-6、4-6、7、5-1、8-1、9-2は形も整っており目的剥片と考えられ、12、13、15、18は1面に剥離痕をもつもので調整剥片と見られる。なお、接合資料4-9は作業面を打面とする剥離痕をもつもので、石核として剥片採取が行われている。

19～60、接合資料1-11、15、2-2～5、3-2、5-2、7-2、8-5～7、10-1、12-2、13-1、2、14-1、2、16-2の61点が小型の剥片である。ほとんどが縦長剥片で(91.8%)、38、接合資料6-5～7、14-1の5点が横長剥片である。表皮を残すものは14点で22.95%である。43、47は一面に自然面を残すもので表皮除去剥片とも見られ、50～54は石刃様剥片の切断資料とも考えられるものである。50～53は先端部を欠失し、54は基部を欠いている。55～60は形が整わないものである。

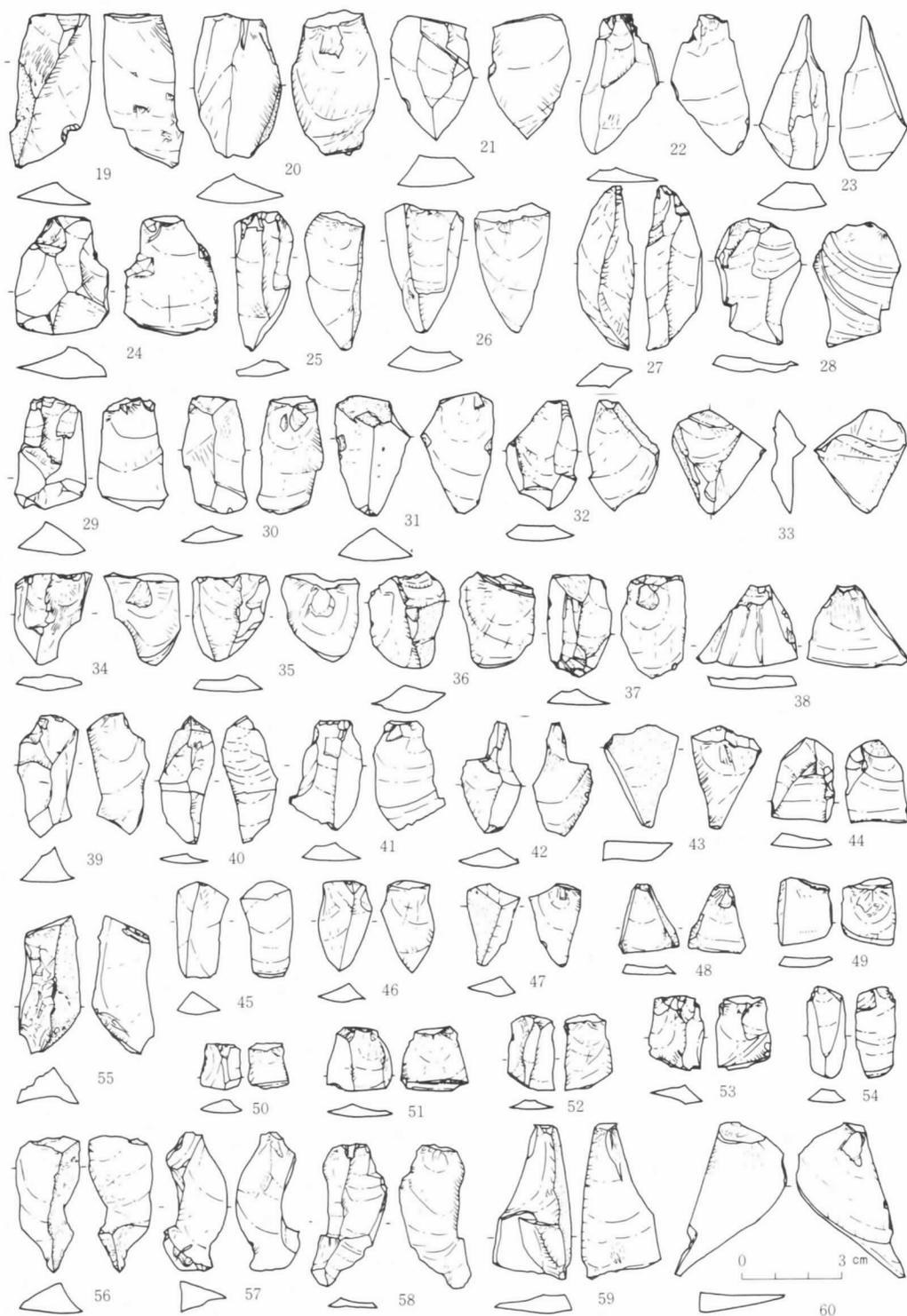
なお「現説資料」によると「形状の整った剥片が二等辺三角形をなすものがおおい」と説明されている。

#### 碎片

発見された碎片は181点で、接合資料は11点である。接合資料1-7、14、2-6、3-1、3、4-5、8の如く目的剥片採取に失敗したと見られるものも含まれているが、大多数のものは調整剥片等の細片である。



第11図 剥片(1)



第12図 剥片 (2)

接合資料1 (第13、  
14図 図版6、7)

石核1点、剥片15点、  
破片2点からなる。接  
合すると長さ約10cm、  
幅約7cm、厚さ約5cm  
の原石が復原できる。  
礫面は底面と上部に平  
坦部をもち、他は丸味  
を有している。

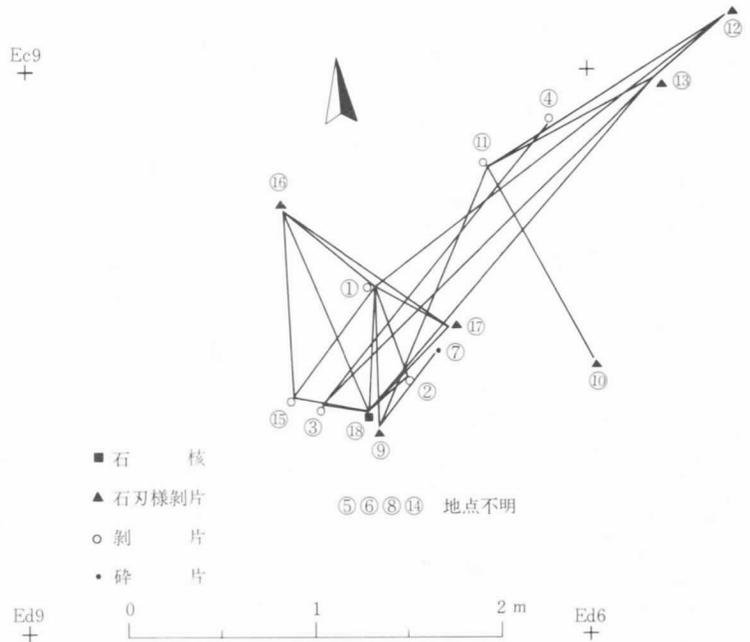
石核は3面が自然面  
で、上部に打面形成剥  
片を除去した平坦打面  
をもつ。剥離面は階段  
状をなし、打面が小さ  
くなっており、石刃核  
の残核と考えられる。

剥片は1、2が打面形成剥片で、自然面を多く残す。前者は円形に近いもので、礫面をそのまま打面としている。後者は縦長剥片で、平坦打面を有す。剥離順序は2-1である。3、4も自然面を多く残すもので、節理面で分割している。一部に調整痕をもつ。5は1面に自然面を残すもので、先行する表皮除去剥片と見られる。

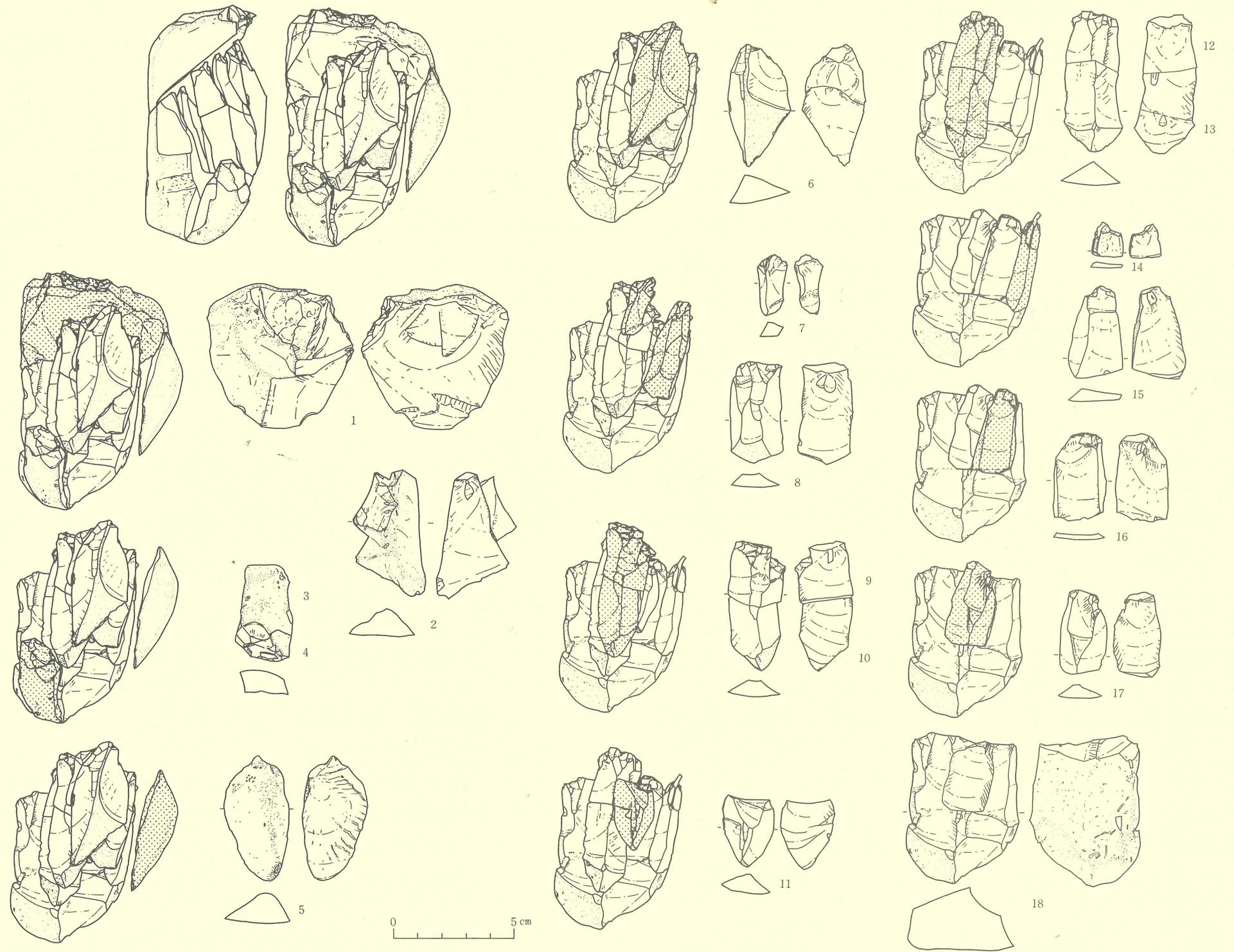
8~10、12、13、16、17はいずれも両側縁がほぼ平行する縦長剥片で石刃様を呈す。目的剥片と考えられる。10、13を除いて横断面形が台形をなす。10、13は三角形で先端部が尖り、節理面で2分している。16、17は先端部が節理面となっており、6、8、10、11の4点が下端に自然面を残している。

破片14は微少剥片で、調整とは見られなく目的剥片採取に失敗したものと推測される。

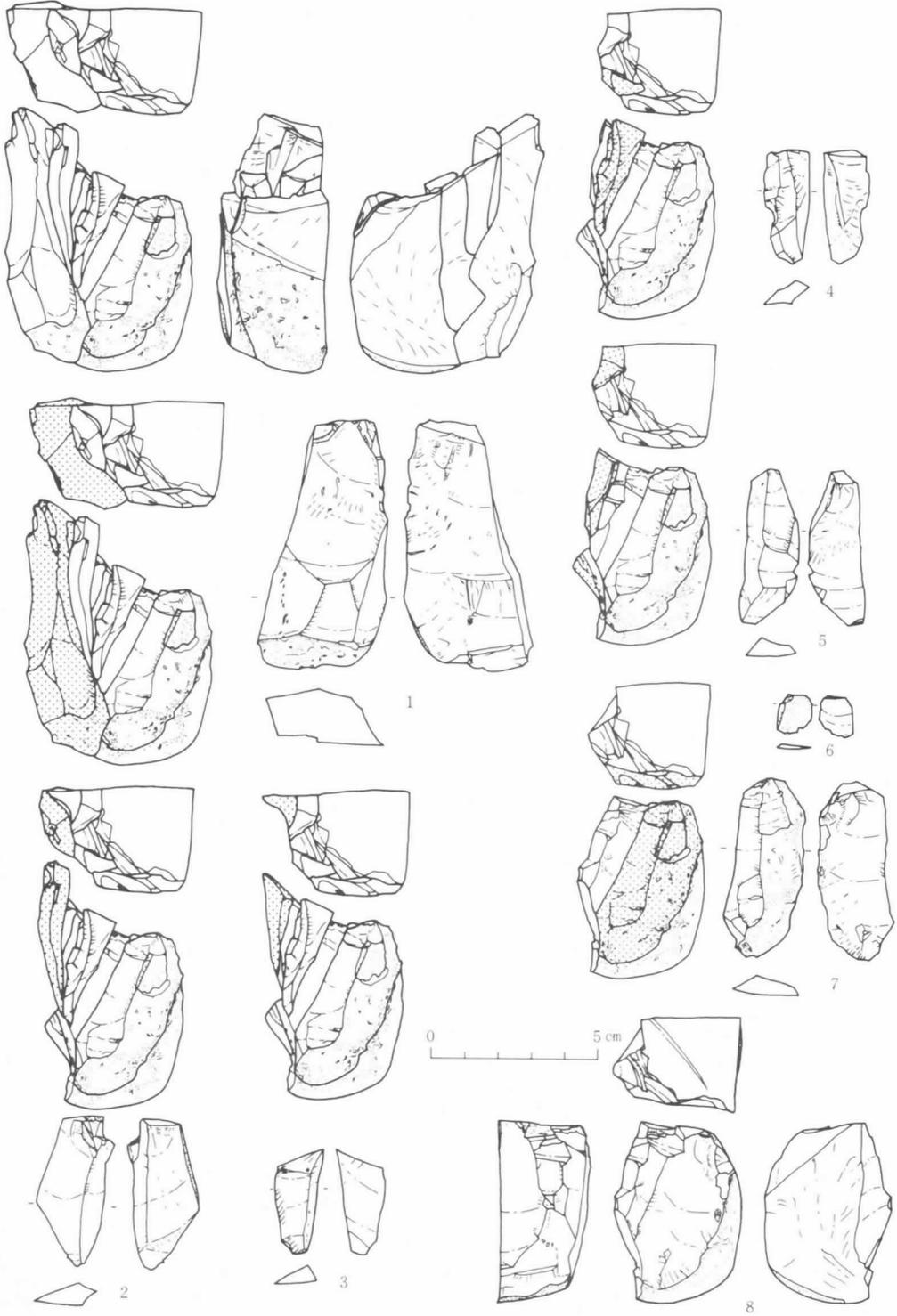
剥離技法は打面形成のための剥離と、目的剥片作業の剥離とに分けられる。前者はあらかじめ設定された打面あるいは礫面に打撃を加えて剥離するもので、得られた打面はネガティブな面をなす。後者は一端を除去したのみの単設打面に一定方向から連続的に加撃して剥片を採取するものである。この時打面調整は一切行われず、また目的剥片においても調整は認められない。残された剥片及び残核を観察すると、目的剥片は縦長の石刃様剥片であったと思われる。ただし、その目的剥片はそれほど大型剥片を根ざしたものではなかったもののようである。



第13図 接合資料(1)の分布図



第14図 接合資料(1)

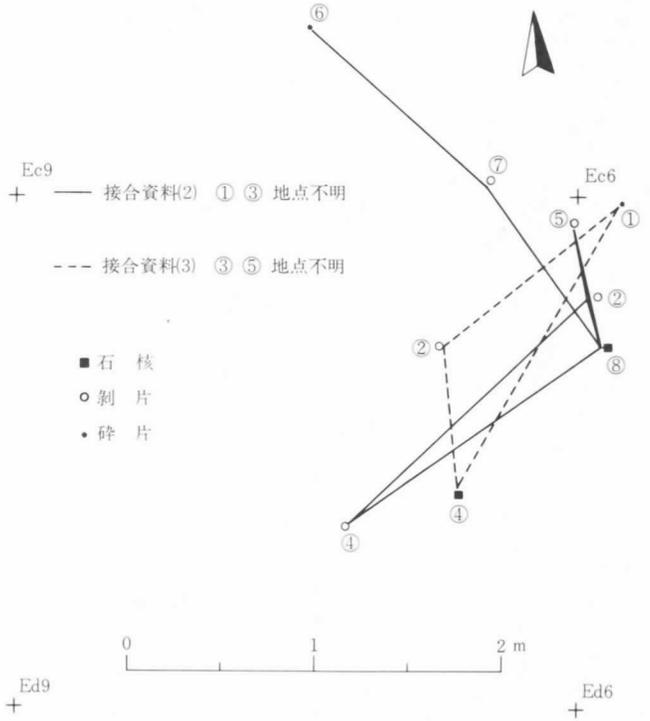


第15図 接合資料(2)

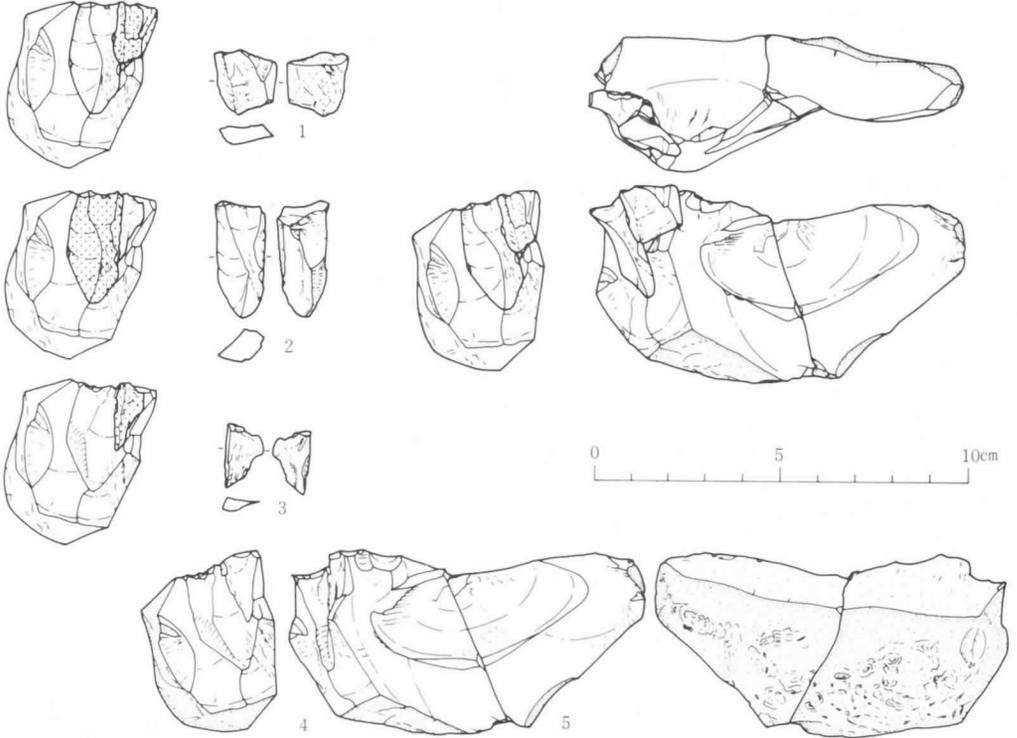
接合資料2 (第15,16図 図版8)

石核1点、剥片6点、碎片1点からなる。接合すると長さ7.9cm、幅5.6cm、厚さ3.3cmの直方体をなし、原石のほぼ1/4にあたると見られる。2面に節理面をもち、ネガティブな面を打面としている。石核は一端に表皮を残すもので、他の面は大きな節理面で構成される。小型の直方体に近いもので、残核と見られる。剥片剥離作業面は左側縁のみである。

剥片は1を除いて、先端部が尖りぎみの縦長剥片で小型のものが多。6、7は表皮除去剥



第16図 接合資料(2,3)の分布図



第17図 接合資料(3)

片と見られる。1は先端部が幅広となるやや大型のもので、下半に2本の稜線をもつ。1が下端部、6、7が一面のほぼ大半に自然面を残す。いずれも打面は単設打面で調整は行われていない。碎片は7の表皮部分の細片である。

剥離技法は接合資料1と同様に、一端を除去したのみの単設打面で、一定方向から順次打撃点を移動しながら剥片採取している。

接合資料3 (第16、17図)

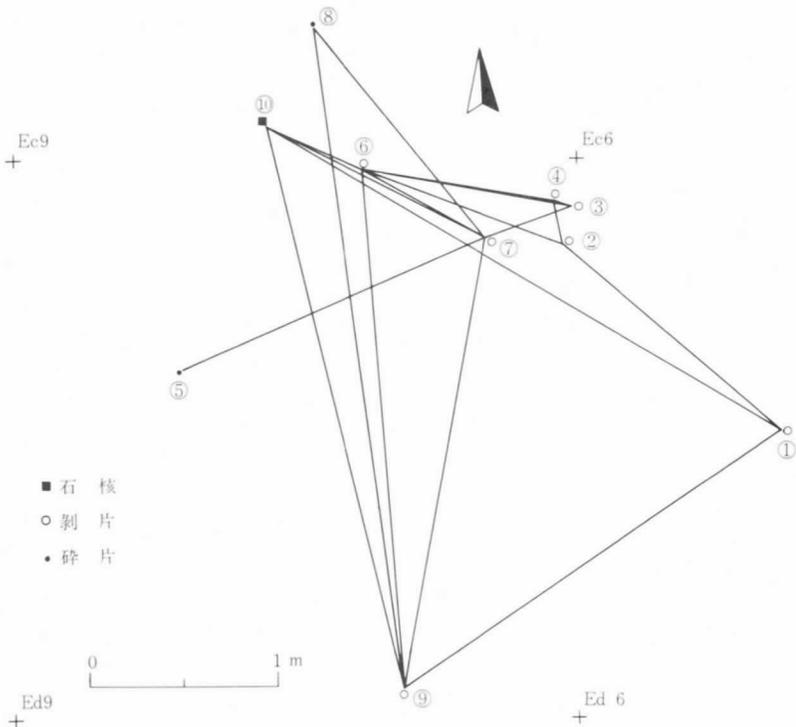
石材及び節理面から接合資料2と同一母岩と考えられる。石核2点、剥片1点、碎片2点からなるもので、石核は中央部から折損している。両者とも1面に自然面を大きく残すもので節理面を打面としている。剥離作業は、横長剥片を得た後、一端から縦長剥片が採取されているようである。しかし、目的剥片は石核の上下が限定されており、4.5cmを超えるものではない。作業は石核の折損によるものか、中止している。碎片は調整とは見られなく目的剥片採取に失敗したもののようにあり、特に定形化されていない。

接合資料4 (第18、19図 図版9)

ほぼ母岩の形態が把握できるもので、幅が約8.0cm、長さが6.5cm以上、厚さが約4.0cmの立方体をなす。扁平な川石と見られる。石核1点、剥片7点、碎片2点からなる。石核は打撃面と作業面以外は自然面で、剥片採取後の残核と考えられる。

剥片は1、2が打面形成剥片であるが、分割後、剥片採取がはかられている(2)。両者とも表皮を大きく残すもので、本来は四角錐状をなしていたと思われる。作業面の観察によると採取された剥片には大小があり、形も一定していない。

3、6、7は比較的大型の縦長剥



第18図 接合資料(4)の分布図

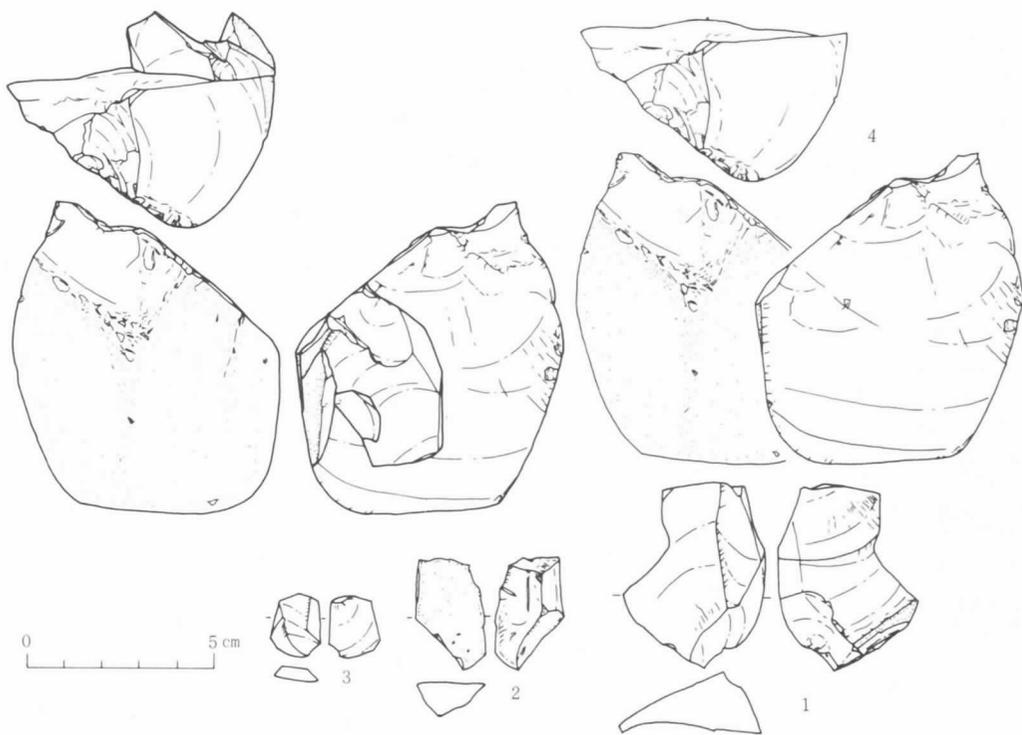
片で先端に自然面を残し、平坦となっている。7には階段状剥離が認められ、5のような小型の剥片が採取されたようである。9は調整剥片であるが石核から剥取された後、剥片採取を行っている。それによると背の低い、縦長剥片が得られたようである。

破片5、8は調整とは見られなく目的剥片採取に失敗したもののようである。前者は若干末広がりとなるが小型の石刃様を呈す。

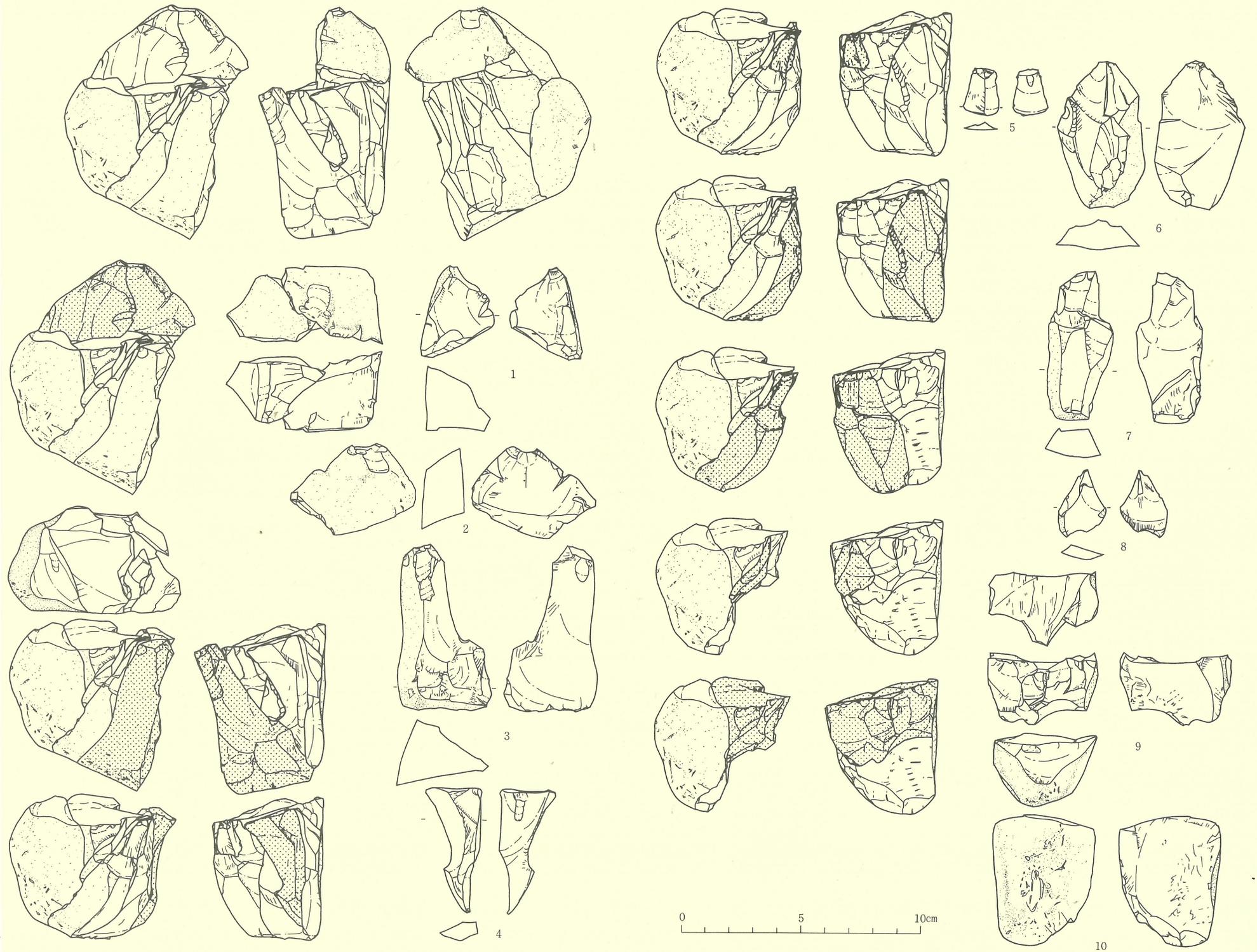
剥離技法は一端を除去して単設打面を形成し、打撃点を転移しながら不定形な剥片が採取されているものである。この時打面は、最後まで調整されていない。なお、大型な剥片(1、2、9)は、さらに剥離作業が進められており、コア・フレークと見られるものである。これらから得られた剥片は、いずれもそれほど大きなものではなかったようである。

接合資料5 (第19、21図 図版10)

石核1点、剥片2点、破片1点からなる。石核は大きく自然面を残し、他の2面は分割面である。剥片剥離加工はほとんど行われていない。分割面のうちの1面はポジティブバルブを有するもので、他の面はバルブが取り除かれている。1は石核より分割された剥片で、剥片採取後の残核の一種と考えられる。打面は単設打面と見られ、上方からのみ剥離されているようである。一端に僅か自然面を残す。中には90度回転して、加撃した痕跡が認められる。2は1から剥離されたものからさらに剥離されたもので、打撃点が90度転移している。1面に自然面を



第19図 接合資料(5)



第20図 接合資料(4)

残すものであるが、断面三角状をなし目的剥片であろうか。3は2を採取した残りの石核に付いていたもので、その後に剥離された碎片である。

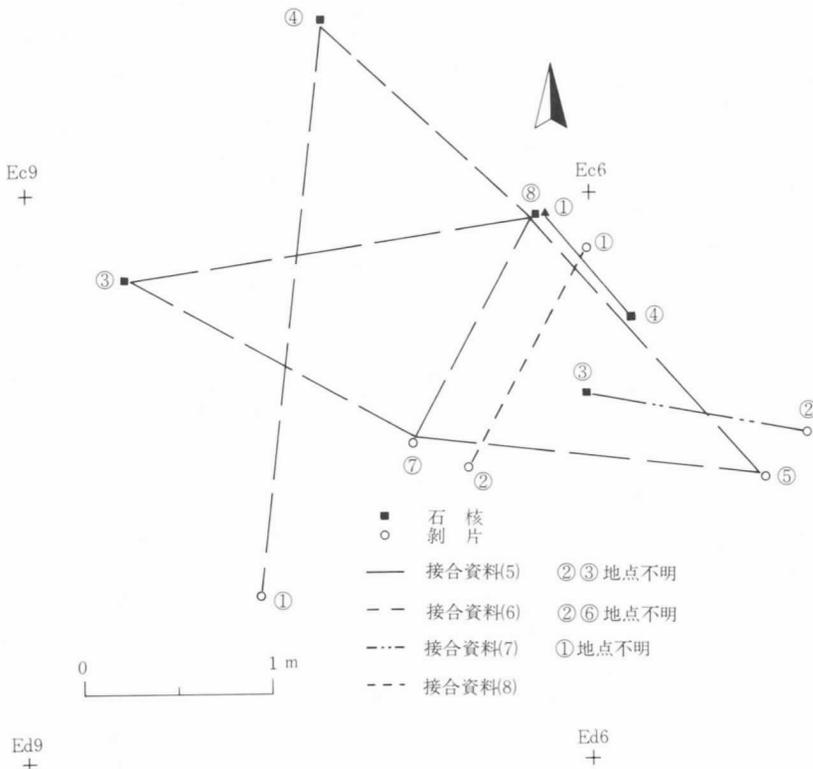
以上のことをまとめると次のようになる。

- ①石核は剥離作業が全く行われていない。
- ②1は分割された反対側の石核。残核と考えられる。
- ③2は1から分割された剥片1に90度打点を変えて得られた目的剥片？
- ④3は2を剥取した石核から剥離された碎片。

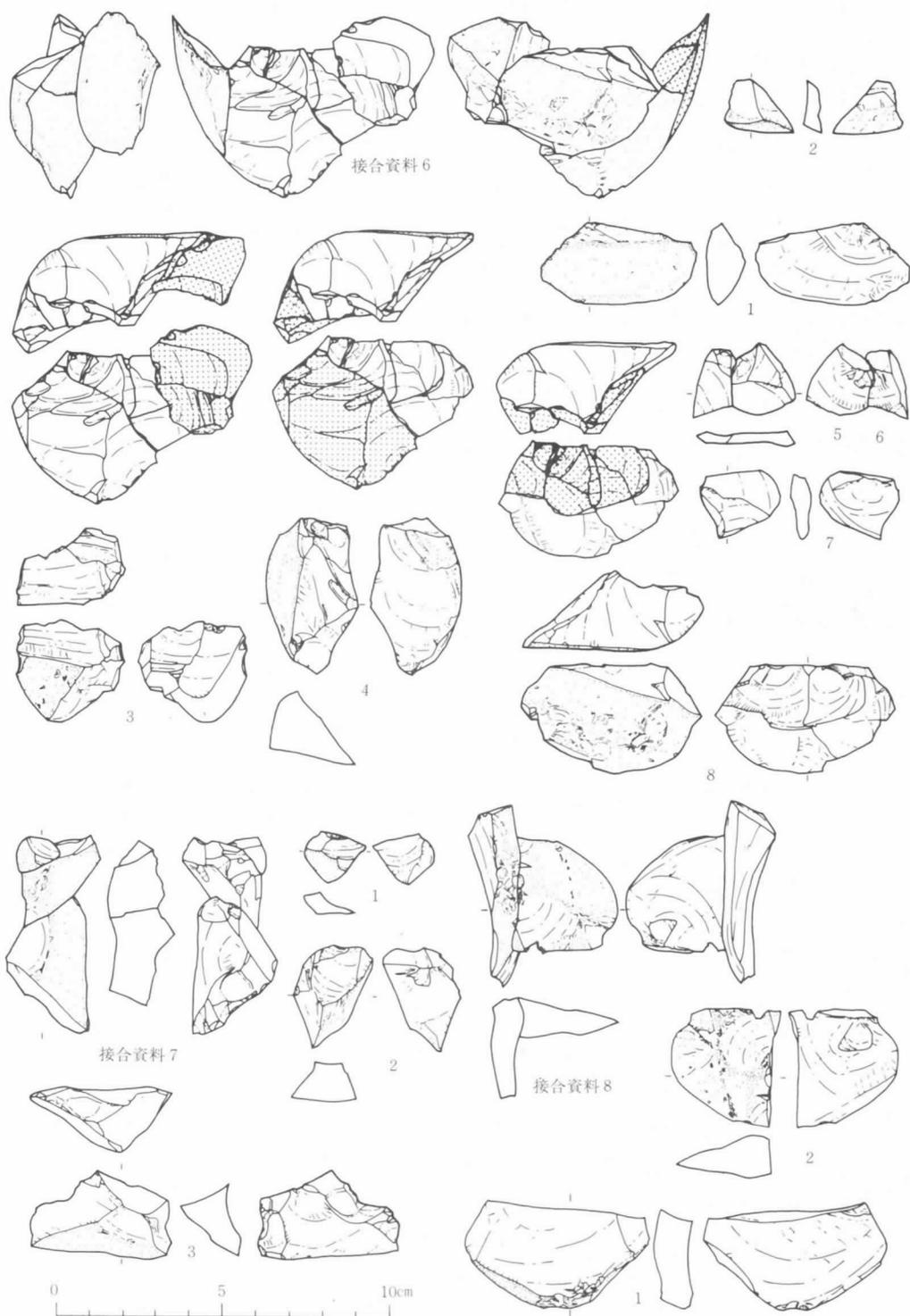
接合資料6（第21、22図、図版10）

石材及び表皮等から接合資料5と同一母岩からなると考えられる。石核3点、剥片5点から構成されるものである。石核（3、4、8）はいずれも、一面に表皮をもつもので、小型である。3は8との分割面を打面としており、小型の石刃様剥片が剥取されている。4、8は分割後、前者は2の打面形成剥片を採取し、後者は90度回転して剥片採取を行っている。両者とも2、3加撃されているが、目的剥片は得られなかったようである。

1、2は打面形成剥片で、前者が先行する剥片と考えられる。1によって形成された打面はその後の剥離で欠失している。2も、前述の如く打面形成剥片である。5～7は剥片剥取過程



第21図 接合資料（5～8）分布図



第22図 接合資料(6、7、8)

で得られたものであるが、定形化されてなく、目的剥片かどうかは不明である。

接合資料 7 (第21、22図 図版10)

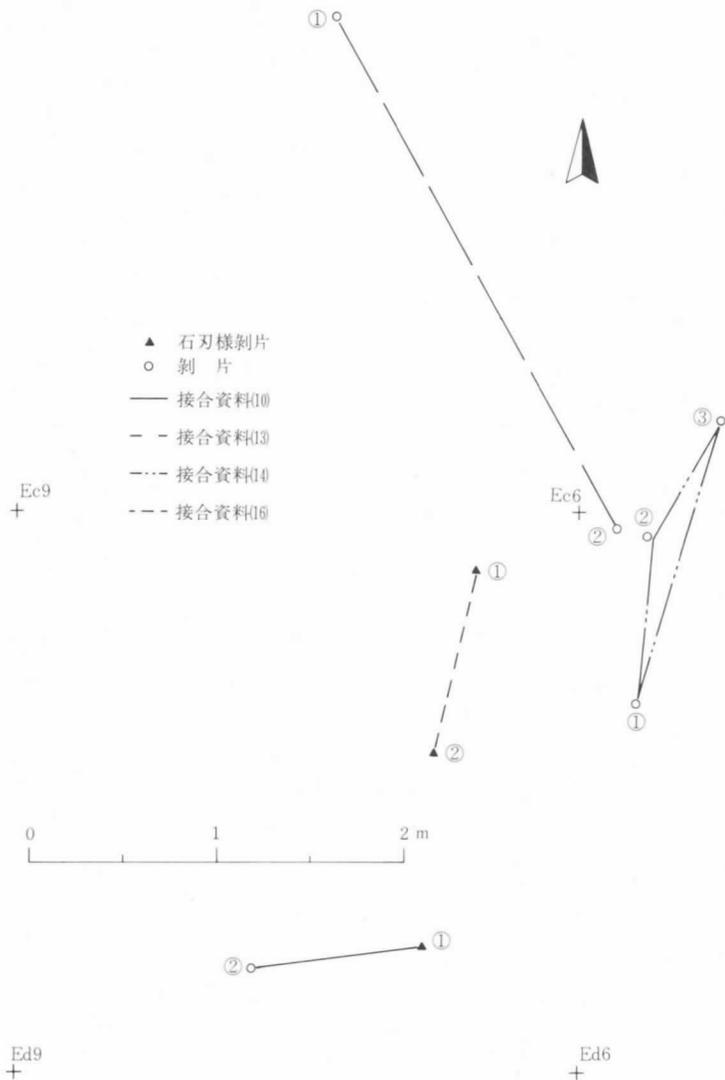
石材及び表皮から接合資料 5、6 と同一母岩からなると見られる。石核、剥片、碎片各 1 点からなる。いずれも一面に自然面をもつもので、1、2、3の順に剥離されている。

1 は基部が折損しているが、本来は二等辺三角形であったと見られる。2 は断面台形状をなすやや厚めの剥片で、目的剥片かどうかは不明である。打面は 1 の打面と同一の平坦打面である。石核 3 は分割面、あるいはそれを 90 度回転した面を打面としている。この他にも小破片を剥取した打面もあるが主要剥離面は前述の 2 面と見られる。これらによると、主に横長剥片が得られた如くである。

接合資料 8 (第21、22 図 図版10)

材質は接合資料 6、7 と同一であり、おそらくは同一母岩からなると考えられる。剥片 2 点からなるもので、1、2 接合面は分割面である。

1 は分割面と同方向からの加撃によって得られたもので、その後 90 度打点を変えて、打撃点を除去している。下端に表皮を残し、剥片の末端部にあたる。2 は打面形成された後に剥離されたもので、1 面に自然面をもつ。表皮を除去した剥片と見られる。あるいは次の打面形成剥片であろうか。ポジティブバルブを明瞭に残す。



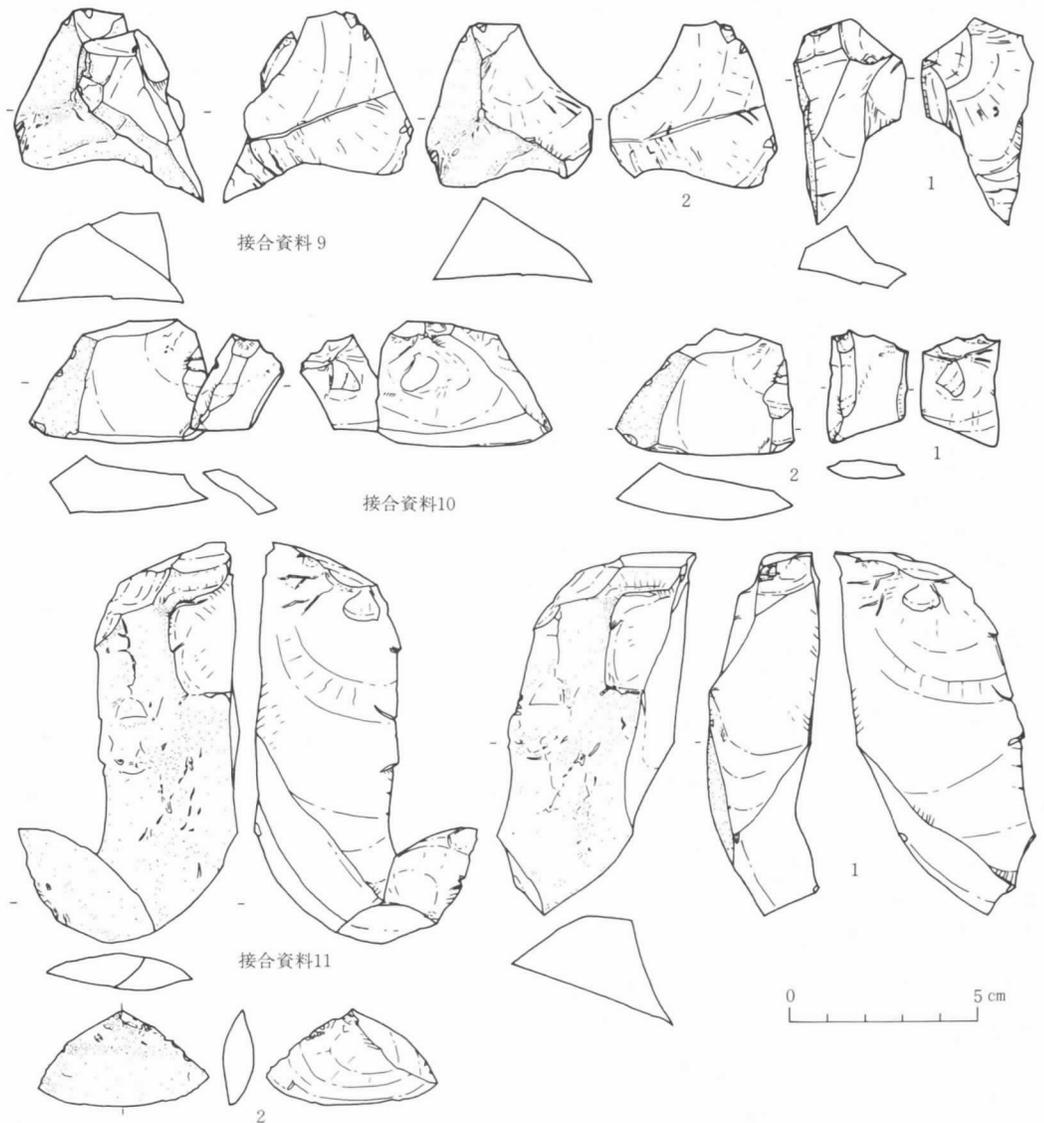
第23図 接合資料 (10、13、14、16) 分布図

接合資料9 (第24図 図版10)

剥片2点からなるもので、2面に自然面をもつ。1は二等辺三角形をなし、先端部が尖り、2は三角錐状を呈する剥片である。両者とも肉厚な剥片である。

接合資料10 (第23、24図 図版10)

剥片2点からなるもので両者とも同一打面から得られたもので、1が先行する剥片である。長さは短いが両側縁が平行し、石刃様を呈す。2は肉厚な横長剥片で、左側面に自然面をもつ。先端部は丸味を有す。



第24図 接合資料(9~11)

接合資料11 (第24図 図版10)

剥片2点からなるもので、両者とも表皮を有す。1は長さ9.8cm、幅4.4cmの大型剥片で、3面の分割面様の大剥離面をもつものである。打面は調整打面と見られる。2は剥片調整と見られ、1の剥離より先行するものである。

接合資料12 (第24図 図版10)

剥片2点からなるもので、採取技法は他のものと同様である。剥片は両者とも1面の右側面に自然面を残す縦長剥片で、先端部に丸味を有す。剥片1は中央に槌状剥離をもつもので、幾分厚い感はあるが石刃様を呈す。剥片2の加撃点はほとんど除去されている。

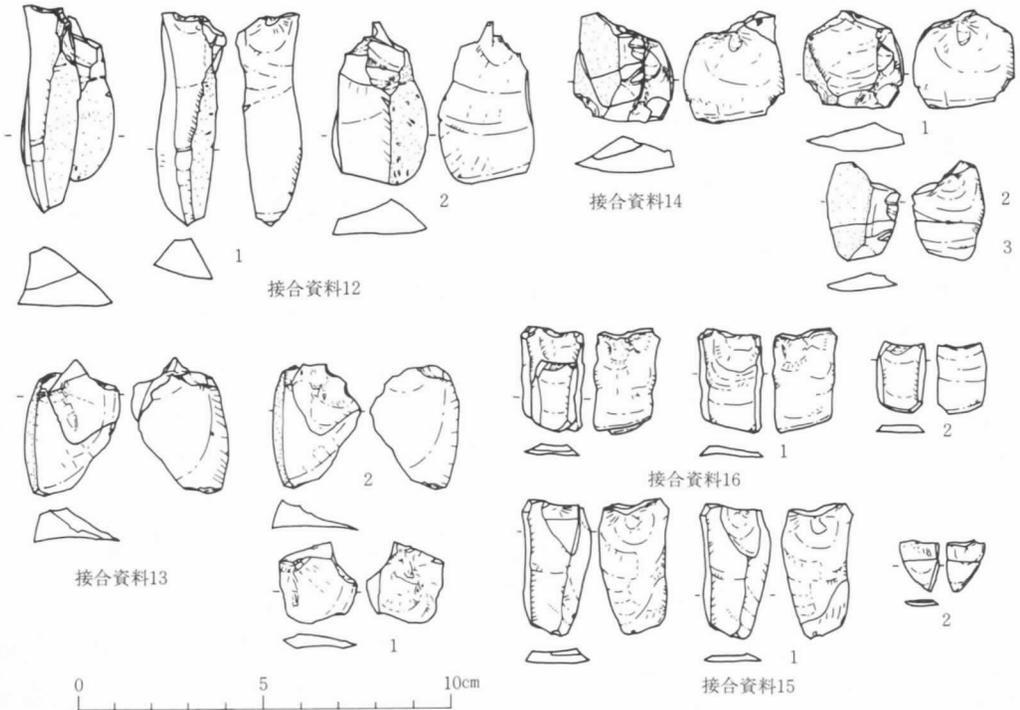
接合資料13 (第23、24図 図版10)

剥片2点からなる。打点を僅か移動して1を得たものである。正方形に近いもので周辺は非常に薄くなっている。2は1側面に自然面をもつもので、他の辺は薄く鋭利である。

接合資料14 (第23、24 図版10)

剥片3点からなるものであるが、2、3の2点は剥離後に折損したもので、元来は2点である。1、2とも同一打面から剥離されたもので、後者は1面に節理面をもつ。1は円形に近いもので1側縁に表皮を残している。

接合資料15 (第25図 図版10)



第25図 接合資料(12~16)

剥片1点と碎片1点からなるものである。1は両側縁が平行する石刃様剥片で、断面形は極めて薄い台形状をなす。2は基部から剥離された碎片で二等辺三角形をなす。

接合資料16 (第25図 図版10)

剥片2点からなるもので両者とも両側縁が平行する石刃様剥片である。横断面形は接合資料15と同様に薄い台形状をなす。1は基部を欠損している。

#### 4 遺構以外の出土遺物

##### 石鏃

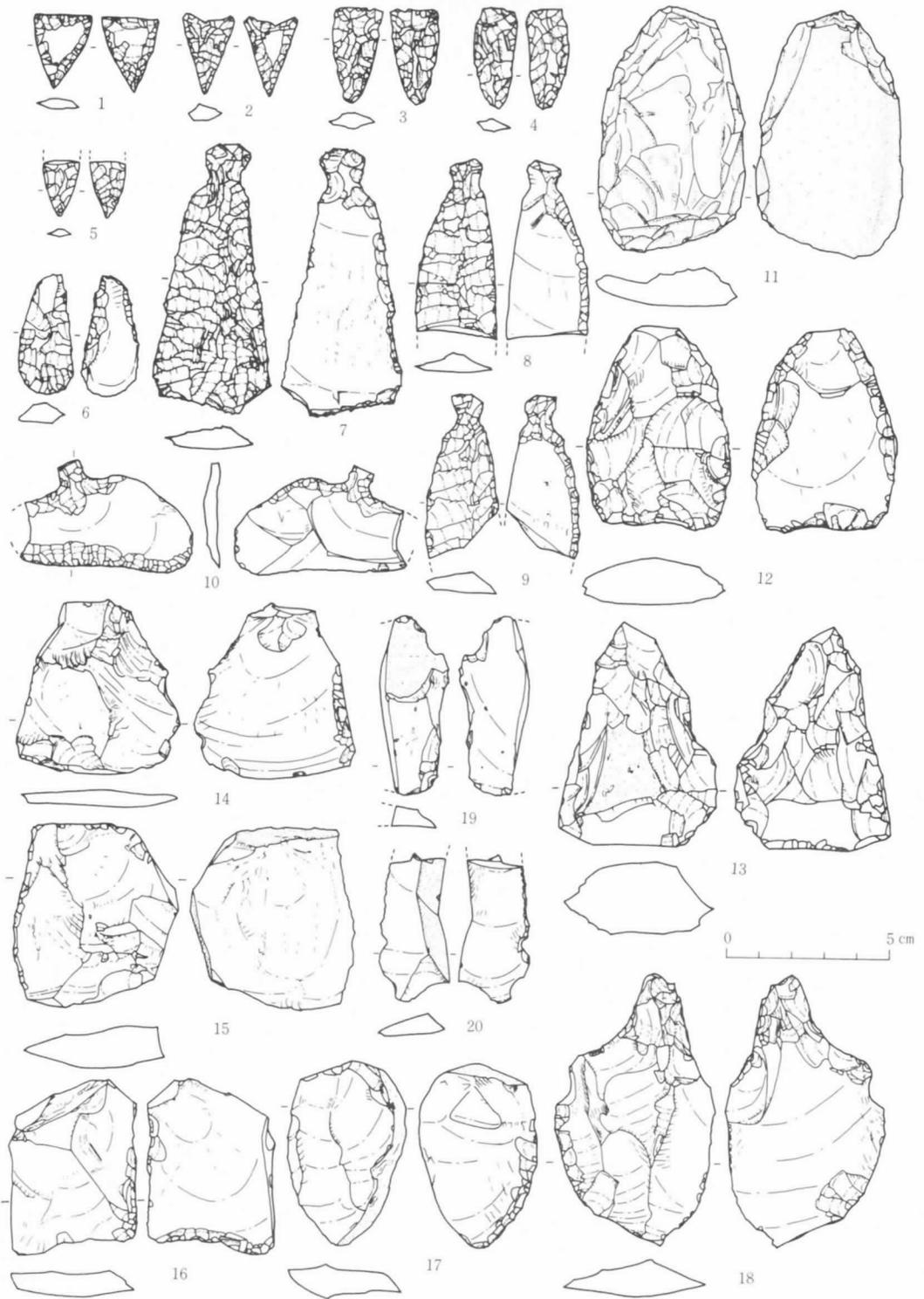
石鏃は6点で、いずれも無柄である。1、2は正三角形に近い二等辺三角形で両側縁が直線的である。基部は前者が直線的で、後者は若干抉り入りが観察される。周縁は背腹両面から規則的にトレミングされ、両面あるいは片面に一次剥離面を残している。3、4も側縁が僅かに脹らむ縦に長い二等辺三角形で、基部は平である。周縁の仕上げは両面加工であるが、前述のものほど丁寧ではない。先端部はそれほど尖っていない。5は先端部のみの破片で鋭く尖っている。6はやや大型で先端部が片面加工で丸くなっている。あるいは搔器類に含まれるであろうか。周縁は背面の加工が丁寧で稜線に向って長く行われ、1面には一次剥離面を大きく残す。基部の仕上げは粗雑である。石材は凝灰質硬質泥岩4、石質凝灰岩1、硬質泥岩1である。

##### 石匙

縦型3点、横型1点の4点である。いずれも背面あるいは腹面からの加圧によって折損している。7、8、9が縦型で、つまみが打瘤部分に作られ、背面に向って若干屈曲している。入念に仕上げられ、比較的小さい。側縁は7が直線的で、8、9が幾分彎曲している。先端部は後2者が欠損しているが、7は直線的で刃部としている。刃部は3者とも片面加工であるが、左側縁は両面加工となっている。腹面加工は8、9が先行するもので、7は新しい剥離加工である。刃部加工はいずれも稜線に向って長い押圧剥離である。横型の10は元来左右対称形をなしていたと見られ、対辺に刃部が形成されている。腹面から加工された片面加工である。7、8、9の右側縁と10の対辺に使用痕と見られる細破碎痕が観察され、8、9の裏側の右側縁では摩耗痕が認められる。石材は珪質泥岩2、凝灰質珪質泥岩1、硬質泥岩1である。

##### 石筥状石器

3点の出土である。いずれも短冊型を呈するもので、長幅比が1.7、1.4、1.4で比較的幅に対して長さが小さい。なお、13は先端部加工が先行するもので、トランシェ様石器と見られるものであり、11は1面に大きな自然面を残すもので打製石斧に分類されるものかもしれない。基部は12が小さな平坦面を残し他は失っている。側縁は前2者が彎曲しており、後者が直線的である。先端部はいずれも直線的で、11が若干斜めになっており、12は刃部再生によるものか中



第26図 遺構以外の出土遺物(1)

中央部が凹んでいる。加工は基部及び両側縁が打撃加工によるもので、先端部はその後二次加工されている(12、13)。石材は凝灰質珪質泥岩2、粘板岩ホルンフェルス1である。

### 搔器類

素材が肉厚で比較的鈍角な刃部をもつ搔器的なもの(5点)と、素材が比較的肉薄で鋭利な刃部を有する削器的なもの(6点)とが見られるが、両者の識別はそれほど明確ではなく搔器類と一括した。なお、この中には使用痕を有する剥片と見られるもの(2点)をも含めている。全体的形状は方形(14、15、16)、あるいは円形(22)、その他分類困難なもので14、15、16、17、21、25は打瘤をそのまま残し、15、17、20、25は自然面を遺存している。いずれも得られた剥片の縁辺部を利用したもので、不定形搔器と言えるものであろう。なお、22は大型の梅指状搔器と見られるものであり、24は先端部が鋭く尖っており、刺突具の一種とも考えられるものである。また18は基部を造り出したものようである。

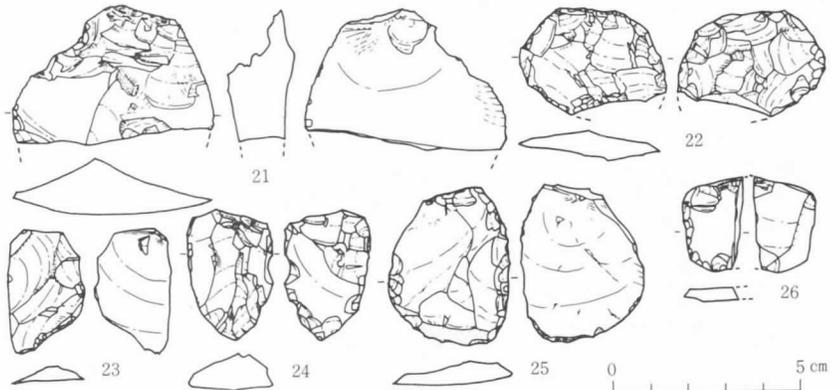
基部の多くは打瘤をそのまま残すものであるが、18、24では基部調整が施され、前者は鋭く尖っている。

折損しているものは5点で、19、26は縦に折損し、20、21、22は横に折損している。20を除いて背面からの加圧による破損である。石材は珪質泥岩9、凝灰質珪質泥岩1、硬質泥岩3である。

刃部は打撃点の反対側、対辺にあるもの2点、打撃点に隣接する側縁にあるもの11点とがあり、直線的なものと彎曲するものがある。刃部加工はいずれも押圧剝離によるもので、22を除いて片面加工的である。その大多数は背面加工(腹面から加圧されたもの)であるが、14、17、20、26、16の対辺は腹面加工(背面から加圧されたもの)である。但し、22は両面加工である。刃部形態は細かい二次加工(4点)、粗い二次加工(4点)、複雑な二次加工(5点)と相半ばしている。なお、20、23の刃部は使用痕様の小さな剝離痕が連続するものである。

### 磨製石斧

輝石安山岩製の1点である(27)。細長い短冊型をなし、全体に風化が著しい。基部はやや尖りぎみの丸形で、側縁は幾分彎曲するが直線



第27図 遺構以外の出土遺物(2)

的である。先端部は弧状をなし、蛤刃状を呈す。使用によるものか破損している。表裏両面には若干研磨面を残し、側縁には打撃痕が認められる。敲打後の研磨による作出と思われる。刃部も研磨されて作出されたと思われるが、風化が著しく判然としない。また、基部の着柄の痕跡も観察されていない。

磨石・凹石

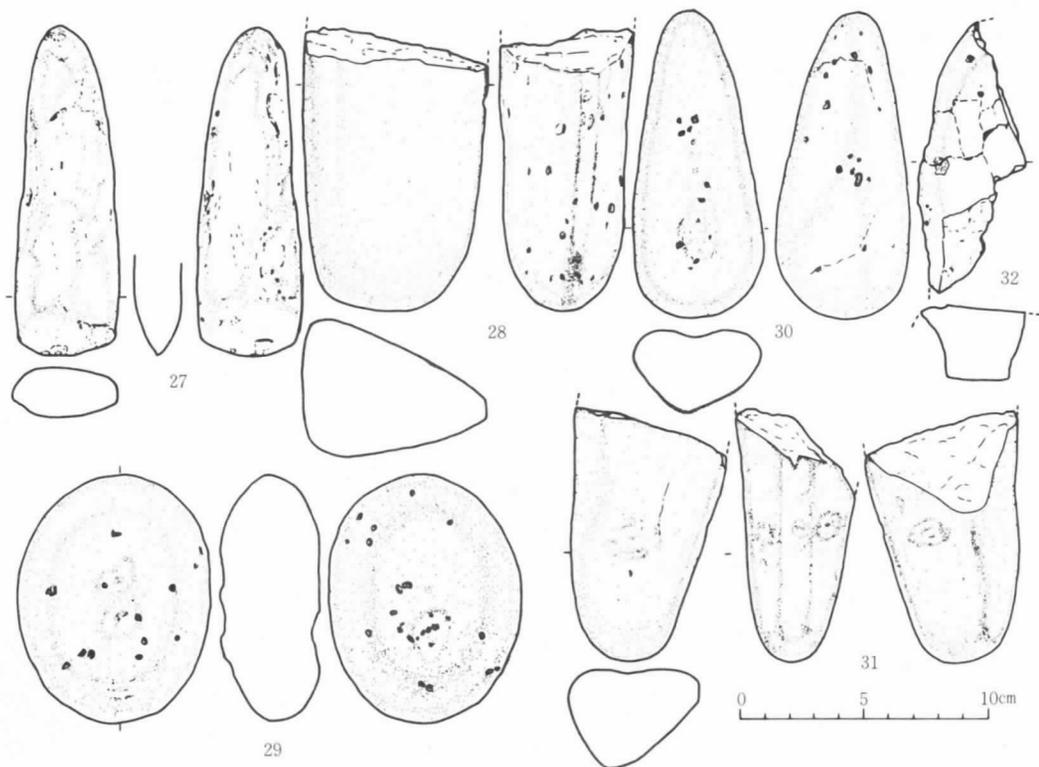
28は棒状を基調とする磨石で、中央付近で折損している。表裏2面と右側縁が使用されている。特に右側縁の使用が顕著で平坦になっている。凹石は3点で、このうち31は研磨痕をあわせもつものである。29は扁平な円形をなすもので、30、31は棒状を基調とするものである。凹みは1面、あるいは2面に認められ、29の表面では2個が連続している。凹みはいずれも浅い皿状をなす。31は磨石28と同様に右側縁が研磨されており、磨石として利用されたと思われる。これらはいずれも自然石をそのまま利用したものである。

石皿

32は上面が滑らかになっているもので石皿破片と見られる。残存部から推定するとかなり大型なもの破片と見られる。側縁の造り出し等は観察されない。

石核 (第29図)

発見された石核は5点で、いずれも旧石器工房跡の周辺の表土から採集されたものである。



第28図 遺構以外の出土遺物(3)

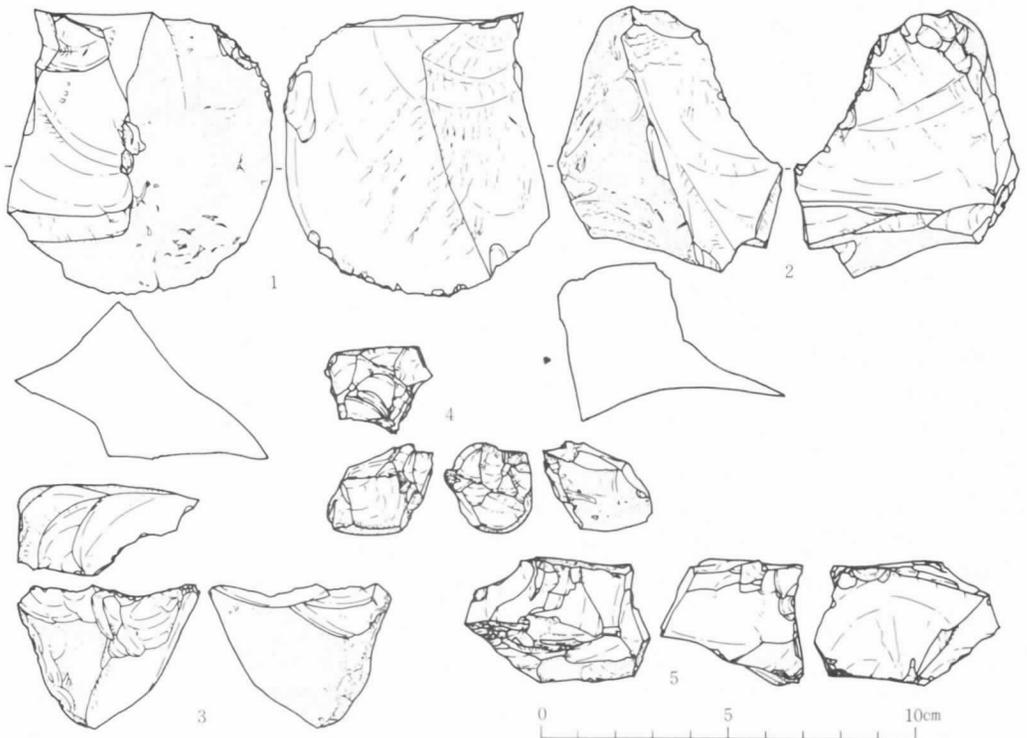
このうち2は1面にポジティブ面をもつもので大型剥片とも見られるものである。

形状は4、5が立方体状をなすもので、他は不定形である。大きさには大小があり、4は極めて小さい。5は両面に他は1面あるいは2面に大きな自然面を残すもので、残核と考えられる。但し、1は打面、分割面、大きな自然面と作業面からなるもので、まだまだ剥片剥離作業が可能なのである。打面はいずれも一端を除去したのみの平坦面で、打面調整は認められない。それらはすべて凹状をなすネガティブ面である。なお、3は作業面を打面としており、4、5は90度づつ打面を転移しているようである。これらから得られた剥片は5.5×5.0cm、4.0×3.1cm、3.6×7.0cm等で、横長剥片、縦長剥片である。

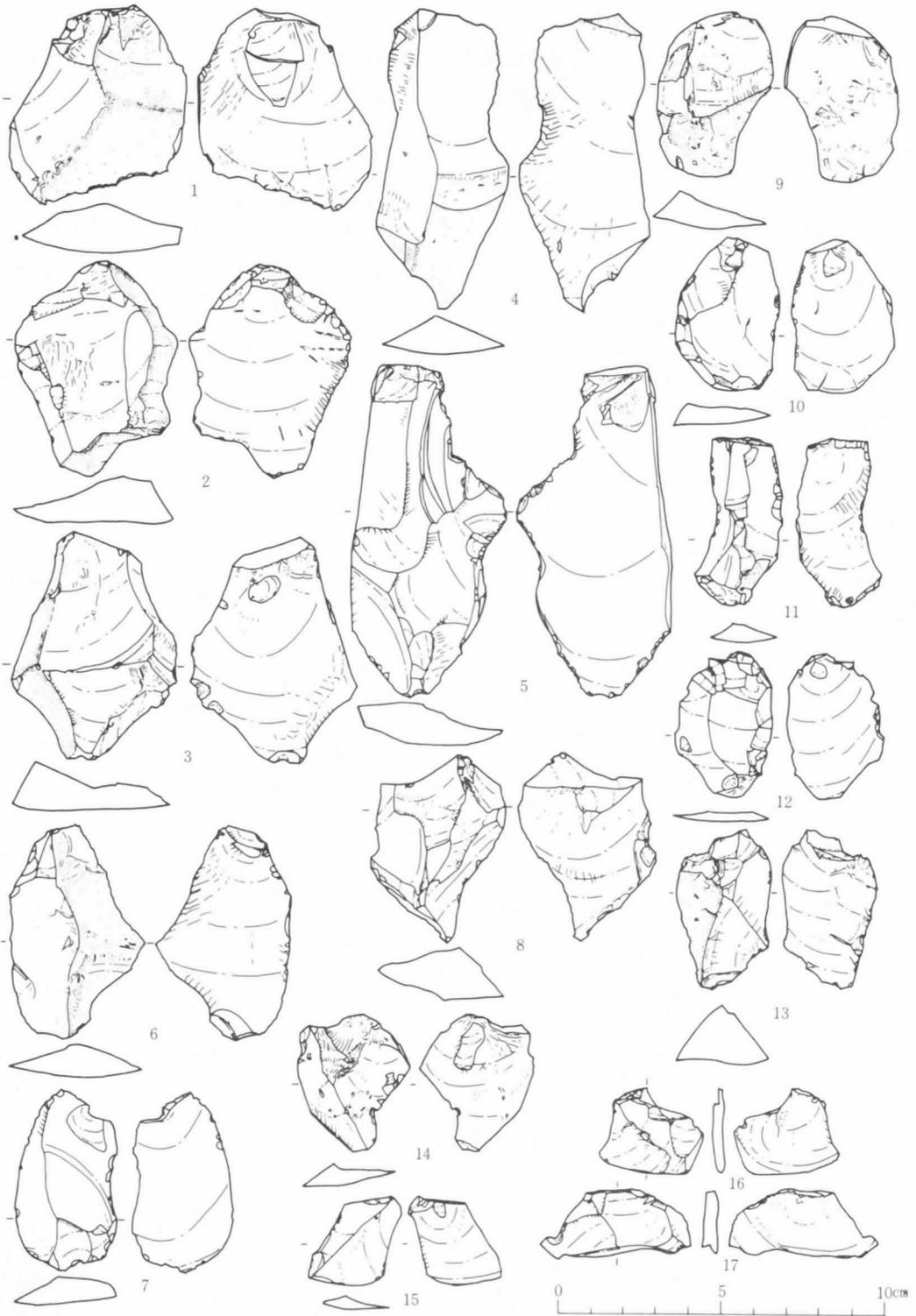
石材は泥岩類（珪質泥岩、珪質凝灰質泥岩、硬質凝灰質泥岩）が3点、凝灰岩類（石質凝灰岩、石質細粒凝灰岩）が2点である。

剥片（第30、31図 図版13）

39点の発見である。これらのほとんどのものはA区南部（As18溝、As15焼石 pit 周辺）から採集されたものである。1は自然面を打面とし、1面に礫面を大きく残すもので、表皮除去剥片と見られる。2～15は縦長を基調とした縦長剥片で、16～24は横長剥片と考えられる。但し、2、3、あるいは20、21、23のように中間形態も存し、必ずしも明瞭に識別できるものではない。大きさには大小があり、8、13、24が比較的肉厚であるが、全体に薄い。断面形は三角形



第29図 遺構以外の出土遺物(4)



第30図 遺構以外の出土遺物(5)

あるいは台形を呈している。

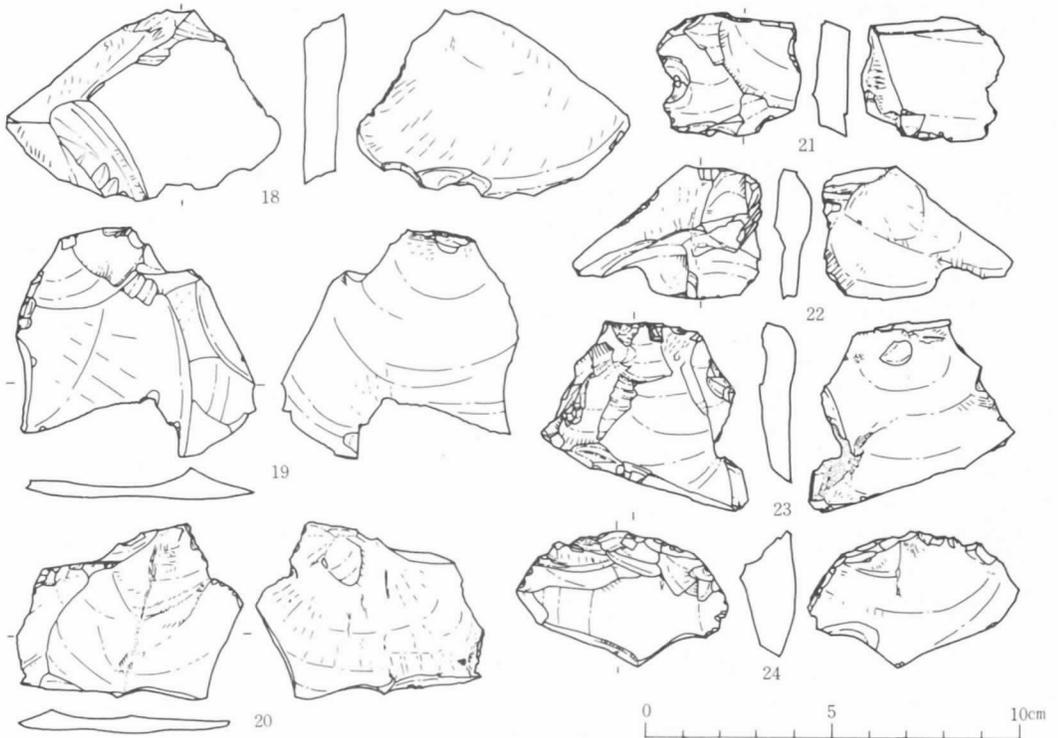
打面は自然面を打面とするもの7例(17.9%)、平坦面を打面とするもの23例(58.0%)である。不明なものは9例で、平坦面を打面とするものが圧倒的に多い。それらの打面は他と比較すると極めて小さい。不明なものの7、13、18は打面及び打痕部が除去されたものである。作業面は25点(64.1%)のものが主に主要剥離面と同一方向から剥離されている。これ以外には90度転移しているものが7点(17.9%)、180度方向から剥離されているものが4点(10.3%)存する。なお、2、3、4、6、9の5点は自然面を残すもので、目的剥片剥離では比較的早い段階に剥離されたものと見られる。17、20、23、24は下半が折損しており、21が基部を欠くものである。以上の他には極めて薄い剥片、欠損している剥片がある。

石材は泥岩類(珪質泥岩1、珪質凝灰質泥岩3、硬質凝灰質泥岩21)が25点、凝灰岩類(石質凝灰岩9、石質細粒凝灰岩3)が12点、玻璃質流紋岩が2点である。

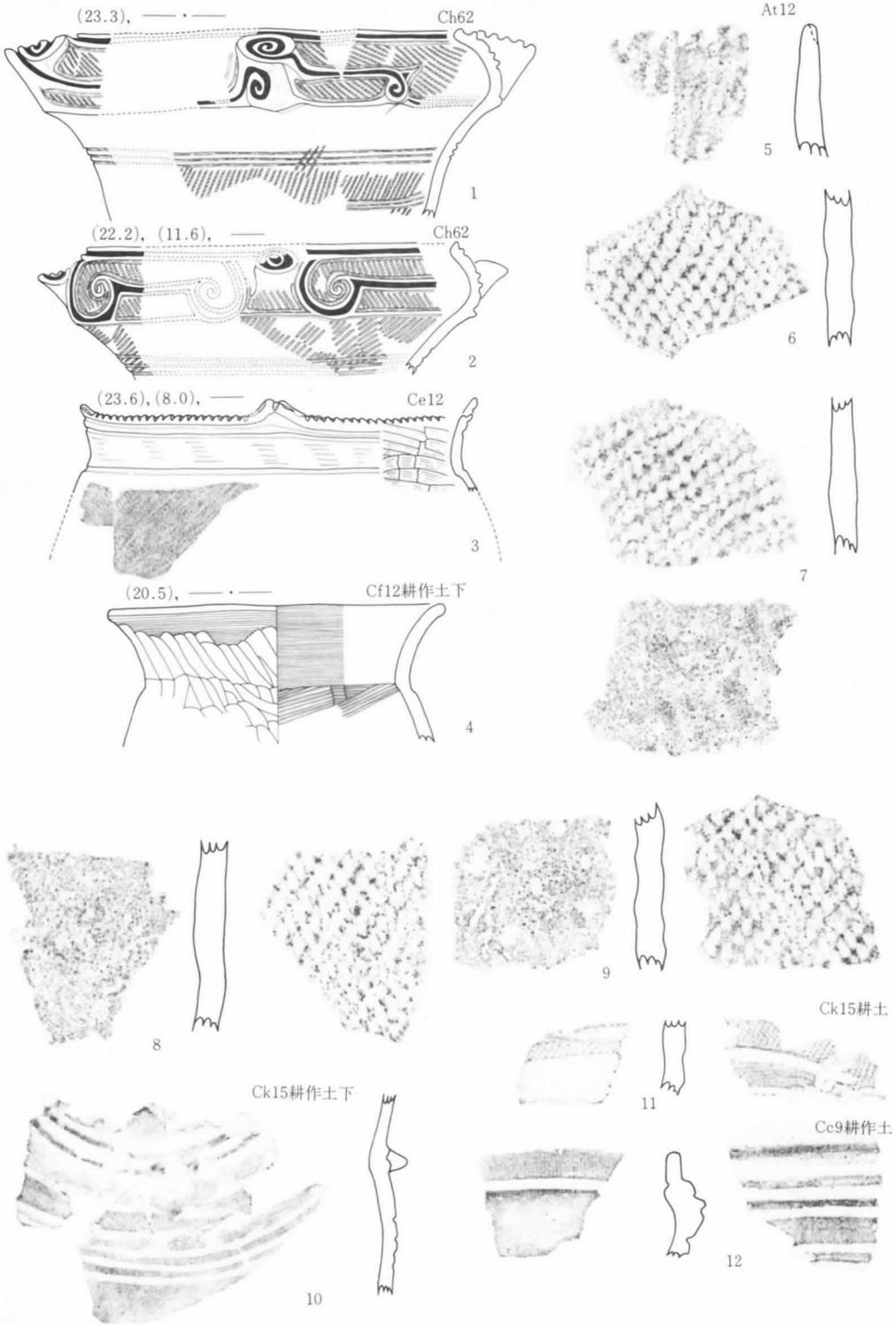
#### 碎片

約60点である。ほとんどのものは調整痕をもつもので、小型の調整剥片と見られる。中には打撃痕をもつもの、石錐様をなすもの、細石刃様をなすものなどが含まれている。また、小型剥片と考えられるものをも含めた。

#### 縄文土器(第32図 図版14)



第31図 遺構以外の出土遺物(6)



第32図 遺構以外の出土遺物(7)

縄文土器は As15 焼石 pit の14点を除いて調査地の北半（A～D区）の第1層から採集されたものである。発見された土器は細片を含めて166点で、すべて破片である。文様等から①早期末～前期初頭、②中期中葉、③晩期中葉に3区分される。

①は主にA区から採集されたもので、比較的焼成の良好な堅緻なものが多い。5は口縁部破片で口唇部に斜方向から施された刻目がある。5～9は太目の単節斜縄文で、胎土に繊維を含んでいる。比較的肉厚（0.8～1.0cm）で、暗褐色、赤褐色をなす。中には撚糸文と見られるものもあるが、摩耗が著しくはっきりしない。

②は主にC区から発見されたもので、復原可能な2点を含む。1、2はキャリパー型をなす深鉢型土器の口縁部破片で、同一地点から採集されたものである。両者とも口縁部が大きく内彎するもので、上部に4突起を有する。文様は口縁部文様帯が突起で4区分され、突起に続く渦巻文を主体とする隆沈線文からなる。体部文様帯は下半が不明であるが平行する沈線からなるようである。地文は1が複節斜縄文、2が単節斜縄文でいずれも細かい。内面は丁寧に研磨され、色調は黄褐色、青褐色をなす。なお、1の頸部は摩消しによる無文帯である。以上の他には地文のみ、あるいは沈線文をもつ破片がある。

③はC区西半から採集されたもので、器形の捉えられる1点を含む。3は頸部がしまつて若干肩のはる深鉢型土器の口縁部破片で、同一個体と考えられる底部を伴う。器形は口縁部が外反し、端部が外方に挽き出されて内側が沈線状を呈している。口縁部には中央に刻みの入った小さな突起を4個もち、口唇部には斜方向から施文された刻目をもつ。口唇部下には平行する沈線もち頸部を無文としている。頸部下端には1条の沈線がめぐり口縁部文様帯を区切っている。下半は単節斜縄文の地文のみである。体部は一様に器壁が薄く（0.5～0.6cm）、内面の調整痕が顕著である。焼成は良好で極めて堅緻である。

10は壺型土器の体部破片と見られ、器面が滑らかに仕上げられ、赤色顔料が塗布されているようである。沈線文の他に肉彫的な雲形文を配し、刻みの入った瘤状突起をもつ。11は内面にも細かい縄文が認められる。12は口縁部破片で、内面に1条の沈線がめぐり、外面は5条の平行沈線がめぐっている。

以上の他には土師器7点、須恵器5点がある。土師器は内面黒色処理を施した坏1点と、復原可能なものを含む甕である。4はロクロを用いない肩部に段をもつ甕で、口縁部が大きく外反している。外面は口端近くが横ナデ、下半がヘラミガキされ、内面は口縁部が横ナデ、下半がハケメ調整されている。須恵器は坏の底部と甕あるいは壺の体部破片である。

砥石33（図版2—9、10）は流紋岩質砂質凝灰岩の自然石をそのまま利用した砥石で、上下両面を砥面としている。砥面は両者とも水平に近いもので中央部が若干薄くなっている。図の下端の稜線は丸くなっており折損後に使用されたことを示し、右端は新しい折損である。

## IV まとめと考察

### 1 旧石器について

今回の調査で検出されたものは1ユニットのみである。東西約7.0m、南北約5.5mの円形に遺物が分布しているもので、そのあり方は周辺部が粗で、北東よりの直径約1.5mが密集地である。接合資料では最大3.5m離れているものが接合し、やはり密集地を中心に散在している。レベル的には密集地を中心に播鉢状を呈し、その中心部では約40cmの厚さを有している。なお、遺物はあたかも凹地に入り込んだ様相を呈しており、二次的に堆積した可能性をもっている。

発見された遺物は台石、ハンマー・ストーン、石核、剥片、碎片等で、石器は磨製石器が1点のみである。その組成は石器が0.3%、台石、ハンマー・ストーンが0.9%、石核3.4%、剥片39.3%、碎片56.0%で、剥片、碎片が圧倒的に多い。碎片は剥片採取に失敗したもの、あるいは調整剥片と見られるもので、剥片石器の製作に派生したものとは認められない。また、剥片石器が1点も含まれてなく石器製作跡ではなく、剥片採取の工房跡と推測される。

石材は硬質泥岩、硬質凝灰質泥岩、泥質細粒凝灰岩、泥質石質凝灰岩、流紋岩質細粒凝灰岩(珪化している)、粘板岩等で、同一母岩からなると見られるものが多く、1回から数回の極めて短期間に営まれた工房跡と考えられる。

剥片剥離技法は一端を除去したのみの平坦打面に、一定方向から連続的に加撃剥離を行って剥片を採取するもので、石刃技法と見られる。この時、打面調整は一切行われず、また、打面を転移することも行われていない。これらから得られた剥片はそれほど長いものではないが、ほとんど縦長剥片である。

発見された遺物の層位は現説資料では「60~70%は②cから出土」とし、E区断面図では「旧石器はこの層位に多く、primaryな包含層」と注記している。これらの遺物はレベル的にはIIc層に含まれるものようであるが、しかし、同一母岩、接合資料等では上層遺物と識別できなく、また時間差をもつとも見られず上層遺物と捉えるべきものと考えられる。断面図でも起伏が認められIIc層上面の凹んだ部分に入ったものと理解される。従って遺物の出土層位は当地域がIIb層を欠除しているのでII<sup>(1)</sup>a層遺物と捉えられる。

年代は現説資料では「黒沢尻火山灰の降下の終わった時期」として3~5万年前にあて、『地団研見学旅行2』<sup>(2)</sup>では岩宿I、磯山、あるいは星野IVなどとの類似性から2.5~3万年前の推定年代を与えている。これに対し『旧石器時代の東北』<sup>(3)</sup>では福島県成田遺跡、山形県岩井沢遺跡とともに2万年前としている。

注(1) IIa層は『旧石器時代の東北』に指摘されている黒沢尻火山灰層の上位のガラス質黄褐色火山灰層に相当するようである。

(2) 『日本地質学会第80年総会見学旅行2 北上川低地帯の鮮新統第四系地形』(昭48)

(3) 『旧石器時代の東北』 東北歴史資料館(昭56)

## 2 その他の遺構と遺物について

以上の他には焼石 pit と溝が検出されている。焼石 pit は直径約1.0m、深さ35cmの皿状の土壌に拳大～小児頭大の玉石が30個ほど入っていたもので、玉石はすべて火熱を受けており、土壌内には焼土、灰等が確認されないことから調理用施設(ストーン・ポイリング)ではないかと考えられている。内部に繊維を含む土器片が混入しており、早期末～前期初頭に位置付けられるであろう。

溝については縄文土器等が発見されているが、そのあり方は現説資料でも指摘されている如く埋土中位にあり年代決定資料とはなり得ない。方向はE10°Sで調査前の水田方向E12°Nとは大きく隔っており、年代、性格とも不明である。

## 3 まとめ

今回の調査で検出された遺構は縄文時代の焼石 pit と旧石器時代の石器工房跡、時期不明の溝跡である。発見された遺物は旧石器時代の石核、剥片等を中心に、縄文土器、石器で、若干の土師器、須恵器が含まれている。

古いものから順に記すと、旧石器時代は1ユニットのみの発見で、まとまりとして捉えられるものである。遺物は石核、剥片、碎片等で、石器は磨製石器1点のみである。石器が僅か0.3%で、剥片、碎片が圧倒的に多く石器工房跡と推定される。しかも、碎片は調整剥片と見られるもので、石器製作跡ではなく、石刃技法による剥片採取の工房跡と考えられる。

今回の調査では石器工房跡のみの検出であったが、西方約1.0kmの地点でナイフ型石器が発見されており、それほど遠からぬ所に工房跡を残した遺跡が存在すると推測される。

縄文時代の遺構は焼石 pit のみで、発見された遺物も土器166点、石器31点で、それほど多いものではない。生活の痕跡が知られるのみである。焼石 pit は調理用施設と考えられるもので、今回の調査では竪穴住居跡が発見されなかったが、近くに集落が存在したであろうと思われる。相去台地における縄文時代の遺跡は和賀川添いの段丘崖に多く見られ、台地内部ではそれほど多くない。但し、古代の遺跡においても土器片が採集されており、生活圏内に含まれていたことを示している。殊に当遺跡では北に成沢川を控えており、あり得ないことではなからう。なお、発見された土器は早期末～前期初頭、中期中葉、晩期中葉のものである。

古代の遺構は全く認められない。土師器7点、須恵器5点が採集されたのみである。隣接地域に集落が営まれたものであろうか、現段階では不明である。

注(1) 「北上市下成沢発見の石器」 福田友之 『弘前大学考古学研究』1 (1981)

(2) 相去遺跡 上大谷地遺跡

写 真 图 版

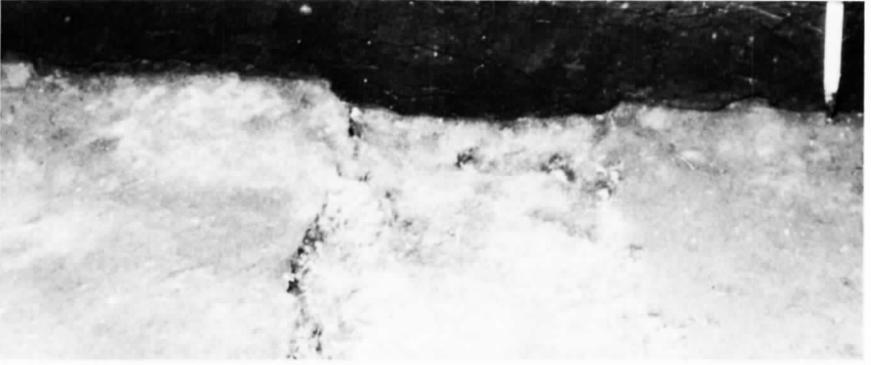
写真図版目次（下成沢）

下成沢遺跡全景，As 18 溝跡， As 15 焼石 Pit ……	図版 1	接合資料 1 ……	図版 7
As 15 焼石 Pit 出土遺物		接合資料 2，台石 ……	図版 8
As 18 溝跡出土遺物		接合資料 4 ……	図版 9
磨製石器，石核，砥石 ……	図版 2	接合資料 5～16 ……	図版 10
石刃様剥片，細石刃様剥片 ……	図版 3	遺構以外の出土遺物(1) ……	図版 11
剥片 ……	図版 4	遺構以外の出土遺物(2) ……	図版 12
剥片 ……	図版 5	遺構以外の出土遺物(3) ……	図版 13
接合資料 1 ……	図版 6	接合資料 3， 遺構以外の出土遺物(4) ……	図版 14

下成沢遺跡全景



As18溝跡

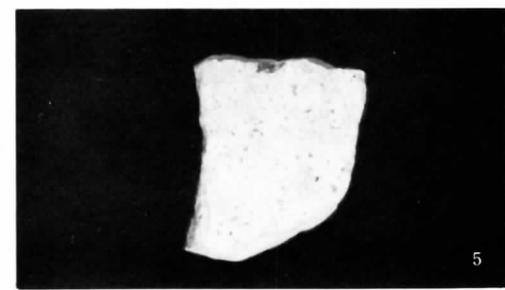
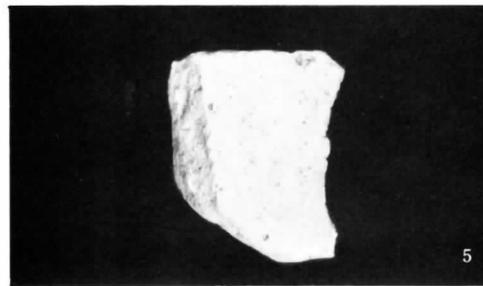
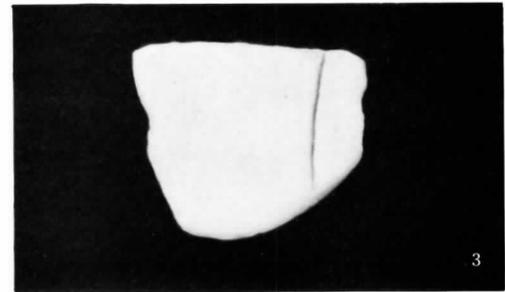
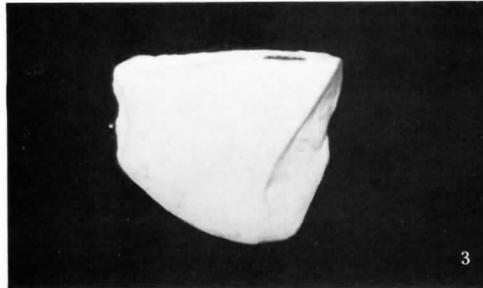
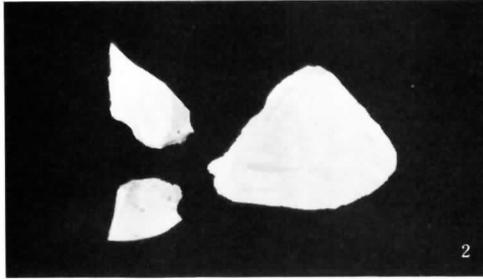
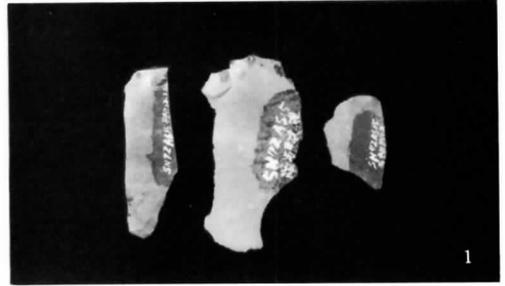
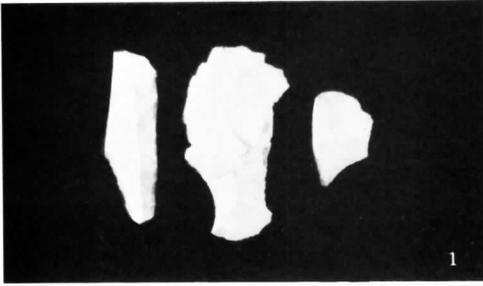


As15焼石pit



As15焼石pit

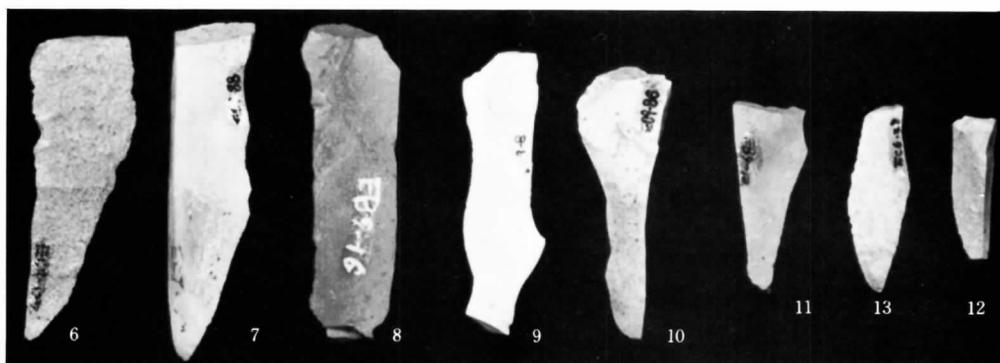
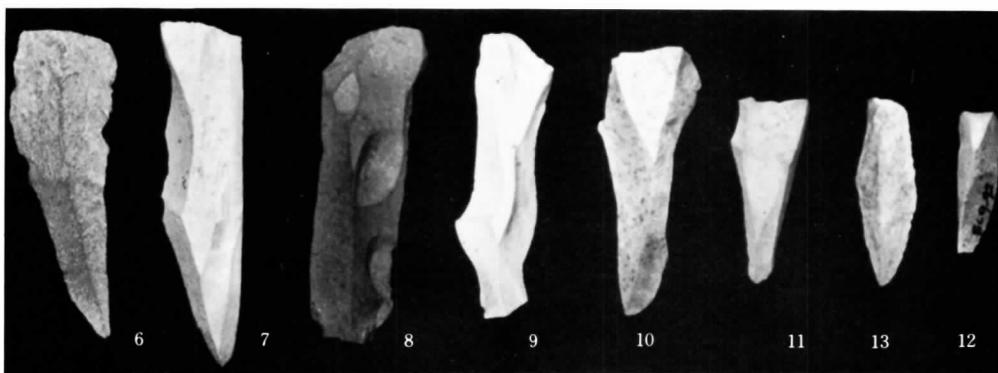
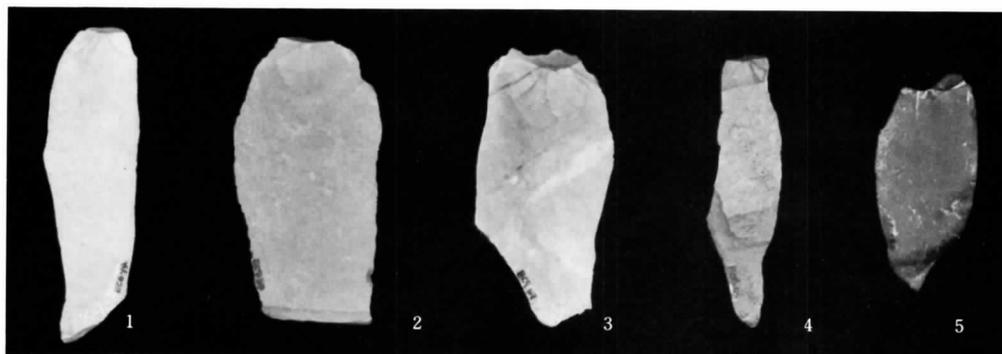
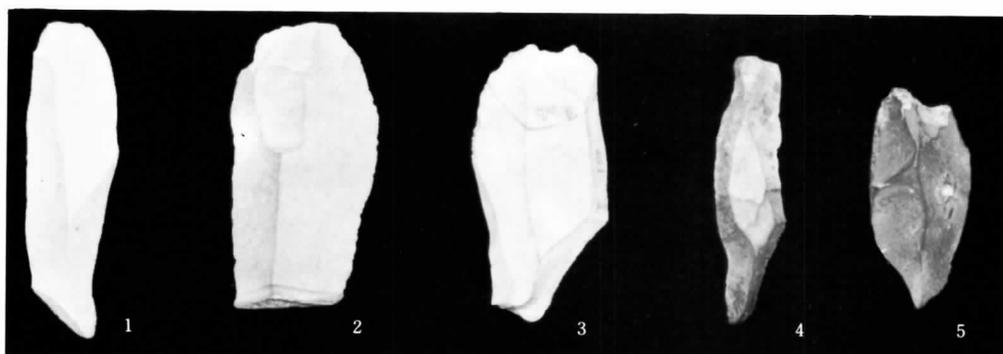




1 As15焼石pit出土遺物  
3 磨製石器

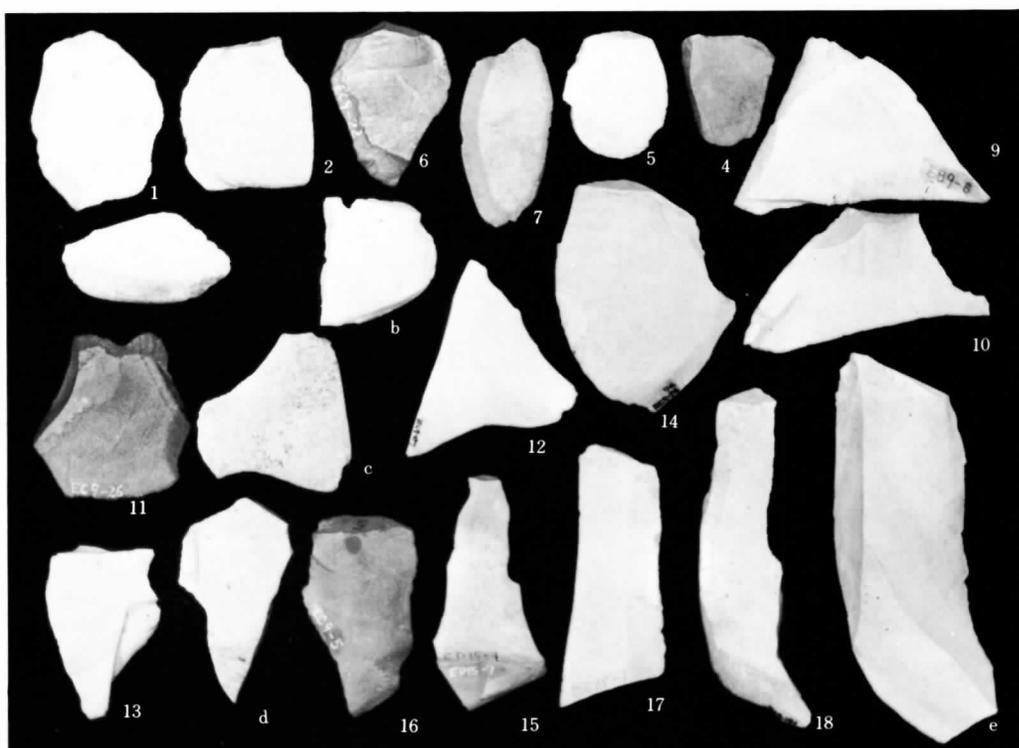
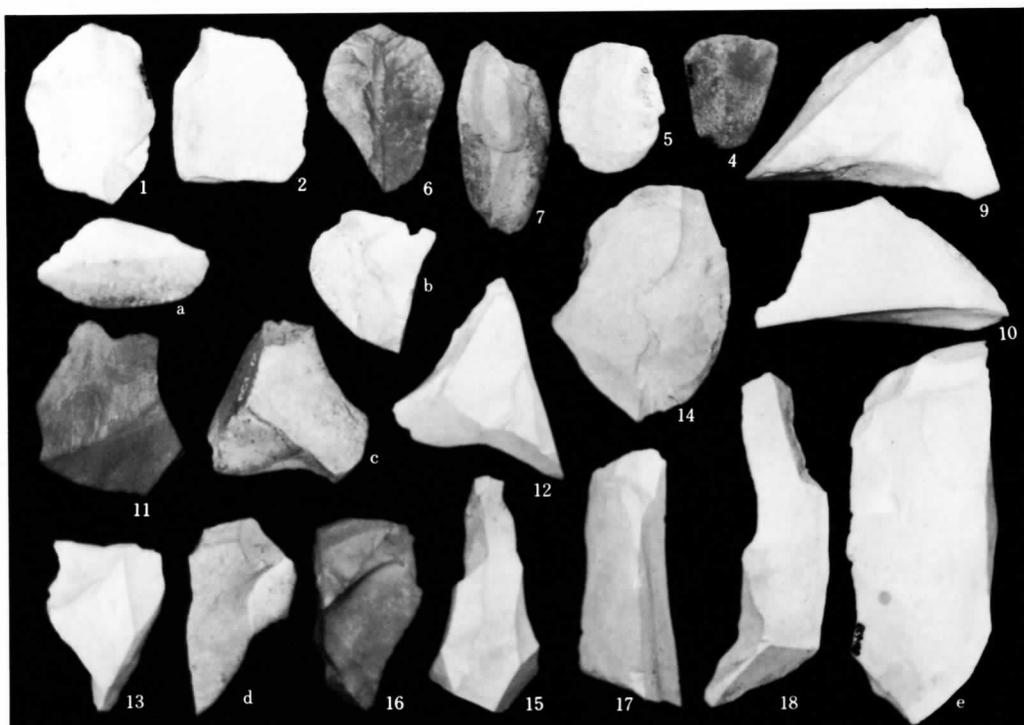
2 As18溝跡出土遺物  
4 石核 5 砥石33

図版2 出土遺物



1 ~ 5 石刃様剥片      6 ~ 13 細石刃様剥片

図版 3 石刃様剥片、細石刃様剥片

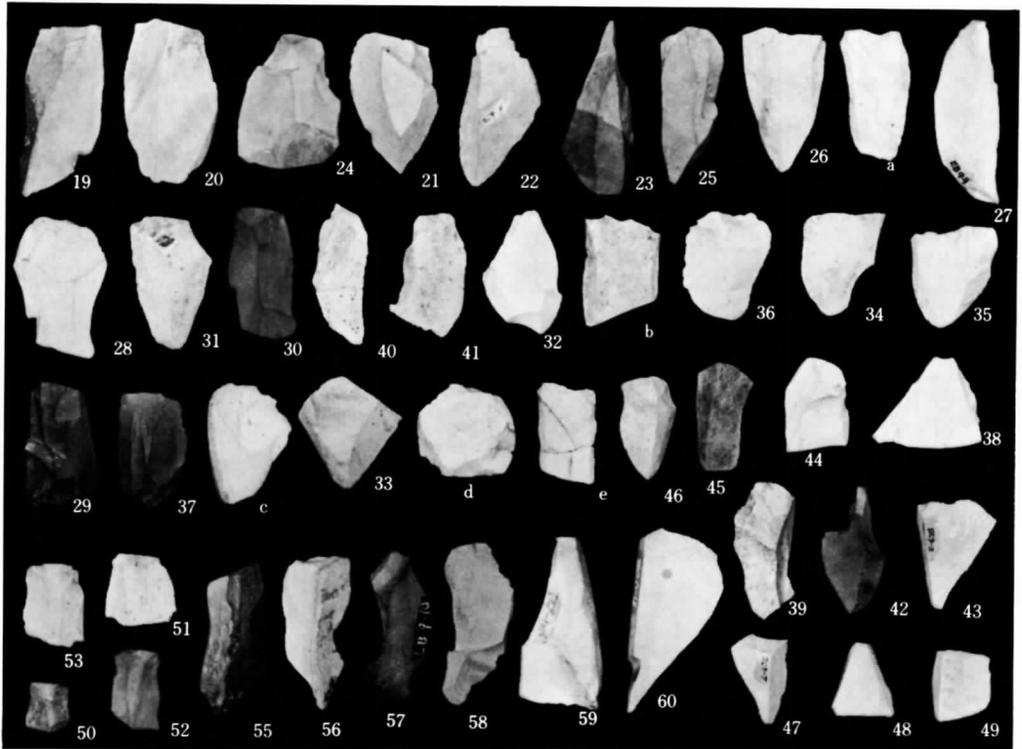


a 接合資料 6-1  
d 接合資料 9-2

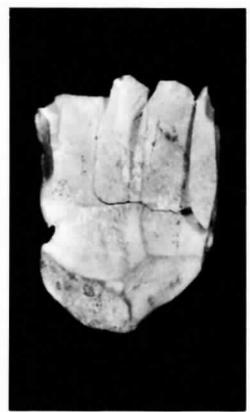
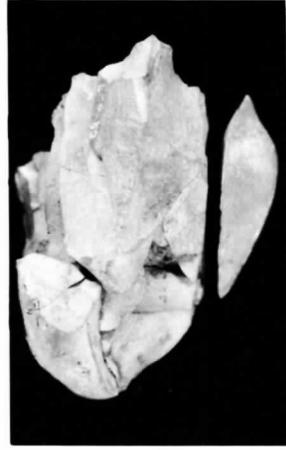
b 接合資料 8-2  
e 接合資料 11-1

c 接合資料 9-1

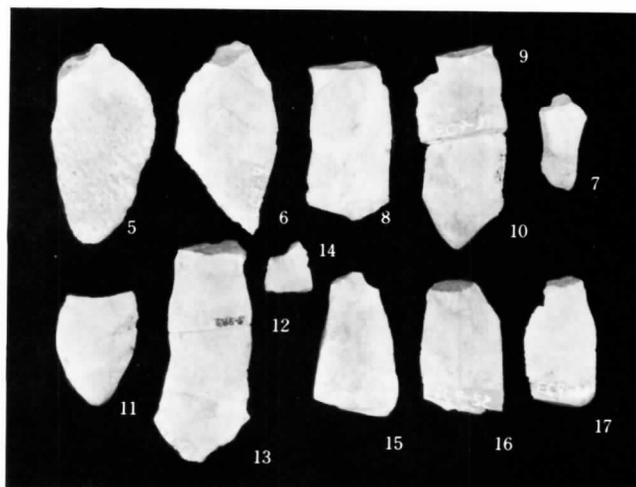
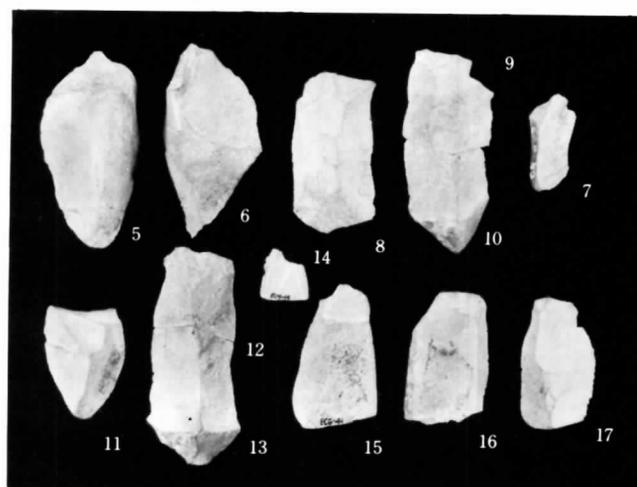
図版 4 剥片



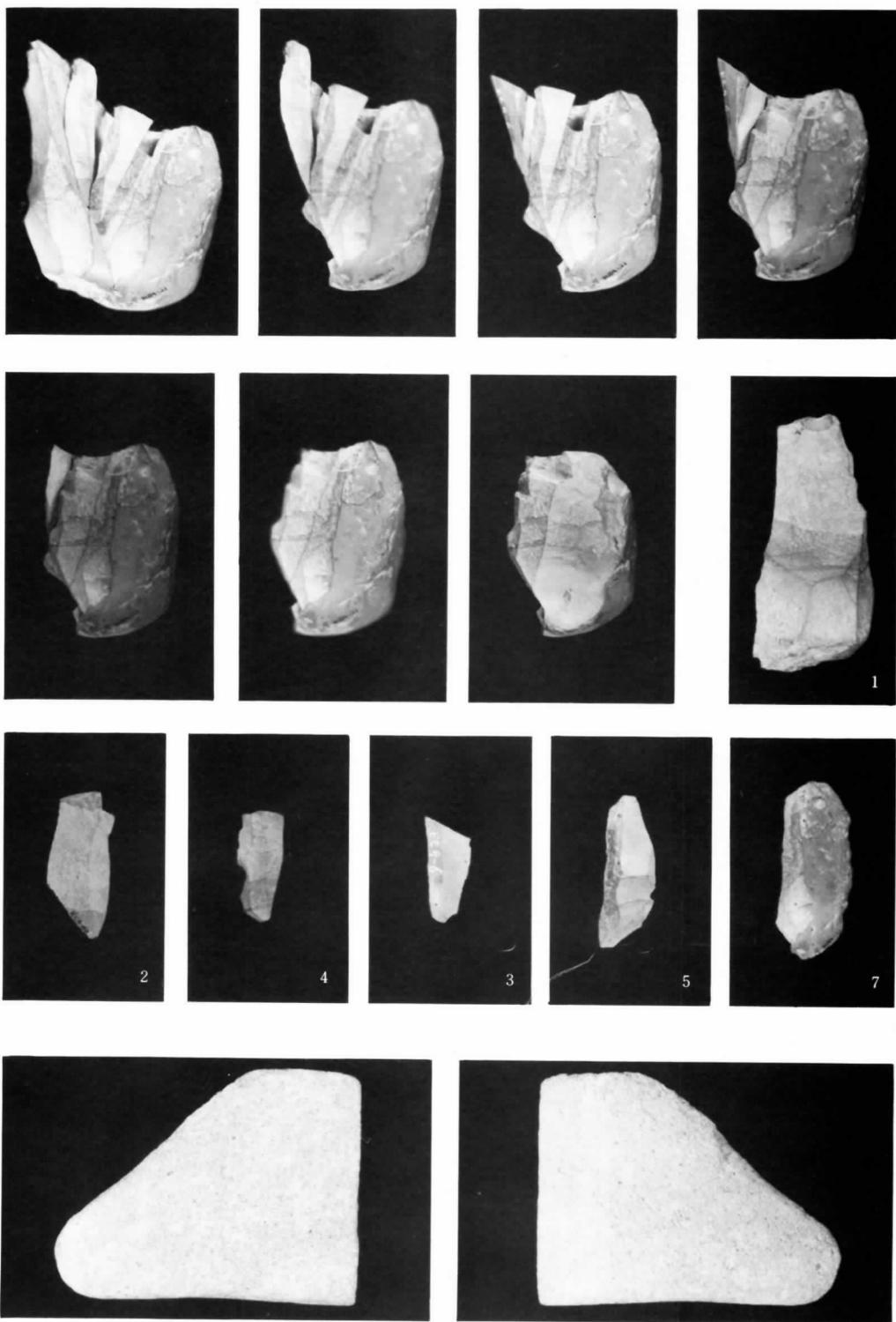
a 接合資料15-1      b 接合資料10-1      c 接合資料13-1  
 d 接合資料14-1      e 接合資料16-1



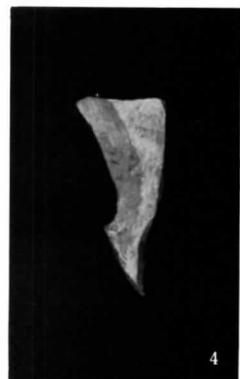
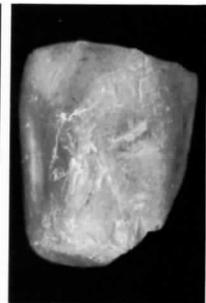
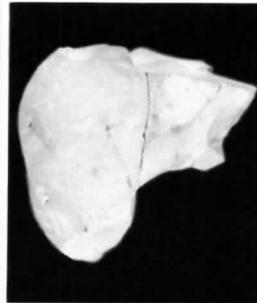
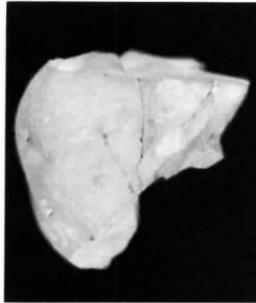
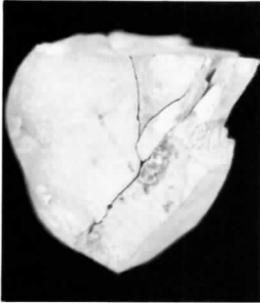
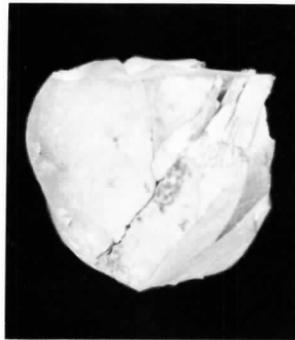
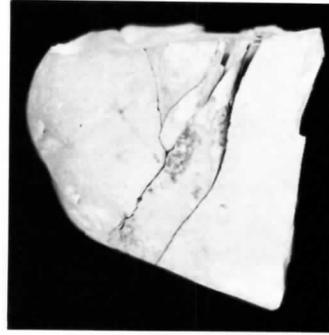
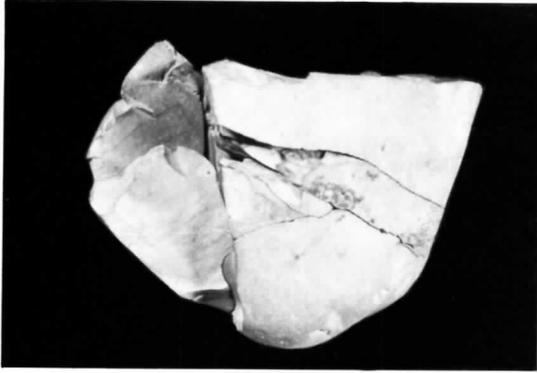
图版 6 接合資料 I



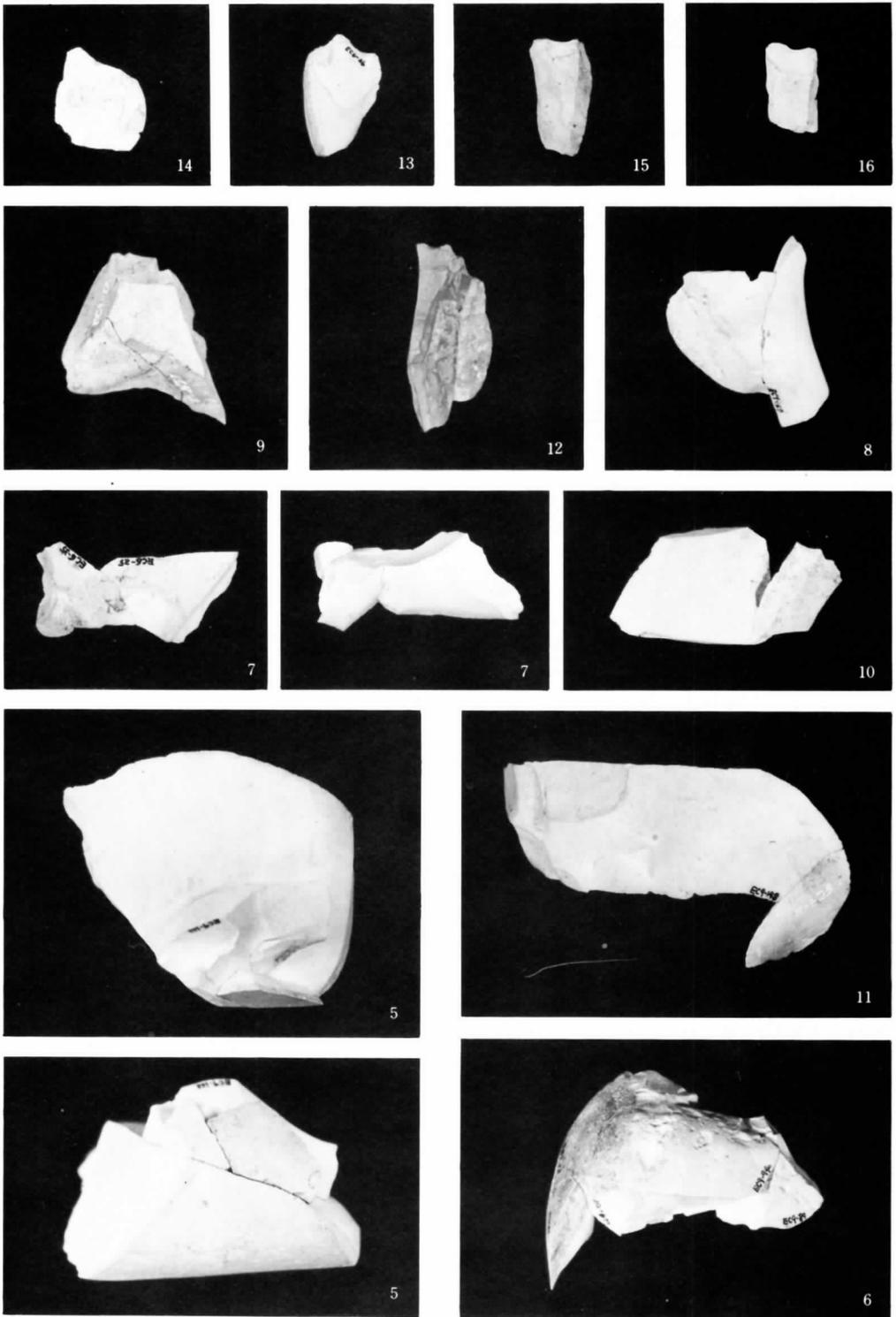
図版 7 接合資料 I



图版 8 接合資料 2、台 石

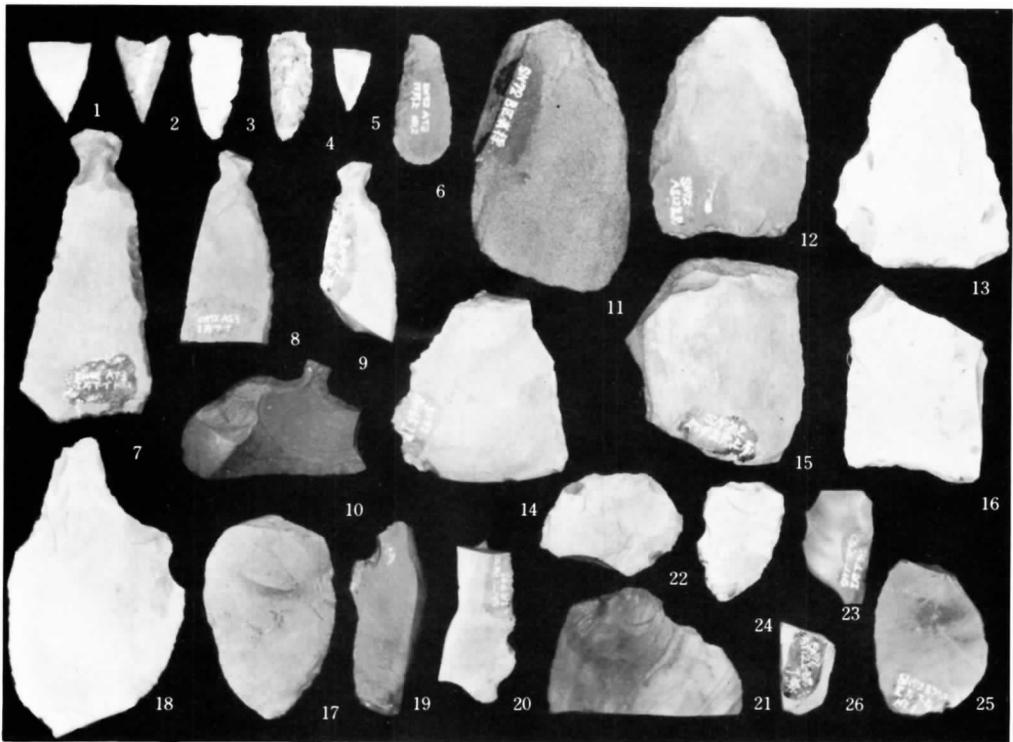
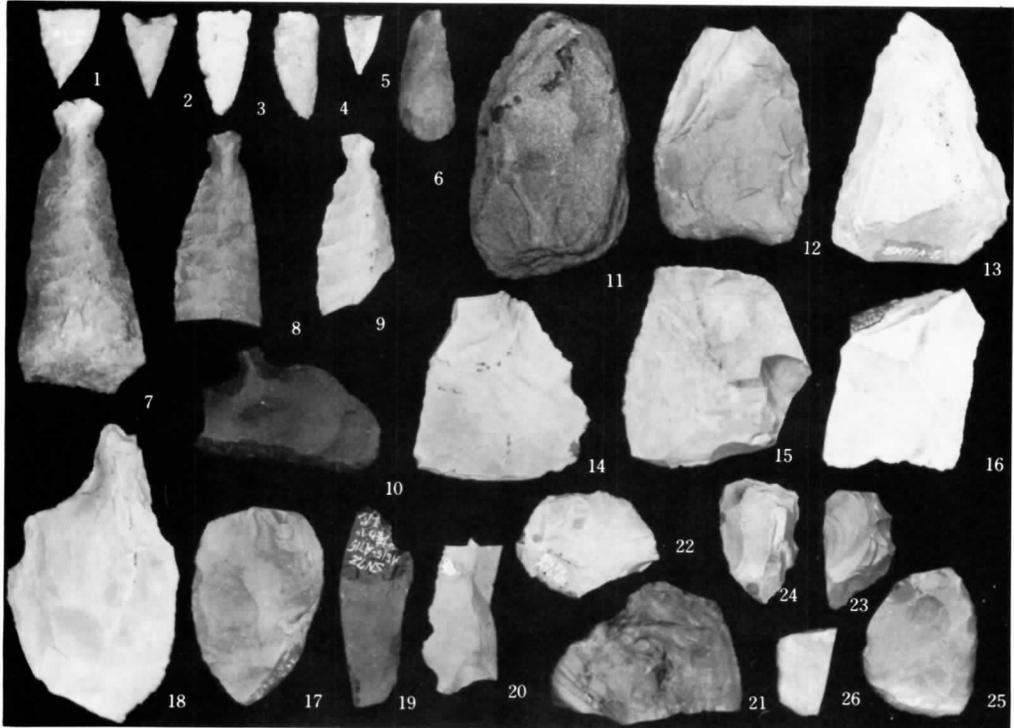


図版 9 接合資料 4

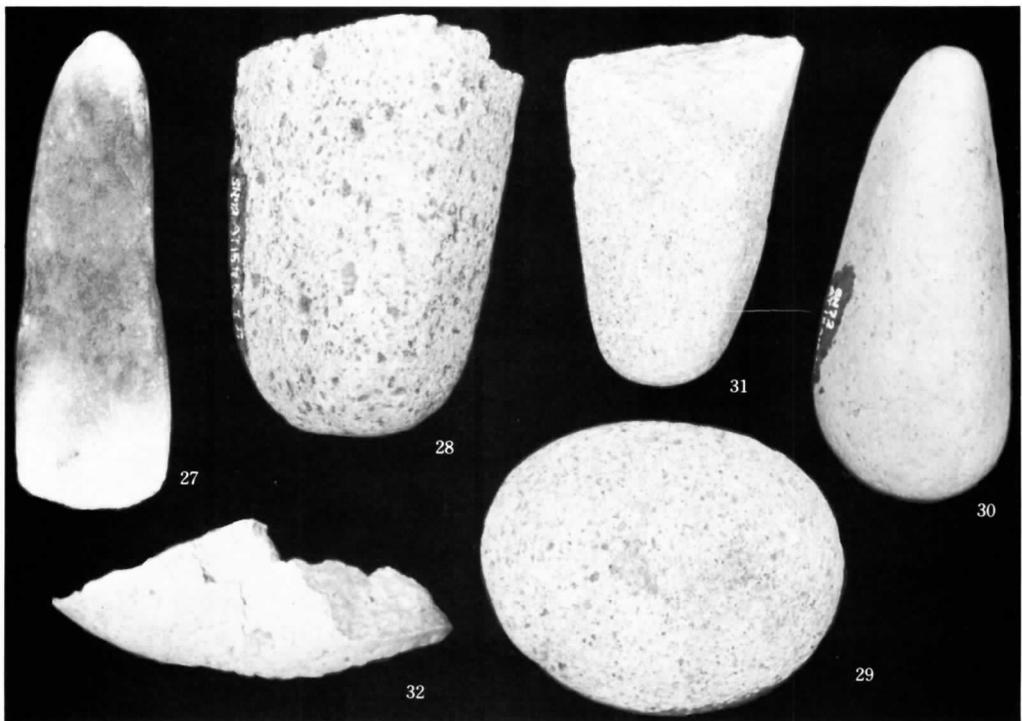
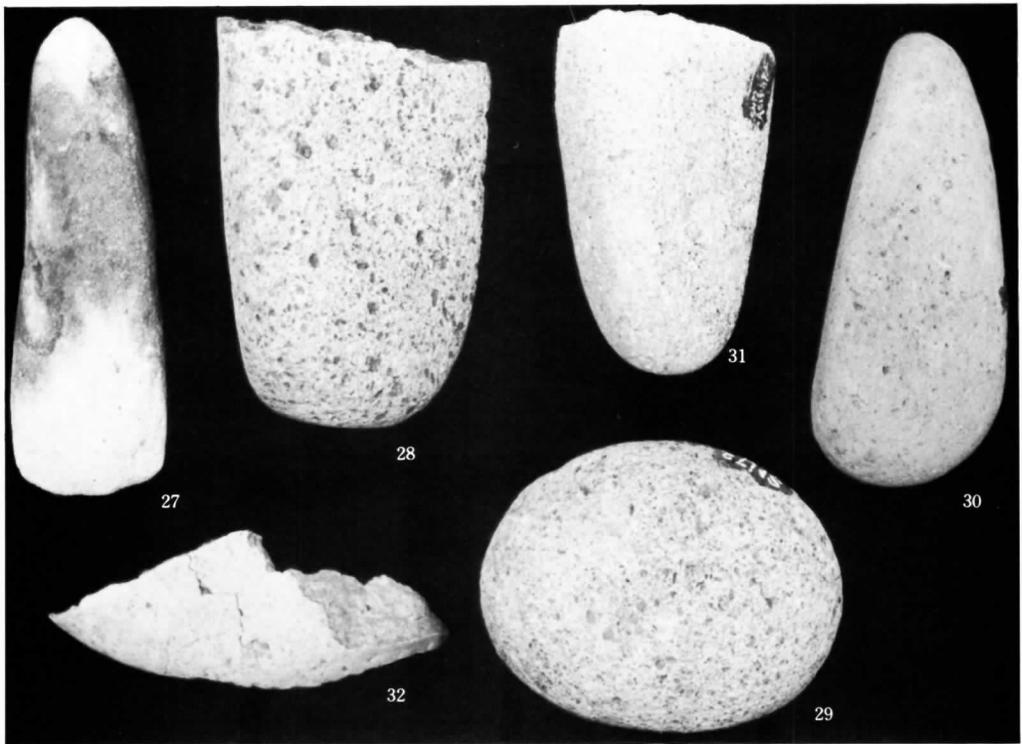


数字は接合資料の番号である

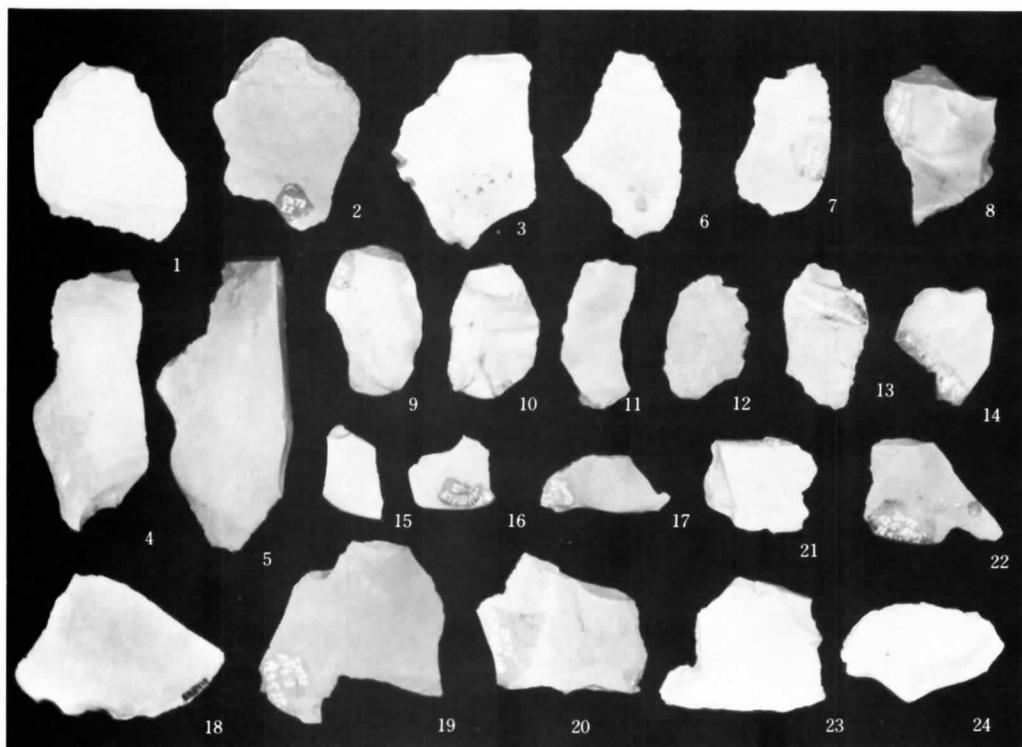
図版10 接合資料 5～16



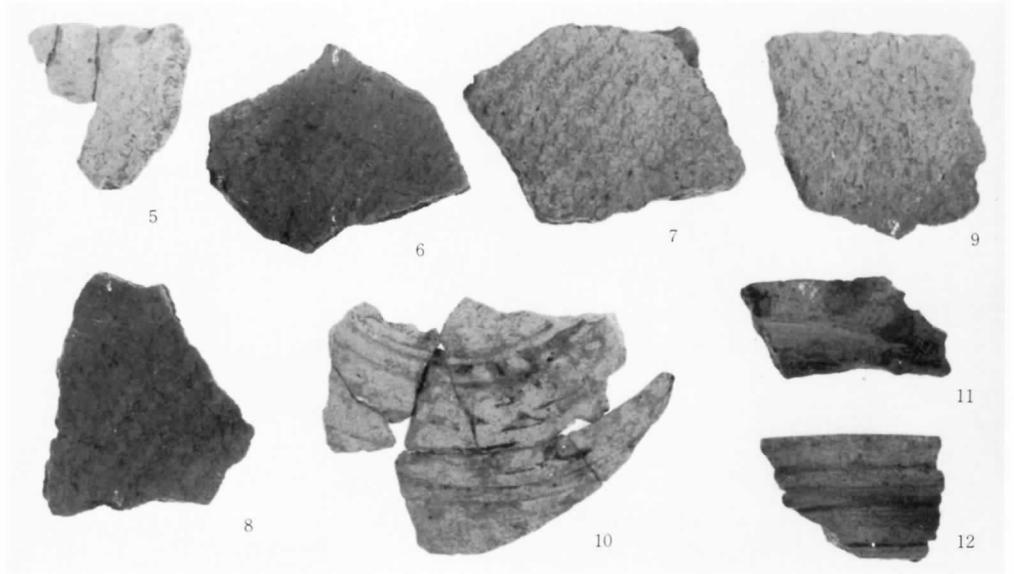
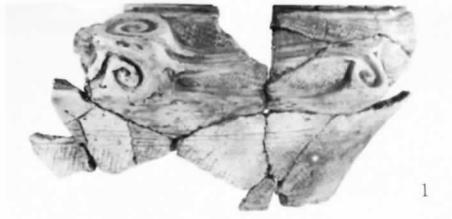
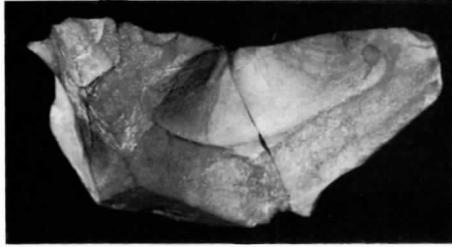
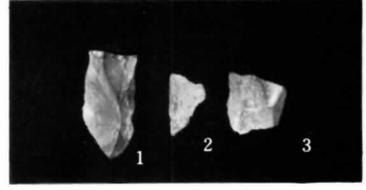
図版II 遺構以外の出土遺物(1)



図版12 遺構以外の出土遺物(2)



図版13 遺構以外の出土遺物(3)



図版14 接合資料3・遺構以外の出土遺物(4)

おお や ち  
大 谷 地 遺 跡

遺 跡 名：大谷地(略号OY72)

遺 跡 所 在 地：岩手県北上市相去町高前田74

調 査 期 間：昭和47年7月10日～7月20日

調 査 対 象 面 積：2,500 m<sup>2</sup>

発 掘 調 査 面 積：800 m<sup>2</sup>



## I 位置と立地

本調査地は、国鉄東北本線六原駅北西約4kmの中位段丘に立地している。南側には大堤に連なる沢がある。海拔約99.5mで現状は原野である。調査範囲は東北縦貫自動車道・本線及び側道部分に限っている。周辺の遺跡としては、西南西方向に高前田遺跡（平安時代・集落跡）東南東方向に高前壇他相去遺跡（平安時代・集落跡）、北方には下成沢遺跡（旧石器・縄文時代中期、平安時代）「本調査関連遺跡」、南の方向には上大谷地遺跡（平安時代）「本調査関連遺跡」がある。なお南西方向には須恵器甕出土の大谷地遺跡がある。

## II 調査の概要及び結果

道路敷となる区域について路線中心杭 STA173+40より174方向に南北約40mの範囲を調査した。表土の除去作業は重機（ブルドーザー）によって行なった。

地山面（黄褐色粘土層）の検出作業によっても遺構や遺物の確認は出来なかった。

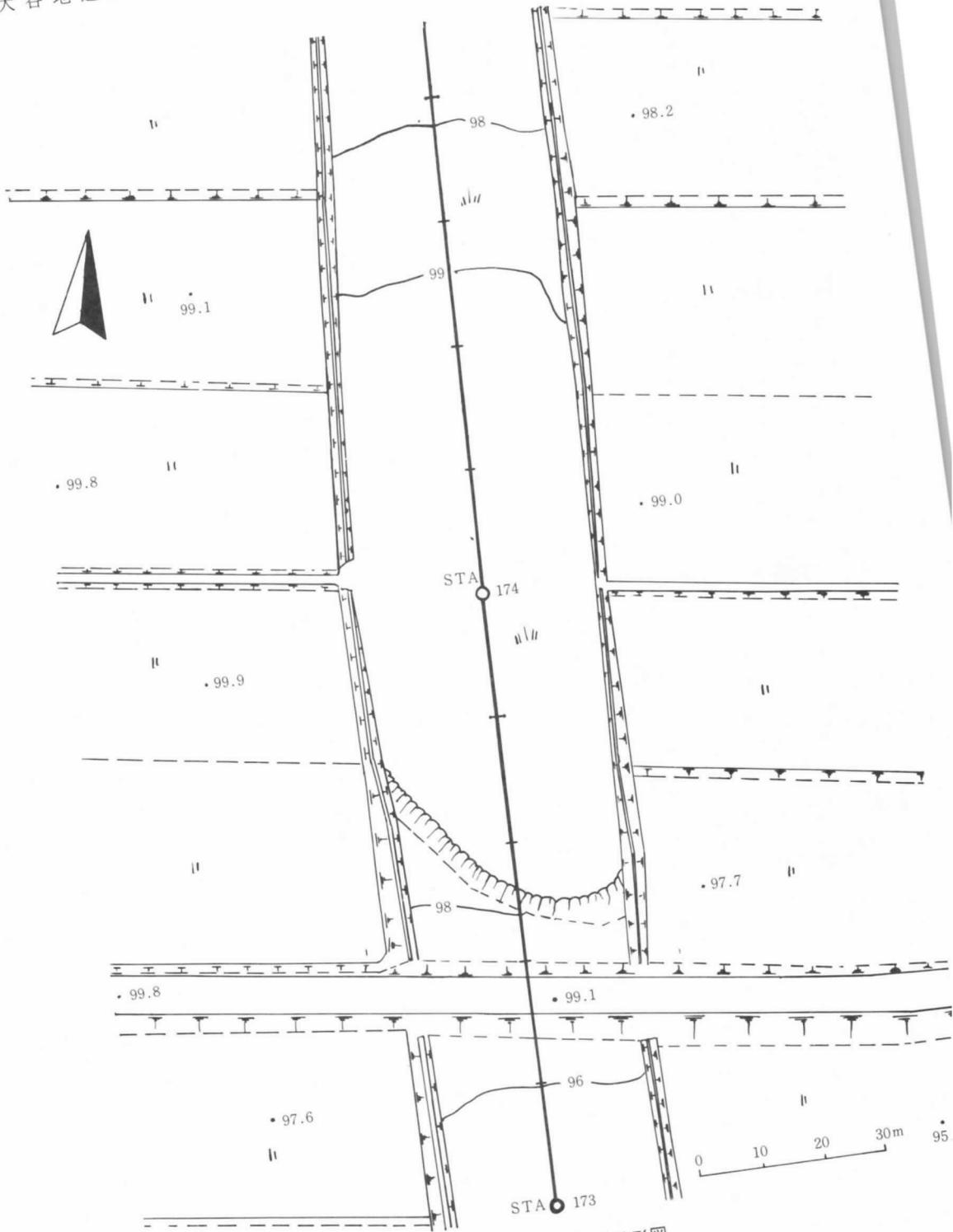
分布調査時、周囲には山林等があった。その時の調査地、原野には土師器・須恵器の破片が散布しており、竪穴住居跡の存在の可能性が考えられたのではあるが、以上の様な結果となった。

## III 今後の問題点

周辺の遺跡の存在から考えて集落跡の可能性を予測したが、調査部分には遺構等なら検出されない結果となった。分布調査の時点では、山林原野であった環境が、調査時には、東北縦貫自動車道敷地部分を除いて開田圃場整備がされていたとも聞く。分布調査時の遺物は地形上、西方から流れ込んだ可能性も考えられ、その意味でも調査地の東西両側の状況が把握されねばならなかった。この事は敷地内北側の未調査部分についても同様な事がいえる。

両側に残された開田部分において原状が保存されているとすれば、次の現状変更に際する調査の結果が注目される。

— 大谷地遺跡 —



第1圖 大谷地遺跡地形圖

かみ おお や ち  
上 大 谷 地 遺 跡

遺 跡 名：上大谷地(略号K072)

遺 跡 所 在 地：北上市相去町上大谷地

調 査 期 間：昭和47年7月10日～12月22日

調 査 対 象 面 積：7,500m<sup>2</sup>

発 掘 調 査 面 積：2,500m<sup>2</sup>

図 表 目 次

第1図 地形図	383	第14図 Bh 06焼土遺構 Bh 06ピット	
第2図 層序	384	Bh 09ピット出土遺物	404
第3図 Bd 12住居跡	386	第15図 表採等の遺物 I	406
第4図 Bd 12住居跡出土遺物	387	第16図 表採等の遺物 II	407
第5図 Be 21住居跡	389	Be 21住居跡ピット計測表	388
第6図 Be 21住居跡出土遺物	390	Bl 18住居跡ピット一覽表	394
第7図 Bh 59住居跡出土遺物	392	遺物一覽表 I	409
第8図 Bl 18住居跡	395	遺物一覽表 II	410
第9図 Bl 18住居跡出土遺物 I	397	石製品計測表	411
第10図 Bl 18住居跡出土遺物 II	398	土器実測図説明 I	412
第11図 Ep 06住居跡出土遺物	400	土器実測図説明 II	413
第12図 Fe 50住居跡	402	土器実測図説明 III	414
第13図 Fe 50住居跡出土遺物	403	土器実測図説明 IV	415



第1図 上大谷地遺跡地形図